

新時代の雑誌 奇譚グラス

女天下時代 特集号



世界奴隷艶情史
或る變態夫婦の死

1952.7月号

奇譚グラス

7

定價九拾円
地方賣價九拾參円



怪奇画集

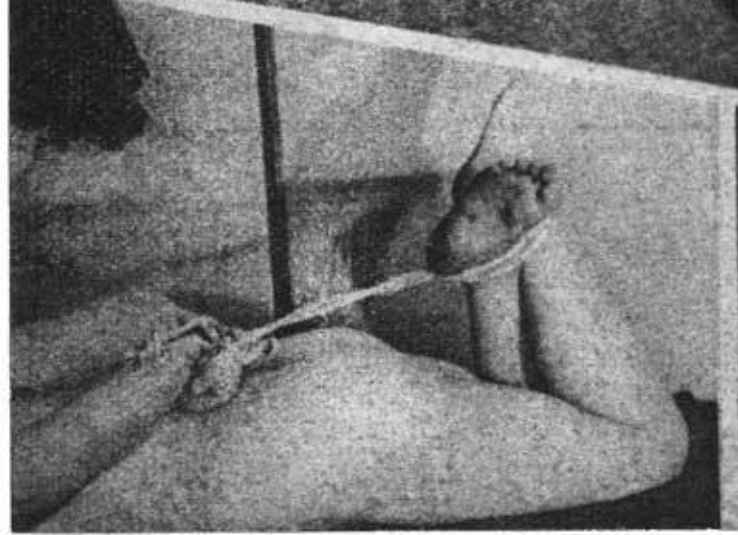
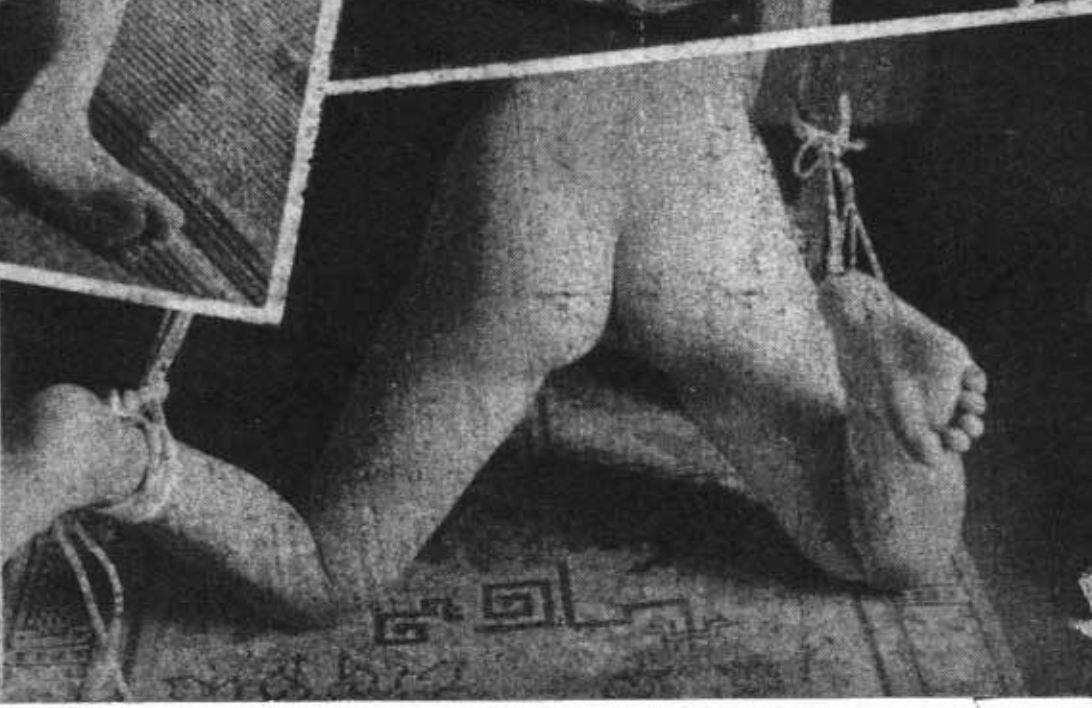
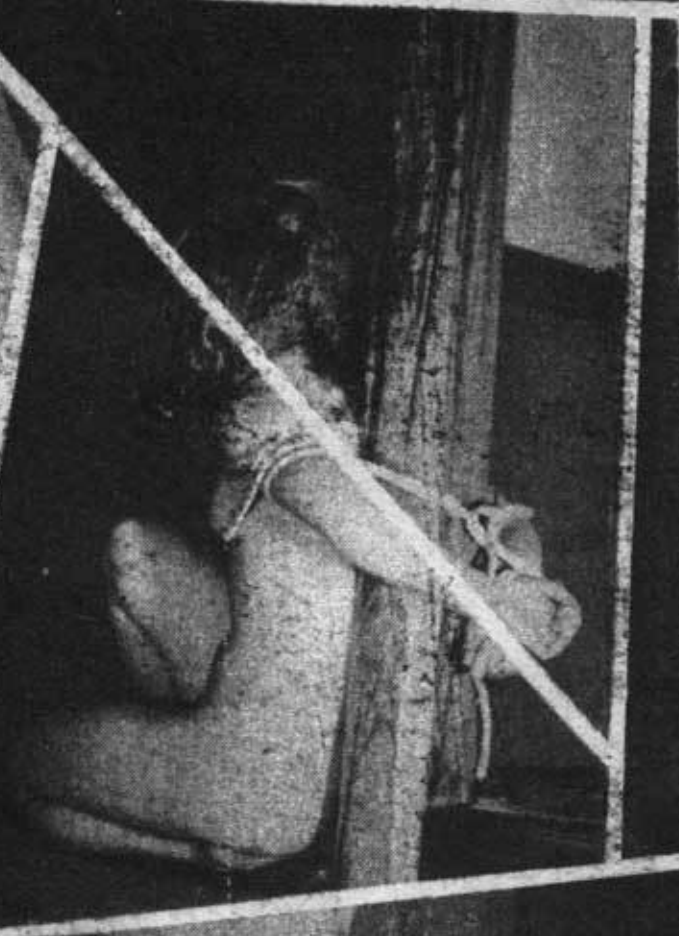
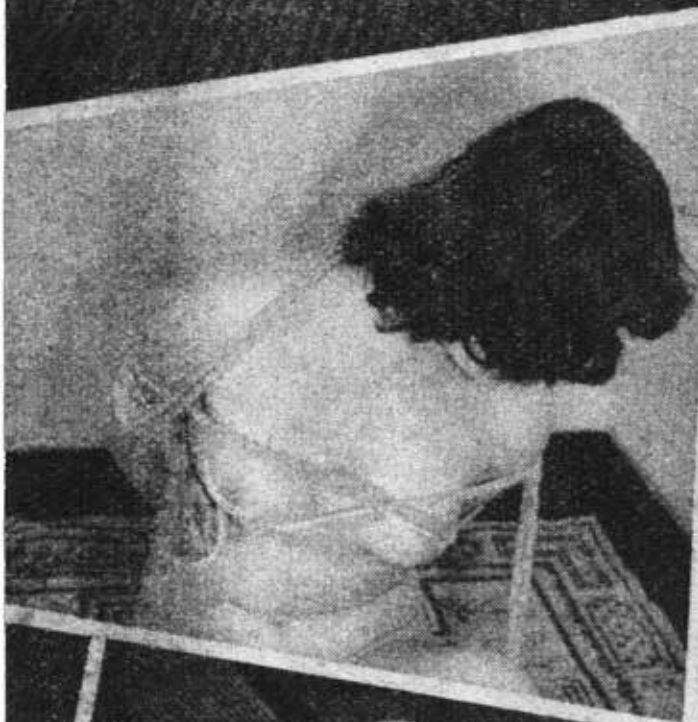


(4)



(5)





女天下時代

「サジストとマソヒストの戯し出す変態交響楽」

女体の下に「春蠟めく男達 阿久津 猛 (一三四)

女の奴隷・マソヒスト群像 高取辰治 (一三三)

淫亂婦女傳

花木実 (一三二)

疾患の鶏

藤安節子 (一三一)

或る變態夫婦の死

藤崎洋美 (一三〇)

お座敷ストリップ色勇傳

鬼山絢策 (一二九)

女剣劇王健在なり

富士芳孝 (一二八)

性愛 獸類にも変愛はあるか

絹島増夫 (一二五)

談義 張型を用いた性愛技巧

白川朝子 (一二六)

世界行脚 (一) 自由と愛の國・モナコ王國

三瀬淑朗 (一二八)

オフィスガールから

伊澤蘭子 (一二五)

内股のほくら

笹田豊 (一二六)

國際文通好色噺

二俣志津子 (一二七)

上海の賣笑婦 野鷄族

野中愛三 (一二八)

色情倒錯者の手紙

染田玄 (一二九)

變態艶書 (ラブ・レター)

岡田咲子 (一二七)

女体の恥毛と腋毛

田中芳生 (一二三)

秘密 女の足の蠱惑

赤坂剛 (一二四)

世界奴隷艶情史

野澤草兵 (一二五)

戦線エロ落穂集・尼港事件余聞

下田章一 (一二六)

或る人妻 妾は早熟な箱入娘であつた

辻佳月子 (一二七)

同性愛者 肌を濡らした女学生

秋山ルミ子 (一二八)

少年好色奇譚

松谷茂 (一二九)

維新の志士漁色競べ

花山劍作 (一二四)

性交なき遂情行爲

鳥上源一 (一二二)

性愛と残酷

仁比山等 (一二五)

洋妾 (ラシャメン) 由來記

福森耕司 (一二九)

選読小説 本誌特刊 張形の謎 倫落の岐路

綠猛比古 (一二六)
壬生すみ子 (一二三)

宗教美術抄説

大宮喜代子 (一二〇)

夏期と性的犯罪

仲信哉 (一二五)

都々逸に現れた性愛感情

安部雨紅 (一二三)

性神探訪 石神案内記

七條美樹子 (一二〇)

山村夜色

吉井川洋 (一二五)

一色慾異常 青年の告白 夢性の美少年 三村幾夫 (一二六)

縛られん

裸女十態

志村美玲子



女天下時代^画集

・女に虐げられる男たち・

女が男を崇拝することは自然であり、普通であるが、男が女を崇拝するのは、いさゝか道理にはずれていると一般には思われている。然しそれにしても此の所謂女に虐げられ、踏まれ、押えつけられ、鞭打たれる事を喜ぶ非自然的な人々が如何に多いことであらうか。此所に「女天下時代」と題して画集を掲げる。「女天下」と言えば性的生活に於ける女性の支配的権力の現れである。此の女の権力というものは、智力に依つてでも、仕事によつてでも、体力に依つてでも得られたものではない。それ等の点に於ては矢張り男が常に優っている。男の弱点はいつの場合に於ても、その性慾にある。そして同時にそこに女の強さがある。



・女の足に偏執する男・

フェチシズムはマゾの一種であると目せられるが、女の足に対する限らない憧憬の念は、ふくよかな女の足に踏まれ、趾にて鼻をつままれ、口の中へ突込まれて始めて激しい恍惚境に到達する哀れな一性的倒錯者である。



・男性を操縦する女性・

我儘で横暴であるべき男も一度これを捕獲し、馴養し適当に操縦して、自己薬籠中のものとすれば完全に女性圧制下の奴隸とすることが出来る。斯くすれば女は立派な女主人であり、男は従順な奴僕である。先ず最初に男の虚栄心と自惚心と浮気心とを利用して、その獲物を手の届く限りのあらゆる技巧を弄して緊く自分に縛りつける。やがて絶好の機会を狙って馴致の印である輪を鼻の孔でなく指にはめ込んでしまふ。若し彼女が愛撫の法、甘つたれる法、適当に飼料をやる法を心得ていれば、獲物は十分になついてくる。肉体的の刑罰は余り功を奏しない。普通は手をちよつと振り上げてみせるだけで沢山である。獲物が夜遊びをしたら寝物語を試みるがよい。若い奴は老つた奴よりも一般に馴らし易い。



・三人の女に叩かれる老人・

一六一〇年のヴィツシャアの銅版画である。三人の若い女の手によつて、その臀部を丸出しにされた老人が、今まさに一人の女の手にする棍棒によつて叩かれようとしている光景である。多分に性慾的な臭いが漂っている。





・女の尻に敷かれて喜ぶ男・

「女の尻に敷かれる」というのは、女天下の状態を表わす世間一般の言葉である。文字通り女性の豊満な臀部の圧迫下に屈服して、その醍醐味に酔う男がある。概してマゾ的傾向の男に此の倒錯がある。男性の中の或る一部の者は、自分の恋着する美人によつて、精神的にも肉体的にも尻に敷かれることによつて、その激しい恋情を疾やすことがある。然し、それに依つて甚しい苦痛を与えられ与えられる程、悦楽の状を呈してくる様になると明らかに病的な状態である。女の尻に敷かれるだけはよいが、樹に縛りつけられ、弓なりになつた身体の上に女の尻を載せるに至つては、被虐症というべきである。



・妻の馬になる男・

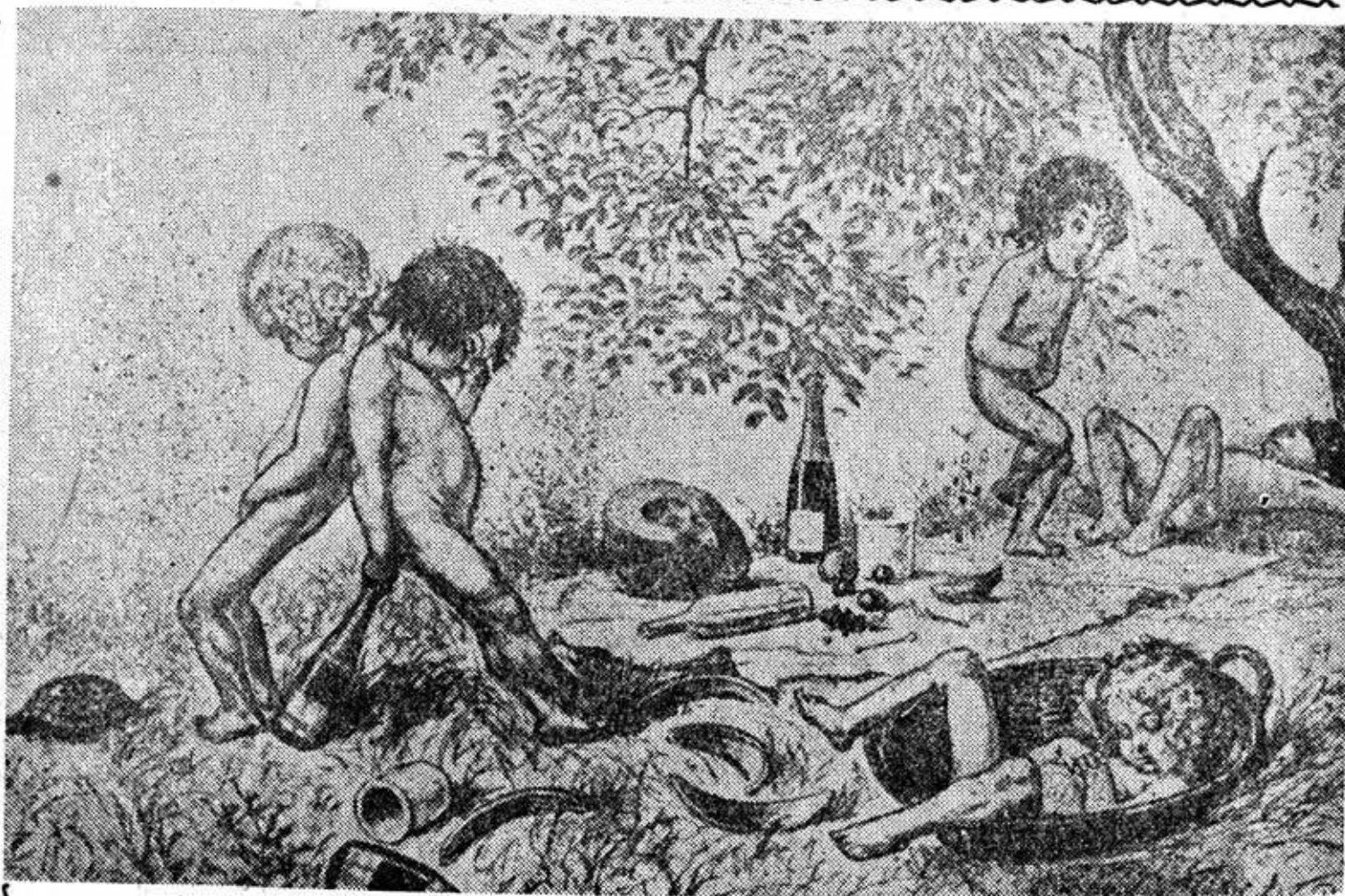
女の尻に敷かれるだけでは満足せずに、妻を背中に乗せて馬となり、座敷中を這い廻つて悦んでいる夫があるとしたら、世人はその鼻の下の長いサイノロジーを嘲笑するだろう。然し妻の持つ物差しにの鞭に満足しているとすれば、女天下の平和境ということが出来よう。痴人の愛のナオミのような女を妻にすれば殆どの男性は馬になろうと志願するかも知れない。



・女に鞭打たせて楽しむ男・

此れは既に完全に「被鞭癡症」と化した男性である。他の如何なる方法によつてもリビドを起さないにも拘らず、女の手によつて激しく鞭撻せられる事によつてのみ性的快感を覚えることか出来る恋態男である。より強く刺戟を受ける為に裸体となり、手と胸を柱に縛りつけられて自由を奪われ、女の暴虐の鞭の下に呻吟する男を描いたものである。これは女天下というよりも寧ろマゾヒストの男の生態というべきで、女の機嫌を取りむすぼうとする男を女天下の始点とすれば、鞭撻せられる男は女天下の終点であらう。





新時代の

奇譚クラブ

風俗雑誌



第六卷第七号

七月号

通刊第四十五号





下時代



虐待されて悲し
涙ながらに離婚

貞操

男性が抗議

◎女の奴隷

マゾヒスト群像

一、戀の僕

「恋する者は奴隷なり、囚人なり、義勇的使僕なり」

とあるように、恋愛は異性に屈し、異性に媚び、その歓心を求むる傾向のあるのが普通であるが、併し此の傾向

高取辰治 サジストとマゾ ヒストの醸し出 す變態交響樂

の非常に顕著となつたが上にも、異性の膝下に跪伏して全くその囚虜とならんことを欲し、甚しきは異性より罵言嘲弄せられても、また殴打鞭撻せられても、また刃物で切りつけられても、少しもそれを苦痛と思わず、却つて此れを甘受することによつて大なる性的愉快を感じ、そのため故意に種々の手段を弄して異性の虐待凌辱を受けんとするが如きものに至つては明らかに病的であつて、有名なる精神病学者クラフト・エビングは、此の様な性的倒錯を「マゾヒスムス」Masochismusなる名称を与えた。それは奥国の文学者ザッヘル・マゾツホの奇異なる性行、及びその創作の内容に因んで斯く命名したのである。



二マゾツホの生い立ち

マゾツホは一八三六年、ガリチアのレムベルグに生れた。彼は生来甚だ虚弱で到底生長することが覚束ないとまで疑われていた程であつたが、母が故郷の小露西亞から頑健な乳母を雇い入れてから次第に強壯となつた。彼は此の乳母から生命と健康とを、得たのみならずまた彼女の精神をも得たのである。

彼は既に小児時代に於て、特に残酷な記事や死刑の絵画を見るのを好み、また

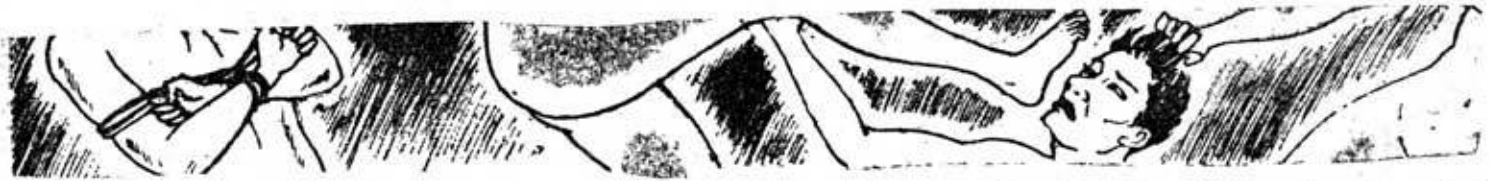
殉死に関する口碑伝説の記してある書物を愛読した。思春期に達した頃にはいつも彼を苦しめる残酷なる一婦人の姿を夢に見た。元来ガリチアの婦人はその夫を支配して自身の奴隷同様たらしめるが如き風習がある。彼は十才の時、始めて此の有様を實地に目撃した彼の血縁に当る一婦人に某伯爵夫人があつて、その纖手に一家の全権を握り夫の伯爵を頃使していたが、此の状況はそれを親しく目撃した彼に対して終生忘るゝことの出来ない印象となつたのである。

伯爵夫人は、顔こそ美しいが、不貞腐れのお転婆であつた。マゾツホ少年は、夫人の美貌と、その纏える高価な毛皮とに憧れて、夫人を讚美していた。夫人もその従順に服従するのを喜んで、彼に化粧室に入るのを許したことも屢々であつた。或る日、彼は夫人の前に跪いて、其の穿ける上草履を脱がした折、いきなり夫人の足に接吻した。夫人は微笑しながら、其の足で彼の顔を軽く衝いた。彼はそれを非常に嬉しく且つ幸福に感じた。或日、彼は其の姉妹と共に隠れん坊の

遊戯をして夫人の寢室へ忍び込んで、壁に懸けてある衣服の後に身を隠した。所がその刹那に、伯爵夫人がその情夫を伴うて寢室内へ入つてきた。彼はそのまま身を隠しながら凝視していると、夫人はソファアの上に身を横たえて情夫と痴々繰り初めた。

丁度其処へ主人の伯爵が二人の男を従え、非常な勢で室内に飛び込んだ。夫人は突然ソファアから飛び上つて拳を振り上げ、主人の横面をしたゝ殴つけた。伯爵の顔からは、鮮血がポタリ／＼と流れ落ちた。その中、夫人は一条の鞭を手にとつて主人をはじめ、その連れの男を室内より追い出した。情夫もその権幕に怖れて逃げ出した瞬間、壁に懸つていた衣服が落ちたので、今迄そこに隠れていたマゾツホ少年の全身が不意に暴露した。夫人は彼を一目見るなり、床上に投げつけ、兩膝で彼の肩を固く押えて、散々殴打した。彼は非常な疼痛を感じたが、併し此れと同時に身慄いするような快感をおぼえた。

夫人の彼に対する暴行の尙やまないうちに、伯爵は帰つてきた。少しも怒つた



よるな顔をせず、却つて悄然として、夫人の前に跪き、どうも宥してくれと哀願した。その間に彼は逃げ出して室外へ出たものゝ、尙二人の様子が知りたくて堪らないので、足音を忍ばせながら密かに扉に身を寄せ、耳をすまして室内の様子を伺つてみると、鞭のビシと鳴る音。伯爵の呻めき声とが相和して手に取るが如く聞えた。

三、妻に逃げられた男

マゾツホの父は演劇が好きで、自宅内に舞台を設け、ゲーテやゴッホルの作を上演した。彼の文芸趣味は既に幼年時代から父の感化を受けて培養せられたことが多い。彼はブライグ及びグライツ

大学に入つて、十九才で卒業し、独乙史の講師となつてグライツ大学に教鞭を執る身となつたが、文学に多大の趣味を有し、遂にこれに没頭す



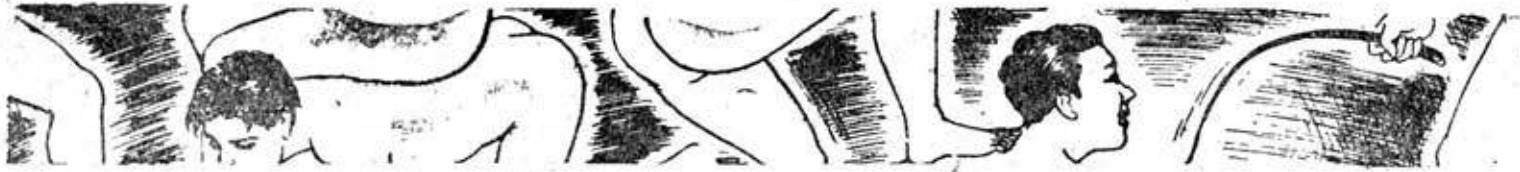
るようになったので、やがて大学を辞し専心創作に従事することになった。一八六六年には伊太利戦役に従い、ソルフェリの戦に於て勇敢に戦つたので、奥国元帥より感状を賜つた。しかし彼は軍隊を退いてから小説の著作に身を委して、漸次其の文名が世に知られるようになった。彼はその間にいろいろの女に恋をして失望したり、悲惨な目に逢つたりしたことが多く、自身の経歴を土台にして多くの創作を発表した。彼の小説の女主人公と云えば、意地強く、女権をふりまわして、男を圧服凌辱するのを愉快とする女性である。所がグライツに彼の小説を愛読する一人のローラという手袋縫いを職として

賤しい身分であるが、文芸趣味を有する伶俐な女があつた。彼の小説の女主人公の名を仮りて彼に手紙を贈り、彼の理想

とする女性の性格を真似て其の意に投合するよう持ちかけた。

そこで彼は当時婚約した一処女のあつたにも抱らず、ローラと会つてみたい氣になつた。彼は手紙の文句から想像してきつと貴婦人だろうと信じたからである自分より身分の高い、そして勝気な女性に身をまかせて、その言いなり次第になり、順の先でこき使われるのが、彼にとつて何より愉快である。ローラは彼と会つた後も、深くその身分を包み、貴婦人らしい態度を見せたので、彼の恋情は愈々募り、婚約した処女を振り捨て、ローラと割りなき中となり、一子を儲けたので、結婚式を挙げたのが一八七三年であつた。

然るに結婚後間もなく、二人の仲には秋風が吹き初めた。ローラは彼の性質が病的で、空想的で、働き甲斐のないことに気がつき、またローラが自分の夢想したような貴婦人でないことを発見したので兩人共非常に失望した。又彼は結婚後其の病的性慾を赤裸々に暴露し、ローラに向つて鞭で自分を打つてくれと幾度も繰り返して要求した。彼は手をかえ口



ローラに歓心を求め、媚を呈して殆ど毎日のように自分を鞭で毆打せしめたが、これだけでは満足出来ないで、今度は更に数歩進めて、ローラに向つて思いきり不貞な真似をして呉れを命じ、且つ彼は自ら筆を執つて「妙齡の一美人、好男子の紳士と交際を求む」という広告を新聞に出し、ローラに姦通させた。こゝに於て、ローラはいゝ氣になつて、さんざん醜態を演じ財産を浪費して果ては新聞記者の色男と巴里に墮落して、彼と縁を切つてしまつた。

四、鞭打たれる快味

ギリシヤの大哲学者アリストテレスがマゾヒストであつたことは、此の哲学者が四つ這いになり、その上鞭を手にした女の跨つてゐる絵画に徴しても明らかである。またアントニオは著しいマゾヒストの傾向を有し、鉄血宰相ビスマルクでさえ、その艶書の中には、慥かにマゾヒズムの色彩を帯びた文句を書いた。

中世紀時代に於ける騎士詩人の大部分はいずれもマゾヒストと認めるべき者であつた。彼等の恋の相手は封建諸侯の夫

人であつて、奴隸的態度を以て其の膝下に座従し、その愛を得るが為には生命をも投げ出した。

フランス革命の導火線となつた民約論の著者ルソーもマゾヒストであつたことはその名著「懺悔録」の中にある少年時代の記事に徴しても明らかである。この「懺悔録」は著者ルソー自身がその閱歴を赤裸々に叙述した露骨な自叙伝であるが、彼が八才の幼童の時、牧師ラムベルシエーの家にあつて、その娘である三十才の処女に鞭撻せられ、快感を覚えたという一事は、疑いもなく、ルソーの変態を物語るものである。

「教師ラムベルシエーの令嬢は、私を可愛がること、さながら慈母の如くであつたが、併し又私に懲罰を加えることもあり、甚しい時には私を鞭打つこともあつた。最初、鞭を以て私を嚇かした時には私は非常に恐れたが、一たび鞭打たれてからは、私はこれによつて受ける苦痛が予想に反して甚しくないのを喜んだ。それのみならず、鞭打ちを受ける毎に、令嬢の無情を怨むの心が起らないのみか、却つてこれを愛慕する情が一層増してき

た。それ故、私は刑罰を受けるのが何より喜びで、故意に悪戯をした。令嬢の鞭打ちによつて受ける疼痛と羞恥とは、私に一種の快感を与えたからである。」

これによつて見れば、ルソーのマゾヒストたることは明らかである。それから彼がチューランに滞在した折、往來の婦人や下婢に向つて自分の陰部を暴露し、彼女たちから受ける侮辱及び羞恥の感によつて、同じく快感を覚えたという。

「私はその旺盛なる性慾を遂行することが出来ないで、奇異なる方法を以て益々これを刺戟した。私は真つ暗な並木の蔭、或は場末を選んで其処に佇立し、道行く婦人を望みつゝ、いやらしい滑稽なる態度を示した。実に馬鹿げ切つてゐるが、併し私の快樂は殆ど名状することが出来ない程であつた。私は或る日、庭の背後にある暗い処に立つてゐた。すると其の家の下女が水を汲もうとして井戸に近寄つてきた。私はそれを窺つて、猥褻と言わんよりも寧ろ滑稽な喜劇を演じて見せた。彼女達の中には見て見ぬ振りをする者もあれば、笑う者もあり、又侮辱を受けたと大声で私を罵る者もあつた。



私は直ぐ身を挺して暗所に向つて逃げ去つた」

ルソーの陰部暴露Exhibition は畢竟そのマゾヒストなるがため、即ち「いやらしい滑稽な態度」を見せて、異性から笑われ罵られるのが愉快であつたからである。

五、被虐の恍惚境

前記ルソーの如く他から鞭撻せられて性的快感を覚える一種のマゾヒズムを他動的被打症 *Passive Flagellation* といふが、此れに関する奇異な事実として、第一に挙げるべきは、十三世紀及び十五世紀時代に行われた「カトリック」教徒の苦行である。

カトリック教は肉を卑しめ、靈を尊び中世時代には、難行苦行として肉体を苦しめ此れによつて現世の慾望を脱すべく教徒に勧説し、且つ盛んに此れを実行せしめたが、この苦行の中には身体を殴打鞭撻するものもあつた。然るに、この脱俗の方便として行われた苦行が、却つて教徒の性慾を挑発興奮せしめるが如き反対の悪結果を招致することゝなつた。

此れに就いて最も著しいのは、比丘尼マリア・マグダレナー・パッチー及びエリザベット・ゲントンの両女が、他より打たれる毎に性慾の興奮がその絶頂に達し、淫猥極れる狂態を怒にしたことである。此の事実はクラト・エビングの名著「プシコパチア・セクスリアス」

Psychopathia sexualis 中にも挙げてある。其の記する所に寄ると、パッチー尼は尼院の長をして其の両手を縛せしめ臀部を露わして杖で殴打せしめる苦行をなすに至るや、忽ち情熱火の如く燃え上り、声を張り上げて絶叫した。

「よし、よし、この火焰は我身を焚きつくさんとす。願くば此れを煽ること勿れ我れは斯かる死を望まず、快味の多きに過ぐればなり」と。かくして彼女の意識は恍惚として、しかも淫猥なる幻覚に襲われ、殆んど失心せんばかりであつた。

ゲントン尼も殴打せられる母に、絶大の快を感じて、神と交る幻像を見、しきりに「愛！愛！を連叫した。

六 醜婦に叩かれる少年

カンヌの或る医師の下へチャリーとい

うイギリス人が病身をなおす為に訪ねて自分の経歴を物語つた。

チャリーは背が高くてブロンドではつそりとしていて、沢山の捲毛が彼の瘦せた、そして精力乱費のために憔悴した顔を取り巻いていた。彼の富裕な両親は早く死んでしまい、極く幼い彼を一人の女家庭教師の手に残した。

彼女の名はエレンと言い、チャリーを彼女の言う事には何んでも従うように躾けた。彼女は夜になつて、家中が寝静まると、こつそり彼の部屋へ忍び込んで布団をはねのけ、叫声を押えるために片手で彼の口をふさぎながら彼を打つた。それでも彼は何の抵抗もせずたゞ低く吸り泣きを残すばかりであつた。

やがて彼は打たれることに慣れてしまつて、ちつとも泣かないようになつた。時々は何百という針が皮膚に突き刺さるような痛みを感じたけれども――。

こうして彼は苦痛を愛するようになり夜になると彼女の来るのを今か今かと待ち受けるようになった。その結果、彼は重い病氣にかゝり、一時家庭教師から離れなければならぬことになつた。暫く



して又家に帰つてきた時には彼はすっかり変つていた。彼は男になつたのであつた。エレンはもう彼を学校に行かせようとはしなかつた。学校に行かせると悪い風俗を覚えるから、どうしても家庭で教育しなければならぬと叔母や医師に主張した。そして結局彼女の主張の通りになつたので、チャリは今や家庭教師の非理性的な熱情での玩具になつてしまつたのであつた。

彼女は惨酷の悪魔に憑かれていた。人を苦しめたいという憧れが彼女の最も荒々しい本能を刺戟した。そして彼女はチャリを自分の犠牲とし、一步一步女性化することの享樂に身を任せた。

然し、或る日彼は彼女の慾望に冷淡な態度をとつて応じなかつた。彼女の絶えず行方取扱い方が正常な手段に対する彼の興味をすっかり奪つてしまつたのであつた。エレンは物凄しい勢で、あらゆる責



道具でもつて彼を責め苛んだ。彼はこの耐え難い苦痛を愛した。エレンの好んで用いる方法は着物を脱がせ、ベツドの上にじかに床の上に寝かせ、彼の頸に跨つて冷たい笑いを浮かべながら、手にした鞭で力一杯打つのである。彼女にとつて、彼の皮膚がだん／＼赤く或は紫になるのを見る程大きな快樂はなかつた。

そして血が滲み出せば快樂は絶頂に達するものであつた。始終彼女は何か新しい責道具を工夫した。その犠牲にとらせるべき珍らしい位置を考えた。彼女はチャリーの力が愈々尽きて、叫声をどうしても抑えることの出来なくなる迄は打つ手をとめなかつた。

こうして彼は信じられない程瘦せ衰えてしまつた。或る日、急にチャリーの叔

父が帰つて来て不意に彼の家に訪れた。叔父はチャリーの様子を見て驚いてすぐ医者につれて行つた。此れはエレンの留守のうちに行われたことであつた。医者は彼が嫌がるにも抱らず、その着物を脱がせた。蚯蚓ばれや青い斑点に覆れた彼の裸体を見たときの二人の驚きは想像するに難くない。

叔父は暫く彼をロンドンの自分の家へ引き取り、恐るべきエレンを解雇し、次いで彼をカンヌに送つて養生させた。弱り果てゝいた彼も、長い休息と養生を續けてゐるうち、再び快樂に対する欲望が猛然と起つてきた。彼の様な金満家の若者であつたなら、ヨーロッパ中到處、どんな快樂でも容易に擲めることが出来たであらうに、彼は美しい女に対して何らの感情も起らなかつた。

彼はたゞ鞭打たれたかつたのである。遂に彼はエレン以外の世界中の如何なる女も、彼には快樂を与えることが出来ないことを知つた。彼は彼が始めて知つた女である本当の麗女、危険なアブノーマルな醜い年増であるエレンの隠し難い奴隸であり、犬であつたのである。



◎女人天國・高天ヶ原

偉大なる高天ヶ原の女性



闇の国となつてしまふのである。

この一人の女神が我が国上代の凡ゆる文化の母体であつた。勿論この一人の女神の現れる以前に、諸々の神々が生れ出たが、それは必意、此の女神の現われる準備であつたと言つてもよいだろう。

この女神のシンボルは太陽であり、即ち、照らす、輝く光る——

などの意味である。当時の所謂高

我が国の歴史は女人より始まる。最初の主権者が天照大神であり、その女神が天岩戸に隠れ給うた時の事を、紀記に依ると、高天原も葦原の中つ国も悉く暗黒となつて、まるで夜の様な有様であつたその為に素盞鳴尊の様な荒振る神々が雲集していくら評定を凝らしても、秀麗絶美、赫耀たる一人の女神、天照大神のいまさぬ世は、狭蠅なす神々の跳梁する常

天ヶ原なる上代の社会に於て、我々の遠祖は、何故、その女性である神の下に些かの不平もなく屈従したのであろうか。由来、女性というものは、一方では非常にヒステリックであり、神秘的な性質を有し、又往々奇蹟的な言行をなすものであるから、愈々神秘的となるのである。又、所謂世の諺とは反対に女性は男性よりも、より理知的である。この女性特有

の諸性質を円満に具足し給い、凡べてに於て清く、尊く、純で、神秘的な女性の神が天照大神であつたので、この至純な美しい女神を繞つて高天ヶ原の神々の社会が平和に形成されていたのだつた。

ところで当時の女性は、今日の女性とは非常にその性質を異にしている。即ち当時の女性は非常にロマン的であり、勇壮活潑であり、そして男性と共に事を行い、国の経営を始めとして、一家の事に至るまで男女同様の権力を以て処理していたらしい。即ち高天ヶ原の神々の社会も下界も同じことであつたろう。

伊弉諾尊と伊弉冉尊が天の御柱を廻つて婚姻（みとのまぐわい）をなされる時女神の方が男神よりも先に言葉をかけられ、そしてその間に蛭子命が生れたと伝えられる等、明らかに当時の女性が男性の権力に拮抗していた証左であらう。又男神が女神に逢うために夜見の国へ行かれた時の有様を見ると

「愛しき我が那邇妹命。吾と汝と作れる国未だ作り竟えずあれば、還りまさね」

と男神が云うと、女神は「悔しき哉、速く来まさずて。吾は黄泉



戸喫^{へぐい}為つ。然れども愛^{うづ}しき吾^あが那勢命^{なせのみこと}、入り来り坐せる事、恐れれば還りなむを且^{しば}く黄泉神^{よもつがみ}と相論^{あひつら}わむ。我^あを莫視^{なみ}たまひそ」

と云われて、女神が殿中深くお入りになつてから長い間、出て来ないので、男神は待ちかねて、禁じられた殿中を覗かれた。すると美しかった女神の御身体は腐れ果てゝいたので、男神は恐れ戦いて逃げ帰つたので、自分の醜い姿を見られた女神は

「吾^あに辱^{はじ}見^みせたまいつ」

と云つて予母都志許売^{よもつしこめ}をして男神を追わした。――

とあつて、如何にも当時の女神の力強い働きが分るのである。一例を天鈿女命^{あめのうづめのみこと}について考えても、天照大神が天岩戸に隠れられた時、平べつたい桶を俯向^{うつむ}けに伏せた上にあられもない姿で突つ立ち上り、ドン／＼と節面白く踏みならし、豊かな匂やかな双の乳房をむき出しにし上衣の紐をだら／＼と殆んど陰部のあたりまでも垂して無茶苦茶に踊り廻つた。この活動ぶりは、甚しく男性的で、当時の高天ヶ原は寧ろ絶対の女人王国であつたことが分る。この神々の社会である高天ヶ原に対して、人間界を中津国と云つたが、高天ヶ原の神々の生活は、とりも

男性を虐める女性

染田 玄

恋愛というものは、元来衣食に十分余裕のある人達の性的遊戯の一種である

と見ることが出来るが、「サジスムス」や「マゾヒスムス」に至つては尙更この趣が濃厚である。言葉をかえて云えば、生活が豊かであつて金銭に事欠かない人達の間にサドやマゾの傾向がある場合には、これが極端に激烈な形式となつて現れてくるものである。

一般に女性はマゾ的な傾向があるものであるが、文化が進んでくるに従つて、逆にサジスムスの傾向の女性が増加する趨勢にある。然し、何れにしても公然と行ふものではないから世間に知られずに済むのが普通であり、しかも、生活に余裕のある者の行動はよしそれが極端なる変態行為であつても、犯罪として世にあらわれることは先ず

無いといつてもよい。度を越して近所の口の端に上るのが関の山である。

然し此れが傷害罪に問われる行為であるとか、又それが昂じて殺人淫樂ということになるのと犯罪を構成して表面に現れてくる。緑猛比古氏の筆で「殺人淫樂症の女」と題して明和年間の「忍草」を現代風に書き直したものを小誌にも掲載されてあつたが、お時という女が、三五郎、万彌、長三等という男の両手を縛りつけて素肌のまゝ、寒い窓外に曝したり、絹糸で両手を縛つた掌の間に点火した燈心入りの油皿を持たしり、或は簪で怪我をさせて血の逆出するのを眺めたりして喜ぶという変態行為が書いてあつたが、こういう男を虐待して欣喜する女も案外居るという感じを起させる。

直さず下界である中津国の反映に外ならなかつたと云えよう。

了



女体の下に蠢めく男達

阿久津

猛

男性と女性というものを対照的に考えてみると、総べての点に於て男性の方が女性よりも勝っているように思われる。智力に於ても体力に於ても。然し一度性的方面について考えてみると必ずしも、男性勝れたと断ずることは出来ない。男性を膝下に踏み敷いて天下の世界を現出している女性の如何に多きことか。以下、未亡人、人妻、処女、女学生、出戻り女、等に亘つて具体的な実話を掲げることにし



一、二人の男をインポテンツにした女

現在二十三才の美貌の人妻加代子さんは十九才の時同じ会社勤めていた同僚と恋仲になつて結婚して会社をやめた。牡丹の花の咲いた様に大柄で派手な顔立ちの彼女に言い寄る社員は多かつたが、結婚する迄は処女を守つていた。

婚当初の男女の総てがそうであるように毎夜濃厚な交情も敢て異とするに足りない。然し一人の子供が生れてからの加代子さんの生態は、全く恐るべき過程となつた。その性的衝動は如何にしても压えがたく、夜となく風となく殆ど狂氣のようになつて愛撫を求めた。

その為には夫は全く瘦せ細り、憔悴の極に達してしまつた。が加代子さんの性慾は夫がそんな状態になつてもおさまる所か益々熾烈となり、あらゆる手段で夫に迫り、その後更に一年余りで夫は完全にインポテンツに陥つてしまつた。彼女は不満の余り、子供を抱えて夫と別れるとダンサーとなつて稼ぎながら、ダンスの教師と同棲する様になつたが、そのダンスの教師も半年足らずで完全なインポテンツに陥らしめた。



実に恐るべきは彼女の精力である。忽ちのうちの二人の男を不能者にしてしまったのであるから。彼女は最近、盛々脂ぎつて大柄な肉体に肉がついて魅力的なポーズでキャバレーのベスト・スリーの一人として踊りまくっているが、誰言うことなく男喰い〃〃という仇名がついて、流石のラブ・ハンター達も一目を置いているらしいが、別にマゾ的な行動をとるという気配もない。とにかく不思議な女として注目されている。

二、肉体を誇る炊事婦の娘

或る新制大学の寄宿舎の炊事婦の娘柳沢和子（十七才）は、深夜になると必ずこつそりと学生の部屋部屋に忍び込み、女体の秘密に神秘的な憧憬を持つ学生たちの前に女王のように君臨して、最初はその素足を学生の一人一人に拝ませ、勉強机の上に腰を下して彼女の足の下に拝跪する学生の頭を膝で撫で、頭髪を足の指にからませる等の悪戯を繰り返して、その遊戯がすむと、彼女はズロース一枚の姿となつて、学生たちの観賞にまかせた。

学生たちは、和子のようにやく膨らみかけようとする蕾の肉体に触れることが出来る喜び、彼女の求めに応じて足で踏まれたり、頬を足の指で挟まれたりする侮辱にも耐えていたが、その中に、彼女はその部屋の学生全部が自分の足を舐めてくれるならば、自分は全裸となつて皆の前に立とうと提案した。然しその夜は、誰もその提案に賛成する者はなかつたが、その次の夜、相談の結果和子の要求に従おうという事にきまり、炬燵のよう机の上に蒲団をかぶせ、その上に和子を腰かけさせて、学生たちが順番で彼女の足を舐めた。「操つたいわ」といつて逃げ廻るように足をすくめていた彼女の態度は、言葉とは正反対に喜々としたもので、それからは



男に足を舐めさせる度に、彼女はその男に身をまかした。そうして、数知れぬ男性の前で、ズロースを脱ぎその肉体をさらす事に大きな誇りと、その女体の神秘に対して驚愕羞恥困却する男たちに対しての優越感を持つた。その中に誰の子かわからないが、妊娠して墮胎した末今では、田舎廻りのストリップーとして豊満な肉体を顧客に誇っていることであろう。

三、婦人科医を訪ねる女学生

チマ子という今年十六才の女学生、齡にしては成熟しきつた身体つきではあつたが、彼女は一週間に二回は必ず婦人科医を訪ねて診察を受けるのである。



「どこが悪いのですか？」

「どうもあたし、変なのよ。病気かも知れないわ」

「どんな風にですか？」

「痛かったり、メンスがなかったり……」

彼女は常に、こういう曖昧な申立をして医者をしらした。医者は当然彼女の申立を信じて、彼女を診察台に載せてカーテンを引き内診にとりかゝる。キユーレットを用い、ヘガールをさし込んでいろ／＼調べてみるが、処女膜こそ棄損されているが、完全な処女体である。

「どうもなつていないね。至つて健全、極めて健康だよ」

「そんなわけ、ないんですけど……」

彼女はセーラー服をつけながら

「どうもありがとうございました」

とすま返つて帰つてゆく。彼女はこうして、次から次へと変つた医師を訪れ



て（決して女医は訪ねない）、職勝上当然行すべき男性である医師の前に、公然とその局部を露出することに興味を感じ又内診による器具の接解を享樂しつゝ、しかも困惑する医師に対して嗜虐的な快感を味つていたというのだが驚く。超アプレ女学生の一入である。

四、娼婦の眞

似をする女

工員

紡績の女工員、岩田ケイ（二十二才）は女としては実に醜い容貌をしていた。番茶も出花と言われるけれども彼女だけはどんな物好きな男性でも恋愛の相手にしようとは思わなかつた。

然しそのくせ彼女自身は、普通の人の何倍もの精力過多で悩んでいた。それで彼女は自分よりずっと若い初心な男子工員を無理に誘つて、思いを遂げていたが

若い男たちは最初の一二度は未知の性に対する好奇心で誘いに乗つていたが、直ぐケイの醜貌にアイソをつかして誘いに乗つて来なくなつた。

それのみか、彼女のあくどい誘惑を嫌つた二三の青年は彼女は淫売だと云いふらした。勿論彼女は自分の方から奢つてやつた事はあつても、自分の肉体を弄んだ代償等は男たちから一銭も貰つていなかったが、そんな噂から、尙更彼女の相手をする男がいなくなつたので悶々の情やるかたなく、やむを得ず、毎夜自分が娼婦となつて多くの男たちの玩弄物となり又自分も遊客たちを手玉にとつて女王になるという空想によつて僅かにその情を慰めていた。

そうして自分が異性に対して持つてゐる武器といへば、只男性の興味をひく性的魅力であるという事をさと、何んとかして男性の上に君臨して優越感に浸り且つその旺盛な性慾を満足させたいものと考えた。そこで自分が淫売だという噂を立てられたのを利用して、妻子のある中年者を目当てに働きかけた。独身の男と違つて、中年男は浮気心といかもの喰



いの者が多いので、金で仕末がつくとい
うのでケイの売込みに乗ってくる者が次
第に多くなってきた。

「お前もか、俺も買ったよ」という具合
で後腐れを心配する男たちの評判を得て
今では押しも押されぬ評判女になつてし
まつた。一生連れ添ふ妻にするのでなけ
れば、あの方さえ満足させてくれれば、
顔なんかどうでもいゝというお客で、
それにケイは貰った金は殆どそのまゝ
費消してしまふので、極めて人気がある
という事だが、果していつ迄続くか疑問
である。

五、珍藝ヤレ突け

ストリツバー

これは有名なストリツバーであるし、
幕中では誰知らぬ者のない事実だから特
に名は秘しておく。酒を飲むと猛烈な露
出症の症状を示して、誰彼の見さかいな
く、そして場所も考えず直ぐ全裸となつ
て騒ぎ出す。まことにストリツバーには
うつつつけの女体で此れが彼女の人気を
あふる一つの原因になつているのだ。
特に秘中の秘とされているのは、彼女

は男達に「ヤレ突ケ、ソレ突ケ」をやら
せ、しかも、それが金目当でなく彼女の
趣向であるというのだから驚く。(註)

ヤレ突ケソレ突ケというのは、江戸時代
兩國にあつた見世物の一つであつて、女
が股間を堂々と見せびらかし、見物人が
それを竹棹で突くといつた、ふざけたも
ので、棹の先には陽物に象つた軟かい布
がついて、棹が又しな／＼しているの
見当が狂い、女も又それを巧みによける
ので中々突けるものではない。それが極
めて滑稽で、エロチシ
ズムの中にユーモアを
醸し出していた。

さて、此のストリツ
バーはどんなお座敷に
呼ばれてもこの珍芸を
しないことには機嫌が
悪るかつた。股間には
きれいにお化粧をして
陰毛には色とりどりの
リボンを飾つていた。
そして観客の拍手や讚
美の声が大きい程、彼
女は悦にいつた。そし

て何のお座敷でも彼女が出る限り、ヒー
ローになつた。

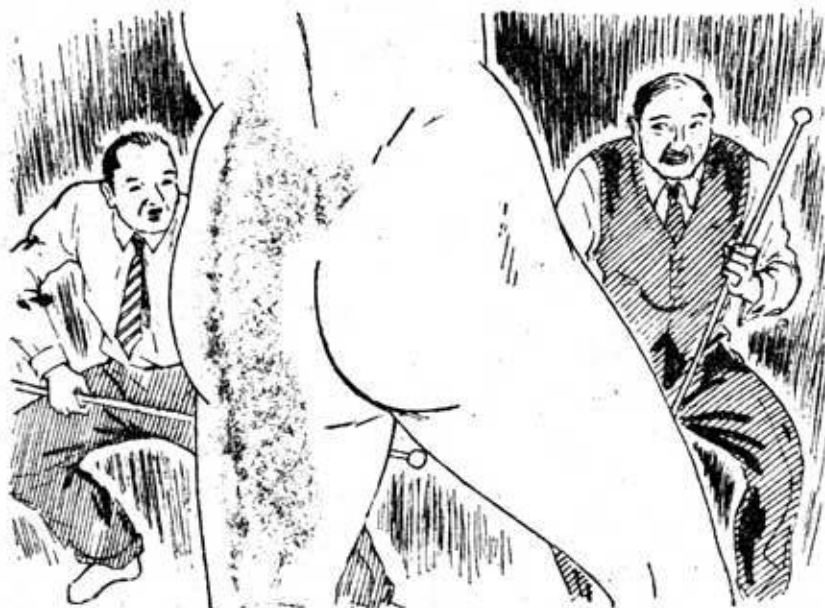
勿論彼女は異常な露出症ではあつたが
男の観客(不思議に女には絶対にこの珍
芸を見せなかつた)を自分の性的魅力の
鉄蹄下に蹂躪するということに激しい興
味を持つていた。一見、男性達の弄び者
となつてゐる様な点からは相反した解釈
になるのであるが、それは彼女がその突
手に選ぶ男客に対しては、金銭目的より
も、彼女の要求に絶対服従するという条

件を持ち出す事によつ
て知れるのである。如
何に彼女の肉体を讚美
し、その肉体美の前に
拝跪させられたかは、
その経歴者である突手
だつた男の様に語る
事実によつて証明され
る。

六、初物喰いの

酒場のマダム

十四の齡から水商売
で育ち、浮川竹の数々





の辛苦を嘗め、現在六十五になる旦那さんの二号となつてゐる染子（卅三才）は丁度今脂の乗りきつた年増盛りである。

浮世の裏道をいやという程知り尽した彼女だけに、現在の酒場のマダムにおさまつて飽食暖衣、旦那さんの精力に如何に不満を感じても、そこはオボコイ娘育ちでないだけに、うつかり浮気をして旦那の機嫌を損じするような事はしなかつた。然し十六の春、金貸の爺さんの手によつて蕾の花を散してから、夜毎の闇に相手は交れども、すべて此れ女から女へと渡り歩いた遊治郎ばかり、今の齡になつて、やつと生活が落着いてみると、やはり処女の頃が懐しく、思ひは、まだ童貞の男を自分の手で開花させてみたい衝動にかられていつた。

夜の晩い商売に拘らず、彼女の訪問着姿が朝早くから電車の中に現れるようになった。通学途中の学生、通勤中の青年紳士等を狙つて、ラッシュアワーの混雑を利用して、腕、胸、膝へと誘惑の触手が伸びていつた。そうして、市内の旅館へ連れ込んで初心な若者に対する衝動を慰めていた。

何処の誰とも知れず未知の二人が、その名も明かさないうで繰り返す情痴のかず。中には彼女の失望するような巧みな技巧の者もあつたが、それは又それで、中年の爛熟した性を満足させるものがあつた。

こうして彼女の童貞男の漁色行脚は、誰にも知られることなく運れていつたが或日曜日の午後、満員の映画館で一人の学生風の男に誘いの手を伸しかけた所、その青年は前にデパートで財布を掏られたことがあつてからスリ恐怖症にかゝつていた為、てつきり彼女をスリだと勘違いして騒ぎ立てたことから染子は警察の取調べを受け、遂にその真実を告白しなければならぬ羽目になつた。

七、十円で肉体を売る未亡人

市街から遠く離れた電鉄の小駅の近くに、駄菓子屋を売つて細々と暮しを立てゝいる未亡人渡辺トミ（三十六才）があつた。夫を戦争で失い、戦争の末期に都会から疎開してきたというだけに、此の近辺に知り合いはなかつた、今年九ツになる小学校二年生の女の子と二人暮しであつた。

電鉄が村の中央を通つてゐるだけに、戦後家内工業の勃興と共に純朴であつたこの村も次第にアプレの空氣が瀰漫してきたとはいふものゝ、元來が純農村だけに、これといつて遊び場もあるわけではなく、殆どの若者はたまの休日は電車で都会へ出るのが唯一の楽しみのようなものであつた。

こういつた村で色事の噂等というものは、一瀉千里の早さで伝わるものである。渡辺トミが一回十円で肉体を売つてゐるというのである。噂の根源は、自動車の運転手で四十二になる男であるが、最初は誰も信用する者がなかつたが、實際は十五六から十八九位迄の青年を限つて春を売つてゐたのは事実らしい。それを聞いた運転手である男が、持前の浮氣心で食指を動かして、或る夜こつそりと忍んで行つたのが、物の見事に肘鉄をくらわされた為に、腹立ちまぎれに一件をふれ歩いたといふのである。

然し誰彼なしに身体を売つたといふのではなく、最初、近所の十六になる青年が夜駄菓子を買ひに来て話込んで晩くな



り、トミさんの情を受けてから、次第にその友達に波及し、一回十円というのは名目だけで本当は和姦であつた。聞くところによると、彼女の手によつて男にせられた此の村の青年は十数名に及ぶそうである。

八、夫を縛りつける妻

犬も喰わない夫婦喧嘩というが、この菅夫婦の家庭も有名なものである。それに普通と変つてゐるのは娘天下の甚しいものであるからだ。菅光夫は万年平社員で社宅の北の端に居を占めてから八年になる、強度の近眼で眼鏡を横からすかすとか何重にも糸が円く見えるという位である。細君スエ子さんは一つ違いの三十一で主人とは対照的にでつぷりとよく肥つてゐる。

以前は小料理屋の仲居をしていたのを



れを唯々諸々として光夫が承知したので十年後の現在でもそれが連綿と続いているのだそうだ。

光夫が見染めて結婚したというだけあつて、波皮のむけた一寸イキな所がある女だ何んでも十年前、結婚する際の条件が絶対服従を持ち出し、そ

子供がないせいもあつて、会社がひけて帰つてくると、直ぐもうドタバタが始まる。壁一重の長屋の事であるから、隣近所の評判になつてもう長い事になるの、此頃では相手にする人もないが、引越して来た当座は大分仲裁に出かけて馬鹿を見た人が多かつた。何にしろ、殴る蹴る掴み合いの大乱闘、それもきまつ

て細君の方が断然優勢で、そのつまりは光夫の方が帯や紐でガンジガラメに縛りつけられるのだ。

それが夜中に一度は必ず起るのだから近所迷惑も甚しいわけである。普通新婚当時は朝の出勤の時等は別れの接吻といった濃厚な所を見せるわけであるが、此の夫婦では、食後の洗物から洗濯迄みんな出勤前の光夫の仕事で、これも結婚当時の契であるらしい。だからスエ子は近所の女房連中から羨望的になつて、すぐ何かの例に持ち出される習である。然し平常は何らこれといった変つた行動を取るわけではないので、此の社宅では菅さんの娘天下として有名なだけで、夜の閨房生活に迄立ち入つて調べた人は全然ないので、そこ迄噂する人は今の所ないわけである。

九、老嬢の看護婦の奇癖

神崎ミキは二十七才にもなつて独身で内科病院の看護婦を勤めていた。瘦せ方の長身できわ立つた容貌で、強いて云えば高慢で冷たい感じの顔立ちであつた。十九の齡から看護婦をしているだけあつ



て、院長や医員の信用も重く、腕も中々達者であつた。

十六七の見習看護婦から、二十二三の正看護婦に至る迄、皆彼女には一目おいでいた。それというのも二十四五になる頃には古い者は結婚や家庭の都合で自然に退職してゆくので、この都内の一、二を争う大病院でも八年と続いて勤務している看護婦は珍しかつた。

病院へ通つてくる男性といへば患者であるが、平常中々威張り屋の男達も、一度病氣となつて病院へ通うとなると、途端に氣弱くなつて、しかも最初は勝手もわからないまゝとかく、おず／＼と引込み思案になりがちであるが、そこへ持つてきて婦長である彼女が男性の患者に対して、ひどく冷たくきついのである。婦人や子供に対しては、そうではないが、男性の患者に対しては、全く取扱いが事務的で暖昧がなく、つけ入る隙がない。

一度いさゝか冷たい冬の日であつたが三十五六の初診の男の患者が診察を受けに来た時の事であつた。診察室の隣りで脱衣して診察室へ入ることになつてゐるのだが、その男は最初の事として、勝手に

わからず着衣のまゝ、入つてきて彼女にひどく叱られ、着物をすつかり脱いで入つてくる様命ぜられた。その権威に恐れをなした男は、すつかり慌てゝパンツ迄脱いで全裸になつて入つてきたので担当の医院を初め、

係の看護婦が面くらつてしまつたという事件があつた。その時彼女はもう別室で、他の患者の世話をやいてゐた。彼女が男にきつい点と独身を通してゐる点とで、過去に何か大きなショックを受けるトラブルがあつたという事が何の根拠もなしに噂された。

ヒステリー染みた彼女の行動と相俟つて、年下の同性に対しては、極めて親切であるところから、何か同性愛的な変態行為があるように云われているが、目下の所その相手と目されている十八才の看護婦千鶴子は、その事実を頭から否定し



てゐるので、神崎ミキは男嫌いでも同性に愛を求めようというのでもないらしく、勝手わからずま／＼する男の患者をきめつけることにサジズム的な快感を味うにあつて、普通の結婚の相手にはそつ

つた男を見つけた男が困難な為に独身を続け

てゐるのだと、解釈するのが妥当であらう。

若し彼女のよ

十、女に叩かれた男

「マゾの男、サジの女に奉仕したし。当方二十七才の男子、御通信願ひ度し。姓名在社」こゝにいつた三行広告を田舎の方新聞に広告した男があつた。彼の名前は荒川虎吉、至つて猛々しい名前であるが、心身共に柔弱な女の腐つたような男



であつた。彼は未だ独身であるが、それは正常な性行為では快感を味うことが少しも出来なかつたからだ。

彼は女という者にリビドを感じるといふよりも、自分に対して激しい虐待を加える仕うちに対して限りない憧憬の念を抱いていた。それは彼が小学校に通つてゐる時代からのことで、同級生、それも異性からいじめられて喜ぶ性癖があつたそれが長ずるに従つて次第に昂じて来て

◎小説に現れた女天下◎

我が国の小説には男性のマゾヒズムの情緒を特に取扱つたものは余り多くないが、谷崎潤一郎氏の如きは性的倒錯を主材とする特殊な創作家であつて、その初期の作品である「痴人の愛」「翫間」「捨てられる迄」「饒太郎」「富美子の足」の様な女子に屈服する異常なる主人公の行動が氏一流の粘り気のなる麗筆によつて微細に描かれている。

中河与一氏の「天の夕顔」も年長

今ではもう何をおいても、自分が異性によつてその膝下に圧倒され、鞭打たれ、縛られ、叩かれる事に憧れ、そんな状態を想像するだけで、仕事にも手がつかない有様であつた。

彼は高等小学校を出ると、或る双物鍛冶の弟子となり、主として研ぎ専門の仕事に携つていたので、生活には事欠かなかつたので、遂にその堪え難い願望を実現させるために、特殊喫茶街や私娼窟を

の美しい婦人を慕う青年の異常な迄の猥褻状態が全巻に描かれているが特にその主人公が婦人の素足を愛撫するあたりは足フェチシズムの色彩が濃厚である。

潤一郎氏の作品でも右に挙げた以外でも、そういう傾向の小説が多い「赤い屋根」という短篇でも映画女優を妾に持つ老人のマゾ的行状が、その妾の若い男と浮気をする場面を見せつけられて喜ぶのあたり、真に迫つて変態的な作中人物の行動が芸術に迄高められている。

訪ねて、特に普通料金の倍額を支払うからといつて、上樓し、相手の女に自分を縛らして蒲団の上にころがし、紐やコードで叩かして悦にいつていた。着衣のまゝではこたえないので、自ら裸体となつてじかに肌を叩かして、それによつて初めてオルガスムスに達していた。

最初のうちは女たちは金目当てで彼の要求に応じていたが、次第に馬鹿らしくなつて、真剣になつて叩叩しないので、彼も被虐的な快感を十分味わうことが出来なくなり、そうして知り合つた待合の女将に智慧をつけられて、前代未聞の新聞広告となつたのであるが、案外世間は広いようでも、そういうた広告に應ずる物好きな婦人も少く。その新聞社気付で彼の手元に来た便りはたつた二通であつた。しかも、一通は住所明記してなく、「私は男を叩いたり虐めたりする事に興味を持つ女ですが、只今家庭の事情で直ぐお求めに應じられないのが残念です。杉隆子」と記されてあつた。もう一通は住所氏名もはつきり記されてあつたので、早速返事を出したが、宛先調査するも不明という附箋付で返つてきた。

伝女乱

初対面

はじめ赤川芳を見た時飯沼は十七位いかと



突 実
花 木
玲 子

思つた。赤川芳を紹介したのは、飯沼の家に出入りする糸崎という青年である。赤川芳はクリームだけを顔に塗つた程度の清潔な化粧

をして、袂の長い和服だつた。子供っぽく見せているのは淡黄色の三尺帯のせいであつた。後に芳が、飯沼の前に両股をひろげ

た姿態を投げだし、海軍ナイフで自分の下腹部を切りきざんで欲しいと強制するような悪癖があろうなどとは、その時は誰も気づかなかつた。飯沼自身この乙女乙女した感じの美人に清が清がしい好意をもつた。赤川芳は糸崎の背後にかくれるようにして椅子に掛けていた。そして後から糸崎を指で突ついては、自分の言い度いところを全部糸崎に代わつて云わせていた。

「僕が先生のお宅へお伺いしていると知るとこの赤川君が一緒に連れていつ呉れと頼むもので、お連れしたわけなんです。―はア、あの、赤川君は俳句の勉強が希望でそのために先生の御指導をお受けしたいと僕に云いました」

赤川に突つかれている糸崎を飯沼はお可笑そうに見ていた。

「赤川さんは在学中と見うけるけれど学校は何所？」

「Fでございます」

飯沼から問いかけて、芳はきれいな声でハッキリ答えた。人前でもものの云えない程内気な性格でもなさそうである。

赤川芳の性格の中に、男に甘え頼ろうとするものが多分に有るに相違ないと飯沼は学者

淫 乱



らしく此の女性の性格の分析をした。作つた俳句をたづねると女はすらすらと三句許り読みあげた。「まだ咲かぬ花の上なるおぼろ月」そんな句もあつた。「なかなかやる」と飯沼は感心した。

山積みしてある蔵書の中から飯沼は数冊本を貸した。本を抱えて赤川芳はいいねいに挨拶し、糸崎を残して先に帰った。芳が女中におくられて表へ出ていつた気配を感じると、糸崎が神経質そうな顔で、

「先生に御紹介はしたんですが、僕はあの赤川君についてどうも腑におちぬところがあるのです。将来ご迷惑を掛けることになりはせ

ぬかと心配でなりません」と云いだした。

「理由は何だね」

「ちよつと見たところは若そうですが、あれで彼女は相当歳を喰つてゐると違いますか。

僕は歳を聞く程の仲ではないので遠慮していますが、それとなく探ると僕らでも知りそうにないず

一つと昔の事などよく知つてゐるんですよ。僕の想像では三十から三十五歳迄の間です。姪がF校在学中なので赤川芳のことを調べてみたら、そんなのいないそうで、在学生名簿をくつても赤川芳などという姓がだいたい無いのです。顔を見ると小皺一つないみづみづしい彼女の皮膚ですが、手を見るとげつそりします。大きくて皮が厚くて労働者の手でもあんなのは珍しい。だから彼女は和服が好きで手を袖口にかくしてゐるのだと僕は睨んでゐます。赤川芳は深い秘密を持つて、それを隠して生活してゐる女のようにです」

「それ位のことなら心配しないでいい。かえつて興味深い女だと人は思うよ。どんな平凡な事でも、隠しさえすれば面白くなるもの

だ」

「処女でしうるか」

「どうかね。歳は二十歳位いだろう。三十五はあまり冷酷な見方だ」

糸崎は苦笑して頭を掻いた。

糸崎が帰つたあと飯沼は赤川芳のことを直ぐ忘れた。飯沼にとつて始め彼女はそんな影の薄い存在であつた。

裸 女

飯沼の先輩の学者が小さな山を一つ越した向うに住んでいた。京都という町の中にも山がある。飯沼は適度の散歩のつもりで山を越しては先輩を訪ねて往復する。帰途が遅くなると、ある寺の境内をぬけて近道をした。そこは鬱蒼とした森の中に不動堂などがあつて滝の音がしている。

ある日ふと飯沼は思いついて滝壺のある方へ下りていつた。

大分夜は更けていたが、家へ戻つて寝るより、今暫くこの良夜を外ですごしたい気持ちがあつたからである。行く程に滝の音はとうとうと夜の底へ音たてて降りくだつてゐるのがわかる。滝といつても、不動堂に籠つて修業する信者の為に半ば人工で作られたものだけ

らけちくさい。ひつそりした山の静寂の中にあるとそれでも極めておごそかである。

冷たい水しぶきが顔にかかるあたり迄きて飯沼はピタリと足を止めた。滝にあたつて禱念している人影があつた。滝の上に覆いかぶさつてゐる紅葉かなにかのよじれた木に電線を巻きつけて、十燭光ほどの電燈が点つてゐるが、その光に浮き上つて見えるのは白い裸身にふさふさした黒髪であり、この深夜の行者は確かに女性であつた。

手は合掌せずに下腹部を——殊に女性の象徴の影の濃い凹面のあたりを丹念に撫でてゐる。

防禦なく突出している乳房は白く豊かに肉を盛りあげて水をはじいてゐる。若い女だ。飯沼はゴクリと生唾をのんだ。恐怖と興味と微弱な発情とを覚えながら、なお目を凝らして滝壺の女性をうかがうと、意外にも赤川芳であつた。またたきして幾度見直しても矢張彼女に相違ない。まだ冷氣のある季節に、深夜水ごりをするなどとは余程の強情我慢がなければ出来る業でないから飯沼は、赤川芳を見直してゐた。

芳は股を軽くひろげた手は変質者のようにその部分許りを躊躇して飽きることがない。

約十分、芳は滝にあたると身体を振つて水からあがつた。飯沼は芳が身体を拭いて着物を着はじめたから、慌ててあと戻りした。とらうたる滝の音で足音も人の気配も掻き消されるのが幸いである。

赤川芳に対する飯沼の興味が勃然と湧きだしてゐた。

飯沼は立木に身をひそめて芳をやり過し、あとをつけた。人通りのある灯の明るい通りへでたので、自分の行為が辱づかしくなり、尾行をやめて家へ帰つた。床に就いても仲々寝つかれなかつた。

事件

だいぶん暖くなつたある夜、糸崎が飯沼の家へ赤川芳を担ぎこんだ。

芳はまッ青な顔色で、唇に少し血がにじんでいた。

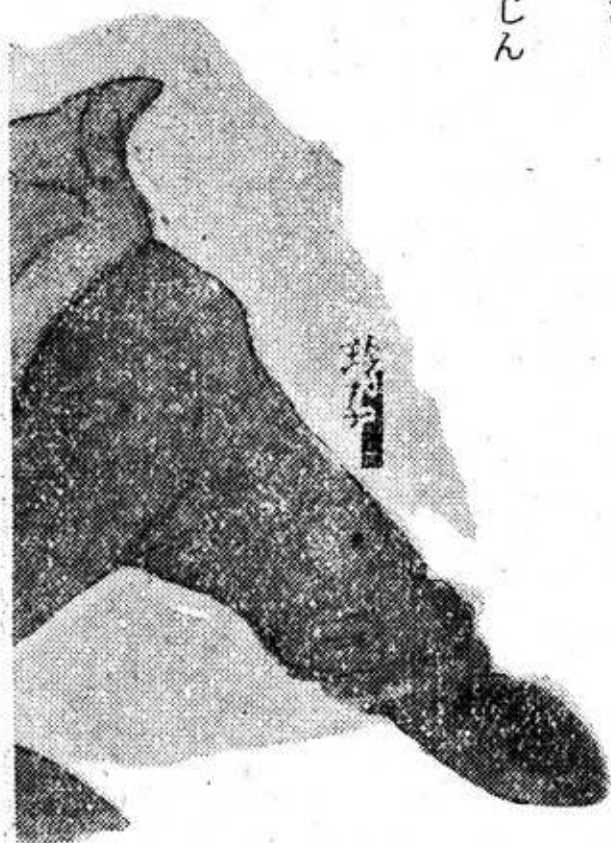
「先生！先生！」糸崎の慌ただしい呼声に飯沼をはじめ奥さんも女中も坊や達まで、玄関へ飛びだすとその騒ぎである。糸崎にかかえられてゐる芳は、飯沼の方を見て青い顔を苦しそうに歪めて微笑ほほえもうとした。

「どうなさつたの糸崎さん。まあ、

この方お召物が泥々よ」女中が運んできたブドウ酒を芳の唇にふくませながら奥さんが糸崎を振返つた。糸崎の容子は変つていない。「先生のお宅をお訪ねしようと二人で其処迄来たら暗がりから飛び出した男が、赤川さんに突きあたつたんです。赤川さんは避けきれなくて、道路へ横倒しになり、そのはづみで身体を打つたらしい。医者に診せたらと思つたんですが、赤川さんが突然のショックに驚いただけでたいしたことは無いと云うので一先づ抱えてお連れしたわけです」

「ちよつと休ませて戴いたら直りますの」と芳は喘いだ。

「ぶつかつた男も無茶な奴だ。それでソ奴はどうした？」



「どうも計画的に突きあたつて来たとした僕には考えられません。暗がり立つていたのがバタバタと赤川さん目指して突進してきたんですよ。労働者らしい、風態の悪い男でした。赤川さんが倒れたのを見定めるとせせら笑つて逃げて行きました」

……鮮麗な花のように身を折りくづしていた芳が、とじていた目をあけて身じろぎした乱れている着物の前を気にして身づくろいするのである。動悸はおさまつたらしかつた。

「さあさあ……坊主共はお部屋へいつた、いつた」と飯沼は子供たちを追ひ払い、糸崎を助けて赤川芳を応接間へ運んだ。彼女は大分元気を恢復していた。

「お手数おかけして済みません。倒れた時鳩尾を打ち気が遠くなりかけただけです。もう大丈夫ですわ」

「こんなでは危くて表もウツカリ歩けぬな」飯沼が一般的な危惧でつぶやくと、芳は個人的な慰めと解釈したとみえて、

「そうです。私皆に狙われているんです。

自分のものにはならない女の肉体にぶつかつて意趣晴らしする異状な情欲の醜い男たちに

——ひどい仕打ちですわ」と独語した。

彼女の言葉には珍らしい激しく勢いこんだ

罵倒である。

飯沼は「おやッ」といつた表情で、

「その男、君は知つてゐるの」と問うた。

芳は興奮のあまり思わず口走つたことにぎくりとして、憂い深く悲しげにうつむいてしまつた。うつむいたままコクリとろなづくのである。

「何か怨みを受ける覚えがあるんだね。といつても、

労働者と君と、どうも、取合せが妙で想像もつかないが」

芳はうつむいたまま無言を通した。わけを話したがらぬ様子がはつきりわかつたから飯沼も強いて聞こうとはせず、赤川芳という女について又一つ増えた疑問を不気味な思いで



心に持った。

いつ迄も犬の遠吠が止まず、芳は帰途が危いと危惧する奥さんの発意で、その夜は客間へ泊め、糸崎だけ帰つていつた。

バ ク ロ

飯沼に弟がある。農林省の技師で、まだ独り身だから飯沼の家に下宿して勤めにでている。その三郎が、

「今日土地測量にいった所で、赤川芳を見た彼女には驚かされるなア」と、夕食後の団欒の際兄に話した。

道路整理の人夫の群が堀立小屋を建てて、たむろしているが、そこで赤川芳を発見したのだ。彼女は手伝いの汚い小母さんたちになじつて、人夫共と猥雑に談笑していた。そうした中で見ると、家へ訪問してくる芳とはぜんぜん別の、野性味があふれているのに三郎は一驚した。

つかつかと寄つてゆくと、人夫は省の技師がむさくるしい人夫溜りへ入つてきたのに恐縮して路をあけた。赤川芳は三郎の姿を見て顔色を変えていた。以前泊つた折顔をあわせているので三郎が飯沼の家族であることは解つていたのだ。

芳はくるり向を変えようと勇ましく走りだし裏口から脱兎のように戸外へ飛出していった「あの人、赤川というんだらう」

三郎は好奇の目で二人の有様を目送してい

る人夫の群へ引返した。

「赤川か黒川か知らねえが名前は芳ですよおい誰か知つたの居ねえかお芳の苗字を」

「麻羅狂いのお芳だ」誰かが半畳を入れた。

三郎は聞えぬふりをして「此処へ働きにきているのか」と聞いた。

「というより夜一緒に寝る男をくわえこみに来ているんですね。お芳を満足させる逞しい男をね」

「ではあの方はバンバンかね」

「いや金とはらないです。この先のもう一つの現場監督のれつきとした亭主があるのに飽足りなくて何処へでも出張して男だけを目当てに操を任すから色狂いだと陰口云われています。亭主は血眼でお芳にそんなことさせまいとしますが持つて生れた悪業で、直りそうもありませんや」と人夫は答えた。

その次第を飯沼は三郎から聞き終つた時苦が苦がしい顔をしていた。何か赤川芳にだまされた気がしてならない。

飯沼の家に一晚泊つてからは家内中の者とも馴れ、足しげく訪ねる芳だつたが自己の私生活に關しては何も明かしてはいない。(無理に問いたただす権利もないが、人をあざむく言を吐くのはもつての他である。又私生活の

◇動物と性の象徴◇

大 路 美 子

▽鯉——鯉のように元気で、威勢の良い魚は精神分析的に、ペニスを象徴していると云われています。

△猫——フランス語の猫 *Chat* は、女性器の俗語に使われているように、大体が女性を現わし、日本では商売女、殊に芸妓の隠語に使われる事が多いようです。それは三味線が猫の皮で張られる事や、芸妓の言語動作などから連想的に生れたのは確かですが、売笑婦異名集という奇観本の中には、芸妓をネコというのは、寝妓から転じた当て字である、と書いています。

▽貝——貝が全世界で女陰の象徴になつてゐることは、明瞭な事実ですが、面白い伝説では、愛の女神ヴィナスは、天の男神ウラシスの去勢された男根が、海上に漂つてゐるうち、その泡の中から誕生し、子安貝に乗つて陸へ着いたと言います。

日本では、清女が晩年になつて、色男につきまとわれるのを嫌つて、女陰を挟り取つて

一端ぐらい洩らしてもいい筈だ」と飯沼はだんだん腹がたつてきた。

それを感じているとみえて芳は十日程ふつり足を絶つた。

このままより来ぬのかと飯沼は何故かがつかりしていた。赤川芳への興味が案外根強く自分の中に巣くつているのに驚いたのである。飯沼はとうとう三郎が赤川芳を見たという道路舗装をしている市の北端の町へ出掛けた。葉桜に春の嵐が吹きつづついていた。埃が支那大陸で経験した黄塵のように穹を赤くして舞上つていた。

新開の十二間道路はきれいに整地され、重量感のあるブルトーザーが道の隅にでんと置きすててあつた。人夫小屋も人影はなく板戸がきつちりと閉つている。二棟の小屋のまわりをうろつき、諦めた飯沼が帰りかけた時その一棟の中に微かな物音を聞いた。歩み寄つて、小さな節穴に目をあて薄暗い小屋内を覗くと、鍋、釜、夜具などの散乱している中に、両手両足を縛された女が転がっている。

飯沼は横飛びに小屋の入口へ走りよつた。板戸に体当りをかけるとバラバラと木の枠が折れ、南京錠が飛び散つた。女の猿ぐつわを外すと、赤川芳のみづみづしい顔が、少しや

つれを帯びてあらわれたから飯沼は思わず知らず唸つてしまった。からだの自由が利くと芳は突然、飯沼の目を震めて、かくし持った海軍ナイフを宙に振つた。自分の下腹部に突き立てようとしたのだ。飯沼が一瞬の差でその手を掴まなかつたら、芳は鋭利な刃を自分の性器に突き立てていた筈である。

「先生止めないでください。私みたいに罪深い女は無いんです。先生に辱づかしいこんな姿を見られたのも原因は私の、私のこれにあるのです。こんなもの無い方が余程楽です。神が人間を造つたというのなら、どうしてこんな罪をつくるものなんかわざ／＼与えねばならなかつたんでしよう。私せめて自分のだけでも抹殺してやります。止めないで先生」

「何を云う。君は馬鹿だ。男達が君をこんなひどい破目に落すので君にはなにも罪はないのだ。冷静に立ち直つて、そんな不潔な考えは直すことだ」

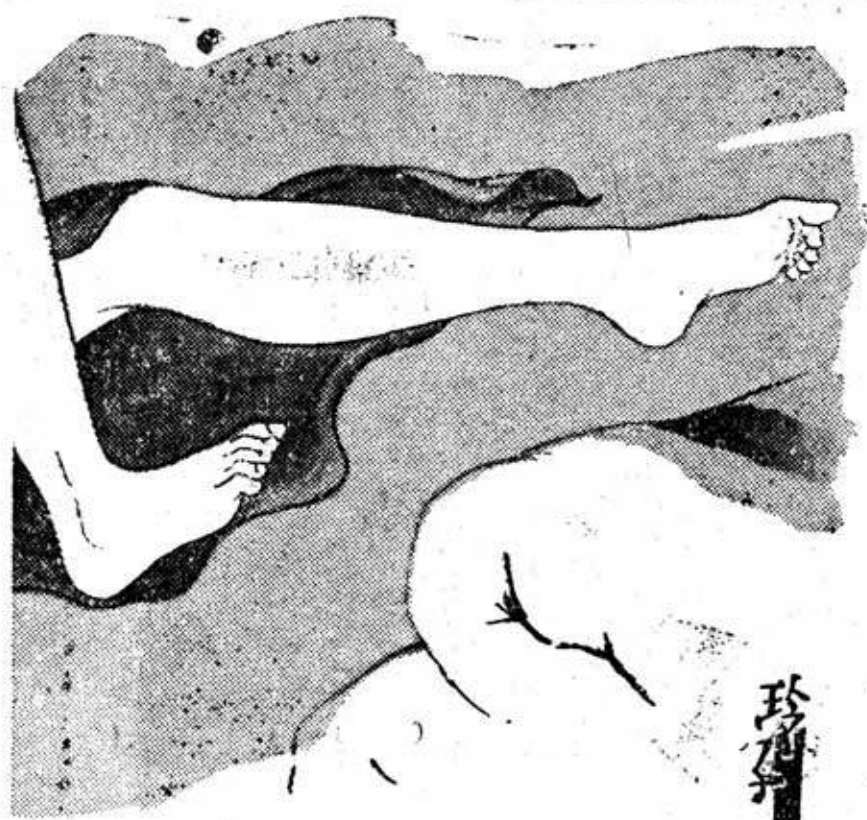
「私は男という男が全部欲しくなるの。それでいて交渉をもつとその男を肉体的に嫌悪する変な癖があるんです。貪婪に恍惚を求める私を、満足させる強靱な男がいないのはいけないのですわ。どの男性も皆私を絶望させ私は次の男へ情欲の巡礼を続けてゆく。ねえ

海に棄てたら、それが似貝になつたと言つています。

▽馬——馬が性慾をシンボライズしていることは、世界的なものです。釈尊の陽根は偉大だつた由で、馬陰藏相と呼ばれていました。だから日本でも巨陽者を、馬之助だとか馬の申し子だとかいふ、午頭天王の本尊（古くは素盞鳴尊）が、いつの間にか巨陽の代表者、弓削道鏡になつてしまつたのも、無理のない事でしょう。

▽龜——その頭と頸がベニスに似ているので男性を表し、古代には生殖神とされてきました。アイヘル（アイ）の事に一に龜頭というのにも穿つた言葉であると云わねばなりません。日本では目出度い龜も、中国では喜ばれないのも面白い対照です。

▽蛇——これはマーキユリーの使神だけではない、その形態から、男性の象徴に用いられるので有名な動物です。特に蛇そのものの習性として穴を好んで住むという所から考えて、古来から多くの伝説が伝えられていきます。その点龜と共にベニス象徴の双璧といえるでしょう。



先生お止めになる代りに、先生が突くなと切るなど、好きなように私を切りきざんで下さいませね。私満足ですわ。お願い、お願い致します」

涙を溜め、唇を乾かし、芳は真剣になつて飯沼の手に縋りつくのである。飯沼は芳のもいであつ毒氣にあてられて精神も錯乱する思ふ。

無理に手にあつけられたナイフはピカリ外光をはじいて血を呼んだ。飯沼の目の前にヒク／＼動いている女体は、下半身に血を凝結

して触れれば忽ち血の花を噴く構えである。飯沼がナイフで斜に切つた時、芳は歓喜の奇声をあげた。

ちく／＼と真赤な血はにじみ集まつて大きな篠を引くと臀部の方へ垂れていつた。

死体を舐める夫

「あつ、とう／＼こんなことになつてしまつた！」

ゴルフズボンに鳥打帽の、土方頭風の男が入口に立ちすくんで、大声で叫んだ時飯沼は始めて我にかえつた。

飯沼が胸に抱えている芳は体温を既に失つていた。二百数十ヶ所の傷口から噴出した血量のため貧血を起したのだ。死顔は六十の老婆の如く皺をきざみ、生前の妖しいみづ／＼しさの片鱗も残つていなかった。然し表情に喜悅の微笑をたえ満足気な意志をたたえた屍体だつた。

「飯沼先生ですね」と男は差し覗き、「芳は私の女房です」と彼は喋りだした。

「あんな手荒な真似をして出てゆくつもりはなかつたんですが、目を離すとこの女は私の手許から直ぐ飛び出して、誰彼のけじめなしに肉体を与えてしまふんです。糸崎さんとも

先生の弟さんともつい三日前一度関係があつたのを私は知っています。あのお二人のような繊細なタイプの方は一度だけで、芳の変質的なしつこさに呆れて逃げる筈です。例のオサダとかいう女とよく似ていて風も夜も男の指が女の上になれば承知しない奴ですから私も自分の女房ながらホトホト弱つていました一方そんな性癖の女が不憫で可哀そうで今日は芳が堪能するまでつきあつてやろうと、そのつもりで数日分の食糧の買い留めにいつて来たところですよ。お笑い草ですが、悲愴な気持でした。芳と心中する迄と覚悟をきめたんです。——そういう性癖を、芳も冷静の時は自分でも辱づかしいとみえ、矯正しようと努力していたんです。高尚な趣味をもち精神を清純にしたらと自分から先生のお宅へも学問のお教えを受けに伺つたわけなんです」

「うう……」飯沼は赤面の余り、両手で頭を抱えてしまつた。

「信仰生活に入つたりもしましたが、芳のよるな変質者と関係すると忘れられなくなる男も有るとみえ巧いことを云つて芳を誘惑に来るやら、芳が表を歩いとわざと身体を芳に叩きつけて挑発する奴も随分多く、矯正の努力は総て水泡になるのが落ちでした。実際の

歳より十も十五も若く見えるのも芳の不幸の原因です。芳は両親が早死にして祖父に育てられたそうで、幼い彼女を毎夜抱いて寝ながらその爺さんがいたつらしたらしいんで。八十近い老人なので、自分の老先も短く後に残



す。だから何人もの男を漁り尽しても離縁など夢にも考えた事はありません。芳さえ、私で満足していて呉れれば、此れに越した事はないんですが、やつぱり私のこの負弱な代物では、こんな異常な淫乱の女を満足させる事

す芳が一人立ちで生きてゆくためには女の操を売れば命がつかねるという考えから早く熟させるのがその眼目だったらしいと芳が、怨みもせずに話していました。矢張それが芳をこんな変質者にしてしまったんでしよう。思えば一層可哀そうな女です」

感情が激した男は最後は吸りあげて泣いた。「芳は私には満足していなかったようですが私は此んな女でも諦めきれなかったのです。芳の肉体にすっかり参つてしまつていたんで

なんか出来ませんでした。今から思えば、此の私の身体に不満を持つたのが、芳のグレ出した原因です。先生の前ですが、実際芳の躰は素晴らしいもんでした。これは、さつきも申し上げたように一度芳と関係した男が、忘れられなくなつて後をつけ廻すことでもおわかりでしよう。……

ええ、そうですとも、勿論、私一人が芳を独占しようなんて考えた事なんか一寸もありません。荒くれ男の土工達の弄り者になつてゐる時だつて、私はじつと眼をつぶつて、これも芳の道楽だと思つて我慢していたんです。若し私が芳に愛を注ぎたいとしたら、とつくの昔に離別してしましたよ。……こんな女を家内にしたばかりに、私の一生も合なしになつてしまつたんです。芳も可哀そうな女だが、私だつて同じように、哀れな男なんですよ。」

飯沼はふら／＼立ち上つた。糸に吊られた人形のやうに戸外の闇へ行くやうに歩みだした。飯沼を止めようともせず、男は赤川芳を哀惜する絶望の眸でいつ迄もじつと睨んでいたが、無残な屍体へ背を丸めて這いよると、芳の血なまぐさい裸身をやさしい天使の目をしてペロ／＼舐めだしていた。

飯沼の行方は誰も知らない。(へおわり)

お座敷ストリップ色勇伝

鬼^{おに}山^{やま}絢^{けん}策^{さく}

妓も居る中で何故彼女が一躍人気者になったか、彼女の売出しの一幕を御披露しよう。

この玉勇、年は二十五で、五尺四寸、十六貫と言う堂々たる肉体美の持主、一寸きつい顔だが、そのけんのある眼に凄じ魅力があり彼女にジツと見つめられると、大抵の男はブルくつとなる程の妖艶な美人である。一寸暁テル子に似た感じの肉感的な女だ。

芸事も三味線、清元、新内、小唄など達者

にこなすがブギも唄い、日舞、洋舞も得意だった。負けぬ気の意地つぱりで、涙もろい事義侠心の強い事、度胸のいい事、一寸サヂズム的な所のある事等で有名だった。亡くなった養父母の一人息子に義理を立て、大学迄通わせて仕送りしたり、一寸同情すると千円や二千円パツと恵んだりした。その代り稼ぎも荒つぽくて、彼女の売りものは「お座敷ストリップ」で、日舞でレコードに合わせてやる長襦袢一枚のストリップが大もてだったこの土地には待合がなくて、芸妓は料理屋へ呼ばれた。玉勇は料理屋でストリップをやったり、又酔つぱらうと、諸肌脱ぎになつて赤い腰巻をクルツと捲つて大あくらかき男達を屁とも思わぬ啖呵をきるのも受ける芸の一つだった。

あの有名な税務署瀆職事件の直前、或る業者の組合が税務署の幹部連中を招待して一タ宴を張つた。私も一寸したひつかゝりで招ばれて一座に加わつて居た。

税務署の幹部の中に岡内と言う男が居て、

日本海に面した東北のA市の花柳界は、他の都市の色街と同じように終戦後活況を呈して来たが、最近東京から来た玉勇と言う妓が人気者のナンバーワンになつて居る。

秋田美人の産地として知られたこの土地で地元の花街の中でも素晴らしい美人も居るし、東京の一流の姐さん達にも遜色のない程の名

女天下時代

これが酒癖と女癖が悪く、彼の居る座敷に招かれた芸妓はいつも手古摺らされて鼻つまみになつていた。

「おい女共はまだかい？」

世話役の宮田が女中に電話をかけさせようとして立上ると岡内は

「宮田君、玉勇も呼んでくれ給えね。僕はまだ玉勇のストリップを見てないんだよ。是非頼んだぜ」

やがて芸妓が四五人来て座敷は賑やかになつたが、玉勇だけは現われなかつた。

「おい、玉勇はどうしたんだ。」

岡内ばかりでなく、皆が玉勇の出現を待ち遠しがつた。

「今晚は……」

やつと玉勇の現れた時は、もう相当酒の廻つて座の乱れかけて居る頃だつた。

「どうしたんだ。売れつ妓は、違つたもんだな」

「どうも済みません」

とニツコリ笑つて一座を見廻した玉勇が床

の間の前に並んだ税務署連中のかん首を見るとサツと顔色が変わつた。

「おそい罰だ、ストリップやれ」

「おいレコード〜。」

待ちかねたように催促する。

「あら、妾今日ストリップ出来ないのよ。」

「何だ？ どうして？」

「フ、どうしてもよ、今日は勘弁して頂戴」

「あんまりおエラ方が居られるので急に恥しくなつたのかい？」

「そんな事ないけどさ、大勢の方が却つてハリキレるんだけどね。今日はダメなの。」

玉勇も相当飲んで来たと見えて、眼のふちをボツと染めた風情はふるいつきたい程の美しさである。

「理由を言え。」

「そんな野暮な事おつしやらないでさ。サお一つ……。」

彼女は巧みに外らして徳利を持つて立上つた。

「駄目だ〜、皆楽しみにしてたんだから是非やつてくれ。」

宮田が立つて来て、徳利持つ手をおさえた

玉勇は小声で

「妾、今のお座敷ではイヤよ……。お断りする

わ」

「何んで？」

「だつてあの連中なんかに見せてやりたくないのよ。」

眉を寄せて床の間の方をあごでしやくつた。

「いや、俺達にとつちや大切なお客なんだ。是非頼むよ。」

「あなた方だけのお座敷の時やりますわ、妾どうしても今日はイヤ。」

そんな問答が何度か繰返された。

「おいッ、玉勇ッ、お前は僕達が気に入らんのか。それでやらんと言うのか」

岡内がそろ〜酒癖を出して来た。岡内と玉勇と二言三言合つて居たと思ふと、岡内は

「第一我々の所へ酌をせんとする法があるか。お前は俺達をのけ者にするのか……、サツやれッ。」

と帯へ手をかけて解こうとした。

「何をするんですよ、そんな乱暴な事なさるんなら帰らして頂きます。」

「何ッ、帰るつたつて帰さんぞ」

「何さ、あんたが妾達を呼んだんじやないでしよ。人の金で遊ばせて貰つてゐるくせに大きな事言うもんぢやないわよ」

「貴様、俺達を侮辱する気がッ。」

「妾帰ります！」

奮然として玉勇は立上った。

「まあ〜」

と宮田が慨てて止めに入った。

「すみませんけど気分が悪くなつたから帰らせて頂きます。」

「絶対！ 帰さんぞ。お前のいゝ処を見る迄は」

岡内は襖の前に大手をひろげて通せんぼした。その前に立つて来た玉勇は岡内と睨み合つた。一寸不穏な空気が流れた。が

「ホムム。岡内さんそんな恐^{おっ}かない顔したつて妾平気よ。チャンと税金は払つてますからね。けどあんたが一番御執心^{おつ}のようね。あんただけに見せてあげるわ。まあ、お座りなさいよ」

と自分から先に坐つた。岡内も襖の前にドツかりあぐらをかいた。

その時だつた。

一たん坐つた玉勇がパツと立上る拍子に実に鮮かに、裾前を片手で下着も腰巻も重ねてクルツと捲つた。片方の脚が太腿のつけ根迄露われたと思つた瞬間、片方の手で下前をパツと捲り、胯の上迄露出したと思うと、サツ

ト脚が上つて岡内の正面から肩を跨いだ。

「真つ平御免下せえよ」

私の所からは彼女の露出したデルタが岡内の頬べたへベツタリくつついたのが見えた。

途端に後の脚をあげて、岡内の顔へ股ぐらを擦りつけて頭を跨ぎ越すと

「バイ〜。」

呆氣にとられる岡内の顔が玉勇の赤いものになぶられて現れた時は、彼女はもう座敷に居なかつた。

二

これで一ぺんに人気者になつてしまつたのである。

此の辺迄は彼女を本名で書いても叱られないと思うが、これから書くもう一つの話は彼女の名誉のために仮名でないと具合が悪いのでやはり玉勇で行こう。

彼女のはこやで留吉と言う男、気が利くので玉勇も眼をかけてやつていたが、これが博奕に凝つて玉勇の着物を十何枚も持出して質に入れて、その金で今迄の損害を取返そうとしたのがスツテン〜に叩かれてしまつた。何しろ五万とまとまつた金で一寸返すアテがない。そこで姐さんの留守に空巢に入られたように見せかけて、ごまかしてしまつた。

ところがこれが新聞に出て、質屋の方でも



流し難くなつて、玉勇へ知らせたから、玉勇はカン／＼に怒つた。

「一体この始末どうしてくれんだい。」

「どうも済みません。どうぞ存分になすつておくんなさい。」

「存分にしろと言ふんなら、サツへ突出してもいゝんだね。それとも返すあてでもあるのかい。」

「どうも千や二千位なら何とかありますが、五万円と纏つては直ぐお返しする事は出来ませんし、と言つて、サツへ出されたんじや、私は二度と、この土地に居られなくなつちまいます。どうかそれだけは御勘弁して頂けないでしょうか」

玉勇は一寸考えて居たが、

「よし勘弁してやる、金を返さなくてもいゝサツへも知らせないよ。だけどお仕置だけにするよ。それは覚悟しておいで」

「へい、他のお仕置きでしたらどんな事でもお受け致します。」

そこで玉勇は、ひいきの客筋へ「今迄にない変つたストリップをやりますから……」と廻状を留吉に持つて廻らせた。

会費は三千円で、秘密ストリップ流行の近頃ではちと高い見料だが、どんな事するのか



と思つて、私も行つて見た。

「喜代川」と言う料理屋の奥座敷で、集つたエロハンターが約三十人、この一挙行で、彼女は利息迄つけて取返してしまつたんだからなか／＼頭がいゝ。

さてそのエロシヨウと言うのが――

「私も東京のキャバレーや待合で、色々秘密シヨウも見えて来たが、これは始めて見る変つ

たしろものだった。

最初に例の長襦袢ものをレコードで二三枚やつて見せたが、そこでいよくスペシャルシヨウに入つた。留吉が呼び出された。

玉勇は見物衆に向つて、

「実は一寸、この男が妾に不義理な事をしましたので今夜は、少しお仕置きをしたいと思ひます」

女天下時代

と挨拶した。留吉は膝をついて一寸頭を下げた。玉勇は留吉に向つて、

「覚悟は出来てゐるだらうね。」

「へい。」

玉勇は片手で長襦袢の裾をやくざ者のように捲つてムツチリした太腿を出して、片手で留吉の髪の毛を掴み、顔を太腿の方にグイと引寄せた。彼女の太股が何か兇器のように感ぜられた。

「途中でネを上げるんじゃないよ」

留吉は一寸怖えた色を見せて玉勇の顔を見上げた。玉勇はニツと片頬で笑つて見下し、白い脚がゆつくりと上つて、曲線をつくり、留吉の頭の上に足をのせて一旦ストップし、そこで力を入れて蹴とばした。自分よりも体格のいゝ玉勇に蹴とばされて留吉はコロコロと転がつた起上ろうとする傍へ走り寄つた玉勇の脚が又頭を蹴つた。こうして玉勇は留吉の頭を右に左にフットボールのように蹴りまわした。

それが済むと、留吉を馬にして、背中へ跨

がり、狭い座敷をグルグルと何遍も這い廻らせた。皮のバンドでビシリビシリと尻を叩いた五尺四寸、十六貫の豊満な肉体を背に乗せては、留吉の瘡せ馬は直ぐバテ動かなくなつてしまつた。

「どうしたんだい。そら！歩け、歩け！歩けよ！」

玉勇は背中に跨がつて居た尻を浮かして、首へ跨がり直した。そして

「ハイシツ、ハイシツ」

と尻を振つたから、留吉は一堪りもなく、くづれて、畳へ顔をつけてしまつた。何しろ十六貫の肉塊、長襦袢をはねのけて、じかにのつけられて居るので留吉は鼻が痛いと思えて首を横に捻じ向けた。

玉勇は悠々とその頭の上へ立上つた。

留吉は疲労困憊と言つた恰好でノビテ居た。玉勇はそこでブイと楽屋へあてた隣座敷に引込んでしまつた。

これでお終いか？

と思つて居ると、今度は、長襦袢をチョコレット色のガウンに着替え、かつらの島田を脱いで、アップの洋髪の地頭で出て来た。

留吉はまだ彼女に乗潰されたまゝの恰好で死んだように動かなかつた。

玉勇は、キングサイズの煙草に、カチツとライターで火を点けると、客席の方へ向いて一息吸つた煙をプーツと大きく吐いた。片手を腰に、片脚をあげて留吉の頭にのせたガウンの裾がバリリとこぼれて、赤のふち取りをした中から、白い脚が内股の辺りまで露出した。

彼女の容貌は日本髪よりも、洋髪の方が似合い、斯うしたなりで出て来ると、ストリップタイザーと少しも変わらないタイプで芸妓には見えなかつた。

「ちつと手荒々な事すると直ぐノビちやうんだからね。頼りないオスだよ。今度は、やりやつてやるうね」

玉勇は留吉の額から眉の辺り迄たれ下つた頭髪を足の指でかき上げて、足の裏で、髪をなでつけた。

「飼犬に手を咬まれたつてなのは妾の事だけど咬まれついでに今度は違つた処を咬ましてやるよ。」

玉勇は留吉の顔の前に膝をついて、ガウンを捲り膝の間をひろげて留吉の顔の前へ持つて行つた。

「ホラ咬め、お前の好物だろ。」

留吉は首を起して眼の前に突きつけられた

ものをジッと見入っている。

玉勇はグイと身体をのり出して、十六貫の全体重をベツタリと留吉の顔の上へ圧しつけた。留吉は仰向けにされ、息もつけぬ苦しさにこの暴慢な女王を見上げて居る。

玉勇は片頬に微笑を浮べて、身体をリズム

カルに動かして居る。

私達の方へ正面きつて膝をついて居る玉勇のガウンの蔭から、僅かに覗いて居る臍が、開いたり、すぼまつたりしているように見えた。

この無言劇が約十分、漸く高潮に達して玉

勇が息使いも荒々しく、乱暴に、尻をくねらせて、留吉の顔を押し潰すかと思われた時、玉勇はニツと満足の微笑を見せて立上った。その下にだらしなく唇を開けた留吉の顔が踏んづけられた大福餅のようにノビテ居た。

(終)

読 者 通 信

私は二年前より貴誌の愛読者で四月号より直接購読者になり毎月御送付を頂いておる者ですが、これからも永久に愛読させて頂きます。さて誠に恐れいりますが、何とか左記の方からは非御返事を頂きたいので、次号へ左の読者通信を御世話願います。

東京のP・L様

御書面の意味、私の日頃心に思う事と一致いたしております

決してあなたを失望させる人格

の持主ではありません。御安心の上、住所至急御通知下さい。

その上で私の住所も本名も申し上げ、よりよき友情に生きますよう。(奈良県高田市八幡筋一丁目、川上方、中村良輔)

誠に失礼ではございますが、同封のお金はお茶菓でも召し上り下さい。

私は同性愛の転倒性欲者に悩まれた事がある。其の男は長驅白顔で皮膚も滑らかであつた。彼は二十七八才であつたろう。

彼は学生を好んだ。特に好んだのは大学生だつた。彼の好む所はMund-Koidusであつて、何人も最初襲撃を受けた時は面喰らうそうである。彼は純マゾ的な汚物汚損を好むものであろうか。私は必ず彼には、対者の面喰らう点に興味を覚えて、サド的な性質を帯びてくるだろうと思つて居る。

ある春本にはオナニストが通常の行為のみにあきたらずして他に対象的を求めてゆく事が記されてある。ある種のものには対象的として何々等と記してあるのを見出すことが出来る。友

人の話によると、オナニストが怪しげな画を求めたり、器械を求めたりするのがあるそうだ。この微苦笑を禁じえない道程が種々の転倒性欲に進みゆく第一歩でなからうか。この様な人々や未熟な青年男女が、その一知半解な性知識や無知によつて、如何に禍されてゆくかという事を考えると、正しい性教育が急に出来ない問題であることを痛切に考えさせられる。

此の意味に於て、本誌なんかは更に一層の躍進を期待する雑誌である。

(東京都目黒 富岡初雄)

妾は早熟な箱入娘であつた

或る人妻の告白

佳月子



一

その頃の

私は孤独を
好む癖があ
つた

学校でも

賑やかなグ

ループを離

れて、一人

ぼつねんと

裏山で読書するのが好きであつた。だから家でも勉強部屋に当てられた裏二階の六畳で家族達と遠く隔つた部屋で一人で起居していた私の家は町でも有名な老舗のお菓子屋で父祖

の代から伝つた古びた家には父母と弟妹達と男女の奉公人五、六人であつたが家が広いので店の繁昌に較べて奥はいつも閑散としていくつもく大きな部屋ががらんとしていた。

私は十六歳で町の女学校の三年生だつた。色が白くてすらりとして自分で言うのも変だが、まあ美人の方であつた。家は昔からの金持で聞えていたら申し分のない箱入娘で友達に羨まれる幸福な身分であつた。

私は文学を好んで手当たり次第に色々の本を耽読していたので年の割に早熟だつた。文章に美化されて書いてある男女の関係などにかすかな憧れを持つたり、仄かな性慾を感じて一人ひそかに頬を染めたりしていた。

或る秋の夜だつた、時計がたしか一時を報じた頃梯子段を足音を忍ばせ乍らみしりと上つて来る物音を聞いた。そして合の襖が音もなく開いた。私は寝ている体のむきを変えて其方を見ると、あつと魂消げて赤い解巻をすつぽりとかぶつて、がた／＼震えはじめた。それは黒覆面をした賊だつた。――

賊は私の枕許に突つ立つていたが、やがて静かに坐つた。

「お嬢さん。そんなに怖がらないでもいいですよ。」

賊の言い方がとても優しいので私はそつと眼をあげて覗いた。覆面から覗く眼が優しくおだやかに微笑んでいた。賊は見上げる私に応えるように両手で解巻を下げて私の乱れた髪を静かに撫でくれた。私はその男が覆面しているに拘らずそれ程怖しくなつて来た。

「お嬢さん、僕のいうまゝになつて呉れますか」私はその時どうも、こつくりとうなづいたらしい。賊はいつの間にか私の布団の中にもぐりこんで来た。

ああそれから私には生れて初めての経験だつた。若さに張り切つた逞ましい腕に私の体がしびれる程抱きしめられたのを覚えていた早熟な私の体は年齢の割に發育を遂げていた小さい苦痛はあつたけど、そろ／＼異性を求める慾望を感じていた私の体は、男の与える刺激を素直に受取つていた。

暫くあつて氣を失つたようにがっかりとしている私の枕許に男は坐つていた。覆面の中から見える眼には優しさと情熱とそして羞恥があつた。

「私、もう処女じゃないのね。」私がつぶやくように言うと男は、黙つてうなづいた。

「すみません」賊はそつと頭を垂れて後悔するような様子を見せていたが、やがて、はつとしたように顔を上げた。

「じゃ、お嬢さん、左様なら」賊は私の手をさぐつて握手した。私が身を起した時は男の姿は何処にもなかった。部屋の窓の戸が一尺位開いていた。腰のふらふらする身で立上つて、下をのぞくと何の人影もなくなつた。向うの裏木戸の門が抜けて、風にばたん／＼と音をたてていた。私は始めて恐くなつて、へた／＼と腰を下した。大変だ泥棒に処女を奪われた……私は真蒼になつてがた／＼と慄え乍ら表着をひつかけて、階下は転がり下りた。

「お母さん／＼」と呼び乍ら……だが階下はどうした事だろう。父も母もそして屈強な男達もいる筈の奉公人が縛り上げられて猿ぐつわをかまされて、丸太でも転がすようにあちこちに寝ているではないか？私は夢中でその人達の縄を切つた。それから先、何が何だか判らない。暫くして刑事さん達の巡查さん達の五、六人の人達が賊のにげ場所の私の部屋の窓のところで何やら言つていた。賊はたつた一人で短刀をつきつけて、家族の大人達を次々と眼にも止まぬ早さで縛り上げ、其日の掛取金と店の其の日の売上げをさらつて行つたそうだ。

「お嬢さん。恥かしいの何のと言つてゐる場合ではないよ。それでね、その泥棒が貴女にどうしました？」刑事さんは私にそう質問する。私はうなだれていたが体ががく／＼震えていた。私は唇が切れても言うまいと黙つていた。

場なれた刑事達はすぐわかつたらしい。父も母も愕然とした表情であつた。私は無言のうち産婦人科医つれて行かれ、洗滌された羞恥のきわみ驚きのきわみの次々の出来事で私は放心したような状態になつた。町の顔役である父の奔走のお蔭で、家の強盗事件は新聞に出たが、娘の私が暴行を受けたなんて記事は出なかつた。父が嫁入前の私を思つて必死にもみ消したらしい。

賊が盗んで行つた程の金等は家の全身代に比したら大した事はなかつたけれど一家に与えた衝動は大きかつた。病弱な母はそれが原因と言うわけではなかつたかも知れないが病床に就くようになり、時々急に高熱が出る事などあつたが其の時うわ言に「泥棒が来た怖い／＼」などというようになつた。父も世

間に表立つては知れなかつたが愛娘が汚された事を気に病んで神経衰弱気味になつていた家中寄るとさわると泥棒の話になり早く捕えられないと心配だといった。

併し私だけはどう言うものか泥棒が憎いとは思わなかつた。私の着物に肌に煙草の香の仄かに混つた若い男性のにはい何時も何処かにしみ込んでゐるように私には感ぜられた私にあれ程近々と接触して誰にもふれられた事のない肉体の秘密を知つた男性はあの泥棒を以て最初とする。ある小説で見たが女が初めて身を許した男性には本能的な愛着を感じると言うが全くそうであるらしい。何処の誰とは知らない否恐ろしいお尋ね者、我家を荒らした凶賊を私は心ひそかに慕わしく恋しくなつたと言うのが事実である。私は家の者達に何と反対されても、裏二階のあの部屋で寝た。皆見掛けによらない度胸だと驚いていたが私は怖くなかつた。否いけない事だとは思ひ乍ら、あの覆面の中に包まれた若い男性の肉体と受撫が恋しかつた。

彼が恋しくて堪らなくなると、私は何故あの時彼の覆面をむしり取つて彼の顔を見ておこなつたのだろうと後悔した。併し万一彼の顔が二眼と見られない恐ろしい傷か業病の瘡

だつたら、やつぱり見ないのがよかつたとも思つたが、彼が私の部屋に忍んで来た時間になると、自分の理性では制し切れない肉体のうづきに悩まされるのである。十六歳とは言へ大柄で早熟な体は、あの夜の強盗によつて、女として芽出えさせられたのである。

一一

当局の必死の捜査にも拘らず家を襲つた強盗は何の手懸りもなかつた。其の年も暮れて私は十七の正月を迎えた。父も母も殆ど回復してゐたし、店は暮には非常な繁昌で、派手好きな父は縁起直しだとばかり、何時もの年に較べてぐつと豪勢な迎春ぶりだつた。私も母の命ずる儘に振袖姿になつて店先きの往来で女中達を相手に追羽根をついてゐた。

私は庭球は得意だつたので奉公人達を次々と負かして振袖の振りから緋ぢりめんはこぼれ大きなリボンをつけたお下げ髪をふりみだして嬉々として奮戦した。往来の人々も時々振りむいたり立止つて眺めてゐた。ところが三十分近くも立止つてぢつと見つめてゐる大学生がゐるのに私は不図気がついた。りゆうとした大島の羽織と着物にセルの袴。おろしたての桐の駒下駄。——その人が私がうつ羽根

の行方などには見むきもせず羽子板を振り上げて羽子をうつ私の姿態を穴のあく程眺めてゐるのだ。私はそれに気がつくといふに急ぎはづかしくなつて、いきなり

「もうやめ！」といつて羽子板を小僧に渡すなり、店の隣りの母家の玄関の中に飛びこんだ。そして格子戸の隙間からそつと覗くと、その大学生は私の行方をぢつと見送つてゐるあの眼！そうだ。あの眼だつた……覗く私と大学生の視線があつた。彼は深い眼色になつてにつこりした。私もにつこりして振袖で顔をかくして、ややあつて眼をあげると彼の姿は其処には見られなかつた。

其の夜私は裏二階の自分の部屋で寝巻に着かえて風呂の晴着を畳んでいた。私の胸の中はあの大学生の面影で一杯だつた。あの人はそうであつた。私は覆面の中の顔が怖い顔でなかつたのを安心すると共に前にも増した思慕で身がうづくようだつた。深い眼色でにつこりした顔がちら／＼と眼先にうつて来る。畳んだ晴着を枕において枕許のスタンドのスイッチを消して友禪模様の布団の中に身を横たえたと窓の戸が外からがた／＼と動いて、軽いノックの音

「誰？」と私が小声で聞くと、又ノック。私

は、ある予感に胸をおどらせ乍ら戸をあけると素早く一人の人間が転がり込んで来た。煙草の香りがまじつた、あのなつかしい体臭！「お嬢さん！」彼はいきなり私をだきしめた燃えるような接吻！私は彼の心臓が激しい動悸をしているの知つた、彼も又私を愛して呉れてゐたのだ！私はそれを直感した。激しい感情の高潮に私は彼の腕に抱かれた儘、すすり泣いた。

「何故泣くの？」彼は心配そうに聞いた。

「嬉しいから……」私は震え乍ら答えた。彼は黙つた儘うなづくと尙一層強く抱きしめたそしてその儘私の体を布団の上に押し倒そうとした時だつた。

「よし子や、よし子もう寝たかい？」

階段の下から母の声がした。どん／＼上つて来る気配がする。お正月でお客様が多いので母はまだ起きてゐるのだつた。彼は愕然として私を離れた。

「又今度ね……」

「今度つて何時？……」私は取りすがつた。

「何時か判らない！」彼は一度私に接吻すると、あつと思ふ程素早くそれこそ飛鳥のように、は入つて来た窓から出て行つた。

「よし子、あのね、よし子や」母はもう襖の

外に立つている。私は母が憎らしいような気がした。

三

その事があつて三カ月過ぎてしまつた。私は完全に恋する少女であつた。片思いではない。彼も又私を愛して呉れているのが判つたから——併し彼が私の家には入つた強盗でありお尋ね者である事は確かであるが、何処の誰とも判らないのである。

新学期がはじまつて間もなくであつたが、教室で授業を受けている時ドアが開いて小使の爺さんがは入つて来て先生に何かぼそ／＼と言つた。先生はそれを聞くと、はつとした表情で

「村井さん。お家から電話が掛つてね、お母さんが急病だからすぐ帰つて来なさいつて。今自動車をむけるから、それに乗つていらつしやいつて電話よ。」と私の方をむいて仰有る。

私は吃驚した。今朝出がけにあんな元気なお母さんが——それも自動車をむけるなんて一刻も争う容態にちがいないと思うと私は自分の全身の血がひいて行くような気がした。「うちの誰から掛つたのでしよう?」

「誰か知らないけど男の声だつたよ。」小使さんは気の毒そうに言つた。先生も級友も心配して、放心したように立ちすくんでいる私の帰り支度を色々手伝つて呉れたりした。自動車は間もなく来た飴色のハイヤーである

先生はわざ／＼自動車に乗るまで送つて来て下さつた。私はべそかき乍ら運転手一人の迎えの自動車のクツションによつた。

ところがゆるやかに走り出したそのハイヤーは私の家と反対の方角に走り出した。心配で一杯になつてゐる私にもそれが判つた。

「運転手さん。そつち方角が違ふわよ。」と声をかけると振りむいた運転手は黙つた黒眼鏡をとつた。ああ!あの美しい瞳!あの人だつた!

「まあ!」私は不安から喜びにかわつた声を出した。

「貴方だつたの?」彼は笑い乍らうなづいた「ぢやお母さん病氣も嘘?」彼は又うなづく「厭な人。ほほ……」私は一杯だまされたと



思うと可笑しくなつたでも嬉しさが胸にあふれて来る。自動車は滑るように一本道の国道を行く。

「どこへ行くの?」彼は無言で黙つていよという風に手をふつた。

自動車はれんげ畑の間の道をまっしぐらに走つて小さな部落についた。こゝは私も学校から遠足で来た事のある嬉野という温泉だつた。

運転台の彼は何時の間にかグレイの春の背広を着たスマートな若紳士になつた。

「あなたもこれにお着きなさい。」という紙布と共に婦人用の春着と絹靴下を私のひざになげてくれた。誰にも知られている制服と野暮つちい黒いガス靴下では人目に立つのであろう。私も彼にならつて着がえした。嬉しい事にはそのワンピースが私の為に出来てたように身にびつたりと合うのである。

やがて自動車は一流の旅館の前に横づけられた。上品な若紳士になつた彼の後につゞいて私は一人前の婦人然と、女中達が手をつい

てむかえる旅館の玄関には入つた。

私達の部屋は清流につき出た二階の豪華な八畳であつた。宿のどてらを着て縁側の藤椅子に並んで腰を下すと私は急に、忘れていた恥かしさで一杯になつた。ところが側にいる彼も眼のふちをぼろと染めて、わざと私の方を見ないようになっている。よそ目から見れば新婚勿々の初々しい若夫婦と見えたくも知れない。

だが眼の肥えた宿の人には正式の夫婦とはやはり見えないであらう。此方から何も言ないうちに次の間に用意してくれた絹夜具に二つ枕を並べて私は彼の思ふだけの愛情を受けていた。私の心にはいささかの悔いもなかつた。思いこがれた人に身を捧げる限りない喜びに包まれていた。この前彼によつて女性への開眼をした私は彼によつて本当の性感を知る事が出来た。若いたくましい異性の腕に抱れて狂わんばかりの恍惚感にたんのうした。ぐつたりとし切つて寝乍ら、不図気がつく

と彼は美しい双の眼に涙をきらくさせて私を見つめていた。

「あなたは僕をどんな人間か知っていますか？」

「ええ」私はうなづいた。

「怖くありませんか？いいえ軽蔑しませんか？」

「怖くないんです。軽蔑なんかしません私好きで／＼堪らないんです。」

「こんな僕でもですか？」彼は私を強く抱きしめ乍ら男泣きに泣いた。

「だつて私の処女をあげた方ですもの。」私も斯う言うと、せまり来る激しい愛情に彼に縋つて泣いた。

「僕は恐ろしい罪を犯している大悪人でいつつかまるか判らない人間です。此の儘あなたと結婚する事は出来ません。今日でお別れになるでしょう。僕は生涯貴女の事を思つています。あなたの幸福を祈ります。」彼の言葉には恐ろしい程真剣味があつた。

「私、貴方と別れるのは厭です。何処へでも連れて行つて下さい。でなければ今一緒に死にましよう。」

私は泣きじやくつた。彼はハンカチを出して優しく私の涙をふき乍ら、

「駄目だ。貴女は前途あるお嬢さんだ。これから幸福になつて下さい。」

「あなたと別れるのは厭！」

その日は私にとつて永久に忘れられない思い出であらう、几張の蔭にしっかりと抱きあつ

て心ゆくまで深い契りをむすんだ私達だつた私はとうとう彼の言葉に従つて夕方家に送り届けられた。知つてゐるのは強盗のお尋ね者というだけ。何処の誰ともわからない、けれど私の切ない程恋しい人だつた。

四

その時以来彼の音沙汰は途絶えてしまつた。それから一年程たつた時「全国を股にかけた凶悪強盗」という見出しで、新聞に彼の写真と共にでか／＼と大幅の記事が載つてゐた。ざつと見ただけで吃驚する悪事の数々である。転々とかくれ家を作り捜査陣をなやましていたが悪運つきで逮捕されたとあつた。言い忘れたけど嬉野の温泉宿で情痴のひととき彼は私の陰毛をぬき、腋毛をぬいた。「どうしてそんな事なさるの？」と恥しがる

「こうしてあなたの毛を持つてゐると、何時も貴女を抱いてゐるような気がするから」と少年のように、につこりした彼だつたが、あの毛はまだ持つてゐるのかしら？私には考えでも頼の染む事柄であつた。

彼の思い出も年月と共に何時か薄れて私は

二十二歳の時、父母のすすめで平凡な見合結婚をした。夫は私にとって二人目の男性であつた、彼は新妻の私をこの上もなく愛撫して呉れたが、私の官能には、強盗のあの青年に抱かれた時のような満足はなかつた。だがそれは私のみの知る事で表面は平凡で平和な結婚生活であつた。

二児を得た頃、太平洋戦争がおこり夫は其の年応召した。私も戦時誰かが味つた苦勞をしなければならなかつた。だが終戦となり夫は復員し、もとの会社につとめる事になり以来とん／＼拍子にすゝみ、夫は会社で重役となり、子供達も大きくなつたので手も掛らず、私は物質的精神的に恵まれた中年婦人として二人の女中を使い乍ら、幸福な生活を送っている。

この間夫の友人のKさんと言う方がわざ／＼訪ねて来て下さつたが、この人は夫の応召当時の親友であるし、又硫黄島の数少ない生存者の一人という幸運な人であるが、夫に硫黄島の凄惨な様子を話し乍ら、

「俺の部下で凶悪犯の前科をもつ奴があつてね、其奴が瀆罪の爲にもと特に辛い仕事の方へ／＼と廻つてね、とてもよくやつて呉れただがとうとう腹部貫通銃創でやられたが断末

魔の時にね胸のポケットをさして中のものを出して呉れというじやないか？出してやつたら紙が大切そうに何枚も／＼重ねてしまつてあつて最後に出て来たのが女の腋の毛と陰毛さ、それもどうも一人の女のだ。俺も本人が真剣な顔しているので開けてやるとこんなものだろう？何だ？と聞くと自分は過去前科者で世の中に随分害毒を流し、様々な女とも關係を結んで来た。併したつた一人自分が生涯かけて誠心から愛した女がある。その女を不幸にしない為に自ら身を引いて其の女から遠ざかつてしまつたが、自分の心の中には何時も其の女がある。その女を思っていると恐ろしい罪にけがれた自分が清まつて行く気がする。その女の思い出故に刑務所でも模範囚で通し、特別恩典で出所後は、特に志望して、このような前科者だが皇軍の一人として御奉公している。自分の更生の志を堅くし何時もむちうつてくれるのは皆その女の思い出で、自分はその女のそう言うところの毛を守本尊として斯うして持つてゐる。自分が此処で死ぬのは覚悟の上で本望だがもう一度その女に会いたい。併し会う事も出来ない。自分はその女の幸福を祈つて死ぬと言つてね、斯う言う自分を笑わんでくれという。笑いはせん。

お前が死んでも俺が若し命あらば内地に帰つて其の女に伝えてやる。その女の名は何だ住所は何処だ？と聞くと、返事をする暇もなく、もう息絶えていた。

誰でも死ぬ時は天皇陛下万歳とか威勢のいい事を言うものだが、あの男の様に女のあゝいつた毛を胸に抱いて死ぬなんて實際珍しいよ。だが女々しいとか何んとかいうよりも、そんなに彼を更生させた女の力には感動したよ」

Kさんの顔は何時の間にか真面目になつて座が白けて来た。

「そうかなあ、そんなに男を更生さす女もいるかと思うと敬意を表したくなるね。」

夫もしみ／＼言つてかたわらの私を振りむいた。私の頬には涙がとめ度もなく流れて来た。夫はそれを話に感動したせいと思つたらしい。

「その女の方が聞いたなら、吃度どんなにお喜びになるか判りませんわ。その戦死したひと間違つて前科者になつても、本当はいい人でしたのよ。吃度いい人でしたのよ。」

私はそう言つてせき上げる涙をかくし乍ら、お茶を入れかえた。



子助安藤
ふ。えいふ

真夜中、眼醒めると、私はきまつて一羽の白い鶏を見るのだつた
鶏の生彩をおびた真赤な鶏冠、おもく垂れた真紅の肉ひげ、鶏は脚
を折つて、うづくまり眠るがごとく、うすい網膜をしづかに垂れて
いる。

鶏のすぐそばに、弟の寝顔があつて、白痴の弟は、無心に眠りこ

けている。白痴特有の異様にとんがった小さな頭、白眼の目玉をむ
き出し、流涎を垂らしながら、弟は眠っている。

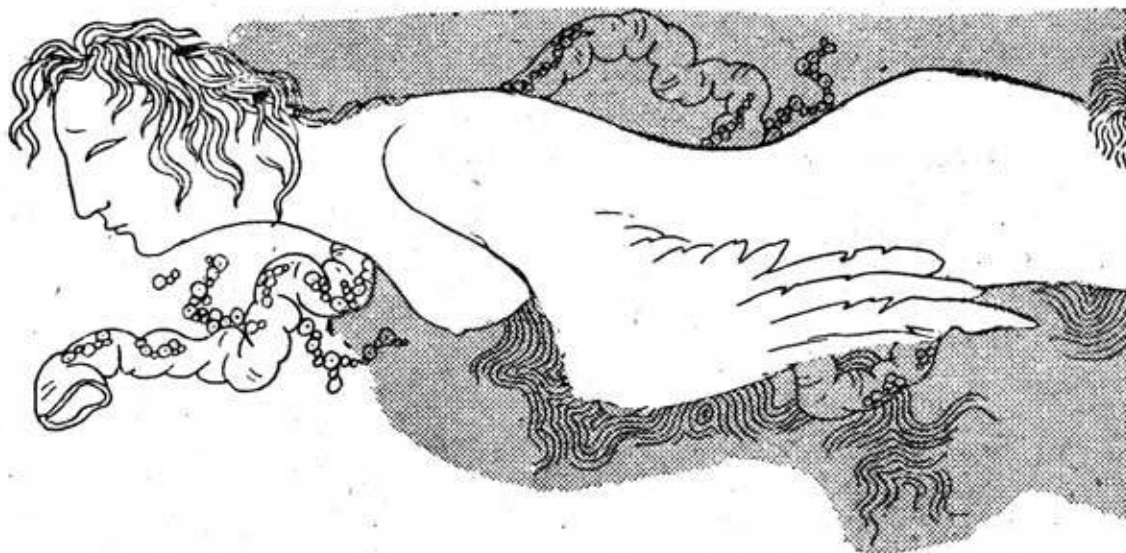
弟はひどい白痴なのである。ポカンとあけた弟の口もとの鬚は目
立つているのに、弟はまだカタコトしかしゃべれない。弟の興味は
たゞ食物だけに限られ、飽満感はずつともなく、暴飲暴食、おそろ
しいぐらいだ。一日中何かしら喰つていないと承知しない。腹が空
くと、発作的に動物のような呻き声をたて、狂人のようにあばれま
わり、途方もない乱暴をする。

この鶏は、いつも腹を空かせて、ポロ服をまとい、ハ
キダメを漁る犬みたいで、町をうろつく弟が、近所の竹
内という後家さんの隙をみて、大切な雌鶏を盗んで来た
のである。

弟はいつか闇市で、屠殺したばかりの、なまなましい
鶏の内臓やトカサのついた頭や、ウロコのかさなつた脚
をひろつて来たことがあり、えたいの知れぬ、くだのよ
うな臓腑、まだ血腥さいトサカのついた頭まで、網のう
えで焼いて、血みどろに喰いちぎつていたことを思い出
し、私は思わず顔をしかめた。

ポロポロの上着の下に、巧みに隠蔽した鶏をとり出し
た弟は、無論、すぐ屠殺するつもりでいたのだがそのと
きになつて、鶏が盗まれたことで、近所中大騒ぎになり
私もつい恐しくなつて、云いそびれてしまつたのだが、
弟もすつかり怖気づき、屠殺を思いとゞまつて鶏を部屋
のなかへ隠蔽してしまつたのである。

何しろ終戦当時の、食料にいちばん不自由している頃



とて、竹内の後家さんにとつてさぞ口惜しかつたにちがいない。後家さんはほそぼそとした自分の配給の米まで鶏に頑ちあたえて、大事に育てて来たのである。弟が部屋の中へ隠蔽した鶏は、翌朝、思いがけず、卵を産み、その翌朝も卵を産み、毎朝欠かさず、無精卵をひねり出すのだつた。そのため弟は、とても鶏を可愛がり、不足勝ちな自分の配給の米まで、鶏にあたえているのである。

弟は自分の枕もとに、鶏を置き、鶏の産卵の関をきくときには、とりに眼を醒ましている。巣箱にはいつた雌鶏は、もくもくと脚と腹でワラをかきわけ、落ちつく場所をつくる。糸のよりに、細い線が、臉のまわりに幾本も描かれる、と、陣痛がはじまるのである。鶏は首の毛をやゝ逆だて、脚をかすかにふん張り、左右にうごかせるのだつた。力むたびに、やわらかい羽毛が、背中の中央に掻きあげられるように、小さな波を打つ。鶏冠や、耳腔のうしろに垂れさがつている乳色の袋が、ほんのりと充血してくる。同時に、カサコソと、爪で巣箱の底を掻く音がきこえ、鶏は嘴をわづ

かに開く。すると、産卵の音がする。

鶏はからだをひねり、嘴で卵をころがせるのだつた。空気にふれた部分から、卵は白い石灰色にかたまり、やがて白い粉が、表面に浮びあがつてくる。

その産みだての、まだほのかなぬくもりのある卵を、弟はいつもひとりで喰つてしまふのだつた。決して姉の私にはわけない。

私はいちど、卵にあやかりたいと思い、生れつき朝寝坊なくせに夜明けがた、眼を醒ましたことがあつた。しかし、弟はすでに眼醒めており、鶏が巣箱にはいるのを見ると、ニユツと手を、鶏の熱い腹のなかに、さしこむのだつた。そして、産んだばかりの、鶏のなまなましい血や、羽毛がこびりついていて卵をひつたくるのだつた。弟はいつも、ボロボロのカーキ色の上着を着て、脛の見える短かいズボンをはいている。ズボンのボタンははづれ、前のはだけたズボンから、ハミ出している生殖器は、発育異常だが、始終玩弄するせいか、それは酷使に歪み、爛れ、腐蝕を帯び、馬のようにダラリと垂れさがつていたのでつた。

弟のような、極く無能な脳では、如何なる感覚も起らないのだらう。弟はいまだに、大小便が垂れ流しである。私はその後始末をするたびに、弟の暗い部分を眺め、成長した年令と思ひあわせて、あわれだつた。

二

弟を真ん中にして、その傍らで、私の姉はさびしく眠っている。弟よりも、この姉のほうが、もつとかなしい。姉の寝顔を見ていると、私はわけもなく、涙が出てくる。そして死んだ母の顔を思い出

すのだつた。私はいまでも、無心に眠りこけている姉を、締め殺そうと思うことが、しばしばある。

姉は可愛想に、生れながらの啞娘なのである。姉は豊啞者としては、聴覚はあるほうで、相手の口唇のうごきだけで、言葉を解し、また、少ししやべるけれど、その異様な発声には、思わず耳をおほいたくなるのだつた。姉はすこし高い声を出すと、怪鳥みたいな、奇怪な叫び声になる。

姉は三十をなかば過ぎた、女ざかりの、未婚者である。姉の成熟しきつた肉体は、まだ男を知らない。もともと、姉の性格はきつく感情的であるが、それが三十を過ぎてからは、まったくヒステリックになり、僅かなことでも、激情するようになった。

姉は豊啞者特有の、猜疑心がつよく、それに孤独のさびしさもあつて、異様な発声で、

「オマエハ、ワタシノ、カネヲ、ヌスンダ、ワタシノ、カネガ、タリヌ」

なぞと、のゝしりながら、私に襲いかゝるのだつた。

怪鳥のような奇異な叫び声をあげながら、鶏冠をさかだて、はげしく爪を蹴りたてて、すごい力で、私に襲いかゝるのだつた。姉は肺病やみの私とちがつて、大柄で、精力的で、その姉の豊富な肉体と、必死に抵抗するとき、私は姉の成熟しきつた肉体に、のたうち狂う情欲が、こんなかたちで、はげぐちを求めていることを知るのだつた。

そして、私も何かひどい乱暴をせずにはいられないのだつた。私の抑圧した暗い性欲が、私をヒステリックにし、何らかのかたちではげぐちを求めている。

私は夜、なかなか眠ることが出来ず、眠つても真夜中、何度も眼が醒めたり、そして夜明けまで眠ることが出来ない。不眠の私の傍らで、姉も眠られぬらしく、毎夜ふとんの上で、反転している。眠られぬ姉が、ふとんのなかで、何をしているか、私はよく知つてゐる。

私自身も、みづからの肉をまさぐりながら、さまざまに、あやしい、妄想、幻覚に、一晩中、頭の芯を痺らせながら、明けがたの浅い眠りのなかで、私はきまつて、性的な夢を見るのだつた。

その夢のなかで、私はしばしば、離婚した良人を夢見るのだつた。良人と性交する夢で、私は股間に、ネバネバした、つめたさを感じ、必ず眼を醒ますのだつた。

私が同衾した男は、良人だけであつた。しかも、私の結婚生活はたつた一ヶ月ほどで、私は経験もあさく、女としての、性的な意味の開花なぞなかつた。

良人は、私の無毛をなじり、離婚したのである、無毛であることが、男の愛撫を受けるに足る資格のないことを、私はそのとき教えられたのだつた。

私の乳房は偏平で、小さく、肺病やみの私は瘦せて貧弱で、愛欲の鍛練をするにも、ゆたかな、ひろい場所がなく、また私の子宮は発育不良で、そこに当然満ちたり、引いたりする潮はなかつた。

しかし、三十才という危険な月令に達した私には、もはや肉慾だけしかない。私がいまでも、良人を恋しく、なつかしいと思うのは感情にあるのではなく、肉体に泌みこんだ、痺れるような、息苦しさにあるのだつた。男を求めても内気で、病身で、家にばかり閉じこもつてゐる私には、容易に男と接する機会もなく、また、私の容

姿のどこにも男をひきつける何ものもないのだつた。

それに、私がその中で、生き、その中で苦しんだ、あの名づけがたい地帯へ、たとえ、男をみちびいたとしても、この地帯は無毛で男の愛撫を受けることが出来ないものであつた。

三

いまや私たちはこの世に於いて、たゞ三人であつた。

もとは、大きな呉服問屋であつたのだが、戦時中、企業整備一三百年もつゞいた古いのれんを閉ざしたあと、老齡の父が死に、三人の兄たちも、次々に戦死していつたのであつた。

その上、この古い大きな屋敷も、建物疎開で、破壊してしまい、雑草の生える空地と化してしまつたのである。さいわい、この古い都市は戦災をまぬがれたが、建物疎開の跡は、焼跡のような、荒蕪たる印象をあたえるのであつた。

たゞ家のおくにある、別棟の土蔵だけ、さいわい疎開をまぬかれ私たちがようだい三人は、この土蔵のなかに住みつくようになつたのである。

この部屋をとりまく、薄鼠色の厚い壁、鉄格子と、金網のはまつた、小さな高い窓、入口には、嚴重な鉄の門があり、それはあきらかに土蔵であるが、裏庭をへだてて、母屋とは関係ないこの別棟は女ざかりに狂死した、私たちの母の座敷牢であつた。

私たちの父は、この土蔵の内部に、便所をつくり、古畳を敷き、電燈のスイッチを引き、住める程度に、いくらか改良して、晩年の母を監禁したのである。

父の放埒による病毒のため、毒はすでに、母の脳髓を侵し、あら

ぬ言葉を口走らせ、しだいに兇暴にしていたのだつた。

その方で、定評のある父は、女には不自由はなかつたのに、いかなる執着か、たわむれによるものか、あるいは、狂人である母が、あらわに要求するのか、この座敷牢にしのんでは、ひそかに性交をつづけていたのである。極く軽い精神病者にあつても、性生活の増進は、外的表象となるのに。

いまから、二十四、五年前、母はこの座敷牢で、月足らずの弟を生み落し、間もなく、粟粒状結核と、精神分離症で死んだのだつた。弟が、生れつきの白痴であるのは、そのような、出生の暗さが原因している。そして母は姉を妊娠する頃から、すでに微毒に侵されていたのだつた。母がすこやかな頃に生んだ、三人の兄たちは、みんな正常で、健康であつた。

母が狂死したのは、私の五才のときで、私はまだ小さく、それに母はすでに監禁されており、私には母の記憶はないのだが、たゞ、狂人である母が、便所のなかで昏倒して、そのまゝ、息をひきとつていつたときとは、子供ごゝろにも、はげしいショックを受けたと見え、よくおぼえている。

便所のなかで、きものをまくつたまゝ仰向けに倒れていた、母の真白い尻から、股間にかけていちめん、ちようど、筍にあるような、あつき色をしたぶつぶつと、潰瘍の跡があつた。それを見たとき、私はサツと肌立つた。

やゝ母の記憶のある姪娘の姉が手まねで語るところによると、この座敷牢に監禁された母は、髪をふりさばき、なまめかしい長襦袢や、肉襦袢を、しどけなく着て、一日中化粧ばかりして、たてひざをした、あらわなものを、お白粉で真白に塗りつぶし、ときには、

経血も、そこらいちめん、べたべたなすりつけていたそうである。いまでも、この薄鼠色の壁の裾に、点々と、汚点を残しているのは母の暗い血の跡であらうか。

母の死後、この庭敷半は、もともと土蔵であるし、母の持ち物や旧家である私の家の、家紋のある祖父母の時代の、長持ちや、家具類が置かれ、物置小屋同様につかつて、たゞ荒れるにまかせていた

◎ある乞食の生活資料◎

これは江戸末期のさる隨筆集 ことなり、水を取りて嚥し与えの中にある珍話。

昔、八十年以前に、東海道路 彼の乞食答えて、其志の程は恭塚大陰囊とて、名だかゝりし乞食なけれど、我はこの陰囊の故食ありける。其後引続いて、予を以て今日錢を得て楽に暮す也が長崎におもむきし寛政のころ 今此陰囊人並になりては、却つにも、同じ駅にまた大なる陰囊て飢渴に及べければ、この陰囊の乞食ありて、旅人通行せる路こそは我命の親なり、とて療治傍に出で、陰囊の上にたゞき鐘を受けずとかや、おかしき話を置き、念仏申して錢をもらい、この乞食に執つては、人に世を渡るをいとなみとせる者あり。日暮れて家にかえるには、彼のきんに紐をからげて結びあげ、肩に掛けて戻ると。むかしの二代目なりと申したるもの有る生活の方便の如何に複雑微妙り。ひとゝせ紅毛人江戸へ拝礼に来れる時、これを見て不便の

それらの家具類は、その家紋が語る、連綿とつゞいた家柄が、もはや精気をうしない、一步一步、没落に向つていることを告げているのであつた。

私は極く子供の頃、この暗い土蔵のなかにしのびこんで、実は、つかしい遊びをしたことがある。

商家である私の家には、奉公人が多く、私はその誰彼と、この土蔵のなかにしのびこんでは、あの『悪い習慣』と呼ばれているおのれの秘密をたのしんだ。

四

私たちきようだいは、弟が飼育している、一羽の雌鶏とともに、この土蔵のなかに起居しているのだつた。鶏はさすがに、まるい籠のなかにふせているが、部屋のなかに飼つていたので、鶏の臭気はむんむんし、その悪臭には、思わず、嘔吐をもよおさんばかりだつた。鶏の悪臭は、私の肌膚にまで、沁みこみ、姉や弟からも、鶏の臭気で、ムツとした、

私は出来るだけ、鶏から離れて、菜ッ葉や、雑草をまで、刻みこんで入れた、水つばい雑すいをすゞりあげるのだが、かゆのなかには、髪の毛や、羽毛がまじることがあつた。

姉も弟も、おどろくほど無神経で、鶏籠のまえで、せつせとめしを喰つた。そのまるい籠の穴から、鶏は首をつき出し、ウロコのかさなつた脚や、汚れた臀の羽を、バタつかせながら、キョトキョトと、ものほしげに、首をうごかせている。そばでコツコツ、コツコと弟は云いながら、箸のさきに、飯粒をはさんで、鶏の嘴にもつていつてやるのだつた。

白痴の弟が鶏を盗んだとき、私はすぐ、返済すべきだつたのだがそれをしなかつたのは、実を云えば、私自身、空腹をかこつていたからである。私は戦争中から、かしわにありついたことがなく、肺病やみの私には、栄養が必要だつた。

しかし、弟は容易に屠殺しようとはせず、私は卵にあやかるとも出来ず、鶏の悪臭になやまされているうち、私はしだいに鶏を嫌悪するようになった。

弟は、何処かのハキダメから菜ツ葉や、蜆貝ぐらい拾つてくるしまづ、餌には不自由はないのだが、陽にあてず、こんな暗い、濕氣をおびた土蔵のなかへ隠蔽しているせいか、鶏の羽毛が、しだいに抜け出し、ことに、臀のところはすっかり羽毛が抜け落ち、桃色の肉や、肛門をマル出しにしているのだつた、産卵直後の鶏の肛門は血の斑点を残していた。

弟は鶏にずいぶん乳暴なこともするが、やはり、可愛いがつて、屠殺することなど、ケロリと忘れている、私はせめて、この桃色の臀のところだけでも、切り落してやりたいと思うのだつた。食欲とも、嫌悪感からともつかず、私は鶏を屠殺してやりたかつた。

私が毎夜みる、性的な夢のなかに、いつの間にか、一羽の白い鶏がいた。鶏の生彩をおびた真赤な鶏冠、おもく垂れた真紅の肉ひげ、鶏は眼と首を、キョトキョトと、うごかせながら、やがて、巣箱のなかへはいり、腹と臀をうごかせ、なやましげに産卵するのだつたああ、鶏でさえ卵を産むのに、私の卵巣は、卵子を生み出す機能を果たないのだつた。

私たちきょうだいは、以前から仲が悪いが、それがいつそう顕著になり、ことに、姉と私は、些細なことから、醜いいさかいをした

おおかたは食べ物のことからであつたが、聴覚をもたぬ姉の、起居ふるまいは、いちいち私の神経にさわるのであつた。

ことに最近、姉は私の知らぬうちに、すーつと、家にいなくなる。ことが頻繁にあり、何処からか、また、すーつと戻ってくるのだつた。その姉のからだからは、あの女のみのもつ、肉体の深部からくる匂いとは、べつな匂いがして、もしや姉に男でもあるのではないかと、私を焦らだたせるのだつた。

私たちは僅かなことから、猛然と襲いかゝつた。姉は奇妙な叫び声をあげながら、爪を蹴りたて、両脚で、力いっぱい地を蹴り、躍りあがるのだつた。躍りあがるたびに、姉の首の周囲をかこんでいる羽毛が、さつと、輪をえがいて、ひろがる。

私は、ばたばた羽縛く姉を、捕え、兩の羽を、ぐいと絡げあわせ、さかさにし、兩脚を縛つてやりたい。そして、嚴重に、ノドボトケをしめつけてやりたい。すると、姉の眼からも、口からも、尻の穴からも、一条の血が滴り落ちるだろう。

そうしたら、私は羽をむしつてやるのだつた。兩脚の縛りをとくと、姉はまだ生きていて、羽をむしられた、鳥肌だつた皮膚で、馳り出すだろう。

私はそれを、むんづと捕え、大きな肉切庖丁で、姉のやわらかい腹や、尻をつんざいてやりたい。すると、胃袋や、肝臓や、迂曲した長い腸管が、ぐにやぐにやとハミ出してくるだろう……

こんな啞娘の姉に、男なぞあるものかと、強く否定しながらも、もしや、男があるのではないかという疑惑を私は日ましにつのらせていた。

姉は、肺病やみの、性的欠陥のある私とちがつて、大柄で、精力

的で、肉づきがよく、その盛りあがった大きな乳房や、大きく膨らんだ、腰のあたりには、私もしばしば、圧迫されるのであった。姉は頸すじにまで、真白にお白粉を塗り、私の隙をみては、すーつと、何処かへ姿を消し、また、すーつと戻ってくる。その姉のからだから、私はべつな匂いを嗅ぐのだった。

五



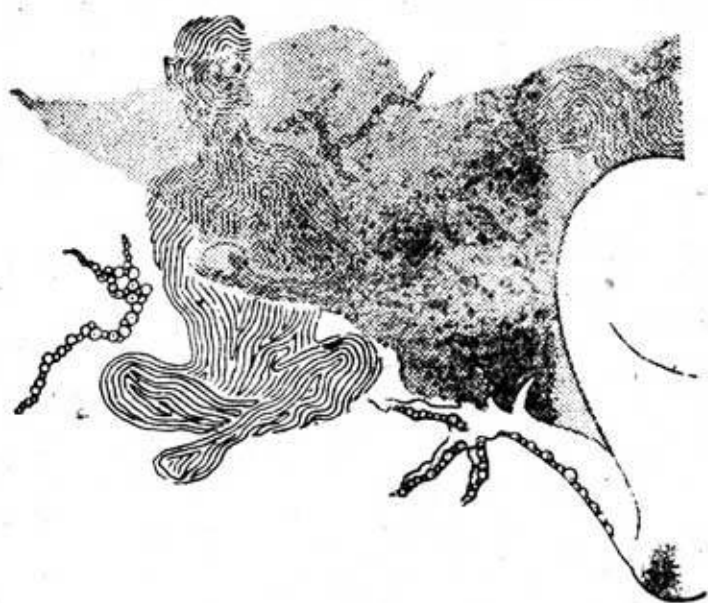
眠られぬ夜、私はふとんの上で、転々と、反転していた。深夜、眼を醒ましながら、私は一羽の白い鶏を眺め、私の傍らで、さびしく眠っている啞娘の姉と、白痴の弟を眺めるのだった。私が肉身を疎外することは、すでにエディプス錯雑であろうか。

その日も、私は姉と醜いいさかいをしていた。姉はすごい力で、私を襲い、私の全身を、打ち、蹴り、引つ掻きまわし、ついに私を組み敷くと、馬乗りとなつて、髪をひつ掴み、凱歌をあげたのである。そのくやしさがよみがえり、やにわに、私はとび起きると、傍らで眠っている姉を、いきなり、襲ったのだった。私は姉の上に、馬乗りになり、両手で頬を打った。眠っていた姉は、眼を醒まし、何か奇妙な叫び声を発した。

姉の生彩をおびた、真赤な鶏冠、おもく垂れさがった、真紅の肉ひげ、私はやにわに、姉にむかつて、とびかゝつていった。姉はバタバタと、私の頭上を超えて、とびあがった。私は姉を追った。右へ、左へ、羽搏きし、逃げまわる姉を、私は追った。私はやつと追いつめ、臀の羽毛を捕えた。姉に宙に浮いて、羽縛きし、全身の力をこめ、逃れようと身悶えした。それともに、私はグイと強く、羽を引つ張った。その拍子に、つかんでいた羽毛は抜け、姉は薄桃色の臀や、肛門をマル出しにして、バタバタ馳けつた。

私はしつかり掴んでいた羽毛を捨てると、大きな肉切庖丁をもち逃げまわる姉を、追いかけまわした。あの桃色の臀を、切り落してやりたい。

私は姉を追いつめ、ホンのすこし、臀の肉を切り落した。姉の臀には、赤い血が流れた。姉はそれとは知らず、狂気のように、逃げまわるのだった。



にころがせておいた。

私は力いっぱい、姉の長い首をしめつけていた。姉ははげしく痙攣し、たえまなき断末魔のうめきを発していたが、やがて、ぐにやりとなり、眠るがごとく、うすい網膜をしづかに垂れた。

すべては終つたのだ。姉はぐにやりと、床の上にくがっていた私は爪先で、姉を蹴つてみた。

私は間もなく、姉をひろいあげると、ひざのうえにのせ、いつしんに、白い羽毛をむしるのであつた、私は両の羽を、グイと絡げあわせて、引き抜き、密生したこまかい羽毛を、たんねんに抜きとつていった。

姉はもはや鳥肌だつた、桃色の生身だつた。あんまり、ぐんにやりしているの、私は鉤にかけて、吊した。そして、大きな肉切庖丁をといだ。

私はやつと、姉を捕えた。私は思わず、呼吸を荒くした。私は姉をさかさにし、両脚を縛つた。私が切り落した臀から、血が滴り落ちた。私は姉の肛門を見た。産卵直後らしく、肛門の筋肉は、血の斑点をのこし、しつとりと潤つていた。

私は姉の両脚を縛つたまゝ、しばらく、床の上

私は思わず息をのんだ。私の手は、付け根から、ぶるぶる、ふるえた。落ちつくために、私は一瞬、祈るように眼を閉じた。そして思いきつて、大きな肉切庖丁を、やわらかい桃色の腹にあてがつた。私は食道気管を切断して、胃袋をつかみ出した。充溢した胃袋だつた。粘膜は桃紅色をしていた。私はグニャグニャと彎曲した、長い腸管をつかんだ。これは肝だ。これは脾だ。私はもろい、小さな袋を、手のうえにのせ、ガラガラ笑つた。

私はふと、姉が果して処女であつたか、どうか、姉の密室を見てやろうと思つた。私は彼女の処女膜のあたりを見ようとして、二本の指を陰口に入れた。だが、そのうすい、とざされた膜はすでに破損されており、出血をとまなわなかつた。

私は彼女の、骨盤臓器の内部をひらいた。子宮や、卵巣や、それはおびただしい管と、厚壁と、皺襞におおわれた海綿体だつた。このとき、私は姉の子宮内に、あるふしぎな機能の、いとなまれつゝあるのを見た。私はそこに、さかんに活動している一個の成長した生殖細菌を見出したのであつた。それはまだ、具体的なかたちをなしてはいなかつたが、姉はあきらかに妊娠しているのであつた。これは夢ではないかと、私は自分の眼を疑つた。私の疾患の内部、無毛の肉体をよそに、姉はその精悍な乳房を、満潮に浸らせ、彼女の子宮内には、かくもひそやかないとなみがつゞけられていたのである。

私は首を垂れ、血まみれの手を、ガラリと下に垂れた。私の手から、肉切庖丁が床の上に落ちた。

だが、これは夢ではない。私は瘋癲病院の一室に、白い鶏のように佇んでいるのであつた。

世界奴隷艶情史

野 溝 草 兵



ローマの奴隷

奴隷はいつの時代でも、何処の国でもあつた。カルタゴ、コリント征服につれて夥しい数の奴隷がローマに流れ込んで、急に奴隷の値段が安くなつた。奴隷使用の目的は勿論労働だ。アウグストゥス時代の歌人チドリウスは二百人の奴隷を持っていたし、紀元六一年、ローマの貴族クンドゥスは二百人を所有した

という。どうしてこんな多数の奴隷を抱え込んだか？値段が安くて入手しやすい点もあるだろう。が、見逃せないのは、一個の贅沢品であり、主人の歡樂の対象になる奴隷の群が発生した事であらう。

ローマ榮華の粹ともいふべき貴族の宴会、その席上には必ず奴隷の姿を見受けたのだつた。饗宴の景物として登場するのではなく、彼等は客を接待したり話相手になつたりした「小アジアの花」として時価二百万円もした

という美少年は酒宴に侍つて、殊に柔かい髪で濡れた手を拭うのは、ローマの客人の最も愛好したものだつた。爛れたようなローマ人の相手の事だから、早熟なエロたつぷりの応答に主人の愛顧をつながねばならない彼等だつたのだ。

女の宴会になると、女達は美少年の着物を脱がせて、罪のないおしやべりに時を送つたこの愛玩人種の中で、金魚や草花と同じように変種がやはり喜ばれた。宮廷には小人や巨人、巨女のような彼等自身には哀れむべき畸形が敢て愛玩の対象となつた。ローマでは「怪奇市場」で三眼で頭が尖り、^{こも}腓がなくて腕の短い人間が売物に出たことがあるという。一人を杖で打擲し、もう一人は鞭で血まみれた。……女主人は鞭数を書取らせ、女友達とおしやべり、さては……着物

の金の刺繡をほめる傍で、お化粧をしながら……そして打たせた。長い日記を読みながらそして打たせた。打つ奴がくたびれるまであつちへお行き?……疲れたら今度はお前の番……。

ジュヴェンネルの詩の一節。女主人の怒りにふれた二人の男女の奴隸が打撃されることを歌った詩である。こうして鞭打たれるのは寧ろ普通だった。奴隸は人間ではない。女主人の気紛れから打たねばならないこともある。もはや病的なサディズム満足の機械に過ぎない。一步進んで奴隸が主人達の性享楽の道具だったのは分り切った事である。この濫用の背後には深い頽廢の淵があつた。頽廢の淵に陥つたもの、そして滅亡するもの、それが大ローマ帝国の最後だったのだ。

主人と男奴隸又は女奴隸の間の頽廢の事實は幾多文献から証し得る。特にみじめなのはこんな醜行に生をうけた因果の子だった。スエトニウスの「チベリウス王伝」によると、この王は「小魚」と云われた自分の嬰兒を、鞭で叩いたり、甜めたり噛んだり、風呂の中で膝の間に挟んで泳ぎ廻らせたりした。殊に乳離れしないこの子に胸や乳房、果ては○○○を吸わせたりして、あらゆるサディズム的

快樂に耽つたと書残している。

こんな腐敗時代に売淫が公然と行われたのは怪しむに足らない。搾られるのは無人格の奴隸だ。人手に転々する商品。投資した品物からは出来るだけの利を食うとする。しかもこの暗い運命に落ちたのは、強奪されて来た戦敗民族の紅顔の子女だった。男もいれば女もいる。だが、彼等のふんで来た運命は戦敗者ばかりではなかった。

「子供の事はくれぐれも気をつけてくれるようにお願いする。そしてニールの上の方、お前にキスを送ろう。坊やが生れたら、どうしてもお前の傍におかなくちゃならない。でも女だったら棄てるんだよ。」(ズードホーフのギリシャ語のパピルス書から)

キリスト紀元の始頃、アレキサンドリヤから商人が妻にこう書き送っている。スパルタ人は政策的に女兒を棄てるものを奨励したと云う程で、棄子の風習は古代では可成り他の民族に及んだらしい。棄られた兒は第三者の手に拾い上げられ、異国民の捕虜と同じく暗い職業を強制されるのだつた。

更に第三の群があつた。貧困に追いつめられて自ら肉体をこの恐ろしい淵に投ずるもの。ローマの劇詩人プラウトスのチステリアの

第一幕でやりてのメレハスが娘にこう云う所がある。

「あたいもお前の母さんも淫売婦、母さんが生んで、あたいが育てゝやつた……だがちやんを知つてゐるものはありやしない。あたいがこんな商売をやつたつて、自慢も糞もあるもんか。せめて飢から逃れたいと思つただけさ。」

貧困と暗黒の生活は決して今日のみに存在するのでないのだ。

小路にともされた赤ランプ——これがローマの淫売屋のしるしだ。マルチアルやジュヴェンネル等の書き残したのものによると、むさくるしい部屋の前に、その中に住む若い男女の名札があつて、その下には赤いランプにてらされて彼等は蹲つて客を待った。殊に子供は女姿で、娘は若者に仮装したという。

売淫の四分の一は目抜きの大通りで行われた。街の角で待つ男妾、女仲間の競争嫉妬、今日の暗い街と事情は少しも異ならないのだ。かゝる淫蕩、かゝる奴隸の氾濫——紀元前三一〇年頃のアテネには自由市民二十万人に対して奴隸一四万人、コリントでは十万人から十五万人の住民に対して、奴隸は四万六千人、ローマに於いても同様だった。もし大史家へ

売買にも税を免れなかつた。農夫が財産を相続する時は、最上の牛馬を献上したし、指定された通常税の外に土からの産物まで一緒に領主に奉る。献上するのは家畜家禽の外に、日用の必要品である羊毛、毛皮、手袋等にも及ぶ。かてゝ加えて厄介な賦役がある。それが又一年中だ。戦いとなると召集令だ。やつと免れたかと思ふと召集者のあらゆる武装を負担しなければならぬ。もし兵役を免れようとすれば莫大な罰金の徴発だ。払えなければ王侯の領地に妻子とともに賦役につく。罰金や徴発の義務を果し切れぬもの——それが奴隷だ。家族が協力して血と汗をしばつても、死ぬまでに罰金を払い終せる見込さえない。家族総動員は戦時に限らない。着物、装身具、その他あらゆる手工業のため妻も子も没頭しなければならぬ。こうして時間と労力をひどく領主のため費し、しかも収入の大部は領主の懐ころに流れこむ。いつも飢饉線上に浮沈するのが中世時代の農奴の姿であつた。

しかも吸血鬼は一人にとどまらなかつた。もう一つの吸血鬼、それは教会だつた。教会自身が領主として土地農民を所有した。その上無智な農民に現世の幸福の儚きと、天国

による救済の観念を叩きこんだ。現世の宝をすてよ、天国の報酬をとれ。——飢は眼前に迫りつゝあるのに、教会の戸を叩いて、濃く血の滲んだ一銭を喜捨した現世の極端な苦悩から、溺るゝ者は虹の如き天国の報酬を掴もうとした。底なし沼にはまつた者が逃れようとあせるが如く……

始めは、戦敗民族に奴隷制度を実施した。併し新らしき登場者ゲルマン族は、

生活の基調が農牧にあつた。交戦中も耕す人が必要だつた。シーザーによると、各郡から一年に千人の武士を出して、残りの者は土地に残つて農牧狩獵に従つた。征服した農民を土地から引きはなして奴隷として使役するよりも、耕作する機械として土地に留めておい



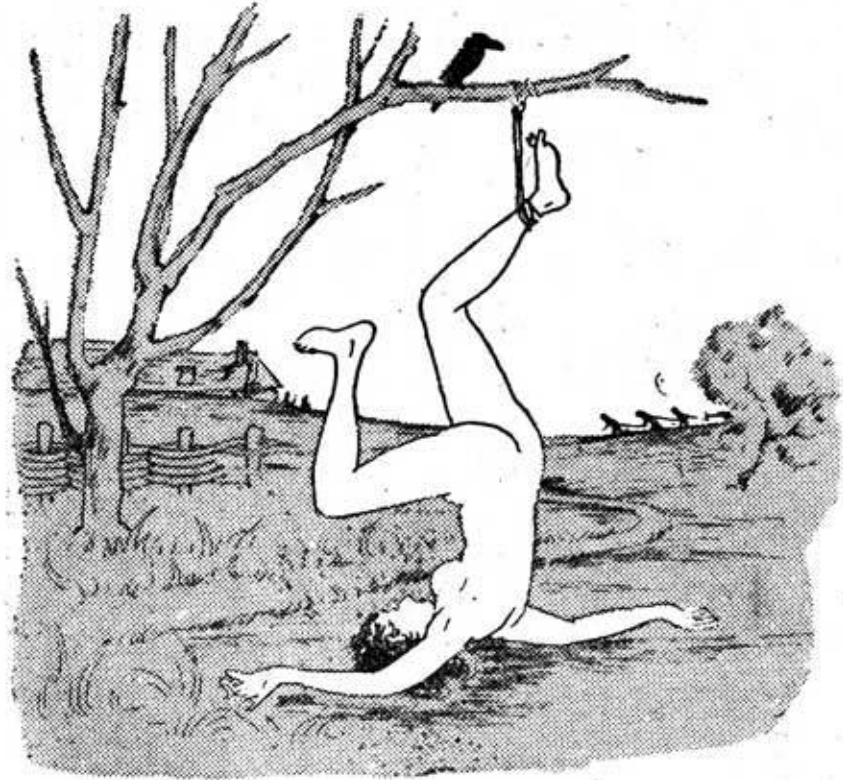
ゲルマン族の奴隷（女奴隷賣買の圖）

た方が余程賢明だつた。それにアテネや、ローマのような大都會を持たない彼等には、莫大な奴隷の消化力もなかつた。たゞその名は奴隷である。戦敗民族はすべて奴隷への運命を辿つた。ゲルマン人の法律では犯罪人は自由を奪われて必然的に奴隷の中に落ちた。

一方教会が普及すると共に一般の人の貧困も深刻さを加えた。カール大

王以来封建制度は愈々確立する。教会や領主への献金、苛酷な税、軍兵徴発、九世紀から十世紀にかけて世界は真二つに分裂した。——農主と農奴。自由農民階級は次第に貧困へ、そして奴僕の中に没落し去つたのである。

こうした経路を取つて発生した農奴は、貴



と言えはもう十九世紀だ。エストニヤにはまだ中世の蠻風が存したとクリストフ・ベトリが「エストニヤとエストニヤ人」(一八〇二年)に経験を語っている。今一、二例をあげて見よう。

○V大佐がある時結婚式に出席した。花嫁が美しすぎた。新婦をつれてこいと命令を伝えに行つた使者は客達から棒で追払われた。大佐はかつとなつた。同地に駐在している大隊から早速八名をさしむけた。花嫁を強奪するか、父親をとらえるか……不幸にして父親が

捕えられた。鞭を百、受けてしまわないうちにくたばつていた。

○領主T、年の市がたつてから、邸の傍に居酒屋が来た。この居酒屋で不幸にも眼にとまつたのがジブシーの楽人夫婦だ。すぐに領内を立退けという。屈ならいざ知らず、真夜中に立退けもあつたものじやない。

「殿様、御慈悲を願います」

懇願、又懇願。彼は応揚にうなづいた。

「では許してつかわす」

「有難うござえます。神様も情深い殿様を祝福なきますだ」

その代りに、領主の面前で、彼等は夫婦としての夜の義務を果して見せねばならなかつた。

○Pという侍従長、領主に似てか侍女に妊せはらまるの不始末を仕出かした。所が彼氏一計を案出して、路傍に立つて通りかゝる若者を待ちうけた。娘に牛二頭つけてやるから結婚するか、それとも鞭の御馳走か。捕つた若者は娘の腹を横目で睨みながら結婚を承諾した。

○Dの奥方、後嗣の姫が紡ぐのが下手だったので、小さな指に蠟をぬつて火を放つたものだ。焚刑に処せられた指でうまく紡げる筈はない。奥方はいらだつた。そして増長するサ

デイズム。鞭で血が出る程引つばたいた後に長い間絶食さして喜んだ。

かゝる不道德、かゝる暴臣、全歐洲には豚が君臨した。そして奴僕は豚にも劣つた生活をつづけた。処女の肉体は当然のように鬪弄された。カール大帝の後宮はトルコのハレムに似て、大帝の愛慾に奉仕する数百の処女が外界と交渉を絶つて一生を送つた。キリスト教の有する道德的嚴格さは結婚生活の神聖をよく守護する役割をつとめた。だがその道德性を徹底さすれば、矛盾につきあたつた。

処女が密通しても、妻が不義に陥つても、大きな過失とは見なされるが決して処罰されはしなかつた。不義の子が生れたら、神の御旨による悪業の酬いだとした。もし処罰するなら、罰すべきは初夜権の強制執行者たる領主ではないか。こゝに矛盾があつたのだ。哀れな奴隷たちは、その唯一の楽しみである男女の愛情の交換をさえ、制限され強奪され、そして領主の名と神の御名に於て泥土の中に蹂躪され尽してしまつていたのでつた。

(おわり)

× × × × ×

戦線エロ落穂集

(三)

下出章一

— 尼港事件餘聞 —

大正五年三月中旬、S君は日活現地撮影員として第三師団に属し、従軍した。俗にいうシベリヤ事変といつて、バルチザン（露軍の虐殺隊）に尼港在住の日本人が惨殺されたのが誘因となつて惹起つた事変である。

ウラジオストツクに滞留すること約一ヶ月——漸うシベリヤも雪解けのシーズンに向つて来たので、S君等は軍用列車で満州里まで足を伸ばすことになった。

S君等は非戦闘員であるから長蛇のような列車の最後部に一車輛をあてがわれて、そこにタムロすることになった。

敵軍はバイカル湖以北に追払われていて、シベリヤの曠野を疾ることは安全とされていたが、途中、例のバルチザンの残党が隠れていて、いつ何時敵襲を喰うか判らぬというスゴブル不安な空気が漲っていた。

だから軍用列車は燃料と水を補給する以外は停車せずに、殆ど、昼夜のへダテなく疾走を続けるのであつた。

列車は内地の人たちが想像する貨物列車の概念をはるかに越して、三個大隊の将兵と、その将兵に必要な武器、弾薬、食糧を積載しているものであつたから、百輛近い貨車の編成で、文字通りエンエン長蛇そのもの、這行であつた。

這行と書いたが、日本の急行列車の速度などをアテハメて考へては不可い。二台の曳行機関車は、振鈴のついた広軌の大型だが、燃料は石炭ではなく薪を焚いて走るのである。だから、ゴトン／＼と恰も這うように走るのであつた。

無聊地獄

内地の汽車の沿線のように、次々に展開して行く親野が、海あり山あり都会ありといったように、いわゆる千変万化の風光の変化があれば飽きはしないが、満目荒涼、想像を絶したシベリヤの曠野である。幾日走れど、視野の変化ということはないのである。

将兵なれば上長が同室していて、嚴重な規律の中に居るのだし、敵襲に備えて、絶えず心持が緊張している。だが、S君のような非戦闘員になると要事というものないので、その無聊はまつたく地獄の責苦だつた。

お乳の臭覺

ちやうど走行十五日目のお屋近い時刻だつた。列車が薪水の補給のために、ある曠野の中の一寒駅に停車した。前の経験で判つていたことだが、薪水の補給といつても約半日の



ヒマを要
する。

ヤレヤ

レと思つて、まず、思うことは大地の上を歩いてみたい欲望であつた。そこで、いきなり列車から降りて、歩廊を靴音をさせながら漫步してみる。一瞬、救われたような気持になるのであつた。

「なにしろ、最前線にある機関車が、無人の駅の構内に停車しているのだから、S君の車輛などは呼べど応えられぬ位の遠い距離のと

ところに停車している。

偶と、足を停めて前方を見ると、ゆるやかな傾斜になつてゐる凹地に牧場らしい木サクが囲られてあつてまだら牛が二頭、青草を食んでゐるのが一瞥された。

「ほう……」

S君は愛人にでも出会つた時のように驚嘆の声を放つた。限りなくその情景が懐しかつたのである。

急にミルクの匂いを連想した。そしてその直後に、乳牛がゐるからには、或は、人間がその辺りに住んでゐるかもしれない——という考えがうかんで来た。

で、薪炭の補給も、まだ一二時間はかゝるものと予想して、人恋しさ、S君は護身用のブローニングを上衣の下に隠すと、探偵のような顔をして、歩廊からその傾斜地へ跳び降りた。

露人の女

いつたん凹地に降りて、こんどは胸つくような坂路を登り、丘の上へ上つてみるとその裏側に一軒の人家があつた。むろん、その牧場主の住宅に違ひないと思つた。

見ると門口が開け放しになつてゐる。S君は歩み近ずき乍ら、ブローニングに装填を施こしてそれを確りと右手に握り、門口に迫つて、

「誰か居るか？」

とアイマイな露語で声をかけた。(露語は必要上、内地出発の時から研究中であつたのである)

すると、奥から、突然、ギヤツというような悲鳴が聞えて、小肥りの露人の婆さんがスカートの前をまくつて現われてきた。まつたくのところ、かつて、兵隊の襲撃をうけた経験があつたに違ひない。大切なモノを提供するから、生命だけは助けてくれというゼスチユアである。

そこでS君は首を振つて、否、否という身振りをした。そこでニツコリと笑い、馴れぬカタコトマジリの露語で

「牛乳があつたら若干欲しいが」

と頼んでみた。

すると見る見る、その老婆の表情がユルンで、何か奥の方に向い、大声に呶鳴つた。

と、その声に応じ、奥から三十歳前後と推定される露人の女が、要領深かそうな顔をしておずくろと出現してきた。多分、その老

婆の娘に相違ない。

ところが、不意にその女が、日本語で、

「アナタ、ヘイタイ、チガウカ」

と談しかけて来た。これにはS君も吃驚した。話を聞いてみると、事変前、彼女は長春に住んでいて、日本人との交際もあり、片言雙語ながら日本語が談せるといふのであつた。一年ほど前、長春からこの牧場の主人のもとへ嫁いで来て、良人は半年ほど前、バルチザンのために連行されて行き多分殺されたに違いないという。

「牛乳が御所望ならば、現在一斗罐が三本もあるから無償で提供するけど、その代償として私を長春まで連れて行つてくれないか……長春には一人の兄がいるから、そこへ行きつきたい、そして一日も早くこの危険



状態から脱したいのだ」

と、たど／＼しい日本語で哀訴した。

義を見てせざるは勇なきなり——日本人ドクトクの正義感が湧き、S君は即座に彼女の願いをうべなつた。

「しかし、この老婆はどうするか？」

と訊ねると、二人は暫く相談をしていたが老婆はこの土地を死んでも離れたくないと言ひ、彼女ひとりが行くことに決着した。

さて、S君

は一応、駅の方の動向を見

究めてから、

露人の女に牛

乳の一斗罐を

自分も一本そ

れを担いで、

こつそり列車

に戻つて来た

濃情

女の名はニ

ーナといつて

二十八歳だと

いう。とりあ

えず、誰にも知られず、女を車室へ連れこんだことは成功だつた。

間もなく列車は再び走り出した。例によつて昼夜の隔てなき蛇行である。たとえ外国人の人妻でも、狭い車室に二人だけで顔をつき合せている裡には、男女のヘダテが除去されていくことは自然の理であらう。

何分にも、露人の女ときたら多血質で濃情であることは世界周知のことである。しかも良人に死別して半年近く空闊を余儀なくされていたニーナは、長春到着までの十五日を、殆ど、S君を身近かに引寄せて離さなかつたという。

エピソード

筆者はその話を羨望のうちにS君から打明けられた。

「そして、ニーナは其後どうしました？」

と訊いてみた。

「むろん、長春到着と同時に下車させて別れたんですけど、車中の秘事は、お互いの戦争が生んだ正当な過失——として、神さまも赦して下さるだろう」

と言ひ。映画「モロッコ」のラスト、シーンのような袂別をして、その後、杳として消息を知る由もなかつたと、S君は話した。(完)



張型を用いた 性愛技巧

張型というのは模造男根の事で日本では江戸時代、徳川の江戸城で御殿女中が自慰用に盛に用いたもので、町家でも未亡人や独身婦人又は淫奔な娘や人妻も之を愛用したものである。張型は支那から伝つて来たもので

支那は張型の本場で、張型は独身婦人が、自慰用に使用するだけでなく男性が一夫多妻で多数の妻妾を統御するのに之を性生活の補助具としたのである。

象牙製や水牛角製、木製等有り之を使用する時は湯で温めて用いたのである。張型は又女性の同性相姦用にも用いられ、その様な時は張型に紐をつけて、男性的役割をする方の女性が腰に張型をゆわえつけた。江戸城の春日局も同性愛者で美しい御殿女中を毎夜の様に犯し、しまいは病氣にしてみましたと云う事である。張型は又支那のお隣の印度でも、盛んに用いられ之を夫婦性生活に応用するのである。

ヌバリ島でも張型は盛んに女の間に愛用されている、レスボス島の女性も色々の張型を用いて同性相姦を結婚するまで十二

分に楽しむのである。美しいフランスの女性も張型は大好物で同性愛用のダブル張型等もある近頃は精巧なゴム製の張型やプラスチック製の張型が盛んに愛用されているのである。フランスの貴婦人達は同性愛が大好きで人妻同志も、張型を用いて互いに楽しむそうである近來日本の新聞雑誌で夫の性的能力が薄弱の為に妻が性的不満のため姦通したり離婚したりしている記事が多く記載されているが、その様な時には、夫は張型を使用し、姦通や離婚は半減するのであろう張型が手に入りくい時は張型の代用品の子宮保温器を用いればよい、之は形は悪いが実感は張型以上で甚だ衛生的であるからである。

昔、日本で張型が盛んに売出されていた頃は、姦通や未亡人

の私通が減つて中条流の墮胎医が商売不振になつたと云う位で現代の日本の様に、未亡人や未婚女性の多い国ではゴム製の精巧な張型を多数製造してデパートあたりで売出せば、それらの女性にとつて甚だ幸な事なのである。女性の自慰は適度に行えば、性交と同じく無害である。女性の自慰はどの様に行うのが一番よいのか、よく研究すべき問題で禁圧しようとするのは間違ひである。そして素晴らしい張型がデパートあたりで売られ、されたとなると、女性は、男なしで自分の欲する時に簡単に欲望を処理する事が出来るので甚だ便利重宝であると思う。夫婦生活においても普通の性交に飽いた夫婦は一度張型を性生活に応用して見ると又面白いものであろう。

(完)



国際文通好色噺

二俣志津子

私はこゝに私の毛を同封致します——どの毛？、そのような御質問はなさるものではありません。私は独身者です。そして、クリスマスの夜、私は高いお金を払って蒸風呂温泉へ参ります。この温泉は、私の国では、全国で五ヶ所以上ありません。そして、勿論二十才以下の少年や少女が蒸風呂に入ることは喜ばれておりません。しかし、禁止されているわけでありません故、若しあなたがいらしやつても、私は、クリスマス夜の、（いつでもよろしいのですが、）あなたをここに御案内することが出来るでしょう。私はそこで私の毛を捜すのです。と、申しますと、私が大変毛の薄いもののようにあなたはお思いでしょう？ が、どうしてどうしてです。お望みでしたらフォトをお送りしても宜しい。しかし、えてして、こういったフォトはグロテスクに見え、幻滅感を受けるものです。故にお受取りにならない方が無難でしょう。

さて、私は毛を捜すのです。こゝには娼妓と同じ感じの少年や少女達が居ります。彼女等は全くの、神様のように素裸なのです。私はこの中の一人をクリスマスの晩餐に呼び、性の接触、悦びに夜を明すのです。その彼女に毛を捜させることもあります。来年が幸福である時は、こゝに同封しましたような色の毛が、私の身体の或るところに三本——間違いな

くきつかり三本です。決して冗談に申しているものではありません——生えているのです。

私はこれを抜いて、私の友にお送りします。

そして、友がその毛をなくさなければ、私は次の一年間次第に幸福になつてゆくのです。

私は、そして、今、あなたに、私の一年間の幸福を托しました。若しあなたが一年後にこの毛をお返し下さいましたら私はあなたの望むものをお送りしましょう。しかし、お返し下さらなくても、なくさなければ宜しいのです。私は、私が幸福に一年間をすごしましたら、あなたが、それを大切に保存して下さいるものと思ひまして、あなたのために教会にローソクを寄進しましょう。祝福あれ！、そして、更に新しい毛をお受取り願えれば、大変有難く存じます。

まあ、何と云う変なお手紙でしょう。私は色は違つていても、それがどこに存在しているものか、やつとわかりかけてきました年頃でしたので、どうしてよいやら、全く困却して赤面し、おどおどしてしまつたのです。私は机に向つて坐り心を落付けて、いろいろ想像してみました。こんなに柔い、きれいな、ながい毛が、ふさふさとしている……私は静か



に眼を閉じます。美しく、そのあたりを頭の中に描き、そして、くすり、と、笑ったことを覚えています。そこに口づけしたらどんなものかしら?。柔かく、そして、快く冷めたいに違いない。私は毛をそつと口に含んでみましたけれども味も匂いありませんでしたワ。私はその頃、まだベニスの機能も、その形さえも、はつきりと知りませんでしたので、夢のように考えておりましたのです。今は?、今も存じませんワ。お教えいただけたら幸いと存じます。直接、且つ具体的に困るのです。ペンをもつて、え、絵でも文でも結構ですけれど……強いてお願いするわけではありませんのよしかし、もう毛は沢山ですワ。

まだ私が国際文通のし始めの頃、いきなりヌード・フォトをお送りしていただいたことがあります。私はびつくりしてしまいました、そして、それはまあ何とむきつけな、大胆なフォームで、書店に出せそうもないものですので、ぼんやりしてしまつたことがありますけれど……私はあなたの、国際礼儀をわきまえない、習慣にない行為にはたゞと驚きます。と、共に、このようなことは女性を侮辱しようとするものと理解致します。故に私は、あなたと文通致すことは出来ません。

そう返事を書いて、フォトを送り返したことがありますけれど、今になつて惜しい、と、その方にお便り出したいのですけれど、その時あまりきついことを申ししてしまいましたので、まだ心にかゝつております。

大概、どこの国の方でも、自分の国の女性をほめておりま

す。それで私は、日本の男性の方はどうかしら?、と、思つたりするのです。ほめすぎられますと、フォトを下さい。と申したくありませんけれど。……

私は、アメリカの方とは、交通しないつもりでおります。何故?、それは、一つには私の天邪鬼^{あまのじやく}。国内で、あまりにも大勢の女性がアメリカの人達にバタフライと呼ばれ、腕を組んでゐるのを見ますと、しかも同性の方達が得々とした表情でおりますと、すくなくとも私だけは、とくにアメリカの方には英語でお話することもすまい。どうしてもお話ししなければならぬのでしたら、国際語のエスペラント語で致しましょう。と、少し意地めいてゐるのです。それならば、エスペラント語で文通なされば、と、申されるでしょう。でも、アメリカは近すぎます。ひよつと訪ねて来られましたら、何もおもてなしが出来ませず、恥かしい思いばかりしなければならぬことでしょう。今、日本ではアメリカが一番近い国なのです。上海、そこは何と遠いことでしょう! 距離ではございません。

×

——私は、あなたのお送り下さいましたフォトに対して心から感謝致します。と共に、大変興味をもつて拝見致しますこのフォトの方達は娼妓でございましょうね。それともモデル専門の方でしょうか?。それにしてもカメラに慣れておらないように見受けるのですが……それに、もつと均勢がとれていてもよいと思うのです。いかゞでしょう。たとえば、腰から……そのあたりがもつと締つていて——、どうぞ、



不躰な言葉をお宥して下さい。つい、あなたが女性であることを忘れて喋りすぎました。それと言うのも、あなたがこのようなフォトをお送り下さるのがいけないのです。あまりこのようなことはなさらない方がよいと存じます。勿論、受取った私は大変嬉しいのです。出来得べくんば、更に、と、申したいところです。

また、京都市の市街、風俗に関するものにも心をひかれしました。この町には特別なダンサー、娼妓が住んでいるのです。よろか？

私達の市には特別な娼妓と云つたようなものは居りません。言うまでもなく、港町ですので多くの娼妓が居ります。また娼妓達の住んでいる街もあります。まあ、そこでは十四、五才の少女も売春をしています。そして、少年達も！あなたは、少年達が売春をしている。と、言うとお思いになるでしょう？しかし、事実なのです。それはべつにあなたのお国のように、男性が女性の姿をしたり、ベニスを太股の間にかくしたり（あなたの下さつたフォトではそう見えましたが）するようなことはしておりません。そして、そんなことは、まるで役立たぬ無駄なことなのです。男性がどうして女性に化けられましょうか！あなたのお国は実に不思議なお国です。

私達の国では、売春は大変秘密になされております。特に少年少女のそれは、と申しますのは、性の接触は、少年は二十一才まで、少女は十八才まで、法律によつて禁じられて居るのです。しかし、この少女は十四才、少年は十五、六才

位から、生殖器は立派に成熟しております。これは私が保証致します。

私は十二才の少女を抱いたことがあります。もう、その娘は娼妓の手管を知っているのに驚きました。彼女等は大体十才位から不自然な生活をしているようです。これは、悲しむべきことです。

これはアムステルダムの方のお便りの一節です。こう云うお便りには、感じないのです。は？、そうです。それで終ります。

ところが、同性のヌードフォトをいただいて、はッ、と、不意をつかれたような、どぎまぎすることがあります。たとえばその女性のどこか、非常に自分に似ている時、ふと自分が裸を見られているような羞恥。或いは真直に突いて来るような、真に迫つたベニス……まあ、そのようなフォトを下さる方は殆んどございせんけれど、そのような方には何となく捉われちゃうんです。お腹の奥がドキンとして、近くに居らつしやらないのが幸いです。そう云うものは、現実具体的にになりますと、忽ち幻滅の悲哀を感じるようになることでしょう。手紙にはロマンがあり、空想があります。幸福は適えられれば終ります。幸福から皮膚の黒い赤ちやんが生れて、その子が少年、或いは少女になり、皮膚から血が出ぬほどにこすつて色を落そうと努力するなど、耐えられないことなのです。



——私は女性との交接を望みません。むしろ嫌悪します。かと云つて私が不能かと言ふとそうではないのです。病氣をおそれているのかと云うと、そうでもないのです。性慾はかえつて激しい方でしよう。それでいて乳房が恋しいのです。

私は、正直に告白して、女を買いにも行きます。そこで私はまづ第一に乳房をたのしむのです。(お宥し下さい。こんな言葉を、私は二十一才です。そして、性交も幾度かしました。が、何とも云えない後味の悪さは私だけのものではないでしょうか？そして、女性にはそれが無いものでしょうか。お教え下さい。とに角、何と云ういとわしい行為だろう！。そしてそれをせずにはいられない自己の性を憎みます。

私は最近手淫を覚えました。それは、女が教えてくれたのです。××しないのを××で揉んで、三十分も×××でしゅうか。それから××りになつて……私はそれから覚えたのです。私はあなたにお教えします。その先の下辺の、××のあたりを指先で××ることです。或いはその先の周囲の××××を××るのです。足の裏が熱くなります。私は今、それを×××この手紙を書いているのです。

×

露出狂じやないのかしら？男性の。私もオナニー位、それは知っております。私はそれを恥づべき行為だとも思つておりませんので、ヘイキ。でも、こうぶつつけてこられると流石に閉口します。文通にも常識と云うものがありますもの……と云つても、私は時々常識外れな、とんでもないお便りをするものがあつて、手紙を出してしまつてからも、しばらく

へどうしようか、と、返事が来るまで心配していることがあります。

×

——このバーの女給は皆な素裸です。いや、靴だけは履いていますが。……私は、田舎者や、外国の旅行者が訪ねてくると、知らんふりをしてこゝに案内することがあるのです。大方は二度と行かないようです。私達は勿論度々行きますが慣れない者は、女給を膝の上へ抱いても、手の置き場に咄しむようですな。かえつて、何もないと、案外困るものです。誰も居ないところなら、例の谷間を求めるでしょうが、近くに三人も四人もまつわりついている。まるで、アマゾンに捕虜になつた男みたいなのが、すつかりはがされて……それでも女達は、私が連れて行つた客には幾分手心をして……いるようです。フリの客は、蟻地獄へ落ちたみたいなのです。この辺では、ダンサーと娼妓と差異はありません。たゞ違ふのは名前と衣裳位なものでしょう。しかし、このバーの女給達ほど食慾はないようです。彼女等は偉大なる胃袋を持つております。彼女等に馴染深い私でさえ、彼女等に絞られて参つてしまうことがあります。

だが私は、彼女等を愛します。彼女等の偉大なるお尻を、彼女等の偉大なる性を。彼女等は潔白で、それこそ赤裸々です。

×

こんなお手紙の紹介はもうやめましょう。つまりません。私はちつとも興がないのです。私は本当のことを言う



私自身の肉体、容姿を愛しているのです。私は幾時間鏡の前に坐つていてもあきません。私は私の爪だけを見ていても満足なのです。私は自分の背中やお尻も眺めたいのです。おかしいでしょうか？。自分の白い柔い腕に接吻。いつか血が滲んで、それが今もつて消えないので、以後強く吸うことはやめておきます。私の腕にあざでも出来たらどうしましょう。心配です。香水を腋下や、其他に吹き込んでゐるのは、おしやれのためではありません。一つの私の体臭を作り出してゆく……それに、私は腋臭なのですよ。私は、それをべつに防せごろと思いません。腋臭のきらいな方は私に近寄らなければいいのです。

文通してきますと、やがてそれぞれの体臭が、封筒や便箋から感じて来るようになります。南フランスの或る少女はたえず便箋を変えてよこすけれども、いつもいい香りが、封を開く度にするのです。彼女は五十日も六十日もかゝる普通便ではめつたに手紙をよこさず、殆んど航空便なのです。何と言ふ愛すべき少女でしょう！。彼女はきつと匂うような美しい少女で、よい恋人も居ることでしょう。流れるようなきれいな字。私のような男のようにぼきぼきした文。がさつな字ですと、そのうちに、お手紙書くのも自分からがつかりしてしまふのです。きつと、私の手紙をお受取りになつた方達もそう思つてゐるにちがひありません。（やりきれない字だなア。そして又、何と言ふ文だ。）私は悲しくなつてだんだんお便りをしなくなつてゆくのです。若しその方達にお会したら、私はどんなに恥かしい思いをよみがえらすでしょう

遙かな遙かな外国のお友達に、一字一字心をこめてお便りするのです。その人はいつまでも私をよく思つてくれることでしょう。言うまでもなく、性の話やヌードフォートの話をするお友達も多く居ります。しかし、いづれにしろ、距離的に遠いと云ふことは、何と云ふことでしょうか。

×

——お嬢さん。私はあなたを男の方とばかり思つておりました。きびきびとした文章。私の意見にすぐ駁論する。卒直に思つたことをうちあけてくる……このような女性は日本には大変少いと聞いております。やさしい、おとなしい、男性の言葉に耳を傾け、若し自分の意見を持つていたとしても、つつましく胸にしまつておく……そのような女性。お人形のような日本女性。確かに、戦後の女性が変わりました。こちらでも、で、恐らく日本の女性も変つたと推察致します。しかし、その変り方は、あまりほめたものではありません。つまり、自己の思想、教養等がないために、自己を表現するのに直接肉体をもつてするのです。私は、他の日本の方から、都会には白人との混血の捨児が大そうあるとお聞きしました。もう二、三年も白人達が日本に居住しましたら、それは、あなた達日本のために悲しむべきことでしょう。なぜならば、それ等の捨児はいよいよ増え、その幾%かは成人し、父になり、母になることでしょう。やがて日本民族は変わるでしょう。中国では、白人達を呑み込み消化してしまいました。しかし日本は消化されるように見受けられる。

しかも、白人達は十年も二十年もあなた達のお国から去ら



ないことでしょう。あなたの御意見はいかゞですか？。

×

真剣な問題を出されると、ながい間お手紙で討論するので
す。そして、最も親しいお友達になります。パリーの古典派
詩人。アムステルダムの方南ドイツの女教師、北京の老書店
主。等々、最近日本の男性から多くのお便りをいただきまし
たけれども、あまり御意見を述べませんようです。性の問題
にしろ。何にしろ、それで、私は物足りないのです。私のお
手紙には或いは女性らしい暖かさがなくとも存じません。お
会い致しましても、きつと冷めたい女、と、お感じになられ
るでしょう。それで、お会いせずに、こうしてお手紙でお話
する方が宜しいかと、ながながしく書き始めたのです。

×

——あなたのお便りに応えまして、私も亦私自身をあなた
にペンで描いてみましょう。

まづ髪から、私の髪の毛はブロードです。柔かくふさふさ
としていて、この春まで、私は髪を編んでおりました。しか
し、私ももう十八になりましたので、子供みたいに編むこと
をやめました。私はこの冷やかな髪を弄ぶことが好きでなり
ません。私はいつまでもこの髪は切らないことでしょう。し
かし、腋下はあなたと同じように、毛をすつかりとつてしま
いました。その代り、下の毛は頭の髪のように大切に致しま
す。本当に不思議なものですわね。何故に生えるのでしろう
なくともよさそうですのに……

眼は灰色です。しかし、私の感情によつて少し色が変わりま

す。それは、説明出来ない位かすかですけれども。

肌は白。大きな耳たぼ。私は来年から耳環をつけよう
と思つております。こんなに豊かなものを持つているのです
もの、祝福されるべきですわ。

私の左の肩には、茶色がかつた小さなほくろが輝いており
ます。それは、私が首を曲げてやつと見えるところにあるの
です。私はそこにキッスしたいと思うのですけれど……

人の身長は脚によつて決めるのではないでしょうか？。私は
どちらかと云うとノツポですのよ。私は脚をそろえて、両足
の間に少しのすきもあります。私はそれが少し得意なので
す。私の恋人の言葉——意見によりますと、私の乳房はやが
て、私のお尻のようになるでしょう。とのこと。恋人は
特にそこを可愛がるのです。しかし、私は耳を吸われる方が
嬉しいのです。あなたはそれをなさつてもらつたこと、あり
ませんか？。私の喜びは全身を走るのです。あなたも、恋人に
それをさせてごらん下さいまし。

私達はもう許し合つてゐるのです。毎週火曜日にお会いし
て、ドライブします。どこまでもどこまでも……そして、私
達は私達の好むところにキッスするのです。彼は私の肩のほ
くろ、乳房、耳たぼ、髪、ヨニー。……

これで私の話はやめにしておきます。此処に同封致しまし
た毛は、誰ので、どこのであるかをお問いなりませんよう。
別にあの外国人の様に縁起のあるものではありません。

實話

或る變態夫婦の死

藤崎洋美



見ておいで、なるべく早く出ないと汽車に乗り遅れるから」

と玄関に出乍ら云つた。十才と七才の兄妹は弁当のつまつた小さなリュックサックを背負つた儘元氣よく

「平井の小父ちゃん、小母ちゃん」

大声で叫びつゝ、バタ／＼と走つて行つたが間もなく

「父ちゃんッ、母ちゃんッ」

と泣き叫び乍ら跳足で駆け戻つて来たのである。

「どうしたんだよ」

「二人ともどうしたつて云うの?」

石黒夫婦が驚いて訊ねると上の子がやつとの事でどもり乍ら

「平井の小父ちゃんと小母ちゃんが死んでるよッ」

と脅えた声でブツ／＼ふるえ乍ら指さして云つた。

「何んだつて?」

石黒は昨夜の元氣で朗らかな平井夫婦を思い出して半信半疑だつたが、妻にかじりついて泣き叫ぶ子供達の様子にあわてゝ外へ飛び出したが其処へ丁度通りかゝつた近所の人と一緒に平井の家に入つてみた。玄関横の庭先を囲んでいる柵の小さな戸から庭に入つて見ると、庭に面した出窓のガラス戸が一枚分だけ開かれていた。此の出窓は低く造つてあるので、此処から部屋の中へ入れるのだ。石黒の子供達の靴が散らばつていたのも出窓から入つて其の儘飛び出して来たものらしい。

石黒達は念の為に、出窓から部屋へ向つて平井さんと声をかけてみた。返事がないので部屋に入ると八畳の間はしんと静まつていて少しも取り乱した様子もなく、子供のいない家庭らしくきちんと整理されていた。襖をあけて次の部屋をと思つたが、廊下の方へ通ずる唐紙の開き戸が半開きになつていたので、二

此の附近の住宅はいわゆるプチ、ブルを対象として建てたものだけに簡素な中にもスマートな近代住宅で一戸ずつ常緑樹の囲いがしてあつて、騒々しい街の中とは違つて外国映画の田園風景の一齣を思わせるものがあつた。其の日は日曜日と云うので久し振りに前日の晩、平井善吉と釣りに行く約束をした小学校教師の石黒太助は朝早くからはしやぎ廻つて喜んでいた二人の子供に、

「お向いの平井の小父さんは支度が出来たか

女天下時代

人は無言の中に眩きあつて其処から廊下を覗いた。

雨戸をしめきつた家の中は薄暗かつたが、つけっぱなしらしい電燈の明りが無気味に映えていた。便所の隣りになつてゐる浴室のシリガラスの戸が大きく開けてあつた。二人は同時にひよいと浴室を見た。

「ウワァッ！」

二人共、途端に叫び声をあげてしまった。「こ、こりやいかん。わしは警察へ届けて来る」

近所の人はあわてゝ外へ飛び出した。家の廻りにはもう七八人の人が集つていて出窓から入つて来る処だつた。

「大変だ〜。平井さん夫婦が殺されてゐる！」

石黒も青くなつて叫んだ。急報に警察からはすぐ数名の警官が駆けつけた。調べはすぐ始められた。石黒は一目見てすっかり驚き、殺されてゐると叫んでしまつたがよく調べてみると一寸違つた点があつた。主人の平井善

吉(卅六才)は浴室の流し板の処にやせ型で背丈の高い身体を一層長くしてパンツだけの身体で仰向けに苦悶の表情で死んでゐた。寝巻らしい着物が脱衣所に無雑作に脱ぎ捨てゝあつた。処が妻の咲子(廿八才)は矢張り寝巻らしい赤い派手な着物をつけていたがすっかり乱れて半裸に等しく、水の入つてない風呂桶の中に尻もちをついた恰好で死んでゐた。だがこれは殺されたものでなく天井が高く乾物の為に作つてあつたのか横に張つた針金に、風呂桶の縁に足をかけて跨ぎ乗り、首をかけて更に紐で縛り其の儘首吊りをやつたもので針金が切れて風呂桶の中に落ち込んだと云う事が判つたのである。そして咲子の左手には大きくペンの走り書きで「良一が憎い」と書かれてある便箋紙一枚を握りしめてゐた。

更に不思議なのは平井善吉の死体であつた。別に細紐等で絞殺された跡はなく、苦悶の素振こそあつたが別に何の抵抗も示さないまゝ死んでゐた。首を圧迫された事は確かな様でそれは苦しまぎれに大きく開いた口だが其の中には頬張つたまゝの人糞が一杯つまつてゐた。

やがて調査の結果、此の夫婦の死んだのは

昨夜十一時頃と判断され、又平井の口中にあつた人糞は咲子のものと云う事も判つた。

そして平井の死体解剖の結果、汚い話だが平井は咲子の糞を食べ乍ら何かのショックで窒息死したと云う事が判つた。其の外部屋を調べて見ると変態性慾に關係のある書画が非常に多く、手製らしいニーム製の手錠や鎖、ゴムで作つた鞭等が発見されたのである。平井の身体には数ヶ所の鞭の跡らしい傷があり、日記帳等に依つて此の平井が強度のマゾヒズム症で、コブラグニーの症状を併せもつた変態性慾者であつたと云う事が判つた。結局此の夫婦は、性欲の満足の為の遊戲が興奮の頂点に平井を死に到らしめたので妻の咲子は驚いてあとを追つたのだらうと云う事が推察された。然し咲子の手に握られていた紙片は、間違いなく咲子の筆跡で机にはインクのフタがあげられたまゝになつていたので死ぬ前に書いたものには違ひなく又平井の死因にも種々の疑問が残されてゐた。

平井は或る会社の出納課の一係長で温厚な人柄と仕事への真面目さは誰からも尊敬されてゐた程で、咲子も又かつてはレヴェニーの肉体女優として大きな人気を持つてゐた事があり、それだけに人目を惹かずにおれない美貌

と豊満な肉体の持主であつたが、家庭の人となつた咲子の主婦振りはそんな前歴があつたとは思えない様な地味な生活ぶりだ、此の夫婦の仲の良さは近所や知人の間でも有名で人際きあいもよく評判のいい家庭であつた。まして変態性欲等と云ふ事は誰も知つていなかった。だが此の「良一が憎い」と書かれた咲子の書き置きから、これに依つて此の夫婦の死が推察通りに違いなかつたが其の原因が一少年の一寸した悪戯の為に此の事件が起きた事が判つたのである。それは中学校に通つていた十七才になる良一と云う平井の実弟が近所に両親と共に住んでいたが、其の良一が頭が痛いと言つてどうしても兄夫婦の葬儀に行こうとしない事と、平井夫婦の死んだ土曜日の夜

「大きい兄さんの家へ行つて泊つて来る」と云つて出たのに、十二時近くなつて家に帰り、友達の家に行つて遊んでいたから兄さんの家に行かなかつたと云つたので、両親から学生のくせに夜遊びしてと、ひどく叱られた事が判つた。刑事達は良一をすかし或はおどかして此の事件の真相を掴みとつた事から常人では想像もつかない変態者の行為がさらけ出されたのである。

良一は其の夜七時頃、兄夫婦の家へ行く途中、友達と会い其の頃やかましかつた学生の映画見物を勝われて悪いと知りつゝ映画を見てしまった。映画の終つたのが九時半で遅くなつてしまつたとは思つたが、家に帰れば叱られるので郊外電車に乗つて兄夫婦の家迄来たのである。其の時は十時をとつくに廻つていたが、土曜日の事であり秋の初めとは云えまだむし暑さを感じる頃なので、兄夫婦の起きている事は外からでも一目ですぐ判つた。良一はやれ〜と云う安心感から可愛がつてくれる兄夫婦への親しみにフト少年らしいイタズラを思いついた。

それはそつと家の中に忍び込んで、ワツと驚かす事で初めの玄関の戸とあけようとしたが、其処はもう固くなつていた。其処でそつと塀を越えて庭先へ廻りまだ開けてあつた出窓の傍へ来ると兄夫婦の話し声が聞えた。此の時顔を出せばよかつたのだが良一はそつと出窓のかげにかくれていた。

「ねえ、今夜はどうする？」
「えッ、そうかい、じゃ頼むよ」

そんな会話だつた。良一は何の事かと思いつゝやつぱり仲のいい二人だなアと思つた。良一は笑いを噛み殺して部屋を覗いたが廊下

の方へ兄夫婦は消えていた。よし、此処から入つて驚かしてやるんだと茶目ツ子らしい考えで部屋へ入ろうとするとドタドタと大きな音がして兄夫婦の低い叫び声が上がつた。

「……？」

喧嘩らしい！ それは直ぐ判つた。今迄仲がよかつたのに……と良一夫婦は喧嘩を交へ思つて耳をすました。兄が義姉を叩いていると思つたのが反対だと判つた時に良一は変な気がした。ヒイ〜許しを乞う兄を義姉はま



だ苛めているらしい。良一は義姉が憎らしい
 氣もし、又弱い兄が齒がなくなつた。

「じや許してあげる代り……いゝの？」

「ハイ」

乱闘が終つて仲直りをしたのか、そんな会
 話が聞えた。それきりコトリとも音がしなく
 なつた。

良一はいよく不思議に思つた。

余程声をかけようと思つたが良一はそつと
 覗いて見る氣になつた。部屋へ入つて唐紙の
 開き戸から浴室の中を見たが

「おや？何をしているのかしら？」

と思つた瞬間。危く声を出す処だつた。良

良一は思わず身体を乗り出した時、義姉と
 バツタリ顔を合わせてしまつた。

一は大変なものを見てしまつたのだ。流し板
 の上には兄が仰向けになつて大きく口をあけ
 ていた。其の上には咲子が着物をまくりあげ
 て、恰もトイレットで用を足す恰好でしやが
 みこんでいた。
 それは純真な此の少年の心には無惨な程の
 光景だつた。良一は帰ろうと思ひ、もう少し
 してから素知らぬ顔で来ようかとも思つた。
 然しもう一度と良一は顔を出した。義姉はそ
 のまゝの恰好で両腿の間から兄を見下してい
 た。

変態情歌

マゾヒスムスの情歌

嘉永年度の情歌に、

結いたての髪に触られ

わしや腹がたつ

ほかにむしらす人がある
 とあるが、異性から自己

の頭髮をむしられ虐待せら

れるのを喜ぶマゾヒスムス 一手段である。狭斜界に於
 の女性を詠んだものである
 う。
 は、江戸時代の情歌を見て
 も分る。

サジスムスの情歌

愛人同志が互いに抓り合

つたり、噛みついたりする

痴話喧嘩は、生理的の「サ

ジスムス」であつて、快感

を増進し情交を濃厚にする

曰く、

抓りや紫喰いつきや紅よ

色で仕上げた此の

からだ

「あッ！」

義姉が何か叫んで兄の上にのけぞつたのを
 チラと見た。良一は何処をどう走つたのか、
 跣足のまゝ靴を両手に持つて何も判らず只無
 我夢中で走つた。義弟に見つかつた恥辱、驚
 愕に咲子は夫の首の上に尻もちをついてしま
 つたのだ。其のショックがはげしかつたため
 平井は窒息してしまつたのである。

恐ろしい変態性欲、其の夫婦の生活が如何
 に怪奇を極めたかはこれによつても想像出来
 るが、誰にも秘密で二人だけ知る快樂に耽つ
 た此の男女の行為は、それは社会上何らの不
 道德を感じさせなかつたかも知れない、然し
 神を恐れぬ冒瀆は神聖な生殖の営みを無視し
 た其の罪は矢張り天罰となつて現われたので
 あろうか。

×

×

これは今から数年前、或る都市の郊外住宅
 に私が住んでいた時、実際に見聞した実話で
 あつて、何ら脚色をせずにあるのまゝ記述し
 たものである。広い世間にはこういつた変つ
 た夫婦の生活もあるものだ、しみじみ思わ
 せられたものである。

性 神
探 訪石^{いし}神^{がみ}案^{あん}内^{ない}記^き

七 條 美 樹 子

先づこれには、性器崇拜から説くのが順序だと思しますので、退屈をお詫びして、最初に性に関する神様の事を少しお話し致します。

こうした種類のものは、日本全国に、約五百近くあるという事ですが、男神としては男根形の自然石の他に、人工で刻んだもののがかなり沢山あります。その名称も多種多様ですが、一番全国で多いものは

サイノカミ（九州地方ではサヤのカミと発音します）或はセイノカミと言つて、塞の神、幸の神、石神、齋神、精の神などと書きます。ドウソジン道祖神というのは、男女併立のもので、両性の性器を彫つたものが本当ですが、道の岐などに立つていて男性だけを表象したものもあります。

又キンセイサマ、コンセイサマなどと云う所があります。金精、金勢、金請、金清、金聖などと書き、殊に奥州地方に多く見ら

れるようです。

この他に石神と呼んでいる所も多く、陽石、石神（福井県若狭地方）などと呼んでいる所、田の神（南九州）などという所、山の神（コワイ奥さんの事ではありません三重県）或はヤマノコ（岐阜県）と言つている所がありますし、もつと露骨に蚊里田様（信州地方）刈田様（越後地方）麻羅神笠神（陸前地方）笠岩（信州の一部）カサジメ（肥後地方）毛長明神（武蔵）お客明神（滋賀県の某所）などと云う所もありまして、道鏡様だとか、金山彦神社などという所もかなりあります。

次に――

女性の方は、多くは天然の洞窟か凹みのある自然岩が祀られ、大木の根元に洞窟の出来たものを崇拜している所もあります。名称で一番多いのは粟島様で、有難がつて拝んでる粟島様の正体が、実は女性のシ

ンボルである、などと言えば、驚いたり、ガツカリされたりする方もある事でしよう。粟島様というのは、住吉明神の後妃粟島様が、白血、長血の業病（現在の白血病、血病？）を患つて海に流されたのですがそれが紀州の加太に漂着して、里人に祀られました。そこで婦人病や、その他の不幸な婦人の為に悲願を立てられた。というのが、粟島由来記の伝説なんです。

その他の名称では、三重県で猿田姫と呼ぶ所があり、三河地方のお女中様、遠江地方の姥神、東京の吾妻又は吾嬬様、千葉県の産の宮、神奈川県に姫石などというのがあります。いづれも女石を祀つたものです。

又陰陽兩石を祀つた所もあり、お地藏様が男神に模せられているように、女神には観音様や弁天様、吉祥天女などが使われています。

効能書はこれくらいにしておいて、それでは実際に、各地からエロっぽい石神大明神を少し動員してみましよう。

先づ一番乗りは高知県長岡郡介良村の朝峰神社、そのこの社殿の洞窟は、高さ五間余り、その形が非常に女のものによく似ていて、内部は深く、如何なる早魃の時でも枯渴しないという、泉水が涸々と流れていきます。懐胎、安産を祈る人が多いので、神社では安産の護符を出していますし、酒造家は酒の神様として、大変崇拜しています。

お次は有名な江の島の弁天さん、この弁財天女を祀る岩窟の入口は、その弁天様の身体の何処かの部分と、そつくりの形をしているから素敵です。しかも御本尊の裸弁天は、股を拡げて腰を下し、右膝を横に張つて、実に艶麗そのもので、おまけに丸の素裸と来ているので、国宝に指定されました。

大体弁天様という女性は、どうも浮気っぽいお方が多いと見えて、江の島の別当、岩本院の開基据膳喰わぬは何とかで、弁天様とネンゴロになられたそうですし愛知県豊川の三明院の弁天様は、馬子と夫婦になつてられるし、広島県宮島の弁天さんは、

漁夫と契つておられます。

弁天様はこれ位で退場して頂いて、お次は岐阜県中津川町の「珍石」中央線中津川駅で降りると、駅前の中村屋旅館からお迎えが来て、旅装を解く間に、この町の名所へ案内してくれます。その時の私達のガイドガール加奈子さんは、後で聞けばミス中津川の美人だそうでした。

中津の町を貫流する中津川の清流を渡つて一丁程行くと、こんもりした森があり、小川を渡つてそこへ行くと、実に巨大な陰陽一对の怪石が出現します。女岩の方は、後年人工を加えたらしく、亀裂の上部に芒穂が植えてあり、追真味満点というところ。正にミス中津川嬢の実物拡大見本以上の、その大自然の精妙な悪戯には、大いに讃嘆の価値あるでしょう。

次は陰陽石の超弩級のもの、それは宮崎県日向岩瀬川の中流にあるんですが、天然石でその形は真に迫り陽石の方は高さ実に二丈四尺周囲九間、その岩裾に陰石があつてその傍に皇産靈幸魂社の祠があります。

岡山県大島の陰陽石は、陽石の高さ二丈周囲三丈、陰石はそれから十丁程隔てた所にあります。

その他、信州の笠岩、筑後靈岩寺境内、大和の天道羅石山のものなどは、天然岩の巨石ですが、中には金沢市兼六公園の鶴鶴石のように、袖珍物もあり、陰陽いづれかがあつた所へ、人工で男性又は女性のものを配したもの、或は全然人工のものなどもあります。

最後に、避妊万能の時代に、これはどうかとも思いますが、子供の出来る石、というのを御披露に及びましょう。先づ福島県岩代松川村の女泣石は、肌の温みで石が暖まるまで抱いていると、必ず子供を孕むという、迷信みたいな伝説があります。

福島県の裏磐梯国立公園の五色温泉には同じような石が浴槽の中にありますし、肥前太田観音境内のまたぎ石というのは、夫婦が尻まくりして、尻合せにこの石を跨ぐと孕むと言われています。奈良の春日神社境内にある。水谷社社前の踏石は、跨ぐと懐妊すると言われています。

しかしこうした種類のものは、既に迷信的な価値より無いでしょう。それよりも、跨いだら避妊出来るという、コンドーム石でも発明されたら、たちまち繁栄疑いなしなんですけれどねえ

上海の
賣笑婦

野鷄

族

野 中 愛 三



スモロ ヤーチ
四馬路の野鷄

ここは上海、夢の四馬路じやなくて野鷄（
淫売婦）の四馬路である。外泊渡橋の下、
戒克の灯が点く頃ともなれば四馬路の舗道は

上つたような風土病の足でアスファルトをう
ろつく。

「姑娘、飯丁嗎？」
流し客がツツツと側へよる。
「謝々 儂……」

C級野鷄の
遊歩地帯と
化すズラリ
と並んだ姑
娘たち五十
余人、オス
を求めて百
花乱態。こ
の寒空にオ
ーバもなく
人絹の衣裳
をヒラヒラ
させて膨れ

待つていましたと云わぬばかりに姑娘は男
の胸へ凭れかゝる。
「今夜は冷えるね」
「だから温めてあげるわ」
「うつ、ふふふ」
「ねえ、いいでしょう」
鴨を遁してなるものかと姑娘、必死の媚態
が続く。

「幾何なの？」
男もさるもの、水平線を越えてはいない。
「あなた野暮つたいわ」
「だつて、最初が肝腎……」
「ホホホ、案外臆病ねえ。あたしとあなたの
取引じやないの」
「だから……」

「あゝ焦れたい。今夜はアブレテンの、あな
たまかせよ」
キユンと鼻をつく白蘭花の香水が、男の知

覚を鈍らせた。

「その口で鯛？は釣れないよ」

「じゃ、あなたは鯛なの？」

「ははは」快笑するだけ。

「あたしには何でもいいの。上げさえしたら皆んなお客様。さ、どちらなの。清茶、それとも夜想？」

「いやにガツガツするナ」

「時間がないわ。ハッキリして頂戴！」

「松茸のウラみたい顔して——」

「あたしがそうなら、あなたはモグラじやないの」

「モグラ？」

「穴から穴を探し歩くくせに……」

「云つたナ」

「口惜しかつたら出して頂戴」

「……………」

「ねえ、本当にどちら？」

姑娘はヒルのようにびつたり、ヒフをすり寄せる。ザクロみたいな唇が男の前にうごめいていく。

「やれ／＼芯が疲れる」

「それはこちらのセリフよ。さあ観念したらどう」

「……………」

「早く行きましょう。立ちん棒は冷えるわよ」

「……………」

「ハッキリしなさいよ。さん／＼焦らさして——」

「ちよつと急用を思いだした。次の日にネ。再会」

「アッ！ 駄目よ。江北人（バカ）」

クルツと男は踵を返して、

「ヒヒヒ」

と薄笑いだ。そして、すた／＼と五馬路の商店街へ消える。

姑娘はもう次の男に狙いをつけている。

四辺は暗くなり、夜の猛禽たち蟬集する時刻だ。オス対メスの跳梁はいよいよ活発になつて来た。

四馬路の先は五馬路、それから大世界娛樂場へ続くエトアール路だ。此処へ来る顧客の足の便は至極よい。南京路からは市電で、エトアール路からは二階建バス。

だから四馬路の野鶏は売れる。どん／＼商品化する。もう人間ではなく、放し飼いの野鶏であつた。

客筋も上は公司の平社員から下は黄包车（車夫）商社の番頭連中が断然多い。ギリギ

リの遊金で吐一杯の放出？を試みる。

それを承知の野鶏族、夜への旅路を間断なく続行することによつて、生きる力を養つていく。そこには一夜の偽装された挑情が、ビチビチ渦をまいていく。

若い酔客など一コロだ。うんすらもなく商取引はまとまり、蛇のように曲りくねた支那家屋へ案内される。

「客人来了」

野鶏の勝誇つた声に誘導されてオスは、対る熱情をヒフに注ぐ。

永安公司

上海へ渡つて来た居留民、旅行者は必ずと云つていい位、永安公司（デパート）へ行く内地のロボット的デパートと違つて、国際都市のデパートは、中々頭がいい。先ず階上はローラスケート場、影戲（映画新劇、手品や喜劇）から舞厅（ダンスホール）の設備トルコ風呂あり旅館、喫茶花園地帯は勿論、ラストの七階屋上はカード階級の野鶏が約三百人は出入する。

南京路大通りの交叉点にまるで象のように

印度人巡捕（巡查）が佇む頃、公司の屋上ではメス対オスの艶笑合戦が展開される。ぶどろ棚の下、ベンチの横、植木のある奥では、ヒモ付きのもとに夜の猛禽たちと秘技のやりとりが活潑に繰りひろげられる。

屋間の仮面を脱いだオスたちは、こゝへ来るともう舌ナメずりの憩いである。それはアレに対する慾情がチカチカ光り、声と声が絡みあい、まみるで「龍巻？」のような凄さ。所詮、オスの究極の目的はアレにつながりメスだつて……そうだろう。

だから客が現われるや否や野鶏たちは「先生！」

飢えたメス猫だ。十五六から二十前後の張りきつた姑娘たち。

「いらつしやい」

キンキンする声を張り上げて七八人、顧客の争奪戦。

客たる先生、泰然自若として先ず米国製チエンメンを啜える。ライターを点じて一服喫る。その間、素早く「姑娘」を選ぶ。ベンチへいく。

「先生、どう」

手の上に手を重ねる姑娘たち。

「あたしが先約よ」

強敵が背広を握む。

「何すんのよ」

最初の姑娘が仲間の靴を蹴る。

「先生、誰にする。早く決めてよ」

横から一人割込んでヒフをすりつけた。

「姑娘散歩だよ。夜想じやない」

と男が胡麻化せば

「ヘーんだ、その口の下」

「これをごらん」

ポケットを裏返しても信用しない。ここへ来ればウソと真実、椰揄のカクテルだ。キツネと狸どころか、短刀直入の仕込が大平に展開される。



たまり

かねたメ

スの

ひと

りが

ベン

チの

後ろ

へ廻

りオ

スのワキ下

をくすぐる

「うあッ」

喚声上がる。男はタツタツと駆け出す。彼

方の陶器物へ腰をおろすと

「待つていたのよ、先生」

ふんわり側へ寄つて来たのは、馴染の姑娘

でもあろうか。東洋的のボチャボチャした頬

と唇のキレイなムスメ。

「やア、姑娘」

もう一声で男の敗北。眉尻を見てもわかる

「先生やつぱり約束を守つてくれたわねえ。

あたし、もう嬉しくつて——」

「と云つても、今夜はダメ。わかつてくれる

だろう」

「わからないわ。そんな無情な……」

「無情は姑娘じやないか。部屋に行けばコブ

付きだもの」

「あれは姉の子と云つたじやないの」

「……」

「病死した不幸な姉だつたわ」

「それにしても可笑しい。ワザワザ聞までつ

れこまなくつてもいいだろう。あの子がベツ

トの境界線じやね……」

「まあ憎らしい。あたしの身にもなつて頂

戴」

「だからこうして——」

「じゃ家へ参りましょう」

「今夜はそつと帰つてくれ」

「折角いらしたのに、あたしだけどうして

帰れますの。それこそ面子がないわ」

「面子がなかったのは、僕だよ」

「……………」

「子供を抱いて寝ようとは、全く夢想だにしなかつたよ」

「……………」

「正直に白状したらどう」

「カード階級だつて、ウソは云わないわ。ねえ信じて下さらないの」

必死にくどくのは馴染の野鶏。

それは先日のことだつた。深夜、これから二人の世界へ入ろうとした時、不意にベッドの下からゴソゴソ這い上つて、足元へ潜り込んで来たものがある。

「誰だッ！」

男が一喝して蒲団をはぐと、三歳位の女の子がふるえていた。

「姑娘、一体どうした？」

彼は愕然としてあぐらをかいて了つた折角の愉しみも興ざめたのは無理はない。そればかりか、肚立たしくさえなるのだつた。

「ホホホ」

「笑いごとじゃないぞ」

「だつて先生の愕ろきようつたらないわ」

「癪だよ。全く」

「アレ、姉の子よ。落みませんわ。隅に寝かしてねえ」

「……………」

いやとも云えなかつた。よく事情を訊くと死んだ姉の子を引取り、養育してるとのことだつた。そして、

「この子供だけは、あたしの二ノ舞いをさせたくないわ」

ハッキリ答えた。それは殊勝な——と、再会を約して別れた。が、よく思考してみるとどうも腑に落ちない点を発見した。姉の子なら当然その夫が世話するべきだ。その亭主は？また姉はどういう結婚をしたか？遺産の分配は？……………それを確めるためノコノコ公司へ現われたのであるが、こうして彼女が抗弁するところをみると、いよいよ姑娘自身の子供であることを直感した

「——これは勘い、姉の子供にお菓子でも買つておやり」

と云つて男は、幾何かの札束を渡した。そして晴々とした気持で帰路につくのだつた。

ホンキユウヤーチ 虹口の野鶏

虹口は碼頭（波止場）地帯である。だから外人船員が圧倒的だ。楊樹浦路は、ユダ、ロシア、スペイン人などが多く、印度人巡補の宿舎、中国難民のトタン屋根も見られ無国籍者も相当生活をしていた。

野鶏の巢はシワタ路にある。すなわち船員目的のエキスパート？がうようよいいた。

外人だつて矢張りアレはある。だからこの野鶏横丁へ現われるや否や

「ハロー、カムヒヤ」

一斉射撃ならぬキンキン声の渦だ。図体の人一倍でつかい印度人へ飛びつく姑娘の恰好は、まるで大樹にセミが止つたようである。その毛だらけの幅の広い口へキッス。これも上海ならではの覗かれない夜景。

「ワン、ハンドレッドO、K」

茶化したように姑娘を抱擁すれば

「ノオー、マイフレンド。ファイブ、ハンドレッド。イエース」

片ことの英語で応待するもどかしさ。彼女たちはキャツキャツの大騒ぎ。部屋の床はベニヤ板。重量の相手が一足二足

「ギシギシ」

胡弓のように鳴る。外人との取引は口先よりも手先で計算する方が早い。性急な姑娘など、一路敵の本陣めがけて殺到する。しかし相手は歴戦待来の強者だ。つまり選手権保持者だろう、一コロになるどころか

「ニヤ、ニヤ」するだけ

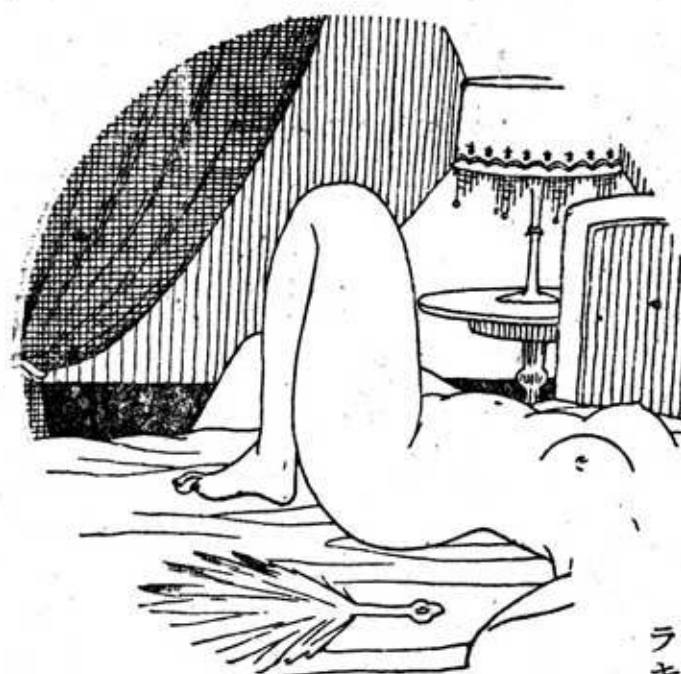
「これで、どう——」

局部を掴まれて

「クツクツ」はじめてホクソ笑む。

「ハロー、何とか云つてよ」

最後の勝利を得んものと、手とり足とりの秘技も空しい気配。姑娘はふつと外人の上衣の裏を見た。そこには野鶏取締のバッジがキラキラ



輝いてるではないか……

チンエシ 静安寺路の女

南京路の大通りから一直線に競馬場へ行く
とグランドシヤター、その先は静安寺路の楊柳地帯だ。ゼスイフィールド公園へ行くにはどうしてもこゝを通過しなければならぬ。その公園へ行く五叉路の角に、パラマウント舞厅が瀟洒な構えで顧客を招いていた。上海のA級ホールだ。舞女(ダンサー)の王洋がナンバーワン。金の椅子を獲得するだけあつて、レットルにしるダンスにしたところで申分はなく、社交術にかけては彼女の右に出るものはなかつた。

問題の頂点はこれではない。それは容貌が李香蘭(山口淑子)そっくりだと云うので大した評判だつた。居留民、無国籍者を問わず彼女を射とめようと、ワンサと押しかけた。そしてホールのバンド近くに陣取り

「ありや本物より背が高く、李香蘭よりシャンドぞ」

とか

「ツルのように舞うところは、天下一品だ。それに気取つた風が見えない」

それから

「まるでシヤモミみたいに愛嬌がある」

いやはや、ニグロのバンドもたじくになる位、噂の花が咲く。ホールは、若いこれらの種族で鼎の湧く有様だつた。札束とアルコの乱舞。狂つた一夜の青春が、フロアを沸らせる。そこに展開されるのは慾と慾の渦巻でなくてはならぬ。

ところが王洋は一時間も踊ると、いつの間にか姿を消すのが常だつた。彼女を追うオスの群は、いつも途中でまかれて了うのである「ナイトクラブで見かけた」

と云う者があるかと思えば、

「ホテルのエレベーターで擦れ違つた。しかも若い第三国人と……」

また側から

「いや王洋は、トルコ風呂にいたぞ」

と、ニュースをばらまく人々で賑つた。どれが真実でどれが虚偽であるかわからなかつたが、それはそれとして、彼女の人気は一層上がるばかりだつた。

日本語、ロシア語、英語を巧みに話した。

舞女には可憐しい女だとの評判も聞かれた。一種の気品があり、それでいて人なつこい顔は得をしていたとも云えよう。だからミーチ

ヤン、ハーチャン族ならぬ真夜中族たちは

「一度は落とせ」

と力み返るのであつたが、飄然とし掴みどころのない女でもあつた。全く神出鬼没。ホールにいるかと思えば三十分後には、自家用車の中だつたり、劇場の貴賓室に、あるいはホテルという早わざである。その場所によつても衣裳異り、夜会服かと思えば洋装、青衣と変装された。

それも彼女のひとりではなく、必ず毛色の変つた男が従いてるといふ噂であつた。

「王洋は高等？サンだ——」

そう云う評判がどこからともなく巷へひろがつた。

ある朝、商社のニュース男と云われた社員が、新聞を片手にあたふたと同僚のいる中へ割り込み、

「おい、これを見る。王洋が……」

新聞を拡げて社会面を指した。それには、

「中共のスパイ団捕縛」

と大題で書かれているばかりでなく

「主魁、王洋のプロファイル」

として、夢だに思わなかつた彼女の写真が掲載されているではないか。

社員一同は、暫く呆然として互の顔を見合すのであつた。

(終)

女性の側に於ける

裸体狂崇に就いて

編集部

我々人間は大なり小なり変態性欲的な傾向を有している。だから、異性の裸体に対して性的興味をそゝられない者があらばその人の神経は鈍磨されていると云わねばならない。異性の裸体に対する狂崇は、通常の人に於ては、尤も有力な性的ロールをスピーレンする。元来裸体であつた人間が衣服を纏うようになつた事を羞恥の結果と云われ

るが、此れは、土人に於ける局

所装飾文身と同じ意義を持つて

いる。併しその衣服も大部分の

人が性的の意義を意識せずして

金力の誇示手段とし秩序上の儀

礼とも見做している。その結果

顔の美醜が一般性の視覧上の目

的である。換言すれば我々は顔

の狂崇を各自持つていたのであ

る。

婦女子に於ても若年の男子に

対する裸体狂崇はあるであろう

併し面白き事には、女子は概し

て同性の裸体には目をそむける

事実である。ストリップの観客

に女性の殆どいないのはよくこ

の事実を物語っている。或る婦

人は「私は裸体美と云われるけ

れども、同性の裸体や裸体画、

写真等は一種の羞恥を覚えて見

る事を好まない」又ある婦人は

「婦人を侮辱するものである」

と答えたが、此の点について

果して、婦人は同性の裸体に対

して如何なる考えを持つてい

か、研究問題であると思う。男

性に於ては、女性に近い要素を

備える同性に対しては。或る程

度の狂崇は存するが、異常者で

ない限り強くはない。

本誌では未婚の処女である二

侯志津子を煩わし、男性の裸体

写真並に女性の裸体写真を各々

十数枚宛贈呈して、次号には女

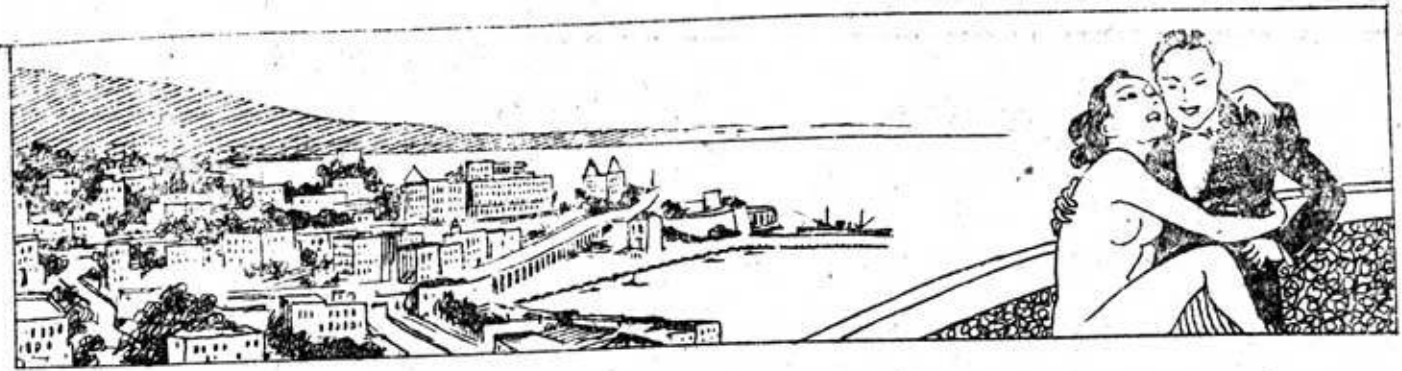
性の側より見た裸体狂崇につい

て、その特有の粘着力のある筆

致によつて、誌上を飾つて頂

きたいと思う。

乞御期待！



自由と夢の國

●モナコ王国●

三 瀬 淑 郎

一、賭博公営
の王国

賭博というと、すぐモナコを思い出す。モナコ、世界の最小國。しかも欧州列強のなかに介在して、その独立國たるの体面を保っている國。最小國で獨立國。そればかりでなくモナコは世界で唯一の賭博公營國である。

モナコは、かくして、反社会性、即ち犯罪行為の賭博を國家が是認した合法行為だとして國營に許しているから、まず欧州諸國のうちでの奇妙な國だともいえよう。

東洋では、印度が最も古い賭博國であつて恐らくは賭博を禁ずる法律は印度が最も古いのであろう。

かように世界國々に行われている賭博が特に日本では更にまつたぐ別箇の發達をなしているが、日本では俗語でよくいう下素のことはであるが下層社會に通じての三道樂といえは「飲む、打つ、買う」という至極簡單にしてしかも要領を得た言葉がある。この道樂三拍子のうちの「打つ」というのは即ち賭博である。

どこの國でも、賭博の行われぬ処はない全世界を通じての共通的反社会性の賭博は正義、即ち「犯罪」という觀念となつて「賭博すべからず」なる御法度が各國に於て設けられているのが現代社會の真相である。

然るに、この現代社會の真相に只一つ例外

として賭博即ち正義の旗印を鮮明にしているモナコが世界人の好奇心と奇異の眼をそゝるのも無理からぬ所以である。

この例外的なウルトラ、モダンの好奇心の目を向けるモナコは風光明媚で南仏特有の海岸の風光を、おしげもなく眺め得る恵まれた國である。

二、南佛の景勝地モンテカルロ

南仏の名港であるマルセイユを午前九時に船出すれば十時半にはこの好奇の國モナコへと到着する。

モナコの山々は薄紫に霞み紺碧の海は小波だになくして油を流した如く、別荘は海岸に面して建てられ欧州諸國の富豪連の遊園地として避寒や避暑に出かける客は甚だ多い。そうして夏はリゲリヤ海の波靜かにして、うららかな太陽の光線を漂わせて涼しく、冬は暖かそうに人の氣を陽氣ならしめる。

世界人はモナコと云う国を思い起せば、またすぐに観楽の町モンテカルロと云う都を連想し得るのである。

一体仏蘭西と伊太利との緩衝地帯として中立王国を建てたのは誰だろうか？

これは英国あたりの指金であらう。昔から小国分立の有様に欧州大陸をしておこるとするのはイギリス伝統の国策である。

モナコ王宮もあり、警官も軍隊も有している。

モナコの首都モンテカルロは南国気分にとどまされた庭園の様な町で花さえ交えて遊人の足をとめ、さわやかな楽の声は樹林を縫うて響いて来る。

天の使の鳩君は羽音も優しく餌をあさっている。与うる豆を撒く人の服装も流行の色は現われている。こうした花園の様な舞台を背景にして国立賭博省は厳然として崖の上に聳えて王城は此の賭博省より眺むれば恰も別邸の様に見える。

三、賭博場の情景

午後五時頃この名高き賭博場へと車を走らせれば入口には守衛が立っている。彼等はここの国の官吏である。そして入場料五法が徴取

される。余りに華美な建築に威圧されてそのあたりに佇んでいると「どうぞ貴方お入りなさい」と玄関子には余りに立派なフランス十八世紀の名残りをした服装の人物に殷勤に右手で彼方へと導かれて行つた。

やがて旅行状をお持ちか、国籍は、職業はと質問されて問われるまゝに答えてその関所を通りぬけた。大広間には七個所の賭博所が許けられ銀行は出張しているし、料理亭もあるし、遊ぶには不便なく一日居ても倦く所を知らない様に設備は行き届いている。

賭博器を中心にして老幼男女の人々は一攫千金を夢みる様な眼をして今しも賭博の最中である。其処にはモナコ王国高等官とでも云いたさうな厳めしい役人が今しも玉を盤上に転がさんとして周囲の人々の金を張るのを待っている。

玉はその役人の指先から勇ましくはじき出されたのである。コロコロと転がった玉はその勢の弱ると共に備えつけられた多数の穴の一つを選んで落ち付いた。そこには数字が書かれてある。

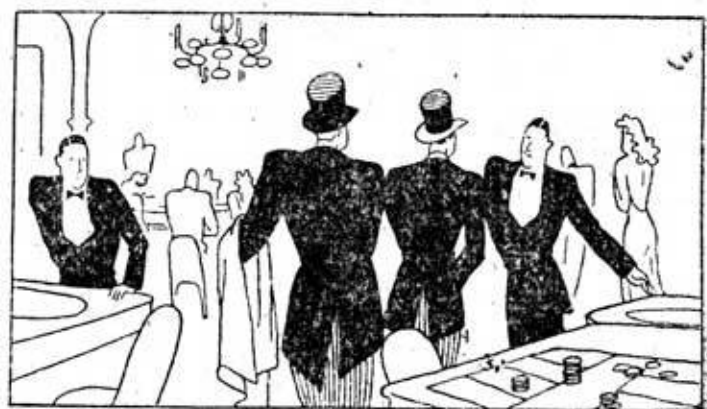
此の数字を予定して賭けたる婆さんは得意気に他の張られた木札を役人の手より受取つた。その器具の簡単なるに比べてその囲める

人々の複雑さは展開されている。

場毎に官吏は四人居つてその内の二人は天玉を転ばしたり円盤を廻したりして当りの数字を表示し、他の二人は賭けてある木札を集めて当りの人に増金を払う職務を持つている

木札の張り場には零から三十六迄の数字番号を表わし客は思い／＼にその中の番号を撰択して木札を張る。すると中央の官吏が円盤を左転すれば外円盤は右転せしめ天玉は外円盤に列んである零から三十六行の数字の孰れかの所に入りて止まるのでその天玉の止まつた数字番号が当り番である。当りの人には三十六倍を増加して返す。

その外この数字を応用して丁半の賭けもあるし十二以上だとか二十五六以上であるとか種々賭け事をしてるので一場所に三四十人位宛集まつて争つて居るが少しの間違いも起らずにやつている。



四、集る欲張り連

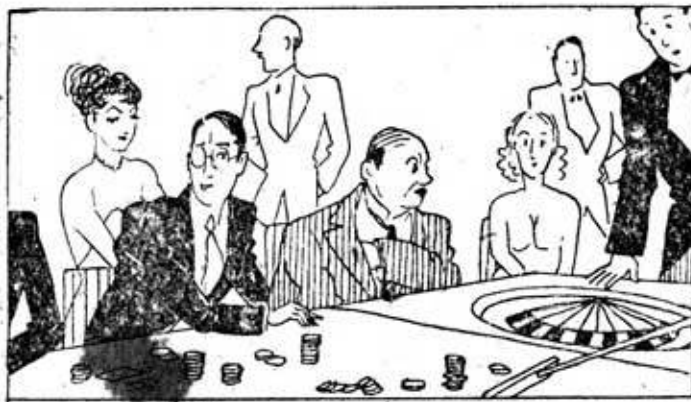
辛苦の名残であり亡夫の遺産に生活せる未亡人さては若やいだ乙女は父の残せる資産がそれとも紳士の額に汗して得たるアメリカの金か、または不労所得にて生活せる巴里人が張られた札は四隅の国立銀行出張所で現金に代えられ、または札が売りさばかれている客の多くは財布を空にして断念して帰つていく。勝つて帰る人は至つて少ない様であるがその幸運者はその場から売春婦を連つて行く。婦人客の多いのは驚くばかりでこんな射倖心は婦人の方が強い様である。

なかには老婦人等はこれを娯楽として居る者もあり、中には事業に失敗した為、この賭博場で乾坤一擲の壮挙を行い運命の消長を天玉に委す人もある。

五、地下室の淫樂

賭博の勝負に心身を勞らした彼等は既に資本主義心理の持主であるから一月の事業慾に疲れた心身を医する所を求めて止まない。それは取りも直さず赤い地下室である。

白や青の色彩では彼等の眼を到底刺戟し得るものではない。赤い電燈に、赤い酒、しか



も強烈な刹那の快樂を慾求する彼等は此の赤い色にひたりつゝ濃厚化粧した女を要求せずにおかない。資本主義の変態心理は性慾の変態心理化を慾求してくる。こうして徹宵美人を抱いて踊り赤い酒にひたり赤い燈火に囲まれ果ては赤い美人を抱く彼等の心理は徹頭徹尾変態心理の権化である。

之等の中には、アメリカから来た弗の旦那で紐育から毎週一回モナコ直航に来る汽船を見ればその船室の如何に華麗であるかに驚かされるのである。

彼等は金儲の天才であつて額に汗する現代社会の実相に飽きたらず丁と張つて半と出る

賭博に自己の黄金慾とを満足させんとする連中である従つて彼等の周囲には何時もキラビヤカナ美人がつきまとつてゐる事は言うに及ばない又、キラビヤカナ美人は何処の世界に於ても交りはないが、笑を売



肉を売る彼女等はその賭博場に徘徊するのみならずモンテカルロの市内にも徘徊している。そして何れも賭博者の帰りを待ち受けている。

かつて伊太利のミラン市で華美そのものの様な葬式に出遭つた時、人の話を聞けばそのの当主人公はモナコ王国の首都、賭博の都モンテカルロで失敗して自殺したとの事であつた。

こうした悲劇は月に一人や二人はあるらしく全く娯楽から生れる悲慘事と言わねばならない。

然し南仏の暖かな別荘国として豆粒程の王国モナコは又、一面には自由の安樂境であり世界の所謂極楽浄土として称えらるゝも亦無理からぬ所以である。

(終)

夫婦仲のよいものを鴛鴦にたとえる。この一篇は美しくも悲しき鴛鴦の契りの伝説である。

伊勢、伊賀に非常に狩の好きな領主があつた。彼が邸を一步踏み出す時には、どんな時であつても愛用の白い半弓を片手にしない事はなかつた。初めて、その領主が江戸へ赴く時だつた。通りかゝつたのが、尾張の国の下之郷と呼ぶ部落である。部落を貫流する川には鴛鴦が群れていた。

「領主の食指が動くだろう」と家臣下が思つていると、領主は果して駒を留めた。引絞られたのが、愛用の白い半弓である、この突然の攪乱者に、春風は破られて鴛鴦は一心に逃げ出したが、不幸にして遂に一羽は領主の犠牲に挙げられてしまつた。

薄幸の雄一羽はかくして領主の膳部を賑わしたのだ。

夜は更けた。一寝入りした領主

が眼ざめて厠に立つたが、意をなやめると、彼女の姿は掻消すから戸外を眺めると闇の中に女の影がふらふらと歩いてゆく。「怪しき者」と思つて、領主は密かに雨戸を開けて跡をつけると、江戸から帰国の日が来た。領主

性の伝説



鴛鴦 おしどり

山本華情

れを抱えると、彼女の姿は掻消すように消えた。はつとして領主が気がつく、それは夢だつた。

○

「見事な鴛鴦だ」領主はにつこりとして獲物を手にした。と彼の眸は異様に輝いた。何物を発見したのだろう。その顔までも変つたのである。

——おしどりのふくよかな翼の下には、冷たい雄の首が抱えられていたのだ。しかも自ら血に染りながらも固く離そうとはしないのだ。元よりそのおしどりは雌である。

領主の頭には始めて過ぐる夜の奇怪な夢が強く描かれた。彼の眼に淡く涙がにじんだ。愛の如何に強く尊く悲しきかを知つたのである。直ぐに亡骸を埋めて一寺を建て、愛用の白い半弓を納めて、白弓山鴛鴦寺と名附けた。

今もその地には白弓橋と呼ぶさやかな橋が昔の物語を伝えてい

それと気付かぬ女の影は流れるようにその旅舎の台所に廻つて芥箱から何物をか求めているのだ。瞬間彼女が掴み出したのは、夕方料理して捨てた鴛鴦の首なのだ。それ

一、禁慾の変態性

セント
聖マグリナ・ド・ポツツイはその性的衝動を消亡するために、棘の叢にころげまわつて五体を自らの流血に浸したといふ、カトリ

ックの或る聖人は樽に充たされた冷水に自らの身体を漬けて、その情火をおさめたと伝えられ、聖アンジェラ・ド・フェルギニオは割石の上に裸体を押しつけて、燃え上る情慾の炎を、その痛苦で瞞着しようとしたという。

バラモン僧の苦行は既に広く知られる所である。この様な宗教的な志向に出發する禁慾の諸行が、結局、落ちてゆく所は、マゾヒズムスかサジズムスか、とにかくその様な変態であることは間違いない。それは丁度、禁慾の反対の極へと徹する「過淫」の行方が、やはり同様の變態であると同様に。

二、殘虐の

恍惚境

近代の心理学者は、「祈り」の如き信仰の極致を示す「接吻」の心境が性的昂奮の頂点を示す所謂エクスタシーの感境と、実験心理学的

条件に於て全く完全なる一致を現すことを報告する。それは窮極において、我々を或る一つの心境、唯一つの或る感覚の世界へ逐い込んでしまふものでらしい。

我々は無限に亢奮する窮極の境地においては——それは遂に、亢奮からの「死」にまでつながる——そこに只一つの無上恍惚の世界 Ekstasia の境地を一樣に把握する。

例えば「怒」や「憎」といふ様な感情形態の契機に於いてさえ、尙且つ我々は此の恍惚の世界へ奔到し、そして其処に沈潜し、陶醉することが出来よう。それを機縁としてその感情に伴う感覚の極致をこの様な Ekstasia に迄導くことも出来るのである。

サジストに於て性慾が加虐にその転機を見出す如く、マゾヒストに於ては被虐による痛苦にそれを見出す。そこでは痛苦の感覚が止揚せられて、たとえば Anaesthesia の如き虚脱の状態から、更にそれが昇華されて感覚の世界へと展開して、そこに無上恍惚の状態を現出するに至る。

この転機は、それが到達するところの窮極の境地は「たつた」一つであるにも拘らず、方便的な契機として多種多様あり得るのである。「戒律」によつて強要せらるゝ禁慾の結果は



極めて巧みに、容易に「性交の形式を取らない遂情」の契機をつかむ。「加虐」によつて「被虐」によつて、或は「偏狭な性格」への固着によつて、乃至は、途法もない「猜疑」の性格に固執することによつて、「嫉妬」によつて、その外、何らかの行為にその形貌を変じて、そこに性慾の下水路をつくる。

棘叢にころげ回つて血みどろとなり、或は割石に肌を押しつけたたり、そうする事自体に於て、その性慾を充足し、彼等は「禁欲」を破りつゝある。しかも彼等は自らそれを知らないのである。

三、無意識的自瀆

函館のトラピスト修道院を見学した者は、修道尼が朝に夕に「祈禱式礼」の五体動作によつて如何に激しく「体験駆逐」の形態をとりつゝ、しかも、それによつて変つた方法の Onanie を無意識に行いつゝあるかに気付いて驚くであらう。そしてその「祈禱動作」なるものが如何に Coitus の態位を髣髴するかを感嘆するであらう。NormalなCoitusによる遂情と果して何処に相違が見出せるであらうか。

舞踊の定源も性交態位にその身振を模倣したものであるという。単なる模倣に止まらずその行為そのものの、即ち舞踊それ自体が又一種の性的行為であり「遂情」なのである。「性交態位に擬して踊る」——踊つて踊つて忘我のエクスタシーに入る。それが又、一つの性行為それ自体なのである。

アメリカ流行の Drive が、その素晴らしい Speed や motion が若い男女の性的慾望に密接深刻な関係があることはスバルウインの「エロを解剖する」という論文にて明らかにされている。これと同様に幼少女、特に破爪期に近ずいた若い女が一般にブランコの動揺、自動車、自転車の動揺にその快美感の報著を示すのも又一種の潜在したる Appetit (慾望) の現れと云えるであらう。

Drive や Dance に依つて受ける快美の感覺、それが無上恍惚の情に徹するところ、それは又、釈尊の禪定三昧の境につながる。肉慾を絶して、觀照直觀の世界に入る。この様な止觀の境地は、感覺・感情の極致を示さずして、それとは別な、理智——思惟——判断の窮極に展げるかの如くにのみ、何故考えねばならぬのであるか。そこでは「肉慾」は阻外されない。むしろ文字通りに「止揚」され

ねばならぬのではないか。阻害せずしてそれが止揚せらるゝところにのみ、始めて、そのような三昧の境地がひらけるのではなからうか。そのような感覺感情の無限に亢奮したる極致にひらける世界も、理智——判断の極致に達した境地も、結局はたゞ一つの境地に於て冥会するのである。

四、遂情の下水路

このように考えてくると、宗教的な意味での「禁慾」なるものは、結局「肉慾を阻絶する」という最初の目的が鮮やかに、——人間の本能的な衝動——能作によつて Spoil されていることを悟るであらう。あらゆる苦行は結局、かくして彼等が「遂情」のための極めて変つた風の一つの形式であり、方便であると見ることが出来る。

禁欲によつて陥る「残虐」への受動的な或は能動的な執著も、つまりは、それによつて禁欲を破つていふことを知る事が出来る。その様な残虐な痛苦による遂情形式の一つの例を示すものにロシアを中心とした旧教の一派に「鞭撻宗」というのがあつた。

それは最初、懺悔贖罪のための宗教的な方

便であり、式礼として行われたものであるが次第に鞭打たれることによつて、鞭うたれる間に於て、彼等はその痛苦を通して「神」に接する。そこに限りなき「神の愛」の救いの世界が展開しかくして彼等は法悦の亢奮の中にのたうちまわるのである。まさに有頂天の至境である。

僧院の訓練

或る僧侶の驚くべくニセの信仰
美しい女たちの優しい刑罰



そこに於て見出した「遂情の下水路」は被虐と加虐の二つの形式に当然分化したであらうが、その様な「傷害」によつて受ける痛苦或は痛苦を与えることによつて感ずるサジismus——その事自体の中に「法悦」を体得したのである。従つて、このような「傷害への憧憬」——執著がその傷害の手段を多種な形式に複雑化することは極めて当然な帰結でなければならぬ。

かくしてそれは、単なる傷害から、犠牲祭祀への要求にすゝみ、去勢に次いで、殺児、成人殺害、自殺、集団自殺という甚しい方法に迄逆上するに至つたのである。

五、血と肉の聖餐

鞭撻宗に入信の信者は最初に於て「去勢」を施される。睪丸の去出、或は陰莖迄も截切された。施術はそれを専務とする熟練の者があり、場合によつては熟達な老婆によつてなされることもあつた。截刀は極めて粗末なもので、せいぜい剃刀が用いられる程度に過ぎ

ず小刀や、ブリキ鋏、大斧等も使われる。

惑溺したる篤信者にあつては、自ら傷害を加える者もあり、そのような場合、時に、痛苦を激しく長くするため、ことさらガラス片のような鈍器を以てすることもあつたという。帝政ロシアの官憲は、嚴罰を以て彼等に臨み、これが絶滅に努めたけれど、生命にかけての彼等の宣教は、恐ろしい勢で国内の諸々市の信者を集め、遂には国境を越えて、ルーマニヤ、ギリシヤあたりにまで、その信仰をひろめたのであつた。

去勢は初め禁欲の動機に基づく一つの方便として施術され、宗儀となつたものであるが破傷そのこと自体が、唯一の目的となり、唯一の方便となり、そこにのみ、宗教的至境への唯一の道を見出し、体得するに至つては、そのような残酷な加虐や被虐に伴う法悦的快感への限りなき憧憬は、単に、去勢によつてのみでは満足出来なくなり、更にそれに附随した「血と肉の聖餐」なる惨鼻な儀式をまで着用するに至つた。

彼等に入信の際に去勢したところのものを神の羹として皿に盛り、祭儀に集る信徒のすべてが、各自にその味を味わい、破瓜期の婦女を集めてこれを××とし、血に飢えた悪

鬼のように狂燥乱舞するのである。このような残虐による法悦享樂のための祭儀は深夜に始まり、夜を徹して曉明に及ぶのである。

更に信者の女が生んだ児は、彼等にとつて「神の賜」であると考えられた。従つて、それは彼等の罪を贖うものと信ぜられ、聖なる感激の間に、無残にも殺害される。生きるゝ後八日、その幼児は彼等の聖餐に供せられねばならない。そして、その温かい血が、彼等を潔斎し、肉は彼等に「復活」を与え、という極めて真面目な信仰に於て、実は自ら享樂したのである。

この様にして、禁欲の動機を持つ単なる去勢から、傷害へ、殺兒殺人へと、その宗教的な亢奮をいよく、加虐症的な残虐の衝動と行動との上に、だん／＼と展開し、拡充していつた一方、被虐症的に自殺の中に無上の亢奮を充足する者が出ずるに至り、更に進んで行動、彼等が昂奮への最後の至上法悦の手段を把握するところ迄逆上するに至つた。

死は、彼等をその瞬間に於いて、極楽、有頂天のエクスタシーに引きずり上げ、かくして彼等は、その門を通つて、常住無限の快美の世界——天国愉悦の至境に永久に入ることが出来ると信じたのである。

此のような「惑溺」が単なる判断の世界のみで考えられ、行動せられるとは解すること出来ない。この行動の根柢には強い一つの

衝動が激しい情熱で動いていることを感ぜずには居れないであらう。この衝動は彼等の Appetit と果して、没関係であらうか。

【読者通信】

拝啓、新緑の候と相成り、貴社益々御繁榮の御事、同慶至極に存じます。肌こそよ風

ろうと思つて下さる方がございますれば、御世話願ひましたと存じます。私は縛られず。体験記に出てくる様な私の対象になる方をお願い致します。

(兵庫県 三村幾男)

夢見る様な桜の若葉、夜毎の夢に貴社発行の奇譚クラブを愛読致して、楽しき日々を過

◎編集部より——本号には三村幾男氏より送られました。

しております。突然とは存じますが、奇譚クラブ十一月号、十二月号、三月号を拝読いたしました。今迄にない喜びを感じ、筆不精の私が、私の体験記を思い出すまゝ、何ら飾らずに書いてみました。ち

「夢性の美少年」(一色慾異常青年の告白)二十数枚を掲載いたしました。尙同氏に対する通信は編集部にて御取次致します。

×

最近各地に於て大分の女が、讀者の方の中で私と同じくはぐで乱筆の点恐れいりま

の責めについて関心を持たれてゐるようですが、責められ様で頂ければ幸甚に存じます。研究並に文献、写真、画等の蒐集に興味を持つておられる

(田村 吟生)

×

何の前ぶれもなしに六月号をお送り下さいましたので雑誌の大きさが今迄と変つていましたので驚きました。断然この方がいゝと思ひました。内容も素晴らしい。次号の発展を期待します。

觀々堂手柄話之内

張^{はり}形^{かた}の謎^{なぞ}



張り形で後家死にますと

よがり出し

「相変らずの色ッぽい話で、独り者の先生にや申訳ねえが、この川柳をどう思いますか？」

「野暮な事を訊ねたものじやな。どう思うと云われても返事に困るが、そのう……つまり、いゝものはいゝに違いあるまいて——」
「ハッヘヘ……」



今 緑 猛比古
幾久 造画

「厭な笑い方をするじやないか——」

「ところが大変な事になつちまつた。死にますと云つたかどうかはしらねえが、相手のねえ張り形でよがり死にしていたとなると、こりや唯事じやねえ——」

「さてはよすぎたかな——」

「チエツ、冗談じやねえ。先生も御存知の米問屋、白銀町鳴門屋のお喜江さんが、独り寝の闇の中で、張り形をこう片手にギュツ——と握りしめて、こときれていたんで……」

「フーム」

「でしよう。何しろ廿七と云や男が欲しくて耐らねえ年頃だが、随分と堅いで通つた評判の後家だ。器量は娘時代、白銀小町と云われ

た程の上出来で、今が脂の乗り切つた女盛り。虫がつかねえのが不思議な位だと、一方ならず心配えしていた連中もあつたが、まきか張り形で成仏しようとは、こりやお釈迦さんでも御存知なかつたでげしよう。——」

「まあ、そう乗り出しなさんな。行燈が倒れるじやないか。大それた力癌の入れ様だが、さては源六旦那思召してもあつたかな」「すぐにそれだ。まあ茶化さずに聞いておくなせえ——」

斯う云つてお馴染の岡ツ引、せつかちの源六、通称かち源が、浅草観音様境内にとぐろを巻く、八卦占いの観々堂先生相手に語り出したのは、五月晴れの空に群れ飛ぶ鳩の姿も、何となくのどかな屋下りの事です。

剣繩をとらぬ手に天眼鏡を握つて、ピタリと図星を指す先生の推理眼に、敬服措く能わざる源六、事ある度に先づ先生に伺いを立てるのです。先生は源六の智恵袋でもあり、且つはよき相談相手遊も仲間でもありました。道草沢山の源六の話を要訳すると

事件は昨日の朝の事——

「御免下さりませ。あのう源六親分様の御宅はこちらでういまいしよるか?——」

聞き馴れぬ女の声と共に、トン／＼と表を叩く音に、源六睨を覚えぬ春眠を覚されて、

「おう、源六ならわつしだが、用事があるなら構うこつたねえ。ズイと通りなせえ。蛆のわく独り世帯で随分とちらかつているがね」「それでは御免下さい——」

たてつけの悪い格子をガタ／＼と漸くにして開けると、オゾ／＼と這入つて来たのは、これが正に吐溜に鶴の、全くもつて素晴らし

くも美しい娘でした。年の頃は二八過ぎでもありましようか。抜群の容色とその楚々たる姿に柏餅のあんこの様に丸くなつていた源六一目見るなり、如何にも眼の覚める美しさに、霞んだ頭もシャッキリと、半ば茫然と座り直したのも、フェミニストの彼にとつて、如何にも無理からぬ次第でした。すつかり上り気味乍らも流石職掌柄事件の匂いを彼女の身辺から敏速に嗅ぎとります。

「お、お嬢さん。一体どうなさいましたので」

「ハイ、実は親分様を見込んで御願ひに上りました。私は白銀町鳴門屋の女主人お喜江の妹で、お加乃と申す者でういますが、丁度今朝の事でういます。何時もは朝の早い姉が、その日に限つて未だ起きては参りませぬ。不審に思ひまして、起しに参りました処、奥の八畳の間の寢床の上で、姉が……姉が……」

「お喜江さんがどうなさつたと云うので?」

「ハ、ハイ。夜具の掛布団をはねのけ、枕は飛んで、あられもなく裾を乱し、ふくらはぎの上迄も露わに、虚空を掴んでことごといていたのでういます。姉さんが配偶に一昨年死に別れてからと云うもの色々再縁のお話もういましたが、二度と悲しい眼を見るのは嫌な事と申しまして、鳴門屋の世帯を女手乍ら一人で背負つて、日頃浮いた噂一つなかつただけに、一瞬物盗りの仕業?と思ひまして。辺りを見廻しましたが、何時もの通り整然としておりまして、何も盗られた模様もなく、戸閉りも何の異常もういません。」

氣も転倒せん許りに姉の処へかけより、抱き起して見たのでういます。既に冷たく変り果てた姿となつておりました。フト、その時私は、姉の右手に確つかと握られた異様なものに、氣附いたのでういます」

「へエ？何が握られて居ましたので……」

「ハイ、それがあのう……」

お加乃は何故か、パツと頬を紅葉に染めると、もじく消えも入りたげに差しうつむいて云い澀んで終いました。

「恥かしがることあねえ、お嬢さん、こゝは貴女とわつしの二人ッ切りだ——。聞かれて恥かしい事なら、随分と秘密は守ろうし、こゝろ見えたつて口は……」

堅い方だと云いたかつたのでしうが、流石自信がないのか、そこ迄は云わず、源六は湧き上る好奇心にぐびりと唾を呑み込むと、お加乃の次の言葉を待ち受けるのでした。

「ハ、ハイ。実は姉の手に、こんなものが確つかりと握りしめられておりましたので……」

ためらい勝ちにも一気に云い切つたお加乃が、そつと袂からとり出したものは、一眼でそれと分る張形でした。おぼこ娘にもこれが如何なる使用に供せられるかは薄々知つていたらしく羞恥に染つた頬や、くねる身のこなしが、生娘だけに云い様もなく魅惑的であつたのです。

「へえ、そいつは京姿じゃありませんかい」

「……らしゅうムいます」

「なんとねえ、あの堅いで通つたお喜江さんが京姿を握つていたとはねえ。勿論こいつは、後家としちや無理もねえ次第だが。いや、どうも——」

と、流石源六も、初々しいお加乃の手にそつと握られているものがものだけに、眼を白黒させて、一寸二の句もつげません。

女性専用の性具として、小間物屋、四ツ目屋で秘かに売られてい

た張形は、一名、京姿、又は男姿オスガタ（雌形に通ず）とも云い、空闊を

かこつ御殿女中、後家、比丘尼を始め、婚期を逸した老嬢や、早熟な蓮葉娘の間では、隠然と愛用されていたのです。安永当時の淫蕩な世相は、こうした性具も半ば公然と売れ、奇を競い、金にあかせてはいろくこれに粹を凝らし、ベツ甲細工や象牙等で造り上げ中には温湯を入れる仕掛や、美麗な打紐をつけて足にはめる様なもの迄あつて、様々に粧いを競いました。特に人形の形につくつたものは見た眼も愛らしく、賞翫され、今に到るも、こけし人形としてその残形を留めて、専ら女性に愛翫されている事は、既に御存知の筈です。お加乃が羞恥に燃え乍ら、源六に差し出したものは、優雅な薫香すらたき込めたベツ甲細工の、可成り太目のものでした。

この一物が、予ねて貞淑の噂も高い、お喜江の愛液を、夜毎吸い取つた果報者かと、生のない造型物にもかゝらず、仄かな嫉み心を感じつゝ、源六は面を伏せるお加乃の前で、ためつすかしつ、しげく魅入るのでした。

「で——、お喜江さんの死因について、何か心当りでもありますんで……」

「それが一向に——。噯かし姉さんも心の中では心細く、淋しく思つていた事でうまいしうが、鳴門屋を気心の知れぬ男の為、かき廻されたくないばかりに、再縁の話も振切りまして、我慢して参つたのでういます。姉さんの男の相手と申せば、長らく中風で寝付いて父の喜左エ門は別として、奉公人の番頭と、手代二人それに丁稚だけで、何れも古くから、又気心の知れた者達許りでういます。外は私と下働らきのお仲とだけの世帯でういます」

「成程——、ところでお喜江さんは、何か心にわだかまりでもあつ

て、その為世をはかなんで死んだと云う様な事は考えられねえんで？」

「世をはかなんだ者が、あの様な恥かしいものを握つて死ぬでしよるか——」

「ウーン、なる……」

「それに姉さんは、昨日も、私と良七の祝言につきましてそろそろ日取りを定め様と申しておりました位でムいますもの……」

「して、その良七さんと仰有るのは——」

「はい、私方の手代でムいますが、義兄さんが私方へ婿入りされました折、里親の桔梗屋さんから一緒に参りました。義兄さんの身寄りだそうでムいまして、行くくは私と——」

「祝言するつてわけで——」

お加代はボーツと襟筋を染めてさしうつむきました。やがて近附く祝言だつただけに、突然の姉の死は一入手痛い打撃だつたに違ひありません。

「如何でムいましょう。堅いで通つた姉さんが、こうしたものを握つて死んでいたとなると、世間の噂も厭なものになるに違ひムいませぬ。親分様の御計らいで、秘かに調べては頂けませんでしよるかしら——」

こう云つて、お加代は清い涙の糸を隠そうともせず、痛ましくも源六に、そつと兩の手を合せるのでした。

「つてなわけで、先生——。頼まれりや厭と云えねえ損な性分、まして美しい娘の頼みとあれば見過すわけにもゆかねえ——。其の場から宙を切つて二挺驚籠で、お加代さんと飛んだと思いなせえ——」フエミニストの源六にとつて、美しい娘の手を合せての頼みには、

最早一も二もなかつたのです。



役得て素股を覗くいやな奴

「つて図で、どうも見られたもんじやねえが、死因が死因だけに、御役目柄どうも仕方がねえ。張形を握つての往生だけに、一応奥の院を調べるのは理の当然で……」

「道理で涎の跡がついてる——」

「からかつちやいかねえよ。すぐそれだから先生にやどうも話がし難しくつて仕様がねえ。兎も角案内された八畳の間——、流石女独りの暮しとは云え、何となく仇つばい部屋で、仏は掛布団を被つた儘で未だ誰も触つちやいなかつたは勿怪の幸い。何れ御検死もあるだろうが、一応仏を拝ませて貰つた。いやどうもそれが眼の毒で、陶器の様ななめらかな色白のボツテリとした肉附の胸がはだけて、子を孕まぬ茶碗を伏せた様な乳房が覗けている。蒼白く冴えた端麗な顔がキツト苦悶に歪んで、いや何とも勿体ねえ様な死に振りだ」

「勿体ない死に振りなんて云うと、罰が当るよ。大分鼻の下が長くなつたのじやないかな——」

「まぜつかえしちやいけねえや。体を改めたが、絞めたのでも、突いたものでもねえ。キュツと締つた玉虫色の唇をこじあけて見たが毒物の模様もねえ。」

「お加代さん、気の毒だが御覽の通り、改めるところはあと一個所だ。一応調べさせて貰いますぜ」とあつしは傍の涙に掻き暮れたお

加乃さんに声をかけた。

「——仕方ありません。どうぞ御調べ下さい——」

袂で顔を蔽つての、きれぐれの返事に、

むつちりとした兩股を開いて覗いて見た——

「よく眼がつぶれなかつたねえ——」

「まつたく——。ところがサア大変、先生、どうなつていたと思ひやす——」

「挟られて、肝心のものがなくなつていたとでも云うのかな——」

「当らねえ。パクツと開いた個所を中心に、辺り一面暗紫色に醜く腫れ上つて、目の子算でも、優に普通の女の三倍位れえの大きさにはなつていたんで——。怖ろしい猛毒がこゝから侵入して行つたに違えねえ、とすると、お喜江さんが秘かに使つた張形が一番くさくなる——」

「へえ、それ迄は臭くなかつたので——」

「そりや臭いとは思つたが……、どうも言葉が変だネ。要するに問題は張形だ。きつと何かの猛毒が張形の先に塗り付けられてあつたに違えねえ。張形の秘密は守りてえが、こうなりや、これの出所を探らなきやお話にならねえ。」

「で、旦那の下手人の見当は——」

「そのものズバリ、これを売つた張形屋、つまり、小間物屋か四ッ目屋の仕業に相違ねえ」

「なら、今迄使つていて、死ななかつたのが可怪しいじやないか——」

「成程ねえ。けれど。本人の口からでも聞かねえ限り、今迄使つたと云う証拠がない。ひよつとするとその夜始めて使つたのかも知れない——」

「で、死んだ刻限は？」

「死後の硬直状態から見て、お喜江が己れの部屋に通つた成の上刻後、間もなく人の寝静まる頃を見計つて使つたものと考えられる。恐らくそれから間もなく彼女の苦悶は始まつた事だろう。何しろ行為が行為だけに人も呼び兼ねるうち、苦しみは勝つてくる。腫れ上つた例の個所の辺りに幾つとなく、するどい爪の掻きむしり傷がついていた——。次第に廻り来る毒に、お喜江はさぞやのたうち廻つた事だろう——」

「仲々立派な推理だよ。で、家人を一応取調べたかな……」



「そいつはねえ。その結果、どうやら下手人を見つけ出した——」

「なら四ツ目屋を疑う事もなかつたじゃないか——」

「あつしの推理の筋を追つたんだ。でないといきなり下手人を飛び出させちや、面白くもねえじゃないか——」

話の順序として、先づ……」

この家の隠居喜左エ門は永患いの中風で寝ついた儘、足腰の立たぬ病人で、離れの間から一步も外へ出ず、下働らきのお仲がその一切の世話をしておりました。

番頭の善兵衛は実直な、子飼からの番頭で、店が仕舞うと、女房子供の待つ自宅へとサツサと引揚げてしまします。

手代の良七、文七は納戸横の四畳半で枕を並べており、丁稚の新吉は店の間で寝ております。

その店の間には、行々お加乃の聲になる良七が、急を聞いて悔みに駆けつけた、親戚や懇意の人々に、神妙に応待しておりました。月代のそりあとも青々しい、苦味足つた容貌は、お加乃にふさわしい似合いの男振りです。

源六の姿を認めるなり、逸早く小腰をかゞめると、

「御苦労さまで親分——。一刻も早く、憎い下手人を探し出して戴けます様、私からも御願ひ申し上げます。」

と、興奮した面に真実を漲らせて頭を下げるのでした。

「何かこれと云つて心当りでも——」

「それが一向に——、何しろあのお方は人様から恨まれる様な筋合はこれッぽつちもふいませんし、日頃堅いで通つておりましただけ



に、あゝした人にも云えぬ死に方をなされ様とは、思いも寄らぬ事でふいました……」

「で、朋輩の文七は昨夜どうしていた」

「ハイ文七どんはお店が閉まうと、頭痛がすると申して、私より先に床に入りまして、私が跡片附を済ませて部屋へ戻つてまいりました時は、頭から布団を蔽つてよく寝ておりました。」

「夜中にでも起きた様子は——」

「夢うつゝで判つきりと存じませんが、何か下へでも一度出掛けた様で——」

その外、色々聞き訊して見ましたが、これと云つて手掛りになる様な話ありません。当の文七は、丁稚の新吉を指図して、家内の片附けにそゝくさと立働らいておりました。文七を呼び止めて前夜の模様を問いましたが、良七の言葉を裏書する様に、彼はその夜気分が悪くて早寝しております。

「夜中に一度不浄へ立つたと云う事だが——」

「ハイ、確か子の刻過、一度不浄に参りました——」

「確かに子の刻過に違いあるまいな——」

「ええ、それはもう……。子の刻限を知らせる鐘の音に、フト尿意を覚えて出掛けたのでいますから……」

子の刻限（午前零時）に彼が後架へ立つたとすれば、既にその頃お喜江は死んでいた筈です。

「その時、お喜江さんの部屋の模様は？」

「私を知る筈がいません。後架へは廊下続きになつてはおりますが、夜更けの事。足音を忍ばせて静かに御新造様の部屋の前を通り用を済ましてその儘戻つたのでいます……まさか親分は……」

「何も怪しいとは云つちやいねえが、何かしようと思えば機会はあつたに違えねえ」

「それじや夜中におちくと後架へも行けません。それに良七どんも一緒に寝ている事でいますし——、まして私は、何も御新造様があの様な張形を使つて……」

「何——、張形だと。どうしてお前、それを知つていた——」

「アッ——」

「この事は、妹のお加乃さんより以外に知つてゐる訳がねえ——。それをどうして手前が知つてゐる？」

「あッ、それは……あのう……」

さつと顔色を変えた文七は、いきなりバタ／＼逃れ様とするのを猿びを掴んで引戻すと、源六の手許からスル／＼と捕縄が延びて、彼の体にキリ／＼と絡んで行きました。



獨り者毒な新造の京姿

「とでも云うところで——。文七の奴、チョイト番所へ引つ立て、痛めつけたら、遂に泥を吐いちゃいましたよ。なんでも或る夜、後架へ立つてその往き復り、フトお喜江さんの部屋から、耐え入る様な押し殺した呻き声が洩れてきたので、不審に思つてそつと障子の張紙の穴をあけ。覗いて見ると、御新造が、今や張形と取組んでの真最中で——見ているうちに文七奴、無精にコーフンして来た。こいつは文七ならずともコーフンする奴だが……。厩は虫も殺さぬ貞淑女の御新造であるだけに、女体の微妙な秘密を覗き見て事の意外に驚き乍ら、それからと云うもの、夜毎寝静まつてから後架へ行くのが愉しみになつたとは厭な野郎で——」

「道理で刻限が確かだつたわけだな——」

「左様で——、だが相手は何と言つても女主人、図太い奴ならそれをタネに何とかするところだが、文七奴、案外気が弱いのか、又云い寄る機会もなかつたのか、唯秘かに、この盗視に、人知れぬ悦楽を味わつては、五人組の厄介になつて自己満足してゐたわけだ」

「で、文七が下手人とでも云うのかな——」

「そうと思えねえ、早速奴の持ち物を、すつかり調べて見ました処、行李の中の、衣類の合間からこんなものが出て来ましたので——」

袂を探つて源六が取り出したものは小さな紙包でした。先生は黙

つて受とると、包を開きます。中から現われたものは黒っぽい、鹿の糞程の煉薬様のものでした。

「先生——、こいつは毒薬じゃねえんですかい——」

「正にその通りじゃ。オランダから渡つて来た秘薬で、何でも異国でこれを矢先に塗りつけて、相手を一刺しにするとか聞いておるほんの僅かでも体内に入れば、忽ちその傷口が暗紫色に変じて須臾にして死んでしまうところから、恐ろしい猛毒じゃよ」

「だから、こんな物騒なものを隠していやがる奴は、こりやてつきり下手人に違いあるめえと思ひやすので——」

「待て——、若し文七が之を使つたのなら、まさかその儘、調べられそな行李の中なんか隠しておく訳がない——」

「と云つて——」

「又、かりに文七が御新造を殺したとして、その原因を取調べて見たか——」

「原因なんて叩けば泥を吐くに違えねえ。そいつを、これから一絞り、しぼつてやるつもりです。いえね、先生、必ず口を割りまさあ」

「いや、いかな。どうもワシは暴力は嫌いじゃで——。チョット訊ねたい事もあるが、旦那、出掛けても差支えないかな——」

「差支えどころの騒ぎじゃねえ。そうなりや全く、願つたり叶つたりで——。じゃ早速案内しやしよう——」

物好きな観々堂先生、すつかり源六の話術に魅き込まれて、観音様境内の其の場から、商売道具を包み込んだ汚れ風呂敷一つぶら下げて、飄々と白銀町の自身番へと乗り込みました。

薄暗い片隅に、打ちのめされて文七は、ぐつたりと柱に繋がれて

おります。髪が乱れ、衣類のところ／＼破けているのは、相当の析檻を受けた証拠でしょう。

「ホホウ、大分手厳しくやつた様だな。これ文七さんとやら、お見掛け通りの八卦見で、決して目明し、捕手ではないからなそのつもりでな。で、チト訊ねたいが、あの夜、後架へ行つた折も、勿論御新造の間を覗いた事じやろうな」

「ハ、ハイ。申訳ありません……覗きました」

文七は、羞恥と恐怖に打ちひしがれた、可細い声で、頭も上げず鳴門屋に勤めて足掛五年、見かけはお店者らしい弱々しさですが、米問屋の手代だけに、裸にすれば、案外ガツリした骨組をしており、それで、容貌も十人並の決して醜男ではありません。

「よし——、覗いたら覗いたでもよろし。ところで御新造はその時どうであつた？——、まさか実演中ではなつたであらうかな——」

「ハイ仰せの通り、変に仰向きに裾を乱して、手足を伸ばした儘身動きも致しません。右手に張り形を握つてそれが宙に浮いておりました。ハット不吉な予感がしまして、皆にこの事を知らせ様と、一時は思いましたが、それによつて、反つてあらぬ疑をかけられてもつまらないと思ひ直しまして、あわてゝ寢床に戻りました。けれども色々と厭な想像で、遂に曉方迄まんじりともせずでゐました」

「よし——一応そなたの言葉を信用しよう。ところでこれは何か知つてゐるかな」

こう云つて先生は先程の紙包を、文七に示して、凝然と彼の顔色の反応を窺いました。

「へエ——一向に何か、存じませんが、——」

「そなたの行李の中にあつたのじやよ——」

「ヘエ？」

キョトンとして吞込ぬ顔の文七を残して先生は表へと立出でます

「旦那、鳴門屋へ行つて見たいが——」

「合点で——」

「ところで源六旦那、文七は下手人じゃないよ——」

「えゝ……」

「毒物を見せたが、わしの観相学から云つても反応は零じゃ。文七はこれがいかなるものであるか知らぬと見える——」

「て、すると、誰が殺つたんで——」

「さ、それを探りに行くのじゃよ——」

二人が鳴門屋へついた時は、丁度葬式を出した後の慌たゞしさで鳴門屋の内外はざわめいておりました。

お加乃の案内で、ズイと奥へと通ります。一応皆の持ち物を丹念に調べ終ると、先生は例の山羊鬚をしきりにしごき出したのです。炯々と冴え渡る眼光、次々と組立てられて行く推理の塔の中には、最早、源六の割り込む隙もありませんでした。

徐ろに先生は口を開きました。

「源六旦那——張り形はこの店のものじゃな——」

「根元のところに山型に十とあるからには、四ツ目屋の、山城屋十兵衛のところから売られたものらしいので——」

「誰が之を買つたか調べたか——」

「そこまでは——」

「慌て者に似合わぬな。勿々に調べるのじゃ」

「オット、合点ノ」

源六は尻に帆かけて、旋風を巻いて飛び出して行きました。



性神由來小記

東 山 五 六

◎七福神と宝船

これが日本の風俗史に現れたのは、室町時代で、東海の一島国が、次第に海外雄飛を始め出した時代の、紀念物である。

印度出身の大黒、毘沙門、弁財天、中国出身の布袋、福祿寿老人、日本出身の恵比須が仲良く乗込んでいるのも面白く、それが江戸時代になると、いつか良い夢を見せてくれる、閨の神に変わっていった。

◎大黒と恵比須

大黒天は梵名をマカカラといつて、真黒な印度の軍神だったのが、どこでどう間違つたのか日本へ輸入されて、金儲けの稲

神に化けてしまった。

大黒様は印度では牡牛や男根で象徴される、繁殖と攻撃の神だったので、その全身を陰莖、頭巾を龜頭、打出の子槌を精子俵を陰囊に模して投影している。七福神中唯一の国産神エビス様は、蛭子かヒコホデミ尊の形象化で、摂津西の宮に祀られてから、商売女の守護神（女性器そのものの象徴）になりきつたものである。

◎辨財天女

弁天様の住居は宝船ではなく殆ど皆申し合せたように水のはとりである。上野不忍池の人も琵琶湖竹生島の人も江の島の人

お加乃手盛りの抹茶一服、悠々と呑む間に源六は戻つて来ました
「先生ノとんでもねえ話だ。張形は売り込みじゃなくて、こちらか
ら買いに行つたらしい。その買いに行つた者は——」

「誰じゃ——」

「なんと、それが番頭の善兵衛で——」

「何——、すると番頭もお喜江さんが張形を使つていたのを知つて
いた筈……」

「シヨツピイて来ましようか——」

「手荒な事をするな。やんわりと連れて参るのじゃぞ——」

やがて源六に手をとられた番頭の善兵衛が、観念した様に、静か
に這入つて来ました。

「そなた張形は御新造から頼まれたものか」

「いえ——、こう何もかも分りますと致し方ムいせん、申し上げ
ます。実はお隠居様が、独り寝の淋しくもあらうと、粹をきかせら
れまして、内々に買い求めて、そつと御新造様の部屋に、以前から
あつた様に何処かへ藏つておけと申されまして、お言付で気恥かし
くも山城屋へ参りまして買い求め、あのお方の留守の間に簞笥の中
へ忍び込ませましたので——それが最早ふた月も先の事でムいます」
「ではそれを見出したお喜江さんが、秘かにこれを使つていた事を
承知していたんだな」

「ハイ、使つているその場合は、見合わしませぬが、恐らくは……」

「ハハ、見られちゃ耐つたものじゃない。するとお隠居も知つてい
たわけ——」

「ハイ左様で——」

「ところでお加乃さん、あんたは——」

も、弁天様は池や湖などの真中
に突出た、女陰を象徴している
島や洞窟のような所に、鎮座ま
しまし、どなたも男性々器のシ
ンボルたる琵琶を、しつかりと
抱いてゴザル。

彼女の本体は、印度の弁舌と
才知を守る美しい女神、サラス
バチーだつた筈だが、彼女も又
日本へ帰化すると、エロチック
な女神アメノウズメノミコトや
吉祥天女と混同されて、専ら愛
慾と蓄財の神に転業したが、彼
女のベツト、蛇は、男性のシン
ボルであることは万国共通であ
り、やはりその道の女神として
おくのが順当だろう。

◎聖 天 様

聖天様即ち大聖歡喜夫は、印
度の大王神シバ神の子で、象の
頭を冠し、女神を固く抱擁して
いるので、歡喜仏と言え、世
界中で一番露骨な色情神であり
聖天様に願をかける供物には二

股大根の実物や絵馬があげられ
るが、その意味は説明を要すま
ごでもないだろう

◎天狗と道祖神

天狗は猿田彦で、男性器象徴
神というのが定説である、又道
の岐に立てられる生殖器神、道
祖神、つまりサイノ神は波の変
身だから、おかめ即ちアメノウ
ズメノ尊とは好一对をなすもの
である。

◎般 若

般若の語源は梵語のベンジャ
で、語義は性慾の知慧という事
である、仏典上で云う般若波羅
密多とは、般若は性慾本能を満
足させてくれる婦人という意味
で、情を解する婦人によつて満
足する事を言う。この場合の婦
人とは観音様で、般若の面は、
觀世音菩薩が性交中に、強烈な
快感の為に美しい眉に皺を寄
せ、顔を歪めて齒をむき出し、
恍惚としている表貌を現してい
る。頭に角を生じているのは、
心中既に獣慾にひたむきになつ
ている事を、現しているのでは
ある。

「ハイ、姉の部屋をいつか掃除致しておりました節、フト目にとまりまして、斯様のもので秘かに慰めておりました事は薄々知っております」

「良七はその事を知っていたかえ？」

「善兵衛が申さぬ限り、私の口から左様な事申せる筈もありませぬ

故、恐らく知らなかつた事でございましてよろ——」

「そうかい、良七は知らなかつたのだないやよろしい。旦那早速だが皆を集めてくれぬかな——」

「懣々大詰めと来やしたね。合点！」

源六の声が、部屋から部屋へ響き亘るのを聞き乍ら、先生の髭をしごく手は一しきりしげくなつて参りました。

「は、一体何方で？」

張り形に味つけをした悪い奴



「だからさ、張形を使っていたのを知った者が一応怪しいと見るべきで。御隠居は中風で足腰立たぬから番外として、お加乃さん——これはまさか姉妹同志で女の事でもあるし、まさか生娘が味つけもしないだろう。となると、善兵衛か文七と云う事になるが、文七は先刻承知の通りとすると、残るは番頭……」

「さては、あの野郎——」

「と思うのは実はシロウトの考え。これだけ皆が知っており乍ら、知らぬ男もいる——」

良七つあん、あんたは知らなかつたそうだが……」

「ハイ、私は毛頭存じませんでした」

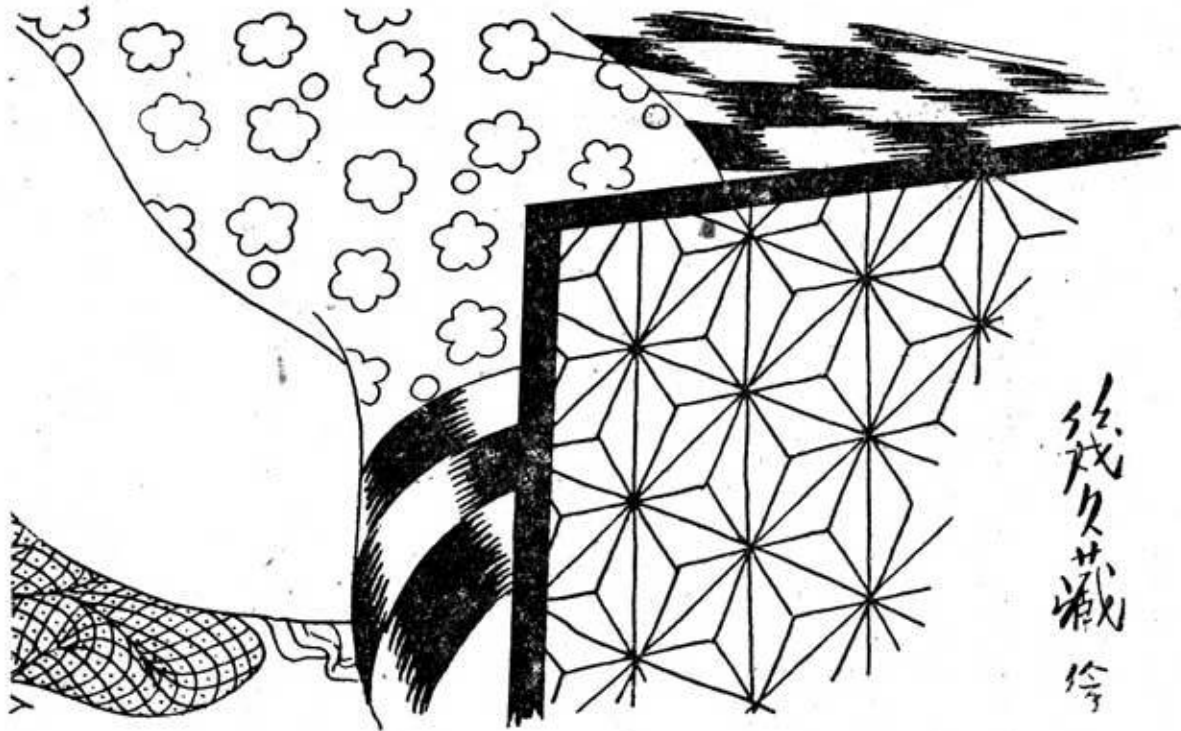
「すると源六旦那、チトおかしいじゃないかえ。事件の朝、良七つあんは旦那になんと云つたんで——」

「え——と、そいつは、下手人を探して欲しい事と、恨まれる筋合がねえのに、まさかあゝした人にも云えぬ死に方をした……」

「チヨイ待った。人にも云えぬ死に方と云なすつたそうだが、一体良七つあん、これはどんな死に方をさすのじゃな——」

「ハイ、私は唯もう夢中で、何となく異常を感じましたので、そう申しましただけで——」

そう云いつゝも良七の顔には脂汗泌みます。



「苦し
い云い
わけじ
やな。
皆が知
つてい
たのに
独り知
らない
と云い
張る術
もない
だらう
よ。そ
のもの
ズバリ
と云い
なさい
オラン
ダ渡り

「と、とんでもない。なんで私が——」

「なら、良七つあん、あんたの行李から出て来た、米間屋の手代には用のないこのオランダ医術本——。こりや一体何の用をするのじやな。御一統様は珍ブン漢ブンでも、この観々堂を甘くみくびつち

や不可ないよ。お喜江さんが殺されたなあ、オランダ渡りの凄い毒物によるものだ、いくら文七に罪をきせようとしても抜荷以外に手に入らぬしろものだ今オランダ医学と取組んでゐる杉田玄白と、このわしが無二の親友じやと云う事は、源六旦那も御存じない事じやが——良七ノ見忘れたかこのわしの顔を？。思い出さぬか、五年前わしが暫く長崎で遊んだ折、抜荷買の長崎屋で度々出逢つた事を——。良七つあん、いやさ抜荷であくどい稼ぎをして、長崎を売つた隼の良平、久し振りだつたな、と古風なせりふも云い出したくなるぜ——」

小気味のよい啖呵と共に、炯々と光る眼でじつと良七を見つめ乍ら、先生はおもむろに顎より下の山羊髭を両手で蔽いました。

「あつ、ひ、平賀源内——」

「ハハ、憶い出してくれたか、如何にも観々堂、平賀源内とか申した事もあつたのう。が、良平——。よくも米屋の手代とは化けも化けたなあ——」

「チエツ見破られたか——」

バツと飛鳥の如く躍り上つた良七の手にヒ首がキラリと光り、仮面の笑顔をサツとかなぐり捨てて、いきなりお加乃の体をだき抱えると、隼の如く部屋の外へ突進しました。源六の手練の捕縄がサツと飛んで、キリ／＼と巻きつくと見るや一瞬凄まじい格闘が始まりました。――

「先生ノいや驚きましたねえ。まさかお江戸八百八丁の度胆を抜いたあの平賀源内が先生であらうとは……。全く今迄知らぬとは云え面目もねえ次第で——」

源六の大手柄の日から数日、御札に参上して恐縮する源六に、先生は手を振り乍ら、

「いかに、今迄通りのヘッポコ八卦見の先生で結構じやよ。反つてその方が氣楽でな——」

「へエ、こりや冷汗もんで、ところで先日、絵解をしに参りました先生相手じや釈迦に説法見てえだが、良七は根が図太い奴で、散々悪事をやつた長崎が危なくなつて、江戸に飛ぶと、まんまと欺して鳴門屋の手代に住み込んだ。奴はそこで生娘のお加乃より、脂の乗り切つたお喜江さんの魅力に強くひかれた。そのうち奴は、文七が度々夜中抜け出すのに氣付き、それにつれてお喜江さんの秘行を知つた。勿論唯で済ます様な奴じやありません。折を見て部屋に入り込むと口説き出した。張形を使う位だから、生身なら猶よからうと思つた奴の思惑は、見事外れて、妹婿と定めた男に不倫は許せぬと反つて懇々と意見されたが、さあそうなると腰に傷もつ身、何か？妙に曝らされちや折角の化込みが台なしになると、表面さもそれから実直さを装い乍ら機を窺つていた。毒は昔の仲間から手に入れたらしいんで——。あの日、お喜江さんの銭湯へ出掛けた留守の間に張形を塗りつけておいて、残りを文七の行李に入れて、彼に罪をなすりとした。いざと云や、文七が夜中の覗きをタネにする腹でしたよ。でも例のオランダ本だけは日本にも数少ないものだけに、流石に捨てかねて、皆には分らぬと甘く見たのが運のつきでしたなあ——」

「思えば罪な張形だつたよ——」

「全く——、後日譚も云や氣の毒なあお加乃さんだが、良七の奴に犯されねえ先の事だけに、まだしもあきらめがつきまさあ——」

「高嶺の花と諦めて、おとなしく覗くだけで辛抱していた文七の方が余ッ程、人間はましかも知れないな」

「今度は盗み視せずに、ひよつとするとされる方に廻るかも知れませんぜ……」

「思わぬ拾いものをしたのは、文七かも知れぬて……ハッハハ。源六旦那もヘンな事にならぬうち、どうじや隣りのおかね婆さんの孫娘、お京ちゃんでも貰つては——」

「冗談でしょう。あんなハネツ返り、それこそ家の根太がゆるんでしまいますよ」

そのお京は源六万更でもないらしく、言端の尻から、ニヤリと唇元が綻びます。

「先生こそ独りで——」

「旦那が先ず先じやな——」

「ヘッヘッヘ……」

「ハッハハハ」

観々堂——。こゝに始めて正体を現わした安永の奇人、平賀源内の行状記は巻を追つて又述べもしましたが、エレキテルの発明後些細な事で時の執政、田沼意次と衝突して、陋巷に身を避けた源内先生は、こゝ暫くは、矢ッ張り今の観々堂先生の儘、源六など相手にのんびりと暮して行き度い事でしよう。

江戸の夕空に、鳶がくるくると輪を描いて、夕焼に紅く染つて見える晩春の事です。

(第三話了)

次号「変化中條流」(第四話)



洋妾由来記

福森耕司

洋妾の濫觴

洋妾の中山万寿という女——ハ
ワイ、ホノルルのフォート街に住ん
でいた彼女の名は布哇史から拭い
去ることは出来ないらしい。

江戸八百八町で、まだぼんぼん
と鉄道の音の絶えなかつた慶応末
彼女は千葉の小室村字戸崎から横
浜に出た。そして天竺移民団の無
頼漢達と一緒にたつてハワイに渡
航した。

「白色珊瑚礁に囲まれた布哇に上
陸した時、活火山の噴煙には驚い
たが、持つてきた荷物といえは、
くたく／＼になつた着換えの着物二
三枚と、元治元年横浜で外人写真
師に写して貰つた一枚の写真きり
であつた。

上陸した当時、ホノルル市中は
町は幅狭く、実に淋しい処で布哇
土人の他には少数の白人等が居住
しているだけであつた。万寿はが
っかりしたが、然し見るもの聞く

もの皆珍しいものばかりなので、
毎日市中を見物ばかりしていた。
白人は又、万寿を珍しがつて、家
に呼び入れて、パイヤ、バナナ
ケーキ等を取り出して是非食べと
奨めた。

けれども言葉が通じないと、
食べる方法がわからなかつた。そ
こで白人の家に奉公していた仙太
郎という年寄つた日本人が通弁と
なつてくれたので万寿は始めて地
獄で仏の思いをした。仙太郎は天

保十二年、土佐の中浜万次郎等と
無人島より助けられて、ホノル
ルに來た者であつた。

万寿は移民団が砂糖採集会社
に雇われて各地へ行つたので、仙
太郎の周旋で砂糖業の資本家ジ
アツドという人の家に、女中として
住み込むことになつた。ジ
アツドは米本国に置いて、本
国とホノルルの間を約二カ
月おき位に生活して
いたものである。彼女に
ジ
アツドの洋妾になることを奨めたの

は、矢張り仙太郎であつた。
かくして万寿は初めて白人の思
い者としての洋妾の地位を獲得し
たのであつた。

茶酒屋の起源

茶酒屋女といへば、外人相手の
遊女洋妾である。明治初年の頃、
ラッコ船と称する英米蘭人が乗つ
た帆船が繁く横浜に入港した。当
時このラッコ船の脱走船員たる英
人ジョネカネという男が初めて、
山下町一八五に、ボーディング・
ハウスという所謂海員下宿を経営
した。

これが茶酒屋の起源である。そ
して数名の若い女に抱えられ、そ
して此の種の家は、年毎に前田橋
を中心として次々と建ち増されて
ゆき、居留地の一角は忽ち此の種
の家で埋つてしまつた。初代ジョ
ネカネに引続いて二代目はジャキ
ネリーという男で、彼もやはりラ
ッコ船の脱走者であるが、茶酒屋
女を妾として成功し、前田橋一帯

の建物の所有者と
なつた。

第一度欧州大戦
当時、スパイの嫌
疑で横浜から国外
に追放され、大正
十三年五月、愛人
の洋妾おせいさん
に対する愛着が抑
え難く、偽名で、
横浜入港の日本郵
便の竹島丸船上に
その姿を現わし、
当時の新聞紙上を
賑わした独人クル
エルも、ジョネカ
ネの茶酒屋にゴロ
ゴロしていた一人だつた。

おせいさんは明治の末から大正
にかけて茶酒屋女として頗る威名
をふるつた者である。彼女の顔は
決して美人ではない。しかし、お
せいさんは若い頃は、友禪縮緬の
二尺袂の振袖に、緋鹿の子の帯を
胸高くお立矢に結び、とき色縮緬



のしごきも重そうにだらりと下げ
て、髪は桃割れに金糸を結び、
京都特有の赤い鼻緒の高いボック
リを穿いた艶姿はエトランゼの目
を眩らせたという。

唐人お吉

長崎市外の小ヶ倉村の半農半漁

の娘でお竹さんという娘は、長崎
に滞在中のスペイン系の米人の女
中に傭われ、いつの間にか主人の
洋妾になつたもので、大正の初め
頃、突然洋装で戻つてきて、村中
を金をばらまいて歩き四辺の村民
を驚かしたものであつた。

余りにも有名な唐人お吉の名で
知られた国際的な婦人、お吉時代
にはまだラシヤメンの言葉は発生
していない。「唐人」という語の
中には既に「唐人妾」の意が潜ん
でおつたと考えることが出来る。

お吉は桜田久之助と共に、玉泉
寺に勤め、ハリスの洋妾になつた
のであるが、彼女は直ぐ妾を免職
されてしまつた。その理由はお吉
の前身が、醜業を職としていたも
のであることが、或る筋から証明
されたので、遂にハリスから擯斥
せられ免妾となつたのである。そ
の間何らのロマンスも何もなかつ
たのである。

寧ろハリスは、後に神奈川本善
寺で安政五年六月廿日、お豊とい



(当時のラシヤメン風俗)

う女と逢い、麻布善福寺に於て侍女として寵愛した。洋妾お豊は毎月俸給銀三十兩、下田産だが江戸育ち、江戸ラシヤメンの元祖こそ情史に飾るべきだと思ふ。

洋妾哀歌

ハリスは安政五年の開港条約と共に、日本駐割の米国公使となつた。そうして七月、麻布の善福寺に公使館を置くことゝなつたので

ハリスは下田を去つて善福寺に移転した。移転の当時は、お豊を玉泉寺に残しておいたが間もなく麻布の館宅に呼び寄せ表面侍女とした。しかし江戸の人は早くもお豊を毛唐人妾と唱えた。萬延元年の末頃、横浜に羅紗女が出来てから江戸でも「らしやめん」が流行語となり、お豊も世人から「らしやめん」と呼ばれた。しかもお豊こそ、江戸でのガールらしやの元祖

であつたのである。

さて最も珍らしいのは、日本娘と外人との恋愛である。これは、らしやめんと違つて江戸の生娘が萬延の年、外人に恋したのである。その相手は親日家のヒュースケンであつてみると、この女は確かに偉い。とにかく日米親善どころでなく、日米の男女が恋し合つた事は、日本の開国史にとつても非常に重要な出来事であつた。

ヒュースケンはハリス公使の片腕となつて補佐した公使館書記官兼通弁であつた。彼は休暇を利用してよく麻布から芝浦辺まで散歩した。そして芝浦の萬清茶屋の茶汲女お豊に見染めた。お豊もヒュースケンを憎くからず思い、心から慕うようになった。然し二人の純情な恋も、ヒュースケンが日本の浪士に惨殺された事によつてはかなく消え去つてしまつた。

高輪隠人南亭の「異人芝老筆記」「横浜出稼男女人名帖」「神奈川奉行控帖」等の洋妾の数は、千人

以上を算し、一々戸籍年齢、旦那名まで記入されている。

綿羊娘、羅紗娘、洋妾、らしや娘らしや、遊女羅紗等、異名や区別は頗る多い。長崎や横浜は場所柄外人相手の娘らしやが実に多かつた。和洋混淆の異様な洋妾風俗をした娘らしやが、町中を得々として闊歩したものである。

ジョンキユ(水仙夫人) トウキゾ(時夫人) カンパニユル(つりがね草夫人) トレブロブル(お晴さん) マドモアゼル・ウイエエ(石竹さん) マドモアゼル・アブリ・コオ(お杏さん) マドモアゼル・ジャスマン(お馨さん) フレエズ(おいちさん) ジニア(おうらさん) マダム・クリザンテエム(お菊さん) お菊さんは晩年、長崎の寺町延命寺前で黍餅を細々と露命をつないでいた。

此等の洋妾を一々紹介してゆき生涯を叙して行つたとするならば洋妾の最後が何れも哀話に終つてゐるのに暗然とするだろう。(終)

倫落の岐路



壬生すみ子

七世琴玲子画

(一)

銀のようにキラリと光った細い庖丁で俊作がブクリと肥った鰯の背を撫でるのを、光子と雪子は躊躇^{しやう}んで見詰めている。まな板をの

先刻から喋^{かた}べり続けていた光子は、一寸黙っていたが急に思い出したように、唇の端を揶^{から}揄^かい気味につぼめて俊作にいった。え?と俊作は顔を上げたが、問い返すまでもなく苦笑を浮べて勢よく鰯のアタマを切り落しながら

丁を突立てる。すうーつと細い赤糸のような裂け目がその上に走る。
「そうく何時か話をきいたお嫁さんの話はどらなつたの」

せた小さい桶からは汲んだばかりの井戸水が、微かな白い湯気を早春の午前の日ざしの中にほの暖かく、立ちのぼらせている。

雪子はアルマイトの鍋を井戸端に置いて、ぼつと放心したように俊作の赤い指先を眺めていた。物慣れた手つきで俊作は、白い脂^{あぶら}の乗った鰯の腹にブツリと庖

「親父はそんなことまで喋つたのか。仕様がないなあ。あれは親父の独り決めだよ。俺の知つたことじゃあないよ」

「どうだか。俺のヤツ嫁が欲しいような口ぶりだつたから、コッソリいい娘を見つけて見合にまで運んでやつたら今度はちつとも嬉しそうな顔をしやがらねえ、と親父さん文句をいつてたよ。あんたは浮気なんだよ。大体」

「馬鹿いらない」

雪子の顔へ眩しそうな視線をチラと走らせた俊作は、彼女が膝をかかえこんで凝然^{じつと}な板をみつめているのを認めると、暗に雪子に弁解でもするような口調になつて、

「何んせ、親父と俺と二人暮しなんだからな、親父も早く家を固めたいんだらう。それで嫁だ見合だと一人でヤキモキしてるんだ。だけれど俺はそんなこと知るもんか」

光子は面白そうに俊作の顔をしげしげと近く覗きこみながら、
「だつて、あんたお嫁さんが欲しいような口ぶりだつたというじゃないの」

「それやそうさ」

俊作は一寸狼狽を浮べて言葉をついだ。

「朝飯は毎日俺が炊かなきゃならないんだぜえ。朝早く起きてよ。一日分炊いてしまふんだから、晩になつたら氷をカチつてるようなもんだよ。だからそんなトキ、女房がいたら便利だつていう気がしただけなんだ。それを親父は……」

「あんたが色気ずいたのだと勘違いした？」

光子は先廻りしてそういうと、フツクリした上体をゆすつて可笑しそうに声をふるわせた。雪子は薄桃色のナイロンの前掛の上に可

愛らしい手をそろえ、光子と俊作の会話を聴きながら、ほんのり温を染めて俊作の手もとに目を落していた。雪子の胸には何かホツとした安堵に似た、水のように切ない気持が拡つている。その切ない思いを小さな胸の底でじつと暖めていると、全身に羞恥の戦きがよぎつてゆくようだ。雪子は俊作の顔を正視することが出来ない。鮮やかに切身をこしらえてゆく俊作の手もとを、彼女は訴えかけるように見詰めている。

魚源の一人息子、俊作は毎朝HOTEL・GINに、注文取りにくる。自転車の後に附箱を積んで。そして、お内儀さんの鶴子が選んだ魚を俊作は井戸端で料理する。

女中の光子と雪子は皿を持つたり、洗濯にかこつたりしてその俊作の傍に蹲居^{ふみか}んで、僅かの時間を盗んでムダ話をするのが常だつた。ムダ話といつて、喋るのは大たい光子と俊作とで、雪子はその傍で黙つて聴いているに過ぎない。それとて雪子は進んで俊作の傍に蹲居^{ふみか}みこむ勇氣はないのだつた。

たま／＼井戸端で洗濯している時とか、洗物をしている時に俊作が勝手口からはいつてくる、彼女が俊作と話すことの出来るのはそんな時だけだ。しかし光子がいない時にはお互いにヘンに気づまりになる。二言三言はお互いに努力して話を交わすが、それがすむとギョチナイ沈黙が支配する。それを破ろうとして無理に喋つたら如何にも故^{わざ}とのようで、かえつてキマリが悪くなつた。それで、光子のいない時は何時も二人とも怒つたようにムツツリしている。そんな苦しみにも拘らず、雪子はその瞬間にうずくような歓びを感じるのである。

雪子は俊作のくる頃になると、井戸端に行く口実はないものかと

悩まし気に瞳を曇らせる。しかし、その項になつてイソイソと出てゆく自分の心を、光子に見すかされてからかわれはしないか、もし俊作の前で素破ぬかれたら私は井戸の中にとびこんでしまわなければならない。などと彼女は心配になる。ヤセ我慢をはつて彼女は部屋の掃除をしに、二階に上つていつたりする。

「俊ちゃん来る時分ネ」

光子が平気でそういうと、雪子は自分が冷かされているようでドキドキと動悸が烈しくなつた。俊作がくると楽しそうな顔で裏へ出てゆく光子が妬ましくつてならない。

「お雪ちゃんは？」「さア、二階でお掃除でもしてるンでしよ」

「ふーん」そんな会話が交わされているのではないだろうか。と雪子は想像する。自分の冷淡さを俊作は味気ない思いで受取つてはいまいか。そう思うと雪子はいても立つてもいらなくなる。

「雪ちゃん、容れもの頂戴」

光子がカン高い声で呼ぶと、雪子は泪ぐみそうになりながら鍋をもつて井戸端へ行く。

浅黒くやけた廿三才の俊作の顔が此方をむく。人懐っこい、象のような細い目が十七の雪子の魂を吸いつくしてしまふように暖く笑つている。

雪子は上気で赧らんだ頬をおさえ、そしてそこでやつと坐りこむことが出来るのだ。

しかし、間もなくお内儀さんの鶴子の、それこそ鶴の一声のような金属的な響が、雪子の心を砂かむような味気ないものにしてしまふのが常である。

「お光うーッ 雪うーッ。何してるのだよ。さつさと掃除を片付け

てしまふのだよッ。半分して放つておいてからに……」

雪子はハツとして立上りかける。光子はチツと舌うちして、その雪子の肩に手をかけて立上らせるまいとして、

「じつとしといでよ。雪ちゃん。あんたが立つたら、俊ちゃんが可哀そうよ」

「あら、あんなこと」

雪子はかツと赧くなつた。

「教えたげよか、雪ちゃん」光子はそんな雪子を意地悪そうに眺めながら、

「俊ちゃんがネ、あんたの股のツケ根をさつきからチラチラ盗視しているのよ。だから、今立つちや気の毒じやないの、もう少し見さしといてあげるものだわ」

「あら」雪子は周章ててスカートの端をひつばつて尻ごみするような恰好になつた。

「よせよ、馬鹿な冗談は」

首筋までまだらに染つた俊作を光子は面白そうに見て、自分のすべくした白い太い内股を別にかくそうともしないで、

「冗談じやないわよ。私のだつて盗視してたじやないの。それを、雪ちゃんが来たら、雪ちゃんの方にばかり気をトラレてからに。……さア、私のならいくらでも見せて上げるわよ。何だつたら、ズロオスもとつたげよか？」

(二)

薄墨色の黄昏が忍びよる四時頃からHOTEL・GINの赤と青

のネオンが華やかな毒々しい明滅を繰返して、夜の客を待ち始めるHOTEL・GINは京都の北東、銀閣寺の静かな疎水べりの奥まった所に在った。客はショート・タイム、オール・ナイト、そして二号とか夜の娘といった半恒久的泊り客、この三種類にわかれていた。それに応じて十五ある部屋もそれ〴〵に区分されていた。簡単な床の間つきの三畳はショート・タイム、四畳半の小じんまりしたのは泊り客、といった工合に。光子と雪子はそのHOTEL・GINの女中である。

彼女たちの部屋は台所の傍の、日の射さない三畳だ。もとは物置だったのを、商売気の勢んな主人・喬造が客の需要に応じてそこを改造して女中に住わせ、女中部屋を客室にしまったのだ。三角形の積木をくつつけでもしたように階段が天井を低くして、そのためその三畳は一そう狭く見えるのだった。

彼女たちの寝床を敷くと部屋は一ぱいになる。お白粉と女の体臭でその狭い部屋は直ぐに甘酔つばい匂いにむせかえつた。

寒い冬など一つの寝床で二人は抱きあつてねむつた。光子はそんなとき、頬を赤らめておすくしてゐる雪子に無理矢理に下着迄脱ぐことを命じて、固くなつた雪子の未だ成熟し切らぬ体を、ムツチリ肥えた白い股ではさんでキリキリと締めつけ、そうして光子は切なさうに喘いだ。十七才の雪子は、光子のそんな狂暴な衝動を、胸を下キドキさせてじつとこらえた。

雪子が女中に住込んだのは二年前だった。両親を失つた彼女は半年ほど親戚の間を転々とした。十五才の彼女は使い道がなく、何処の家でも厭な顔をされた。最後に或る親戚がその知人を介してHOTEL・GINの女中に雪子を世話したのである。

雪子がHOTEL・GINに来た時、光子はもう二年近く前から住込んでゐるのだと、雪子に話してきかせた。喬造の細君・鶴子は以前から胸を患つていて、始終蒼い、秀れぬ顔色で寝たり起きたりの暮しだった。光子はその人手不足を助けるため、鶴子の郷里から上京してきたのだ。鶴子の遠縁に当つた。雪子より三つ年上でその時十八才だった。

「仲よくしよネ」

と、雪子にむかつてへんにしみじみした口調で光子はいった。

「私、旦那さんが怖うて仕様がなないの」

脅えたような色がその時光子の黒い瞳の底を流れ、雪子は何が言いかわからなかつたが、そんな光子の言葉に泪ぐんでうずいた。瞳の翳るくらい長い睫毛を顫わせていたホッソリした少女つばい光子が、何故か雪子には愛おしくてならなかつた。

一年を経つたろうか、或る夏のことだった。狭い三畳はムンムン熱気が籠つていて、雪子は幾度も寝苦しい思いで寝返りをうたなければならなかつた。

夜中ふと目を覚すと傍で眠つてゐるはずの光子の姿が見えなかつた。小用に立つたのだらうと思つて雪子はウツラウツラしてゐたが光子は容易にもどつてこなかつた。

しばらくして、低い微かな足音が廊下伝いに近付いてきた。手洗いととは正反對の喬造の寝室の方からだ。雪子はそれをまだ訝しいとは思わないうたけれど、入口に吊してあるスタレがかすかにゆれて、夜着のすそを乱した光子が猫のように素早く音も立てないではいつてくると、いきなり自分の寝床に突伏して懸命に嗚咽こをえ始めたのに気がつく、雪子は急にギクツとした。

「どうしたの」

興奮を抑えた慄え声で問いかけると、光子はハツとしたように雪子の方へ顔を向けた。戸外の残置燈がほの白く漂った暗がり、雪子は光子の乱れた襟もとから白い肩が剥き出して見えるのを、何か息ずまるような生々しい思いで認めた。初潮を経験していた雪子はそれと気付かぬながら漠然と事情がのみこめた。「私、旦那さんが怖うて仕様がな」怯えたような目で最初の頃自分を見ていた光子の心に思い当たったような気がし、雪子は黙つて寝返りをうつた。

ショート・タイム用の三畳は一日床が敷つばなしである。部屋に



そなえつけてあるクズ籠の紙クズを棄てるのも彼女たちの仕事であつたが雪子はそのような時頼の赤くなる興奮を覚えることなしに、その仕事を済ますことは出来なかつた。ぼつてり濕氣をふくんだ、様々の汚点を印したそれらの柔かな肌ざわりの紙クズは、雪子に未知の歡樂の世界を、身近く生々なまと感じさせるのであつた。或日、若い男女を部屋に案内した雪子は、先客が用を済ませた桃色の枕紙を丸めたのが枕もとに転つてゐるのに気付き、あわててひろつた。異様な感触が掌を濡らすのを感じると、雪子は急いで手洗ひにかけこんだ。

それはゴム製の器具から流れ出た、稠密度の高い液体であつた。数分間の歡樂の陶酔と恍惚の絶頂の所産であるそれを見詰めてゐると、雪子は身内を熱いものが音立てて流れ、カサ／＼に乾いた唇から火のような息をはいてゐる自分を、意識した。

——そんな肉体の営いとなみが、乱れた襟から白い肩を剥き出して吸り泣いてゐる光子にも、洗礼を与えたのであろうかと雪子は漠然と思ひ、胸の底が熱く悩しく掻き立てられるのを感じたのだつた。

その翌から光子は目に見えてオド／＼し始めた。暗く鬱ふさぎこんでゐる光子を、雪子には正視することが出来なかつた。光子が寢床をあける回数は増えていった。

三日ほど経ると、雪子は光子の上に第二の変化が訪れたのに気が付き始めたのだつた。

ホツソリ瘡せた光子の体に、艶々した桃色の滑かな脂肪が輝き始めたのである。清潔だつた瓜実顔の容貌が何時の間にかポツテリとふくらみを増し、唇の色に異性を識つた艶なまめいた光沢が浮んでみえた。濃い睫毛の翳の奥に輝いてゐる瞳は不逞な落着を漂わせ始め、鶴



子の前でも妙に侮^{あき}けりを含んだ挙動を見せるようになったのである。

雪子は肉体的にも精神的にも光子のその変化に、驚きと半ば怖れの感情を抱いて彼女の日常に接するのであった。あの何時か手洗いで見た掌の上の異様な感觸——それが女の体のすみ／＼に吸収されて、このように光子の体も心も変化させたのに違いない、と雪子はその時も心の底に熱い切ないうごきを覚えたのだった。

光子は雪子を自分の寢床にひき入れて眠るとき、雪子の胸のふくらみを弄ぶのが常だった。光子はその白い股で雪子の胴を締めつけ

て未知の世界の知識を話した。そんな話の果てに、

「私、若い恋人が欲しいの」

熱い息を正額から浴びて苦しそうに喘いでいる雪子に、燃えるような瞳をキラキラ光らせながら光子はいうのであった。

「カッと燃えて行ける相手が欲しいわ。私、狂い出しそうなの。本当に、気狂いになりそうなの。こんなにしてズル／＼と若い日が経って行ってしまうのだと思うと、堪らない気持。ねえ、どうかしてよ。ねえ、雪ちゃん！」

雪子はゴクリと唾をのみこんで、不思議な快感^{エキスタシイ}が全身をシットリ濡らすのを感じるのであった。

「私、俊ちゃんが好きだわ」

「……」雪子の胸は破れそうに高鳴った。

「でも、あのひと煮え切らないの。私がフトコロに飛びこんでいつたら肩すかしを喰わせるんだわ」

「……」

「ねえ、雪ちゃん。私、俊作さんが大好きなの。あのひとが私を好いてくれないのは、あんたという人がいるからよ。あのひとはあんたが好きなんだわ。憎らしい……」光子の目はキラキラと光った。

「でも、私は思いをとげてみせるわよ。どうしても思いをとげずにはおくものか」

雪子は光子の、息をつまらせるような強い体臭に喘ぎながら、光子が益々内股に力を入れて胴を締めつけるので、ウツと苦しうに息を洩らした。

暖くなり始めたと思つたら、又木枯しが桜の枝を細かく顫わせ出した或る寒い日のことだつた。カミソリのように鋭い比叡おろしが疎水を逆撫でして水面を鳥肌立てていた。

真赤に指先をこごえさせて枕のカバーを裏の空地に乾かしていた雪子は、低く名を呼ばれて振向くと、思いがけずジヤンパーに鳥打帽を被つた俊作が立つていた。

「まあ」と、明るい表情になる雪子に、

「一寸、話を聴いてくれない？」

思いつめたような真面目な切口上で、俊作はヒタと雪子の目に見入つた。雪子の頬にはサツと紅が散つた。光子は宇治の方へ用足しに行つていたので、日暮にならぬと帰つてくるまい。

雪子は俊作の後について、裏の空地の隅に立つてゐる物置のかけに行つた。

「寒くない？」

「ええ」

俊作は一寸口籠つたが、やがて光子が宇治へ行くのだといつて店の前を通つたものだから、それでその留守にコッソリ雪子を探ねて来たのだといつた。

「雪ちゃん魚屋の女房嫌いかい」

いいにくそうにポツンと切り出すと、急に火のように烈しく燃えるまなざしを俊作は、真正面から雪子に向けた雪子はカツと全身が狂い出すような興奮に襲われた。人懐っこい象の目のように細い俊作の目が、このとき不安と期待と羞恥に戦っているのをチラと認めると、雪子は体中をぐいぐいと俊作にすりつけてゆきたい衝動を抑えることが出来なかつた。光子のフクヨカな太股にキリキリと締め

つけられるような切ない思いが、雪子の胸に燃え上つた。

彼女はただ泪ぐんだ目を上げてじつと俊作をみつめた。ツーツと熱いしずくが頬を伝うのを認めると、俊作の顔が不意に距離感を喪つて大きく、そうして近々と雪子の前にせまつてきた。彼女は思わず一步よろめき下がつたが、そのとき丁度後に在つた物置の扉が内側にひらいて、本当に倒れそうになつた彼女を、俊作の腕がしっかりと抱きしめて、そうして強く強く締めつけた。物置の中に踏みこんでしまつた雪子は、ほの暗く翳つた俊作の顔が自分の唇を求めておおいかぶさつてくるのを認めると、固く目をつぶつて首筋をこわばらせた。

カサカサに乾いた雪子の、半分開きかかつた可憐な紅い唇に、濡れて光つた俊作の唇がおしつけられ、彼女はその生温かい強い吸引力に魂が吸いつくされてしまふのを感じた。長身の彼の唇を受けるため弓なりに反りかえつた雪子は、殆んど爪先立ちそうな位のび上つた姿勢で抱擁され、その細く締つた腰に廻された俊作の腕がいよゝ強く力を増してくるため、雪子は下半身がピツタリと男の体に密着し、そしてそこに異性の興奮を感じて、その部分の細胞が戦慄するのを感じるのであつた。

「愛してくれる？雪ちゃん」

「……………」雪子は俊作の肩に手を廻し、返事のかわりに夢中で体をすりつけた。

「それでは、その証拠に……………スツカリ、ぼくに呉れる？」

雪子は息をのんでかたく目をつぶつていた。彼女は、柴をつんだその上にひろげてあるムシロの上に柔かく倒された。

しばらく経つた。

乱れ髪を後向いてときつけていると、雪子は再び俊作に抱きしめられた。雪子は真赤になつて、そうして俊作の顔を正視することが出来なかつた。弱々しい抵抗は軽く抑られて、再び同じことがくりかえされた。

「今夜のあんたおかしいわ。何かあつたのじゃない？」

その夜光子は雪子の体を抱きしめながら囁いた。

「どうして」

「どうして、——何だか、こう体のシンのシヨリがなくなつてゐたい」

雪子は熾しい肉体の記憶がなま／＼と体中に甦り、湧れるのを感じた。そうして、苦痛しか与えられなかつたその代償として、俊作の歓喜を吸収した自分の体が、切ない感動をよびおこすのであつた。

(四)

或る日の朝、使いから早目に帰つてきた雪子は、勝手口に俊作の自転車止めてあるのを発見した。いそいそと裏口を潜つたが、俊作の姿は井戸端にも台所にも見出すことが出来なかつた。雪子は突然胸さわぎに襲われた。

泣き出したいような焦燥に駆られて雪子は光子の姿を捜し求めたが、光子の下駄は台所に脱がれていながかつた。胸が押し潰されるように疼いた。

低い、おし殺した女のささやきを、そのとき雪子は何処からともなく耳にした。急に雪子は身を刺し通されるような恐怖の目を見は

つて、裏の空地の隅に在る物置を見た。物干に乾かされた白いシャツが、雪子の怖れを掻き立てるようにバタバタとしごくような乾燥した音を立ててゆれ動いた。

扉が内側にひらかれ、人の出てくる気配を認めた雪子は素早く身をひるがえして台所に駆けこんだ。彼女はまなじりが蒼ざめきつく吊り上つてゆくを感じた。次第に瞳孔のひろがつてゆくような虚ろな衝撃が心に残つて、ボロボロと涙がこぼれるのであつた。

疎水沿いの並木の桜が咲きあふれる頃になつて、HOTEL・GINに週三回、必ずオール・ナイトを過す男の客があつた。

二十七、八の色の白いスラリと背の高い青年であつた。一流品とすぐに知れる英国地の紺の背広をピツタリと身につけ、流行のねずみ色の春外套をその上にふか／＼と着ているのだつた。好みのよい中折帽を脱ぐと、ゆるくウェーブした黒髪は何時もキチンとわけられてあつた。キリリと高い上品な鼻、ふと血のにおいを感じるほどに赤い唇、バラ色に上気した血色のよい頬——それらが青年の素性のよさを物語つてゐる。女のような優美な印象を漂わせている中に濃い眉の下の切れ長なひとみだけは、強い意志のひらめきを見せてキラキラと鋭く光つていた。

宿帳に記入する。

蒔田健次郎（二八）会社員

という一行を、光子も雪子も何時か覚えこんでしまった。

「マーさんよ」

玄関の戸に耳をすませた光子は、瞳を輝かせて飛び出してゆく。蒔田健次郎と名乗るその青年は、常に気前よくチップを握らせる。

蒔田の連れの女はその日くで異つたが、大ていはこういう場所に足を入れたことのない素人の女のようであつた。時には田舎から出てきたばかりのような野暮つたい女を伴つてくることもある。

「あのひと、ほんとうに会社員なのかしら」

「そんなこと知らないよ、私は」

光子と雪子はそれく別に別な思いを抱いて蒔田を話題にのぼせるのであつた。

「会社員だつて、ドロボウだつて公金横領だつてかまやしない。私大好きだわ、あの人」

熱っぽい瞳を輝かせて光子はいい放つ。雪子も同じ思いであつた。「あの人はきつといい家の息子なのよ。お金があるもんだから、軟派の不良になつたのよ。だからああして素人の女ばかり相手にするんだわ」

光子は確信を籠めてそういつた。「私もあんなに一度誘惑されてみたい」

そんな時光子の濃い睫毛の下にキラキラ輝いている瞳は生き生きと濡れ、悩まし気な光を湛えるのだつた。「私、若い恋人が欲しいの」という夜の告白を、雪子は熱つぽく喘ぐように想い出すのであつた。そしてそんな光子にはげしい嫉妬を感じる。

雪子は何とかして蒔田に愛せられ、光子をアツといわせてやりたという切ない欲望を、十七の体一ぱいに燃え立たせるのだつた。雪子の脳裏には蒔田と較べるとき、俊作の面影はすかし絵のように影が薄く透明にうすれていつた。彼女は俊作を憎んだ。あのような約束をかわして自分の処女を得ていながら、光子の体をも求める彼の心が測れない。簡単に弄れたという屈辱が、思いつめていただけ

に一そう雪子の情しみをあふり立てたのであつた。

「雪ちゃん、雪ちゃん」

或る日、低い声で興奮を抑えた光子が駆けよつてきて、台所にいた雪子をきつくぎしめた。

「マーさんを西の5番に入れちやつたの」

息をはずませていうのである。その部屋はショート・タイムの三疊で隣室が蒲団入れになつているその壁の小さな覗き穴から、部屋の内部を手にとるように覗き見ることが出来るのであつた。

雪子は思わず息をのんだ。

「見ちまつたのよ！」

光子はふと狂暴な色をその目に浮べて、雪子の耳に熱い汗ばんだ



息をはきかけるのであつた。

酔つぱらつた男女がしどけなく肩をくんで、ぼつてりと桜の花の匂つた静かな疎水沿いの道を縫いながら通る姿が、しばしば見られる頃になつた。

そんな或る夕方、蔦田が一人でHOTEL・GINに宿泊した。彼は妙に憂鬱な沈んださえぬ顔で、静かな室を求めた。雪子は熱っぽい視線を光子と交わした。電流のようなものが胸を貫くのを、雪子は意識した。

蔦田は酒を求めた。雪子がカンの代りを持つてゆくと、どてら姿で床の間を背にしていた蔦田は、窓にむけていた視線をボンヤリと彼女にむけた。その美しい目に、雪子は堪えられないような孤独な沈んだ色を見るように思つた。

「今日はお一人なのでございますネ」
思わずそう口を滑らせてしまつてから、雪子は耳のツケ根まで真赤になつた。

蔦田はそれには答えないで、雪子につがせて苦しそりに猪口をなめていた。疎水を酔つぱらいが野卑な歌をうたいながら通りすぎる。

「何処か遠い所に旅行しないか」

ふと、蔦田は独り言のように低くいつた。

雪子は動悸が烈しくなつた。さし出された猪口をオバ／＼断ると蔦田は彼女の手をとつた。生温かい血が小刻みに雪子の体を顫わせた。

廊下に足音を聞いた雪子はツつと手を引き、急いで盆を手にし



た。彼女と入れ違いに、桜色に上氣した光子がいそいそとはいつてきた。

(五)

二日後に帳場の五万円と共に光子の姿がHOTEL・GINから消えた。

血相をかえて口から泡をふきながら狼狽して喬造夫婦を遠い目で見ながら、雪子は五体を絞られるような哀愁を味わつた。どてら姿の蔦田の乾いた孤独な声が体の底から甦つてくる。蔦田と共に何処か手のとどこぬ遠くの果てへ去つていつた光子に、胸をえぐられるような嫉妬と憎しみが突上げた。

その翌朝、雪子が井戸端で枕のカバーを洗っていると、俊作の父

親の源作が勝手口からはいつてきた。そして雪子の傍に躊躇みこむと煙草入れを太い指先でいじくりながら、

「実はな、お雪ちゃん。伴がどうしてもあんたを嫁にというのだよ。御らんの通り親一人子一人の気楽な家だ。来ちやあくれないかね」

「……………」

「親父のわしからいのは何だが、至極カタイ男で、それに性質は……………」

雪子は突然憤りが身内からこみ上げた。

「ウソよ、ウソだわ。カタイ男だなんて。知っているわよ。私は。

お光つちやんとだつて、……………お光つちやんとだつて……………物置ん中にはいつて……………ゴソゴソと……………何してるかしれやしない人なんだから」

雪子は感情の堰が切れたように声を放つてオイオイと泣いた。源作は度肝をぬかれて、ポカンとなつた。

雪子は三畳の女中部屋にかけこむと、押入れからウスべらい自分の蒲団をひきずり出して、その中に身をうずめて声を放つて泣いた。皆が自分を馬鹿にする——そう思うと、自分が惨めでたまらなかつた。

しばらくして今度は俊作を連れて、源作がやつてきた。

「お光つちやんが薪を下してくれつていうから物置にはいつたんだよ。そうしたらいきなり抱きついて来たんで、俺はふりほどいたそれだけのことだつたんだぜ、何時かのあれは……………」

俊作の真剣な表情に、雪子は息を詰めてかたくなに黙りこんでいた。彼の言葉がよし真実であらうとも、雪子はヘンに泥くさいもの

を彼から嗅ぐだけだ。蔦田の端麗な、洗練された孤独な姿が目前に浮ぶ。自分はあのひとのものなんだ。何時かきつとあのひとは自分の所へ帰つてきてくれる——そう固く思つた。

しばらく黙つていた俊作は

「昨日、疎水 所で若いしやれた態の男に出会つたんだ。雪ちゃんを呼び出してくれといったから、そのひとはもういないと思わずいつちやつたんだ。お光ちゃんが見えなくなつた後だから、俺、ヘンな不安な気持になつて……………」

「そうしたら、そのひとは」

雪子は我を忘れたようにいつた。

「北の方へ行つてしまつたよ。誰にも自分のことはいわなくてくれといつて」

「何んて勝手なことをするのッ」

雪子は胸中が滅茶苦茶に掻き廻されるのを感じ、ヒステリックな声を放つた。蔦田だつたに違いない——そう思うと、俊作にむかつてこらえ切れない憤怒が突上げてくるのであつた。

桜の青葉が鮮かに疎水の面にその緑の翳を落すようになった。その頃、HOTEL・GINに光子がヒョククリ戻つてきた。

腹を立ててわめき散らす喬造夫婦に光子は両手を合わせ金は必ず働いて返済するから自分を置いてくれと頼むのだつた。光子は顔色が悪く皮膚はたるんで見る影もなく老けこんでいた。安っぽい派手なめいせんの襟は、脂垢で黒く汚れていた。両手について喬造に哀願するその姿は、以前の光子の面影を何処にもとどめていなかった。色々と聞き正す喬造に、光子は最初は黙りこんでいたけれど、や

つとのことでオソルオソル口をひらいて、男に売られたのだという
と、ワツと泣き伏した。雪子はそれを模の外で耳をスマしてきいて
いて、思わずゾツと背筋に悪寒の走るのを覚えた。

〇〇へ行く密輸船にのせられようとした所を、辛じて逃亡したの
だという。蒔田と名のる青年は、その背後に在る国際的な人身売買
団の手先なのであった。

雪子はその夜、光子と女中部屋に寝んだが、光子は言葉少く蒲団
をかぶると寝返りをうつて身動きしなかつた。

雪子は小窓から不気味な男がじつとうかがっているような錯覚を
おぼえ、ウトウトとまどろんでは恐ろしい悪夢に目を覚さねばなら
なかつた。深夜、雪子は光子のうめき声にハネ起きた。スイッチを
ひねると、白い目をむいた光子は苦しうにその瘡めた胸を掻きむ
しつていた。

病院で応急手当を受けてやつと薬物を吐き出させ、光子は一命を
とりとめた。

翌日、HOTEL・GINに、額に刀創のある、耳の殺^{ころ}げた兇悪な
人相の男が二人やつてきた。冷たい怖ろしい目で、蒼くなつた喬造
を睨みすえ、このことを公にしたらお前の命はないものと思え、
短刀を畳に突立てて凄んだ。そうして床についている半病人の光子
を病院から連れ出して、自動車にのせて何処とも知れずに姿を消し
た。光子は再び喬造や雪子の前には現れなくなつた。光子は連れて
行かれる時、ロウのように顔色が失く、小刻みにガタガタ顫えてい
たと、看護婦が怖ろし気に物語つた。

「私、若い恋人が欲しいの」白い太股でキリキリと雪子の胸をしめ
つけなが熱つぽく囁いた光子を思い出すたびに、雪子は病院から連

れ出されてしまつた光子の行方が、胸を掻きむしられるように切な
く、そうして怖ろしく魅つてくる。

彼女はもう一日も、HOTEL・GINに止つてゐることに堪え
られなかつた。

「あんた、何時かの言葉をまだ私に掛けてくれることが出来て？」
勝手口から力なくはいってくる俊作に、雪子は勇を鼓して謎をかけ
た。

「何時かの言葉？」

「ええ。私、もう何処にも行く所がないのよ、何処にも……」

「それじゃあ……」

思わず声をふるわせると、俊作の目は不意に生々と輝いた。

「それじゃあ……おれの家に来てくれるのかい。え？」

「連れていつて、今すぐ、ね。たつた今すぐ連れていつて、許して
ね、これ迄のこと、悪かつたわ、私が悪かつたんだわ。私、あんた
のいうことは何だつてきくわ。どんなことだつて辛抱するわ。私、
もう一生あんたから離れない。きつと、きつとあんたのいいお内儀
さんになつて見せるわ。」

雪子は俊作の胸に縋ると泪のあふれる瞳でその顔を近々と見上げ
そうして突き上げてくる胸の激情に声をふるわせた

(了)

女体の秘密



芳生

腋毛は、恥毛の一種であつて、陰部に生ずる毛と、密接なる関係がある。部位から云つても腋部と陰部とは、何れも肢関節の内腋窩にあつて、たゞ上肢と下肢との別があるのと後者は生殖機能を有するに反し、前者はそれ

を有しないとの差があるだけで、性慾を唆ることは同じである。

更に之れを詳言すれば、腋部は強き性的刺激を有するだけ、此の部に対して、羞恥を感じるのである。それは男も女も同じであるが特に女の腋は、乳房と関連して、一層強烈なる刺激性を有することはよく人の知る所である。

それで腋窩と乳房とを比較して見ると面白い。乳房も恥部の一部であつて、此れを露出することは、羞恥の大なるものであるけれども、それよりも腋窩の方が、一層恥ずかしく感ずる。女が乳房をあらわして、これを乳児に授くる場合は勿論、これを秘密にする女もその羞恥の感情は腋窩ほど強くはない。

腋窩に対する性的狂崇も、こうした事情から生ずるのであつて、女の腋部を瞥見することに対して好喜する者がある。例えば夏など電車に乗つて、釣り革を握る際の如きで、婦人の袖口から腋窩の見えるのは、其の種の狂崇者の的となるようなものであるから、注意しなければならぬ。

斯様に腋窩が恥部として性慾を刺激するもので、昔の人もこれに就いては、考えたと見えて、彼の残酷な死刑即ち磔に於いて、罪人

を刑する際にも、男の方は裸にして、大の字に張り附けるけれど、女の方は裸にしない、多くの場合着衣の上から、腋窩を貫くようになつて居る。これは見物人に、羞恥の情を起こさしめないためであつたと思う。

以上は、腋窩と性慾との関係に就いて、述べたのであるが、斯くの如く腋窩に対する性的感情の強烈なのは、何ういふ理由かと云うに、これは要するに、その部に生ずる毛(腋毛)が、恥毛に類似して居るからである。語を換えてこれを言えば、腋窩に対する羞恥の情は、腋毛から生ずるので、売笑婦の如きものは、若く見られたいのと、客から刺激せらるゝことを厭うとの、二つの事情から、これを除去するということである。

此の点からいふと、男子の髭も、恥すべきものゝ一つである。何となれば髭は性慾と関係があつて、発情期の頃から、発生するからである。けれどもこれは顔面にあつて、恥部でないから、却つて威厳を添えるものとして一般に裝飾とせられたのである。然るに恥毛はこれと異なり、陰所に生ずるので、自然にこれを恥ずるようになつたのである。

けれども腋毛も、矢張り髭の如く性慾と関係して、又、美の一要素となるものであるこ

とを、記憶せねばならぬ。これはストラッツなども言つて居るが、其の色や厚薄等に就いては、人種及び民族に依つて、違いのあることは勿論である。ストラッツに依ると、其の色は黄金の如くで、疎らに縮れた腋毛は美である。随つてそういうのが、理想の美人に適つて居ることである。

疎らに縮れた腋毛は、日本人も同感であるが、其の色は黒くなければならぬ。余り密生したのや、長いのは強い刺激を与えるけれども、美としては相応わしくない。娼妓花の如き美人に、熊毛のような腋毛があつてはならぬ。

腋毛は、恥毛と関係のあることは、前に言つた如くであるが、兩者は多くの場合、連発するものである。それで一方が缺ければ、他方も缺け、これに反して一方が饒多なれば、他方も饒多である。併し腋毛の発生は、恥毛に遅るゝのみならず、部局が狭く毛数も少ないので、恥毛に比すれば、缺けて居るものが多い。男に就いて、アンモンの調査に依ると恥毛の無いものは、極めて少ないが、腋毛の無いものは、割り合ひに多い。女に就いてはどうか、材料は乏しいけれども、恥毛の缺けて居るものは、男よりも多いことは事実であ

る。此のことは次節に述べる。

二

それから恥毛の生理的官能であるが、これに二種の作用がある。即ち一は色慾を刺激して性感を補助すること、他の一は局部を保護することである。孰れも性慾との関係から起るもので、これを中心に各民族に於ける種々な習慣もある。

恥毛の生理的官能を、一口に言つてしまえばこうなるが、其の発達及び必要に関して、説を為す学者は多くある。例えば恥毛は、幼児を抱き寝する際、足で陰部を踏み附けられないように、保護する為めに発達したものであるとか、最初衣服の無い原始人が、手拭いの代用とする為めだという類であつて、ベルヒの説に依れば、恥毛は人間が直立して歩むから、あらゆる事情が纏綿して、これが発達を促したと言つて居る。其の事情の中には、汗の刺激を防ぐのも一条件となつて居る。語を換えてこれを言えば、体の上半身から流出する汗は、恥毛に遮らるゝことに依り、生殖器が其の刺激を免る、ということになる。

此の外にも、随分奇説を出した者もあるが私は性的淘汰の結果とする説が、最も穩当で

事実合して居ると思う。先ずこれに就いて言つて見るに、恥毛は烈しく異性を牽きつけること、生殖器以上の力がある。語を換えてこれを言えば、生殖器の気分は、恥毛に依つて亢めらるゝもので、生殖器か恥毛か、恥毛が生殖器かというように、此の二つのものは密接に相関して、離れないのである。故に裸体美術に於ては一般に恥毛を略して、添えることのないのは、生殖器の気分を消滅して猥褻の觀念を去る為なることは言うまでもない。これは視覚上の刺激であるが、触覚上にても有力なる刺激を与えるものであつて、性感を補助することが著しい。恰度それは頭髮や鬚髯などに触れたときと同じで、此の感覚は特に盲人などの如く、視覚のない者に於いて発達して居る。

次に、第二作用としての保護も、重大な問題で、等閑視が出来ぬ。何となれば局部の分泌腺は、これに依つて涵養さるゝからである。此の分泌腺は、皮膚の外面に存する汗腺以外、内部に有する陰腺及びバルトリン氏腺等の如く、特殊のものまで、恥毛の影響を受けて、分泌する傾きがある。それは何ういう理かというに、恥毛の少ないもの、又は無い者は、此れ等の分泌腺が乏しくして、陰内は

常に乾燥して居るに反し、恥毛の饒多な者、又は厚濃なもの等は、腺に富んで、多く分泌するからである。

売笑婦などの如く、陰内の常に乾燥して居るのは、客に接することが甚だ多い為めに、局部が肥厚して、自然に分泌が止まつたものと言う人もあるが、それ許りでなく彼れ等が

故意に恥毛を除去して、成るべく減少するのが、其の主因であると思う。何となれば恥毛を除去するときは、腺源が涸れて、分泌しなくなるからである。

かように売笑婦が、恥毛を減少する習慣は何ういふ訳かというに、これにも理由があるそれは性交の際、毛擦れを防いで、病毒に

感染せざる為めと、一つは若く見せる為めの二点である。毛擦れから生ずる擦傷は自己に生ずると客に生ずるとに拘わらず、病毒の侵入する通路となるから、衛生上は必要である。しかしそれが為めに、分泌機能を妨げて性感を滅却するのは損失で、局部の除毛は売笑婦以外の女子には、全く無益である。

男子同性愛者からの書信

南 里 文 彦

本誌六月号に掲載した「男子同性愛者からの書信」について夥しい反響を頂いたが、その中の某氏からの分をこゝに発表させて頂くことにする。住所氏名をはつきり書いておられたが、勿論これは同氏の要求がなくとも、発表すべき性質ではないので仮名としましたので御諒承を乞います。(原文のまゝ)

× × ×

拝啓、小生奇譚クラブの一愛読者です。いつも先生の誌上記事を中心ときめく思いで拝読致して居ります。二十六年十二月号の男色天国繁昌記の如何に感がい深く打たれましたこ

とか、到底先生方の御想像下さる域ではございません。つきましては私の悩み、それはもろ全国の同境遇の人々よりの訴えによつて先生方にはなんの興味もお感じ下さらないことゝ存じますので省略致したいと存じます。然し私達がいかにか何か満たされない気持のまゝに苦悩の日々を繰り返えして居りますことか何卒御賢察下さいませ。

つきましては六月号に二十六才の青年が望まぬ結婚をして却つて不幸を招き、目下非常に苦悩の谷底に呻吟していられる記事が掲載されて居りますが、私の悩みと非常に酷似の

境遇に居られる様に思いますので、是非共この悩みを訴えられた一青年とレターの交換が許されるならば同病相憐れむのとえに従い互に不遇を語り且つ慰め合い励まし合いたいと存じますので、先生におねだり致したいとペンを走らせました。勿論匿名にはなつておりますが、住所姓名おわかりかと存ぜられます故、御紹介下さらないでしうか、社の規則とかむつかしい条件もおありかも知れませんが、何卒この切なる望みお聴入れ下さいまし、幸いにして御聴許しただけですれば、小生は終生先生の御恩は忘却致しません。

人なつかしい晩春初夏、私達の最も苦悩厳しき季節でございます。周囲には苦しみを打明けける相手もなく、独り秘かに孤独に泣く私の救い主は同志よりのレターより以外になきものと一すじに考えます。何卒／＼御聴許の程御願ひ致します。同封の新聞紙の切抜きは私達の境遇の一人の青年が、その悩みを新聞社の相談係へ持ち込まれた切々の訴えであります。その回答の味気なさに、此の青年の失望落胆の程が偲ばれて、此の青年とのめぐり合いを夢みて二十五年五月十三日より今日迄、此の切抜きを心の友として参りました。今日に至るも夢の願望は叶いません、どうか先生もこの青年の身上に一掬の御同情を御寄せ下さい。

失礼をも顧みず悪筆にて御願ひ申し上げます

二十七年四月二十七日

敬具

南里文彦先生へ

××県××町××通り

秋村 右一

× ×

同封された新聞紙の切抜きはS紙のもので(相談欄) 私の場合、解答者は村岡花子女史ですが、同氏が此の解答に対して失望した

という事に関連して、新聞紙の相談欄というものの性質についても考えさせられて、面白いのでここに、そのまゝ再録させて頂きます

× ×

異性に魅力を感じない青年

問 私は二十二才の男子です、今まで成年になれば治るだろうという望みを抱いていたのが、年と共に一層激しくなり誰にも打明けることが出来ず悩んでいるのです。

というのはどんな美しい人であろうと愛することが出来ないのです。たとえ異性の裸体に接しようとするの感じも起りません。私には異性に対して正常な羞恥感がわかず、かえって同性に魅せられてしまうのです。現在も何年振りかでこの程再会した同級生の若々しい顔が忘れられず、秘かに想い続けており、肉体的に接したい欲望さえ起きて来るのです。

特に私の恋情の対象となるのは十四五才の少年及び四十才以上の成年者です。精神倒錯者というのは私のような者をいうのでしょうか、私は幼時父に死別し、母と姉に育てられました、何とかして正常になりたいのですが矯正出来ないものでしょうか。

(福井一煩悶生)

答

お答えすべき限りではないと思いますが、余りこんなことで煩悶しないように、そうした問題を心から追ひ払う方へ努力なさつたら如何ですか、心配なさらずに御自分の仕事に専念なさつたらいいでしょう、何の仕事なさつていらつしやいますのか分りませんが、仕事とスポーツとで青年らしく心身を活動させる潑刺とした生活が一番健康で、不健康にクヨクヨ考える習慣を追放することですね。

× ×

その回答の味気なさに、此の青年の失望落胆の程が偲ばれる……。と秋村右一氏の文面にありますが、相談欄の冒頭に——お答えする限りではないと思いますが——といった書き出しから、大体この解答者にこういつた種類の解答を求めることが無理であろうと思ひます。私の手元には全国からの多数の方々からのレターが来ておりますが、秋村氏からの分は一番文章もしつかりしていると思ひましたので、誌上を借りて発表させて頂きました。早速同氏への返事を書き終りましたが、次号には愉快的な結末をお知らせ致します。

× ×

訪話
探実

千円札

偽造犯人を探ぐる 宮川力造

本物の千円札と寸分違わぬ偽札が全国に現れて恐慌を來たしていた頃、山梨縣の片田舎で贋造紙幣の偽造團が檢舉された。これは新聞ラジオで全国的に報道されたので知らない人はないだろう。その主魁の一人が直ぐ近くの村であるため、私は彼の過去を探つてみた。そして犯罪の蔭に女ありという諺を今更のように強く感じたのである。



新築したばかりの家のガラス障子を一ぱいに開け広げ、女中は藤椅子を直して、湯から上つて來た主人渡辺六郎を迎えた。

渡辺六郎は、今年四十一才肥満の中背で、禿上つた額は、てか／＼と光っている。

彼は縁側の藤椅子に腰を下すと、煙草に火をつけた。

五月半ばの空はどんより曇つて、今にも降つて來そうである。太く吐く煙は、電燈の光りに近ずき直ぐ天井へそして表へ消える。一寸耳を澄ますと、湯殿から音が聞える。それはるり江である。六郎は今迄一緒に這入つて彼女の姿態を飽かず見ていたのである。

今正に咲き誇る牡丹の花、それがはたちになつたばかりのるり江である。引締つた肉付すべ／＼として光沢のある肌を思い浮べてごくりと唾を飲んだ。思ふ存分楽しませる今夜——だが、六郎もその幸福な裏には毒汁のよるな苦悩があつた。

吸い残りの煙草を一口強く吸うと、庭に棄てた。そして、はだけた浴衣の上に腕を組んだ。此れで好いだらうか?——学校長としての自分が、その部下である女教師の瀬川るり



江との邪恋。それが今では、るり江の肉体なしではいられない自分になっているのだ。

妻は半身不随、二人の息子は東京に追つた。此の新築は、るり江の要求からである。

村を俯瞰する高台で、玄関、応接間、客室化粧室、音楽室等々、それこそ近郷にない贅沢で豪壮な家である。

もとく六郎の家は旧家である。だから田畑、山林、書画、骨董など、郡下でも指折で家柄も祖先は、土地の豪族だと、伝えられていた。

るり江と知り合いになつたのは、妻が産後の肥立ちが悪く、それからどうしたとか、半身不随となつて、子供の世話から、勝手の用事迄、女中では間に合わないことを、茶飲み話にした処が、彼女も、同情して、六郎の家に出入りするようになってからである。

るり江はK町の呉服屋の娘だつた。生れつき大柄で派手な顔立ちで特に音楽や唄が好きで、教師という型ではなく、上流家庭のおきやんなお嬢さんといったタイプだつた。

「花園の静かな処に、綺麗なお家を建てて——」るり江は夢のような話しをした。それをそのまゝに六郎は、この家屋敷を新築したのである。然し、教師としての立場から考えて、妻のある身に、るり江と恋をして、家庭を破壊することは、到底出来る相談ではなかつた。だから、日に一度か二度、思いに沈むのだ。

そこへ廊下に足音がして、るり江が障子を細目に開いた。

「おい、待つていた、さあ来い」六郎は立ち上つた。

「駄目よ、此れからお化粧しなくつちやあ」るり江は一寸睨むと、障子を閉めた。入れかわりに、女中が酒を運んで来た。

八畳の間に置かれた朱塗のテーブル、床の間には、江戸時代の作か、桜花の前に立つ恥かしそうな花魁と、酒肴のそばに座り若殿の花魁を見上げる姿の描かれた掛軸があつて裸女の置物がならぶ。

六郎は再度、女中の注ぐのを盃へ受けて急

にあらたまつた口調になつた。

「ねえ、柳子は寝ている？」

「はい」女中はちよつと、六郎の顔色をぬすみ見て、

「さつきまで、雑誌など読んでいられたましたが、いま見ると眠つておられます」

「そうか」六郎は安心したように微笑んで、

「俺とるり江との仲を知っているのはお前だけだ、きつと御礼はする、秘密にしてくれよ」

「大丈夫ですよ、旦那さん」女中は云うもやぼだと云わぬばかりに、手を振つた。

「有難う——」六郎は大袈裟に頭を下げると一寸考えに沈む。

「今夜も鍵を忘れずにナ」化粧室からるり江が唄い乍ら出て来る。

「では私——」女中は立ち上つた。

差しつ差されつしているうちに、るり江は暑いと云つて浴衣一枚になつた。目元に紅をさし、伊達巻もゆるんで、膝はくずれる。六郎もかなり酔が廻つて、顔から胸まで赤くなつた。手を引くと、膝に崩れる紅ばらのようなぼつてりとした身体、肩で息をはずませる。

「いやよう」甘く、そして濃艶にるり江は、六郎の近づく顔を白魚のような指で押して身体を起した。

「さあ、もつと飲んで」六郎が盃を出すと、るり江は注いだ。

「お前も——さ」るり江は盃を受けた。

「ねえ——」るり江は甘えて六郎の肩に手を置いた。

「なんだい、此の家に不足があるのか」六郎は、まだ氣に入らなかつたら改築するぞと云わねばかりの顔をした。

「そうじゃあないの——」

「じゃあ、何んだ」

「私は二号なの？」るり江は一寸真剣な顔をした。

「お妾さんなら私、嫌やよ」るり江は家を建て、から今度はそれを責めるのだ。

六郎には、それが一番苦しいのだ。それを云われると心地好く酔つたものが急に胸につかえるのを覚えるのである。

六郎は頭を抱えたが、急に顔を上げて、

「まあ、その事は次にしてくれ、お前の望み通り家も建てたんだから」

「いや、家を建てる時、本妻にする約束もしているのに」るり江は妖艶ににいと

睨む。六郎はその視線をそらせて一寸思案する。すると、るり江は小指を出す。

「指切り、ね、本妻にすると約束して」子供つばいるり江に没々乍ら指を出す。

「嬉しい！」るり江は指切りが終ると、小雀のように六郎の膝に飛び込んで来る。

「私どんな若い男でも、生活力のない者は嫌い——ねえ、あなた」

るり江の手が六郎の首に廻つた。六郎の手は彼女の細い腰の辺りへそして二つの唇はびつたりと合う。

小雨が降り出したらしい。暗い表から微風が来る、屋敷続きの桃園は、いまを盛りに咲いている。其処から来る苦味のある花粉と、るり江の身にふりかゝつていゝる香水の匂いと云いようのない甘い香が六郎の鼓動を激しくした。

部屋の一隅にドアがあつてそれを開くとベットがある。スタンドに照らされている羽根布団、紅のカーテン、窓越しに花壇を眺めることが出来る。六郎は、るり江を抱いて立ち上ると、ベットに運ぼうとした。

るり江は身をもだえて、軽く抵抗すると、皿から落ちるブドーのように、六郎の手から離れた。そして一足さがると、一寸睨む、そ

の視線は六郎の胸をジンと響かせるものがあった。

「こいッ」六郎が近寄ると

「まだよ」甘く六郎の手を振り払つて廊下へ出た。

「待てッ」酔つた勢で後を追う。

「ほゝゝゝ」るり江は笑つて蝶々のように走つて、音楽室へ入る。

そして、ピアノのキイを叩く。

六郎はるり江の音楽に暫く聞きほれてたゞずむ。

るり江は次第に、美しさを増して来る。果実の前に、乾ききつた咽喉を鳴らす、そのように、六郎が再び手を出すと、るり江は艶やかに笑つてまた逃げる。

「何んて世話を焼かせるんだ」

客間の茶の間、応接間、と追うと、玄関でるり江の姿を見失う。

六郎は息をはずませ乍ら、勝手に引返して水を飲む、そしてよろめき乍ら、その部屋に戻つて来る。

「何処へ行つたんだらう」と呟き乍ら

藤椅子に腰を下すと

「ほゝゝゝ」笑う声はるり江である。

「何処だ？」六郎が怒鳴る。

女天下時代

「ほゝゝ」次の笑い声に、六郎はベツトルームのドアを開ける。

ベツトルームにりり江は寝ている。六郎を見るとくゝと笑つて面をかくす、羽根布団の下に動く彼女の姿態は掛布団を透してアリアリと彼の眼に映じてくる。六郎はいきなり飛びついて行つた。

今度こそ、りり江は逃げなかつた。いや逃げるところか、六郎の心をかきたてる狂気のような行動――

背後には山を、前に由良川を眺め、戸数四百戸の小村で、昔から何の発展も見せず、軒低い農家の、最低生活を細々と営む農民達の眼には、彼等の豪華な生活は、どんなに羨ましかつたか。

「あんな生活、小作人じゃあ夢にも見られねえだ」

「校長先生は好いナア――」

「本当だ――羨しいが出来ねえよ」

◎

六郎のりり江に対する、熱の揚げかたは日に昂上して、明けても暮れてもりり江であつた。

それと共に、本妻の柳子は、次第に病弱となつて。自分一人では、便所にもゆけぬようになつた。いや本妻がそうでなかつたら、りり江との関係も、そんなに進展しなかつたかも知れない。

そして、りり江と六郎との仲は、何時か村人の耳に入り目にもとまつた。さあ六郎は困つた。柳子に知れるぐらいなら叱り飛ばすことも出来たろうが、村の人達に知られては、職務上痛かつた。そうなると向りり江は甘い睦言の後先で、本妻にしてくれと責め立てるので今迄嘘を云つた事のなかつた彼が、嘘を云うようになつた。

「りり江は、家の娘として、他家へ嫁にやるんだ」とか「どうだるり江を嫁に貰つてくれんか」とか、村の青年に話しかけたりした。そうして自分が潔白であるかのように装う一方、何んとか、妻の柳子を離縁して、りり江を本妻にしようと焦燥した。

処が、柳子が病弱の為に、秘密の営みはよゝとして離婚とか別れ話し等は出来なかつた。当然故郷の、兄弟に、りり江との仲が知れ柳子にも薄々知れた。

柳子が時には責めるが、彼はそれを笑つて大きく横に首を振つた。

村の噂がうるさくなつたので、りり江を湯の町へ置いた。そして自分も表面上校用にかこつけて、りり江と、温泉で遊び、四日も五日も過すことがあつた。そうした六郎の留守に、柳子の病氣は悪化していった。

七月の或る晩、六郎は一週間目で吾が家に帰つて来た。家に着いた頃は、夜の九時もとつくに過ぎて十時に近かつた。

「今帰つたよ」玄關を開けると、女中が出て来るのだが、今夜は声を掛けても、返事もなかつた。

「おみつ（女中の名）」六郎はそう声を高くし乍ら靴を脱いだ。

「誰もいないのか？」茶の間に這入つて、四方を見廻したが、ひっそりとして、何故か濕氣を含んでいた。

「変じやあないか」六郎は呟き乍ら自分の部屋にカバンを置くと、妻の寝ている離れの戸を開いた。

電燈は消えている。息を殺すと、嚙り泣く声が聞える。

「柳子！」六郎は思わず妻の名を呼んだ。だが返事はしない、六郎は電燈を点けた。



妻は打伏している。そして瘦細つた肩に波うたせているのだ。

「おみつはどうした？」

妻は答えなかつた。そして不自由な身を起こそうともだえるのだ。

「ほら——」六郎は中腰になつて妻を抱えるようにして起した。全く肉気のない枯木のような手触り、そして何か腐敗したものゝような病人の臭気がムツと六郎の鼻をついた。

反対に妻の柳子は、夫の身についているる江の肌の匂いを感じたらしい。落ち窪んだ

目を夫に向けた。白いワイシャツの胸には紅がついているに、柳子は気付いた。

「校用が随分長かつたわね」喉に何かゝらまつているような噎れた声

「ウン、東京へ行つて来たんだ」六郎は本当らしく云つた。そして

「おみつはどうした」と強く尋ねた。

「暇をとりました——」

「暇を取つた？」

「どうせ、私も間もないんだわ」柳子は夫に答えずそう云うと、青白い頬に一筋涙の糸を引いた。

「女中が愛想つかすのも、無理もないわ」そう言う柳子の眼は恨を含んでいた。

「あなた」柳子の声は高かつた。

「何んだい！」云おうとしたが云つても仕方がないと思つたか太く溜息をした。そして急に関節が疼づく

か、うち伏して、うめくのだつた。

「痛むかい？」六郎は脚を撫でてやろうとして近寄ると、柳子はそれを拒んだ。

「向うへ行つて下さい」

六郎はむつとして、云うがまゝに部屋を出た。

廊下で耳を澄ますと、吸り泣きが聞える、自分の部屋に帰つて、鏡の前に立つた。白いシャツに、口紅のついているのに気付いた。

「いけなかつたな！」と一人ごと云い乍ら急いで寝巻に着換えた。

そして且つてる江と寄り添つて寝たベッドに這入つた。柳子の部屋と違つて、そこには若い女の体臭が香水の匂の中に入りまじつていた。

六郎は眼を閉じた、だが仲々寝つかれなかつた。

約束の家は建てたが、るり江を晴れて家に置くことが出来ない。

六郎の頭には、るり江の姿が浮ぶ、すると彼女を一人で置くのがいたゝまれなかつた。そして、彼女の許へ今からでも行きたいという衝動にかられたが、だが、バスもなし、それに気付いて諦めた。

十時になり十一時になり遂に十二時になつ

女天下時代

たが尙寝れず仕方がないから茶の間に行つて冷酒を二三杯コップであふつて帰つて来た。漸く身体を横にしていると、異状な考えが頭に浮んだ。

どうせ、あんな身体では全快の見込みもない、生きている柳子だつてつらいだろう。そうだ静かに眠らせてやることだ。――

それは恐い考えだつた。六郎はベッドを離れると棚の薬品箱をおろした。そして中にある睡眠剤を取り出した。柳子は衰弱している。だから過剰の睡眠剤を飲ませたら死ぬ？酒の勢いでそんなことを決心はしたが、何か知ら胸を締めつけた。二時が鳴つたとき、ようやく決心して、静かに妻の部屋に近寄ると、まだ眼が醒めていた。

「起きていては毒だよ、さあ水と、睡眠剤を此処に置くよ」

六郎は、平常通りの睡眠剤とは別に、コップの水の中へ、多量に入れて置いた。

「便所へつれて行つて」妻は夫の親切に、嬉しく肩にすがつて便所へゆき、帰つて部屋に

来ると、東京の子供のことなどを聞いたりした。

◎

「校長先生の奥さんが、亡くなつたつてよ」

「ほう奥さんが――」

「タベか？」

「いや今朝起きて見たら、洗面所で倒れていつてよ――」

「洗面所で？」

田畑の畔や、井戸端でそうした柳子の奇怪な死を村人は噂していた。

医師の診断書は、中風卒倒、心臓麻痺と書かれた。葬式が済むと、一週間を待たずしてり江が新居に姿を現した。

そして間もなく近所廻りをした。

「後妻のるり江です、宣敷――」と

「死んだ人が一年は家の棟にいるつて云うになあ――」

「男つて、独りじゃあ一時もいらねえんだよッ」

かげで村人達はそう云つて、六郎を悪く云つた。また柳子の死――と、るり江の到来とを見て怪しいと噂が飛んだ。

「毒でもくれたんだらう？」

「殺したに違いないよ！」

「邪魔だからなあ――」

そうした噂の中に、二人は派手な生活を続けた。

◎

それから十五年、敗戦は日本の旧指導者階級に大打撃を与えた。六郎は教員生活も終り、恩給生活をしていたが、物価暴騰から、六百円内外の恩給では如何んともなり難く、妻のるり江からは生活苦を訴えられるし、生きる為の手段として贋造紙幣の製造に着眼したのである。

事件が明るみに出されたとき、贋札偽造は彼一人でなく数人のインテリ層の人物が登場していた。

村人は誰云うともなく

「先妻の恨みさ」

「柳子さんの思いでさア」

「無理はねえ、無理はねえ」

そうした噂の中に、公判は続けられた。彼は何時か強度の神経衰弱となつて、瘦せ細つてしまつた。

栄華を極めた生活も今やどん底に落ち美しい家の戸は堅く閉じられて開かず、庭に雑草は生え茂り、その中にるり江と共に暗い日々を送っている。

(終り)



都々逸に現れた性愛感情

安部 雨紅

○待つた辛さを背中で見せて
しばし我慢も恋の意地

如何に待たされたからといって、姿が見えたらイソ／＼と出迎えたらよさそうなものを強いて背中を向けて拗ねるといふのは、そこが恋の意地である。しかしそれも、逢うた嬉しさを一層強く味わいたいというテクニクに外ならないのである。こうした場合に女性が男性のような心理状態になつて冷静で居られたなら、興味索然として寧ろ味気ないものである。

○今夜言おうか明日にしよか
何うせ言わなきやならぬ胸

燃ゆる胸の中を言い出すということは恋に

経験のある者でも可成り心が引けるものだ。それに初恋とくれば尙更である。実際今日云い出そうか明日にしようかと毎日同じ思いを繰り返す。そうして自分から絶望してしまつたり、是が非でも云い出さねばならぬと固い決心をしたりして、日々悶々なる情を言い現している。

○石になる様に泣いたが今じや
風の便りに人の妻

久しく契つた女と或る事情で別れねばならなくなつた時、女は別れを悲しんで石になる迄もと泣き明かしたが、時の力というものは恐ろしいもので、一年二年と経つに従つて夢も消え果て、人の便りに聞けば、泣いたその女ははや人の妻になつてゐると。そして自

分も又数人の子供の父親であるとは

○初め恋風半ばは魔風今じや
口惜しい秋の風

初めは恋によつて其の心を動かし、次には魔の手によつて相手を拘束して思ふ存分に蹂躪する。こうして色魔の習性として相手の女性を満喫した後には必ず倦がくる。そうして一方がそれと気付いた時分にはもう晩い。こういった動機から貞淑な女性が自暴自棄となつて色魔の餌食となつてゆくのが多い。これは色魔の用いる常套手段であるからだ。

○疑ぐり過ぎるか知らないけ
れど疑らせるのは主の罪

嫉妬は愛の半面だというが、然しその原因の大半は男性の責任である。世に婦人の嫉妬で苦しむ男女は多いが、その原因の多くは男子が自ら蒔いた種子によるものだ。たとえ愛の半面であらうとも、互に疑惑の間に生きるということとは人間の幸福ではなからう。

○長し短かし言うてる中に何
時か年取る皺が寄る
人間の一生は長い様で短かく、特に婦人の

生涯に於ては、その花の時代は至つて短い。しかも此の年頃は空想が手伝つて、相手を寄り好みし易いものであるから、いつの間にか婚姻を逸して老嬢となると、愈々人生を悲観して心は曲つてしまふ。

○二世も三世も約束したが
何うやら此の世もむつかしい

二世も三世もとは仏教の教えたもので、輪廻の因果關係を示したものだ。然し此の世で夫婦になつた者は少くとも未来に於て再び夫婦になり得るものであるとは、可成り一般に信じられている。二世も三世もと約束しながら、此の世でさえも既にその約束がむつかしいとは、寧ろ滑稽にさえ考えられる。

○憎いねえとは可愛い謎か
思いあり気なつねりよう

反対の言葉でその真意を表示することは恋の場合に特に多い。「憎いねえ」と云つて相手の太股をつねつた、そのつねりようから、「可愛いくつて仕方がない」という言葉に出して云えないその真意を表している所に、纏綿たる男女愛慾の情緒があらわれていて、そこに濃厚な性愛の匂いが感じられる。

○きれいに別れてもう一年よ
鳴くな夜更けて渡る雁

思えば昨年の秋、初雁の渡る頃であつた、やむにやまれぬ理由からきれいに別れて、すっかり忘れていた筈であつたが、今宵の初雁の声を聞いた時、油然と胸に浮かぶものは嘗ての愛人の影である。それと共にその当時交した熱い肉作の接触が思い出されて、独り寝られぬ夜がつゞく。

○親の意見を昔のまゝに云わ
にやならない身の辛さ

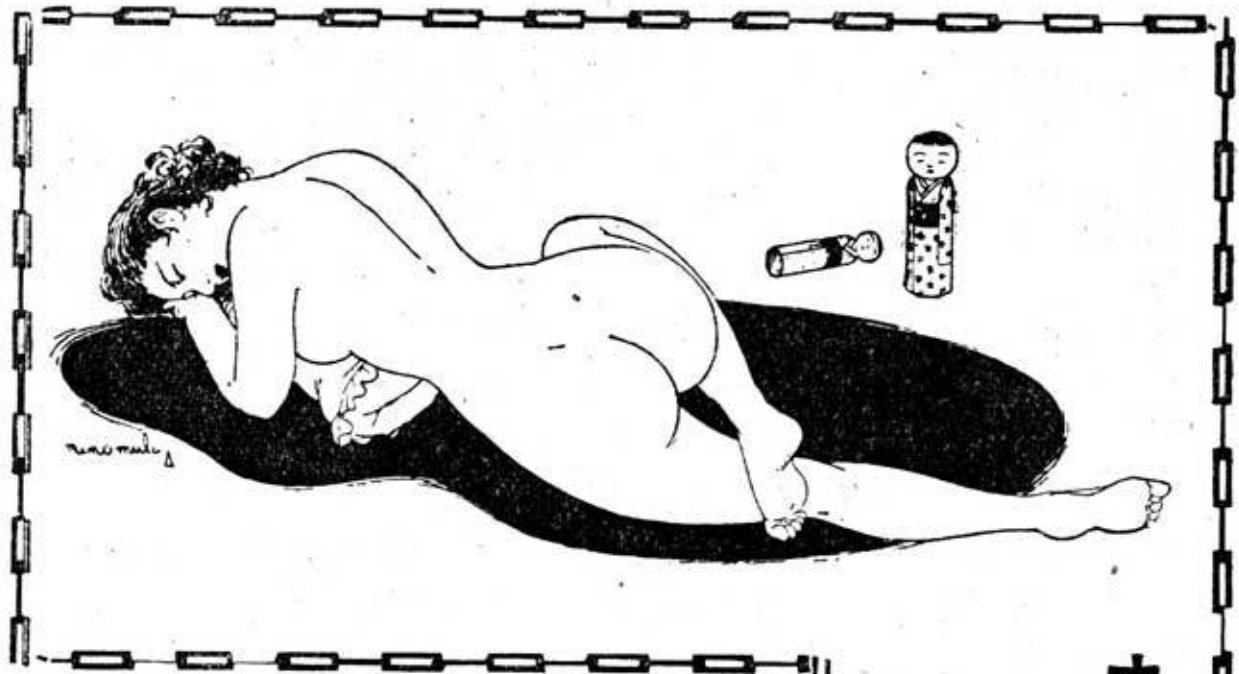
人に意見を聞く間が花である。自分から人に意見をする番になつては再び昔の夢を味えることが出来ない。然かも自分がさんざん道楽して親に世話を焼かせたものが、今度は立場をかえて自身が子供に意見をしなければならぬとは、昔の自分を顧みて良心の呵責に耐えないと共に、又若い頃の楽しかつた諸々の事が思い出されてホロ苦い気持になるものである。

○兎にも角にも心が知れぬ知
れぬ心に惚れながら

恋の苦勞とは云い換えれば相手の心を知りたい苦勞である。浅墓な人間の智慧で人の心を知ろう等と思うのは実に潜越な事だ、然しその身はどうかと云つたら、その不可解な心に惚れたのではないか。測ることの出来ない人の心に惚れて、それが知れないからといって苦勞する等とは、何んと矛盾したことであらう。

○ちよいと眺めは奇麗だけれ
ど末の頼みにやならぬ雪

世の中に見かけ倒しは必ずしも雪ばかりではない。人間にも見かけ倒しはいくらでもある。外見だけに迷うて実質をよう見極めないで苦勞する人の如何に多きことか。概して人は輕薄であり、才人は不実である。永世変らぬ色を備えたものは概ね醜なるものが多い。一度この苦しい経験をした者は、美の恐るべきを体得するが、一般の人は悉く美に向つ美接近する。此処に人間の弱さがある。



オフィスガールから重役の二號になつた

女の性愛手記

伊澤 蘭子

したが、どれもこれも皆私の氣にいらないうのばかり。此の頃、会社で男の方が結婚した相手は二十才から二十二、三の女性が多く、私はいつの間にかやらオールド・ミスの仲間入りをしているのかと心細く思うようになっていました。

或る土曜日の夕方、一人でコーヒを飲んで映画でも見て帰ろうかと心斎橋の雑踏にもまわっていると、やはり同じ会社に勤めている和田という三十五才になる妻子持ちの男とばつたり逢いました。今から思えばなんでこんなつまらない男に処女を与えてしまったのかと口惜しく思うのですが、その時の私は、誰と出逢つても直ぐその人の腕の中へ倒れ込んでしまふような心淋しさに薬をも握かむ氣持だったのです。

私は田舎からたつた一人都会へ出てきて、

アパートに一人暮らしをしているのです。そこからの私は月の中二回余り、ホテルや旅館で和田と逢曳しては秘かな性の享樂に耽りました。私は和田に対する恋心よりも目的とするものは性的享樂でしたが、その中に彼が案外非精力で私を十分満足させて呉れないことに気がつきました。それに彼はいつも自分本位で早漏氣味なのです。一度性の醍醐味を知った私には繊弱い和田との月二回位の逢曳では辛抱出来なくなつてしまいました。

そして私はその不満を自慰によつて補うことを発見しました。それは最も自然に近い方法を考案したのです。詳しいことは申し上げられませんが、子宮保温器を用いるのです。日中の味気ないオフィス生活も、夜アパートの一室で保温器のゴム栓をはずして湯を入れてベッドへ持ち込むそのひと時がある為に、私

葵商会というタイムレコーダーの販売をしている会社の私はオフィス・ガール。ビルの埃のしみついた平凡な二十六の女。それでも二、三年前迄はちよいと結婚の話もありま

には何の苦勞とは思わない位になつていました。どうせ私のような売れ残り娘はまともな結婚は出来ないんだという自虐的な氣持が激しく自らを弄んでゆくのでした。

そして疲れきつてぐつすり熟睡すると翌朝は身体はしやんと元氣ずき、氣も晴々として潑刺と出勤するのです。私は中途半端な和田との逢曳等に興味を失つていました。それに引き替え、私は夜毎、いろ／＼と研究を積んで次第に素晴らしい仕草を考え出しては恍惚として耽溺してゆきました。

和田とすつかり手を切つて一カ月ばかりした日曜日の午後、私は買物に出たデパートでうちの会社の専務の福井さんに逢つたのです。私が慌てゝ挨拶すると彼も私をよく覚えていて下さつて「買物に来たのかい？ 一体何を買うの。君の欲しい物を僕が買つて上げよう」と云うのです。私はそこで福井さんからスイス製十五石の九千円余りの小型の腕時計を買つて貰いました。

今迄和田のような貧乏な平社員と交際して二度の中一度はホテル代迄自分のハンドバックから出していた私は、福井さんの物解りのいゝ親切さに感心しちまつて、彼の為にならどんなサービスをしてもいいと思ひました。

二人は肩を並べてデパートを出ましたが、時計は丁度四時を指していました。福井さんは私に「何処か落着いた所で飯でも食べよう」と云つて一丁ばかり離れた料亭へ入りました。

すゝめられて私は一風呂浴びてくると、福井さんは独酌でちびり／＼とお酒を飲んでいました。彼は私が素直について来たので大満悦です。私も少しばかりお酒を飲みました。出てきた料理は貧しい田舎出のオフィス・ガールの私には初めて口にする立派なものばかりでした。酔つて満腹した私は福井さんに抱えられて、隣室に敷かれた寢床の上に運ばれました。

彼は本年五十四才だそうですが、美食に慣れた脂ぎつた肥満体は和田のような纖弱ではありませんでした。そうして私は三日にあげず福井専務と高級ホテルや料亭の一室で逢曳を続けました。然し流石に年齢は争れぬもので激しい私の精力体には彼も次第に辟易するようになりました。そこで私

はハンド・バックの中に子宮保温器をしのばせて、彼と逢ふことにしました。福井専務は非常に好奇心にかられて、そういった遊びに對して大變な興味を持ち初めました。

私は自分を十二分に心ゆくまで満足させて呉れる福井専務が好きになつてしまつたので一軒家を持つて二号にして貰うよう頼みしました。私はアパートを引き払つて、湯殿付きの平家を借りて貰ひ彼の妾となつたのです。福井さんは毎日のように妾宅を訪れます。彼はもう老齡なので、私と二人で演ずる遊戲の方により興味を持つのです。それが又好淫症の私の趣味にびつたりするのです。



色情倒錯者の手紙

染田 玄



前略。私は今年三十歳の男子で御座いますが、子供の頃から異常なるマゾヒスムスにて、年若き美

又、私は美婦人の身に附いて居る庶物を崇拝し、痰や唾液位は申し上げる迄もなく、小便を飲み、糞尿を食べて見たいと日夜、希うて居ります。

婦人の身分の高い、而して年のお若い為に、美人の召使となり、其の御方様の糞便を常食として、思う存分に酷惨な使用され、又玩弄物となつて、恥辱を与えて貰い、又出来る限り惨酷なる鞭り殺しにせられた上、自分の肉を料理されて喰べて貰い度くして仕方が御座居ません。

この事は今でも希望して止みません。或る時は、年のお若い看護婦の為に、生きながら解剖せられんことを願ひ、又或る時は、女学生の便所にモグリ込みて、美しい姫君達の小便を、思うまゝに飲食せんと願ひ、或る時は美しい婦人を見て、其の御方の為に自分の肉を料理して喰べて貰いたくなつた事も一度や二度では御座います。そんな事は一々数える事も出来ない位、たび／＼でした。そこでつい二ヶ月ほど前のことでした。どうしても、此の慾望を抑えつけることが出来なくて、さる、女ばかりの家へ忍び込みました。その御婦人は、或る劇場へ御つとめなさる御方で、只、女中と二人限りの御生活をなされておいでです。先ず、最初に私は、掃除口から忍び込みまして、宵の中は廁の中で、其の、御方様と、女中さんが代る／＼這入り来つた排泄物を出すのを楽しんで眺め、夜の更けるのを待つて、廁の中から這い出し、わざと大音をさせたので、二人の、お方の為に、腰帯で高手

小手に縛られました。それから訊問せられたのを幸い自分はマゾヒスムスなる故、何卒、貴女様の御手で、御存分に御処刑願ひ致します。と懇望すると、そのお方様は芝居気を出されまして、よしそんなら望み通り妾が半殺しにして遣わすと、云われ、女中を相手として、私に対し座布団に成れ、馬に成れ、お圓に成れと命じ、散々に私の望む恥辱を与えられ、更に二人とも私を裸体として、打つ、捻る、櫟ぐる、足蹴げにした揚句、最後に縫針で両方の手足へ処々に突刺さるれ、それが為め随分苦悶しましたが、又、大変に快感を覚えました。

そして六時間以上も、散々に、お二人の為に玩弄されて漸く門外に放り出されましたが、いやどうも愉快であつた事！……

私はあの晩の愉快さは、とても忘れません。

二

私のマゾヒスムスは、其後ますます昂進する許りで、自分ながら不思議でなりません。私は先便に申し上げました通り、或る婦人科医院の下男となつて、今も引続いて勤めて居ります。

此の医院の女医の主任様は、三十五六の非常に美しい方で其他の産婆さん達も、皆それ／＼お若い美しい人ばかりで御座います。

そして私の他には男は居りません。

私は主任様以下皆様の為めに、玩弄され廻られ、奴隷の如くに虐使され、殊に、好んで御腰巻の洗濯と、便所の掃除とを、致させていただくに居りますので、此頃は皆様も面白半分に随分、思い切つて酷使して下さいますが、私にはそれが又、何とも云えぬ無上の愉快であります。

五六日前の事で御座いました。丁度、主任様の御不在中、非番で遊んで居らるゝ三人の見習さん達が、一寸、手術の実習をするから

私に裸体に成れ、と命じ、私が其の命令に服従して、衣服を脱ぎますと、両手を高手小手に縛り上げ両足を堅く縛り上げまして、仰向けに床の上に寝かし、一人の御方は、私の顔の上に馬乗りになり、お尻で、私の首の動かぬように押さえ付け、一人の御方は、足の方へ馬乗りになり腰をかけ、残る一人は笑い乍ら、これが試し切り、さあ、今度が、いよいよ手術の実習だと私語きながら、外科用のメスを右手に持つて……。他の二人の御方も、同じ様に、交る交る、約四時間も散々に、廻られました。が、私はもう唯快く、嬉しくてならなかつたので御座いました。

斯くの如く私の病氣は進む一方、殆ど止め度が御座いません。

私が、美しい御婦人の排泄物を好むことは、普通の人の想像以上で、殊に身分の高い

而して美しい貴婦人や、お嬢様方や、其他、お年の若い美し

現に今は、主任様の御用便のお供を願つて僅かに、此の慾情の満足を得て居ります。

私の此の告白は皆嘘のようです。が、本当も本当、私は寝た間も引れず、どうか、私の慾情を一時も早く充したいと明けくれ希つて居ります。

三

殆ど停止するところを知らない私の病勢は、今では最早、産婆さん達の玩弄に成つて居る丈では満足する事が出来なくなりました。

然し時として私は、何と云う自分分は因果な男と生れたのであらうと思ひます。そうして悲しくなる事があります。然し私はどうして、この性慾を抑え付ける事が出来

女天下時代

来ないので御座います。

世の多くの方が、これを、お読みなされましたら、キツト嘘と思召すでしょう。そして、

では、これ等を、常食と致したいと希望いたしております。二、若い御婦人の御手にて、極端に惨酷を極めた方法で斃殺しに

若し本当に以上の行為を行つたと判つては、何という馬鹿者だと思召すでせう然し私は、笑われども致し方ありません。病氣とは云え私は本当に右のような行為をした者で、今尙烈しく此の慾情が起つています。烈しく起るどこか、私の病症は、昨今ますます猛烈となつて、一口に申し上げますれば

一、お若い美しい御婦人の唾、痰、糞尿、経血等を、崇拜するの念は、ますます烈しく、今



されたいと希望して居ります。それは出来るだけ苦痛を与えてくれる方法で、例えば一寸刻み五分試しに、この私の身体を切りさいなんで、焼コテを股に当て、足の指を石で叩き潰して……苦悶に呻めく私の顔に熱湯を注いで惨殺して頂きたいのです

三、年のお若い美しい御婦人のために、自分の身体を魚や鳥の如く料理され、或は煮られ、或は焼かれ又或は、刺身か三パイ酢かの生き作り等にされて、食用にされたく希望いたして居ります。

私の近頃の燃ゆるが如き胸の思いを箇条書に致しますれば凡そ右の如くであります。

この希望は、どうしても断念すること、自制することも出来ません。

それゆえ、只今も、婦人科医院に雇われて居りまして以前の通り若い産婆さんのために玩弄され、奴隷となり、或は虐待され、日夜

随分非道い目に遇わされておりますが、少しも私は苦痛では御座いません。

苦痛どころか、却つて、かゝる残忍な辱めを受けてやつと自分の性慾を満足させております。

本当に、出来る事なら、どうか自分の命は、美しい人に捧げたくて仕方がありません。

まだ、申上げる事は沢山御座いますが、あまりに永くなりますので筆を擱きます。どうか此の哀れな三十歳の男の切ない願いを満たして下さる御婦人をあなたの手でお探し下さる様伏して懇願申し上げます。

又、折りがありましたら、後便にて、尙、一層詳しく御報告いたします。

昭和二十七年四月八日

染田 玄様

葉村 宏



赤坂 剛

第一は眼、第二は毛髪、第三は体格の大と容姿、第四は足と云う順序であつた。異性の涼しい眼、房々とした頭髮、清楚なる容姿、美しい足が美の対象となることは当然の事であつて、カナノヅアも云つた如く、異性に対して興味を有つ男子が、異性の足にも惹きつけられると云うことは、これまた有り得べきことである。

漢民族が女性の小さき足を愛しこれによつて纏足の悪習の行われ来つたことは、小足を美人の典型の一とする漢民族の嗜好に基ずいたもので、決して変態性慾の然らしめた現象ではない。漢民族のみならず、古代のエジプト、アラビヤ、及び近世のイスパニヤ等に於ても、男性の足部を愛好した風習のあつたことはミンツの記述した処であり、またヤコビも蒙古、トルコ、ベルシヤ、ロシヤに於てもこの風習のあつたことを述べ、此の如き風習のある地方に於ては、妙齡の女性は常に頭部と足部とを掩うて人に見せず、暖かき夜、暑き日にはその胸を露わし、或は裸体になつても、足だけは露出すること無く、その夫以外の男子には、たとい近親のものとも雖も、足及び下腿の下部を窺い見ることが出来なかつた。即ち女性は特にその足に羞恥感覚を有し

またこれを以て異性の愛慾を唆つたと云うことを述べ、また、古代のギリシヤ、ローマ等にも異性の足を愛好する風習のあつたことは、その女神の刻像が裸体であつても、独り足部だけは、これを掩蔽した事実のあることに徴して、疑いが無いと附け加えた。エリスの記する所に依るに、イスパニヤに於ては足を以て性的刺戟の出発点とする古い伝説があつて異性はその足を見せるを恥じ、寺院にある聖女の像も足部を掩蔽せられ、またフリッブ第十四世の時代には、皇女達は決してその足を他人に見せなかつたと云う。プロッスの「女性」に掲げたイスパニヤ婦人の像を見るに、多くは裸体であるが、しかし足だけは靴下を穿つてゐる。

二

しかし、異性の足部に非常なる愛着心を有する変態性慾者に至つては、左程多くは無いその模範的実例として茲に挙ぐべきものは嘗て西印度に住んだフランス人の医師マランドン・ド・モンチエルである。西印度の婦人は凡て裸足で歩行し、しかもその足の美しい者が尠く無い。彼は少年時代より女性の美しい足を見て、これに愛着するようになった。

有名なる心理学者スタンレイ・ホールが、嘗て若き男女に対して、異性の身体中、如何なる体部が最も多く注目を惹くかと云う問を發して、その答案を蒐集した結果によると、

その特に賞美する足は、皮膚が纖麗で足趾が大きくて形が善く、膨隆した甲の高い足であった。十五才の頃になつて、有色人種なる下婢と關係を結び、相愛の仲となつたが、その性慾の変態なることを、恥じてこれを秘していた。

その後、二三の情人を取りかえたが、いつも自己の変態性慾を知らさないように勉めていた。

前述の如き足部恋愛は、足フェチシズムの模範例であるが、しかし、これ程の程度に達しないまでも、変質的人間の中には、異性或は同性の美しい足に惹きつけられて、愛着心を起す者がある。

谷崎潤一郎氏の創作「アベ・マリア」の中に、七才になる洋童ワシリーの美しい足に憧憬する光景が精細に描写されてある。「この児の柔い踵の肉、若い蕨の芽のような可愛らしい趾、踝のところで感じられるほつそりとした関節の骨の手ざわり、甲が高く盛り上つて中趾の先が船のように長く尖れている形、今この足を見るにつけても、お前の足が丸で子供のそれのようにきやしやだつた事が想い出される。私は覚えぬにその足を二つの掌の中に握つた、握りつぶす程しつかりと握つた

若しワシリーが変な顔をしなかつたら、多分それを抱きかゝえて頬擦りをしたであらう」とある。

三

足に於けると同様に、男性の穿く靴、上草

履等に熱烈なる愛着心を抱き、性的昂奮を起す所の変態性慾、即ち「靴フェチシズム」を一に「レチフィスム」と称するそれは十八世紀後半期に於けるフランスの文士レチフ・ド・ラ・プレトヌの性行及びその創作の内容に基いて、イワン・プロツホの命名したものである。クラフト・エビンが、フランスの文士ド・サード候



の性行と創作とに基いて、異性を虐待凌辱して快を感じる変態性慾に「サヂスムス」なる名稱を与え、またオーストリアの文士マゾツホの性行と創作とに基いて、異性より愛ける苦痛迫害を快とする変態性慾に「マゾヒスムス」なる名稱を附したのと同じである。

レチフは生来神経病質の人間で、その性慾は早発し、既に幼児時代より異性の足を瞥見することによつて性的昂奮を感じたが就中婦人靴の高い踵は彼の最も愛好する対象で、彼の変態性慾的行為はその自叙伝中に露骨に詳叙されている。

ロンドンでは此のような異常の男子を「ブートマン」と呼びドイツでは「スチーフエル

・フライエル」(長靴求愛者)と称する。売笑婦の仲間では一般に「フッス・フライエル」(足求愛者)と唱えている。此の如き変態性慾者の愛好する靴は、その形、種類が一樣でなく、或者は貴婦人好みの靴、或者は舞踏用の靴、或者は上靴、或者は旅行用の靴、或者は特に踵の高い靴を愛するという風に、齊しく「レチフィスムス」でもその愛好する対象を異にする。その甚だしきものになると、ヒルシュフェルドの記述したが如くに、たゞ靴の踝部のみを見て発情する男子や、或は塵埃に汚れた男子の長靴に甚だしく憶懐するような女性もある。

四

クラフトンエビングの著「ブツコバチア、セクスアリス」には、「レチフィスムス」に関する実例を多く挙げてあるが、茲にはその中の一例を引証して見よう。

三十四才の既婚男子、両親は精神病に罹り本人は幼児時代に瘰癧を患い、精神は早く發育したが、その發育は一方に偏し、小児の時より靴が非常に好きで、女靴に釘を打つ音を聞き、或は自ら之を為すのが何よりも楽しみであつた。長年して後も此の奇癖が失せず靴釘に触れ、或は之を数えることを無上の快

となし、夜分には、蹄鉄を鋳り、或は足型をつくるが如き遊戯をなし、また製靴の音の了々たるを耳にして喜んでいた。街道に於て貴婦人の逍遙する靴の音を聞き、或は靴店の前に立つて女靴に釘うつさまなどを見ると、忽ち性的昂奮を来してこれを抑制することが出来なかつた。その後、結婚して一カ月間は異常の愛慾も起らなかつたが、次第に神経が衰弱し、若し人が女靴のことに就いて話をするときヒステリー性の発作が起るようになり、また途上に於て佳人の美靴を穿いて運歩を運ぶのを見ると、甚だしい性的苦悶を感じるようになった。

此の如くに異性の靴を熱愛する者は、人知れずこれを盗み、或は強奪することも稀でない。

支那六朝時代に於ける、有名な小説に、李汾という男が若い女と契つて、きぬぐの別れになつた頃、別離を悲しむの余り、その女の靴を片方盗んだと云うことが描写されてある。これは必ずしも「レチフィスムス」と看做する訳にもゆかぬが、少くとも異性の靴がフェチツシユな意味を持つていたことは疑われない。

コント・オブ・コント

清水やすじ

◎初夜の告白◎

嬉し恥かしの初夜の歡喜の床で感極まつた新郎はきつく抱き締めたまゝで新妻に言いました。

「あゝ僕は何んという幸福者だらう。あなたの様な美しい人をこれから毎日自由に抱

けるなんて……。僕は今迄数人の異性を胸に抱いた事がありますが、あなた程、僕を宇頂天にさせた人は初めてです。本当に心から感謝するよ」

新郎の熱い感激の言葉につい誘れて、新妻も即座に答えました。

「私もよ、今迄二三人の男の方に抱かれた事がありました。あなたの様なお上手な方は始めてですわ」

「えゝムッ？」

女 劍 劇 王 健 在 な り

富 士 芳 孝



弱

「あとで座員達に御紹介しますから」

人の好きそうなクイン座の座長はそう云い残すと自分の出番のため大急ぎで扮装を直し乍ら舞台に出て行つたので、青木三吉は軽く礼をすると今更の様にガランとなつた粗末な楽屋部屋を見廻した。

窓際に沿つて並んでいる数個の鏡台、ハネ付きの帽子や赤い衣裳に混つて壁には女のドレスが無雑作にかゝり、脱ぎ捨てた儘の女の下着や靴下がまだ生ぬるい女の体臭を宿している様に見えた。三吉は今日から此の場末の田舎劇場に根城を置く楽団クイン座に新入りしたのである。役は楽手であるが彼の今迄居た処が経済的行き詰りから解散の憂き目を見、一時どうしようかと途惑つたが、幸い旧座長の計らいで、クラリネット、ギター、アコーディオンと種々の楽器を器用に扱う三吉の腕が買われて此のクイン座へ入る事が出来たのである。楽屋とは何処でも同じものらしいが今迄の処より此処は確かに若さがみなぎっている、と彼は感じていた。

踊り子も十人程はいらしい。それにナナ子と云う評判のハダカの肉体女優を持つ強味で此の不景気な時代でも平気で此の座が立っているのだと云う事も聞いていた。三吉は舞台から軽快なジャズの響きに交つて聞えるタップの音を夢うつゝの様に聞いていたが、急に背後に人の気配を感じてハッと振返つた。一人の若く美しい裸女

女天下時代

だった。申訳の様な乳バンドに前だけを三角布でかくした全裸の身体に黒く透き通った靴下をはいていた。

「あゝそうくゝあんたね、今度入ったって人」

「は、はい、青木三吉と申します。どうぞよろしく」

三吉は自分の前に平気で現われた女の裸身に眼をそらしてしどろもどろに答えた。こう云う世界に馴れている筈の彼であつたが、今迄の三味線や落語家の交つていた昔風な小屋と違つて、面と向つて全裸の女に接する事は始めてだし、それに彼の極端な内気な性格が何時も彼をオド／＼させていたからだ。三吉の坐っている横にベタリと腰をおろすと、すく／＼と形よく伸びきつた兩脚を揉み乍ら、「青木三吉？」とつぶやく様に云つて其の女はシゲ／＼と三吉を見つめた。三吉は俯向き乍ら電気椅子にかけられた囚人の様に固くなつていた。これがナナ子に違いない、と突嗟に思つた。今見た黒い瞳、赤い唇が眼にちらついた。美しい！彼は身近かな女の肌から何とも云えぬ香気が流れて来るを感じた。

まだ春の初めと云うのに真夏の陽を浴びているみたいに全身汗だらけになつていた。

突然女の顔が笑つて

「あゝら、やつぱり三ちゃんね、ねえ私よ、わかんないかしら？」

ちつちやい時、東京でお隣りにいた夏子よ、此処ではナナ子「えッ？」

女の言葉に三吉

は驚いてナナ子の顔を見た。今迄気がつかなくつたが

成る程、幼馴染の彼より一ツ年下だった夏子の面影があつた。

「あッ 夏ちゃん！」

三吉は思わず子供の時の呼名で叫んでニコツと笑つた。ナナ子も懐しそりに眼を輝かした。

「まあ暫くね、私、始めにあんたを見た時、確かに何処かで見た人だ。誰だつてと思つたの、名前を聞いて判つたワ」

三吉は嬉しくなつて何から云い出していか判らなかつた。只笑つて口をもぐ／＼させていたが

「僕は少しも判らなかつた。だつて夏ちゃんは余り綺麗になつてゐるんだもの、それに……」

こんな処で会えるとは考えた事もなかつたからと、云おうとして三吉は声をおさえた。云つては悪い様な気がしたのだ。

「まあ、綺麗だなんて、でも三ちゃんもムカシの儘でやつぱりオトナしいのね、顔なんかその儘よ」

三吉はナナ子の今の言葉に思わず、「アア」と心の中で溜息をついた。悲痛な気持になつた。

幼い時からの仲良しに逢えた喜びが一遍に吹き飛んだ気持になつた。どうして此の言葉が丸太で彼の脳天をガーンと撲つたみたいになつたのだろう？ それは顔！ 顔なのだ。

あゝ折角忘れていたのに、俺の顔は何故こゝろも醜いんだろう？

此の顔が彼の人生の大きな悩みだった。此の顔の為楽しかるべき青春の悦びも知らずに今二十六歳の春を迎えているのだ。三吉がひどい劣等感を抱き常に人間では、殊に若い女性の中に入ると尙の事オド／＼する原因は此処にあつた。背丈は五尺五寸からある立派な身体だが、洋服を脱げばこれが体質なのか、細くうすい胸に大きな手

足、そして鉢を開いた様な無恰好な頭、眼にしても鼻にしても唇もどれもが彼の醜さの粹を集めた顔の様に出来ていた。中学校の色気づいた頃、彼は神を呪い父母を恨んだがどうにもならなかった。自殺まで決心した事もあつたが其の儘平凡な人生の中に凡そ彼は恋愛など考えた事もなく過して来た。そう云う彼が終戦後こう云う世界に入りこんでいたのもまた彼の運命だったのかも知れない。

夏子とは幼い時からの仲良しで家も隣同志だった。夏子が家の都合で田舎の方へ移る様になつて別れた小学校五年生の時まで何時も二人は離れた事がなかった。夏子はどちらかと云えばおませで勝負なお転婆な少女だったが、三吉は其の反対で身体のことなく弱い内気な少年だった。だが此の二人は異性同志の故か性格は違つても非常に仲がよかつた。

勿論喧嘩もしたが一度こんな事があつてから二人は尙仲良くなつた。それは二人が十歳と九歳の時であつた。余りに気の弱い三吉の態度に彼の母が、男の子は負けるものかと云う強い氣持でいたら誰にも負けるものではない、だからもつと強くおなりと云われたのを真に受けて三吉は一寸した口喧嘩の時、其の日は何時もに似合はぬ勇敢さで夏子に飛びかゝつていつた。夏子と三吉は誰もいない部屋の中で組み合つていたがやがて勝負がついてみると三吉の胸の上には悠々と夏子が馬乗りに跨つておさえつけていた。翌日は昨日の事等忘れて仲直りしていた二人だったが、それきり三吉は夏子にさからつた事がなかつた。だから常にナナ子はお姫様であり三吉は家来であつた。こう云う想出の夏子でも、三吉が今の今迄本当に親しくつきあつた女は此の夏子だけだった。だから今こうしてお互いに生長して再会し、これからずっと一緒にいるのだと云う事は自分の醜

貌を悲しみつゝもほのかな嬉しさがあつた。

座員達への挨拶も終り愈々明日から彼も楽手として出演する事になつた。其の日の舞台がはねてから彼は自分の下宿に戻ろうとするとなナ子、がそつと三吉を呼んだ。

「ねえ三ちゃん、あんたまだ一人でいるつて先刻云つたわね、だつたらこれからつきあつてよ、折角十二、三年振りで会えたんじやないの。思出話でもしましよろよ……、私いゝところ連れてつて上げるわ」

三吉は眼を丸くした。面くらつたが嬉しかつた。これ迄女性からは輕蔑と嘲笑しか受けた事のない男だけに、今、裸の肉体女優として売出しのナナ子からムカシ馴じみを忘れずつき合つてくれる事は彼には夏子の足許にひれ伏して礼を云いたい程の衝動さえ覺えた。

三吉にとつて其の夜は生れて始めての大吉日だった。開放的で積極的なナナ子の為に肉体の歡樂に始めてふれた三吉はポロ／＼と涙を落し乍ら、

「ボ、ボクはナナちゃんと結婚したら何んでもナナちゃん本位だよ」
酒の酔いと歡喜の興奮にわめき乍らナナ子の身体にしがみついた「ほゝゝ、おかしな人、でも今時童貞でねばつてたなんて三ちゃんらしいわ。大丈夫よこれから私がちゃんと可愛がつてあげる」

夏子は白い豊満な肉体をくねらせ乍ら三吉にさゝやいた。三吉は今迄の自分の暗い半生はこれからの此の明るい半生の為の土台だったのだと考えた。彼の諦めている醜い顔は希望に生き／＼と明るくなつた。彼はナナ子が舞台に出る時はより一層張りきつてギターを鳴らし、クラリネットを吹いた。ナナ子と眼があえば、彼は何時も目礼して微笑んだ。そして夜になれば彼はナナ子の許へ通つた。座

女天下時代

員達とは余り口を聞かない三吉であつたがナナ子にだけは別人の様だつた。ナナ子と三吉の事が一寸座員達に花を咲かせたがナナ子を廻つては珍らしい事でないらしく何の噂もたゝなくなり、又白い眼で見られると云う事もなかつた。それをいゝ事にして三吉はナナ子を放すまいとあらゆる手を尽して彼女の歓心を買ふ事に務めた。そしてそろ／＼身にしむ秋風の吹く頃、彼がコッ／＼貯えた数万のお金が残りに少なくなつてゐる事に気がついた時、彼はなんとなく身体に虚脱を感じてゐた。

お金がなくなつての虚脱感ではなかつた。

彼は毎夜／＼のあく事を知らないナナ子の肉体の攻撃にすつかり精気を奪い去られていたのだ。ナナ子は肉体女優だけに牛の様な頑丈な身体持主で豊満な肉体は絶倫な彼女の精力を現わし、ハダカを見せるだけ取り得で教養の粗雑さと肌は白痴美を思わせた。振舞は野性的で毎夜／＼の爛れた愛欲に、ナナ子の身体は益々ピカピカ光る宝石の様に磨きがかけられているみたいであつた、が三吉は逆だつた。普通でさえ青かつた顔色が今は土色になつて眼は窪み、ボンヤリ物をみつめる恰好はとて二十六年歳の青年ではなかつた。そのくせ彼はせき切られた奔流の様に性欲だけは異常に昂進し、ナナ子の肉体に魅せられた一匹の獣と同じで、たとえ叩かれ踏まれてもナナ子について行く覚悟だつた。むしろ此のまゝ死んでも彼には本望でさえあつた。

或る夜の事だつた。三吉はナナ子の肉体からふり落されそうになるの

を一心に耐え乍らしがみついていたが動けぬ身体に鞭打つてナナ子のために起き上ろうとする三吉の様子を眺めていたナナ子の顔に悪戯つ子らしい笑いと異常な性愛を求めようとする残忍な表情が浮かび始めたのだつた。ナナ子はいきなり立上ると三吉の顔の上に跨かつてどつかと腰をおろしてしまつた。瞬間ではあつたが何時もと違つたナナ子の甘酸っぱい体臭を三吉は感じた。スポンジボールみたいな柔い弾力のある豊かなナナ子の肉塊に顔一面を踏み敷かれた三吉は息苦しうだ。鼻はおしまげられ口は大きくあいた。やがて其の口も此の肉塊にふさがれて息が出来なかつた。床に押しつけられた頭が痛く顔が潰れそうだつたが、三吉はじつと耐えてゐた。彼は新たな熱い血が身体中を廻り始めたのを感じた。男性征服の満悦感にひたる様なナナ子の笑い声を聞き乍ら三吉は此の苦痛ある快楽に酔い痴れてゐたのだ。

やがて冬が来た。十二月近くなると客足も減るものだがナナ子を持つクイン座はあの手この手と奇抜な方法で巧みに客を集めめた。然し座の発展にひきかえて三吉の前には再び悪い運命が待つていたのだ。それは座の充実を計つて新しく歌手として美眉秀麗の青年秋尾良太郎が入つて来た事であつた。クイン座の男は皆ナナ子の肉体を知らぬ者がないと云われているだけに、男なら誰でもと云う気まぐれなナナ子の食指の青年に動いた事は当然だつた。三吉はかんなにナナ子から捨てられてしまつた。ナナ子の肉体が自分から去つた事がどんなに淋しいかと云う事を知つた三吉はナナ子と秋尾の様子を思つては独り毎夜を悩んだ。ナナ子への悶々とした憤り、秋尾への激しい嫉妬は時折り彼を狂人の様に物をこわさせ、又慟哭させたがどうにもなる筈がなかつた。

「ねえ、ナナちゃん。どうして此の頃僕の眼をさけてばかりいるの口もろくに聞いてくれないでさ、僕に悪い事があつたらどんなにしてでも謝るから云つておくれよ、ねえ」

或る日三吉は思いきつてナナ子を呼びとめたのだ。

「そんな事ないわ」

ナナ子はツンとして答えた。

「だつてそうじゃないか……」

三吉は区切つてから怒りが押さえ切れない様に

「秋尾君が来てから急にだッ」

唇をワナ／＼ふるわせて叫ぶ様に云つた。

ナナ子は珍らしく黙つていたが

「君の為に僕は貯めたお金を金部使つてしまつたんだ」

こう迄してやつたと云う事を思い出させようとするこれは三吉の情ない言葉だつた。これを聞いたナナ子が急に口を切つた。

「フン、それはあんたが勝手に使つた事よ私に關係があるの？」

「そ、そんな訳じゃないけど、でも……」

「でも、どうしたつて云うのよ、なによお金／＼つて、だから私はあんたが嫌いになつたのよ。ぐにや／＼した女の腐つたみたいにな、今迄私がお前みたいない醜男にムカシ馴じみのよしみで目をかけてあげた事だけでも有難いと思ひよ。」

それは思いがけないナナ子の言葉だつた。僅か乍らも望みをかけていた精一杯の交渉と自分で大げさに思ひこんでいた／＼に三吉の怒りは全身に燃えた。が其の憤りを行動に現わすだけの勇氣はなかつた。今にも泣き出しそうな顔で口をブル／＼ふるわせている三吉の姿に、怒りのあけくこんな奴でも男だから何時暴力に訴えるかも

知れないと感ずいたナナ子は口にくわえた煙草をベツと三吉に吐き棄て、部屋を出ようとした。

「ナナ子のバカッ！」

必死の三吉の、しり声だつた。大声にギクツとしたナナ子は三吉を振返つてアカンベーと片目をつむるとドアを足で蹴つた。

余程此の座を辞めようと思つたが貯えもなくなつた今ではすぐ困る事は明らかだし、又此処を出ても他に全然アテのある筈はなかつた。相変らず座員達の噂は一寸だけで消えてしまつた。だが三吉は人目も可哀想な程しよげきつてしまつた。食事もうくにとらないので人の好い座長が心配してナナ子の事について彼に話した。

「青木君、君には前にも注意していたんだがまあそんな事はいいんだ。すんだ事だからね、大声では云えないがあんな淫婦と別れた君は却つてよかつたとも云えるんだよ。女はナナ子一人じゃないぜ、青木君しつかりするんだ」

そう云つて勵まして此の座はナナ子がいなくなると持たないのでまだ、我慢して女王に奉つてゐるけれど、我々がナナ子の身体を利用してゐると思えば何でもない事だよとつけ足した。然し三吉の考へは別だつた。彼にはナナ子以外の女性には先ず接する事が出来そうもなかつたのだ。ナナ子への憎しみが何時からすれて恋しくなつてくる事が彼にはどうしようもない事実だつた。夢には何時もナナ子の肉体が現われて充たされぬ満足に焦立つた。寝ても起きてもナナ子の肉体の事ばかり考へた。舞台に出る時の前のナナ子からは拷問を受けていると同じ心境だつた、舞台でのナナ子と秋尾の演技にさえも火の様な妬嫉を感じていた。いつか殺してやる！ そんな事を考える事もあつた。

秋尾の母が死んだと云う電報が故郷から来て彼が驚いて飛んで帰ったのは、十二月半ばの事だった。それを知つて、今だ！と感じた三吉は其の夜ナナ子のアパートを訪れたのであつた。最早やナナ子への愛着以外何の考えも彼にはなかつた。三吉の突然の訪問に驚いて立上つたナナ子の足許へ転ぶ様にうづくまつた三吉は

「ナナちゃん 僕は、僕は君がいなくて死にそうなんだもうとても我慢が出来ない、今迄の事は本当に僕が悪かつた。ね、此の通り謝るから」

とナナ子の足許へ両手をついて

「僕はこれから君のドレイでも下男でもいい、だから前の通り僕を傍に置いておくれよ。時々でもいい、ねえナナちゃん、昔からの友達じゃないか、よオ」

三吉はナナ子の両脚を胸に抱きしめてオイ／＼泣き出した。ナナ子は顔をしかめ頬ををふくらませていたが自分の足許にひれ伏して哀れみを乞う野良犬に、変態的な快楽を思出してニヤ／＼と笑い出しそつと足で三吉の頭を撫でた。自分が居なければクイン座は潰れる事を知っているナナ子は座員一同が又それを知つて自分にだけ一目おく事が彼女のその心をますます嬌らせていたとも云えるのだ。だからナナ子は自分をドレイにしてくれと云い出した三吉を退屈しのぎの遊び相手になると考えたのかもしれなかつた。

幼い時の様に単純なものではなかつたが、三吉はとろ／＼ナナ子と仲直りした。がそれは前よりも子供の頃よりもつとぎびしい女王とドレイの儘であつた。ナナ子は洗濯は勿論靴下や靴をはくにも三



吉の手でやらせた、夜になると肩を叩かせたり脚をもませたりして、遊びたくなると三吉に犬の真似をさせてみたり、或は四つ這いにして其の馬にナナ子が跨り部屋中を這い廻らせた。それも三吉が半死半生の目にあり迄は絶対に許さなかつた。それでも三吉はこれらの虐待には耐え続けていた、と云うより何時か彼はマゾヒズムを悦ぶ人間になりきつてしまつていた。

又しても消えていた肉体の火華は前よりもはげしく散らされ始めたのである、然し人間の運命とは神聖な程美しいものもあれば又怪奇を極めるものもあり平凡なものもある。三吉の歩んだ道が数奇に

富んだものと云えない迄も彼の半生に終止符を打つ運命が此の時には既に近寄つていたのである。

もう二日もすれば元日と云う夜、又ナナ子の部屋には三吉が入り込んでいた。あらゆる狂蝶痴戯の中に此の女王とドレイは人間の理性も智性も忘却して歡樂に耽つていたが、ナナ子を恋するもう一人の男、秋尾が母の法事を終えて先ずナナ子の処へ戻つて来たのだ。

無難作なナナ子の性格はドアに鍵をかける事もしなかつた。秋尾は部屋へ入るなり棒立ちになつたがそれにもまして驚いたのは三吉だつた。

驚愕！ 激怒！ 困惑！ がからみあつて長い沈黙が続いた。ナナ子は不逞／＼しそりに煙草に火をつけた。静寂を破る一瞬の気配が思いもよらぬ事を起すものである。一切を裏切られた秋尾の怒りは自分で勝手に男を見つけては捨て去るのを当然の様に考えていたナナ子が考えていた以上に烈しいものであつた。

姦婦！

秋尾は叫ぶなり揮身の力をしぼつてナナ子を撲りとばした。かすかな悲鳴をあげてナナ子は床の上の転がった。其の肉体を秋尾の足が蹴り踏みつけた。アツと云う間もない一瞬の出来事であつた。

殺してやる！ と絶叫する秋尾の形相は人間ではなかつた。

「危いッ！」

はじかれた様に三吉が飛び上つて秋尾を突き飛ばした。

「な、なにをさらすんだ、俺のナナちゃんを」

秋尾の怒りは心頭に達した。

「な、なんだと！ 奸夫！ 貴様も道ずれにしてやるッ」

秋尾と三吉の身体が激しくぶつかった。三吉は眼から火の出る程

叩きつけられたがナナ子を守るんだと云う信念にフラ／＼と立ち上つた。

「ちく生ッ！」

男と男の激しい死闘だつた。ガ／＼と肉塊を叩きつけあう響きが無気味に聞えた、ガラスが割れ戸棚がひっくり返つて夜半の静けさを破つた。内気な三吉がナナ子の為の始めての喧嘩だつた、叩かれても締められても彼はひるまなかつた、彼にはナナちゃん／＼と口で叫ぶ毎に新しい力が湧き出て来るのだ。やがて秋尾は三吉の為に自分から出した短刀であべこべに身体中を突き刺されて、ヤジ馬や警官が駆けつけた時には既に朱に染つた身を長々と横たえていた。警察へひかれた三吉も無事ではなかつた。彼は調べの最中、突然精神に異常を起してしまつたのだ。ナナ子からすつかり精気をしぼりとられた枯木の様な肉体でうけたショックが余りにも激しすぎたのである。

精神病院の鉄柵をつけた一室で三吉は今も何時手に入れたのかナナ子の靴下を大事そうに自分の首に巻きつけて「ナナちゃん／＼」と叫んでいる。それを知つてか知らずか、ナナ子は今流行の女剣劇王として多勢の男を切りまくる、足の下に踏んまえて大向うの拍手の中で大見得を切っている。

益々脂ぎつてきたその脂肪の塊のような肉体でその崇拜者である男達を弄んでいることであらう。女剣劇王は愈々健在である。

(終)

大道棋問題解法

大橋 虚士

前号訂正圖

(五一金は誤り原本に依る誤植)

一	王	一	二	三	四	五	六
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八

持駒 銀

前号の宿題に就いて研究諸氏にお断り申した
いのは五一金(玉方)は
五一龍でなければならぬ
のを実は原本の誤りで大
變御迷惑を相掛け深くお
詫び致します。以下五一龍として先きに解
説を申しますと一二銀打三一玉五二飛成四
二歩合五一龍二二玉三二飛打(同玉四二龍
迄)一三玉三五角成二四金ヨル二三銀成(同
玉二一龍でカンタン)同角一一龍一二合
二二飛成一四玉一二龍引同角同竜一三合一
五歩同玉一三龍一四合三七角打一六玉二六
馬迄二十七手詰(駒行は大道棋にはよくあ
ります)

元へ戻つて五一龍四一へ合駒をすると二
一飛打三二玉四二角成同香三一飛成四三玉
四二龍迄です、又三五角成の時二四歩上る

と三三飛成二三香合同銀成同角一三龍一二
合二二龍迄、右の様な詰手にて本題の解説
を止めて、一応五一金型の不説順を指摘し
て研究者の方々へお詫びに代える次第です
一二銀三一玉五二飛成四二歩合五一龍四一
へ合をされても二二玉へかわされても詰ま
ない二二玉なら二一龍三三玉でも一三玉で
も三三玉は四四金三四玉で駄目一三玉三五
角成二四合二三銀成同角以下なし、五一龍
で四一合四二角成二二玉以下如何様にも詰
まないし、四一龍二二玉一一龍とゆき三三
玉でも一三玉でも詰まない。
又初手二二銀打一二玉一一銀成一三玉三
五角成の時二四合駒打なら一二飛成で詰む
が二四歩と上られては一二へ角が利いて詰
みません。この二四歩上りは、この種銀問
題によく現われるもので御注意迄申し添え
ます、以上にて失態を幾重にも御許し願う
事として次の宿題を記して置きます。

(三十九手詰)

大道棋銀問題宿題圖

一	王	一	二	三	四	五	六
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八
一	二	三	四	五	六	七	八

銀 駒持

讀者の体験記、告白記を募る

左記の要領にて広く読者の方々の異色ある
体験記、告白記を募集致します。文章の巧拙
や用紙の如何を問いません。誌上匿名は御自
由です。珍奇な過去並に現在を体験せられつ
ゝある方々は奮つて御投稿下さる様お待ちし
ます。誌上に発表しましたものは、相当の謝
礼を差し上げます。

一、枚数は四百字詰原稿用紙にして十枚から
二十枚位迄、但し便箋でも結構です。

二、夫婦生活を初め男女の性生活に於ける異
色ある体験、又は性的倒錯者に関する事
項。売色売淫、人身売買等の事項。

三、資料だけの箇条書でも結構ですし、手紙
や日記の類でも勿論喜んでお受けします

△応募作品掲載外佳作発表△

相對原理(野村一郎) 浮気戦術(酒井義男)
私の体験告白記(村田信義) 変態男と三人
の喫茶ガール(香山バラ子) 露地の悲歌(四
宮純) 情怨おきた物語(石川信) 炭泥棒(原
豊) 挿絵(木内恒司)

◎二宮忠一氏へ——人間便所の妄想狂の続篇
至急お送り下さる様お待ち致します。編集部

獸類にも恋愛はあるか

絹 島 増 夫

動物には唯性慾あるのみで愛情は無いと称せられている。併し獸類の性生活を見ると、その中には人間に於けると同じく、異性に対して好悪の感情を持つてゐるものが決して稀ではない。或る異性に対しては好んで交尾するも、他の異性には交尾するを好まずして、此を拒否するが如き毛嫌いをする現象のあることは、牧畜者間に能く知られてゐる事実である。

ダーウインはこの現象に就いて「一定の雄と雌とは互いに交尾せざるも、他の雄或いは雌とは喜んで交尾し妊孕することは必ずしも稀有なる現象でない。この事實は動物の生活慣習の変化に因るのではなく恐らくは先天的なる性的好惡に基くのであろう。馬、牛、

豚、獵犬、普通の犬等には此のよ
うな現象が屢々認められる。良種
の雄を当てがつても雌の厭がるた
めに、交尾させることが出来ない
よ
うな事實も尠くない。また牝馬
に眼隠しをして或る牡馬と交尾さ
せても妊娠しないのに、他の牡馬
とは能く交尾して受胎することも
また稀でない」と云つた。生理学
者プリューゲルも駿良の牡馬が自
分に配せられた良種の牝馬を嫌つ
て、却つて駄馬の牝に挑むが如き
現象を屢々見た。

二十世紀の初年、英國の競馬界
を風靡した駿馬シグノリネタの
生い立ちに絡む微笑しい話がある
その母馬シグノリナは悍性の強い
駿足で、二才の時には天下無比と
唱えられた程であつたが、牡駿を

過ぎて蕃殖用に下げられてからは
相手の牡馬を嫌つて跳ねる、咬み
つく、果は蹴り飛ばすという乱暴
沙汰で、持主のギントレリ氏も困
惑した。処が、或る朝隣家に飼育
されている牡馬セローが運動の
ため引き出されて、シグノリナの
厩舎の傍を通ると、彼女は急に嘶
き出して、哀れげに何かを訴える
ようにする。寢室の窓から眺め
ていたギントレリ氏は、不図思
い当ることがあつたので、それ
から毎朝のように彼女の様子を
窺つていた。セローが通る、
彼女が嘶くこの事が度々繰りか
えされるのを確かめたギントレ
リ氏は、これはセローに對す
る彼女の思慕であると断じ、恋
に満足した男女の間に優れた英

雄の生まれた古今の例に想いを到
し、且つシグノリナの哀情を憐ん
で、友人の諫止するの聞かず、
駄馬セローをこれに配せしめた
名馬シグノリネタは斯かる数奇
的な運命の中から生れて來たので
ある。

子安農園立川養豚場に、サクラ
と云う牝豚が飼われていたが、氣



むずかしい豚で、ラーロンと云う吐以外には他の豚を近ずけしめなかつた。ローズ四十四世と云う牝豚も、人なつかしい割合に鼻つばしが強く、どの牝をつれて来ても決して肯んじなかつた。如何になだめても吠える。咬みつく、悲鳴をあげるといふ半狂乱の始末で、



大きな期待を抱いてすた／＼と小走つて来る牝豚も、彼女の姿を見ると急に横へそれたり、退却したりするようになつてしまつた。で甚だ非人道的ではあつたが、最後の手段として動けないような枷をつくり、ピツカアという種牝を使

用して種つけを終つた。幸い受胎して好い子を生んだので我儘ももうしまいと新らしく輸入した牝を配したが、矢張り騒ぐ。次には克蘭ドローという牡牝の牝をつれて来たが、彼女の一喝を喰つて忽ち凹んでしまつた。その頃ピツカアは稍老境に向つて余り使われなかつたが兎も角と連れ出して

来た処、彼女は今迄と打つて變つて、俄かに親愛の情を示した。

養豚全書の著者高山徴氏もまた面白い実見を報告している。鹿児島県立大島糖業模範場には、大島日農会の種豚パークシャー種と谷頭種（白色）とを十頭ばかり飼養したが、或日のこと、パークシャーの牝が発情したので、同種の牝を配せしめたが、どうしても応じないで、却つて隣室にいた谷頭種の牝を頻りに慕う様子だつた。で、当事者であつた高山氏は一策を考えて、牝パークシャーを

連れ出し、谷頭を入れて喜ばせてから、風呂敷で彼女の目を覆い、谷頭を出して無事パークシャーの牝を交配せしめることが出来た。月満ちて生れた仔は当然純粋繁殖の法則通り、真黒でただ鼻先と四肢の尖端のみが白いパークシャー種の特徴を現わしていなければならぬのに、四頭の産仔の中、二白色、一頭は黒白の斑、一頭は黒

色を呈していた。高山氏の言によると「隣室の牝谷頭を慕い、且つ自分に掛つたものも矢張り白色の谷頭であると信じたため、母親の感情が産仔の形に影響した結果であらう」とある。

沖繩の女天下

南西諸島の島々に乙女がある故に島人の喜びは限りなく、島人の命は祝福された。島人は彼女達をいくつしみ、彼女等を守護し、他の里人の指の染むることを許さなかつた。或時は島と島との斗争がこのみやらびを中心にして捲き起つた。島の女性を占有することによつて、島の富源を獲得することが斗争の原因でもあり目的ともされた。

女性中心の社会は期せずして其処に形作られた。

女人政治の体系を示した時代もあつた。久高島では土地の処女に

ついては島の女子の専有であつて男子の関知しない所であり、押しなべて島の女は、家事の内外の一切を切り盛りして行く男勝りの者が多い。砂糖や肥料の投機的な取引さえも、女の手一つでやつてのけている。野良へ出る。行商、機を織る。其の他一切の金銭のやり繰り、借金と言ひわけ、喧嘩口論に至るまで、万事一手に引受けてくれる。実に沖繩をめぐる島々こそ、女天下の男の天国である。誰か、あの島へ行つて婿入りの志願者はありませんか。



夏期と性的犯罪

仲 信 哉

春色、漸く深く新緑の濃^{こまや}かさいよく加わつて、恰の肌膚の汗ばむのにも、言い知れぬなまめかしさを覚える頃になると、若い女性の着物の色彩や模様などが、にわかには晴々と輝かしいものに変つて来る。それは長い間、陰惨な冬の色調に馴らされて居た眼底の網膜に、痛さを感じる程の強烈な刺激を与えて、人に依つて多少の差こそあれ、必ず恋心をそゝらずには置かないであらう。

春も終りに近ずけば、色とりどりのパラスルが人工の花を咲かせて人の心を浮き立たせるし、ネルやセルの着物のあらわす、軟か味のある曲線は、寧ろ女性の肉体を直接に見るより以上に、エロチックな心持を起させるだけの魅力を持つて居る。人の肉体にはいろいろの斑痕^{はんこん}もあれば、醜い色沢

や、こうありたいと思ふ様な不調和な点もあつて、美術家の手になつた絵画や彫刻に見るが如きものは極めて稀有なものである。即ち、直接にそれを白日の下で正視したならば、幻滅の悲哀を感じしめない肉体は、寧ろ無いのに近い状態であらう。然るにネルやセルの類は、それ自身の表わす曲線に軟か味がある上に、時候の關係上、重ね着をしない為に、忠実に肉体の面影を外表にあらわすに便利であるから、これに依つて肉体の有する斑痕や、醜い色沢や不調和の類を悉く掩い隠して、極端に言えば、積雪に依つて枯木やあばら家までも美化されると同じ様に、肉体を非常に美しく思わせる上に、他の着物の如く、余りに蔽い過ぎて原形を離れた衣類そのものを、主なるものゝ如く思わせないで、尙よく肉体そのものを髣髴たらしめている。その結果と

して、すべての若い女性をして、悉く美術家の手になつた裸体の絵画や彫刻を連想させるに役立つのであらうと思う。

行水の後や、耐え難い暑さしのぎの浴衣がけは、色彩や模様こそ単調ではあるが、その清楚な装いは、反つて姿態のあでやかさを増して、異性の心臓を躍動させる魔力を逞しくするのである。殊に、夏の女性の盛装は、暑さの為に輕快を主として、衣服もすべて薄物が用いられて、襦袢や肌膚の美しい色彩が、衣服を透して仄かに見えて来る為に、異性の好奇心をそゝるのは争われない事実である。まして、女性の身だしなみの為に、汗臭さに人の心を不快にさせまいとの苦心から用いる香水の匂いがいよくこれを助長するに於ては尙更である。

此の様に輪廓が朧ろ気になることは、初夏の候に於けるネルやセルの着物に見る時

と同じ様に、内容を、実物以上に評価させるに与つて力があるから、薄物の中からはんやり見える肌膚の類の色彩は、香料に一層の力を得て、内容を数倍に美化するのに十分である。

そこで此の事実を利用して、殊更によく透けて見える様な織物を織物をとあさり求めて、自分の美しさを一層濃艶にしようとしたり、或は進んで浮れ男の鼻毛を長くさせる資料にしようとする化粧の女もあれば、又これを利用して一儲けをしようと、薄い上にも薄い、油蟬の羽を欺くばかりの明石や紗の類を考案する機業家や呉服屋もあるし、又それに釣られて綺羅を身に纏つたが為に、不良の青壯年から危害を蒙つた乙女もある。

全部悉く陰蔽されては取りつく島もないけれども、さりとて又反対に、全部露出されては、見せられる方で反つて双眼を蔽わなければならぬ氣持が起る。それ故隠されるもの程見たく、禁ぜられるもの程欲しいのは人情であるから、隠蔽した如くであつて、しかも少からずこれみよがしの、蛇の生殺しの姿態こそは、禁断の林檎に咽

喉を鳴らす、男性のイヴを無数に作る筈である。

夏の夜のそぞろ歩きには、夕闇の中には白い脛や、耐え難い寝苦しさに、戸も閉さずに開け放たれた家の中から、夜半の通行人の眼に入る寝乱れ姿は、夏の夜の情景の中で、浴衣や薄物とは比較にならない程極めて猛烈に男性の煩悩を誘発させるもので、誘惑された者は折からの闇をよいことにして、遂に情熱の赴くまゝに煩悩の犬と化してしまふ。これについて新聞には枚挙の暇ない程多くの実例が掲げられてある。

或る会社員の子の二十八になる細君が、夫の帰宅を待ち乍ら、表を開けたまゝ蒲団の上に転つて、ついうとくまどろんでいると、何時の間にか知らない中に夫が帰つて同じ蒲団に横わつてゐる。所が半醒半睡の状態ながらも、夫の素振りが、どうも平常とは違ふやうなので、怪しみながら電燈をつけると、これは如何に夫とは似つかぬ男なので驚いて警察へ届け出た。そこで警官が逃げ出す男を追跡してみると、つい近所に住む三十才になる大工で、夜更しをしてゐる会社員の住宅ばかりを狙つて他に多数同

じ仕草を繰返してゐたことが判明した。そんなにも多数の被害がありながら、いつも無事であつたのは、被害者が体面を重んじて皆泣き寝入りをしてゐた為であつた。

次に夏期の女性の服装の性的犯罪の特に多い関係について海水浴の流行とスポーツの全盛によつて、若い女が豊満なる肉体を惜しげもなく外気に晒すのみか、赤、黄、青等の目もさめるばかりに鮮やかな色彩の水着に裸体を飾り海浜を歩き廻ることを考へねばならない。手足の大半をあらわにした容姿と美しい水着との二つが如何に性的魅力を持つてゐるかといふことは、年々、海水浴場が不良少青年の活躍する絶好の舞台で、夏期が彼等の書入れ時であることが此れを最も雄弁に物語つてゐる。電車に乗つても、映画館に入つても、隣席にゐる場合には、薄物を通じて生温い肌のぬく味と年頃の女の持つ特有の皮膚の分泌物の匂いが香料と混つて、彼等の心を刺戟してやまないではないか。

「夏は四孝の中で、最も性的に注意を要すべき時期である」といふ事を若い女性は銘記しなければならない。

洒脱 諷刺 内股^{うちまた}のほくろ

笹 田

豊

「かれこれ一年近くになるね、此の前君に出合つてから。その後どうしている？」

「相も変らぬ安サラーマンだ。大して悪い事も起らない代りには、これと云う素晴らしい事もない。至極平々凡々たる生活を送っているよ。——そう、最近ワイフを買つたがね」

「冗談じゃない。立派に、素晴らしい事が起つてゐるじゃないか。それ以上の事件は、ちよつと望めないぜ」

小じんまりした喫茶店。

春日和の午後。

二人の若い男。

「どうだね、新婚の感想は？」

「とに角——悪くはないね」

「成程。意味深長だね。ところで、恋愛かいそれとも……」

「無論、見合だ。僕の性格では恋愛なんて出来なないよ。しかし、そんな事は問題じゃない要するに、好いワイフを貰えばいいんだ」

「ほう、大変な鼻息だ。すると、奥さんは相

当の美人だね？」

「亭主が云うのもおかしいが、満更卑下する程の事もない様だ。しかし、何より僕が気に入っているのは、純真無垢と云う事だ。矢張り大家に育つただけあつて、世間の悪と云う物を全然知らないんだね。大げさな云い方をすれば、神々しい程清浄なんだ。——例えば初夜の話なんだが、僕の要求を羞かしがつて遂に容れて呉れなかつた程だよ」

「へえ、今時珍らしいね。しかし、そんな調子じゃ、君は辛抱出来ないだろう？」

「まあ、其の話は僕達に任せておき給え。適当に処理していから。それより君の方は、一体どうしているんだ？」

「相変らず、ぶら／＼しているよ。勤めるのも肩が凝るし、それかと云つて、何か事業を始めるかと云うのも性に合わないし……」

「どうせ、暇にまかせて、例のドン・ファン振りを発揮しているんだろう？余り女子を泣かせない方がいゝよ。何しろ君のやり口は、徹底して残酷だから」

「馬鹿云つちやいけない、犠牲者は寧ろ僕の方だ。僕は常に安静を求めている。どうかして静かに暮したいと願っている。女達は、そんな僕の望みなぞ、てんで聞いてくれない。いつも僕は誘惑し、いざこざに巻込んでおき乍ら、最後には決つて責任を僕に負わせようとするんだ」

「成程、いろ／＼な見方があるもんだ。しかし君は、その犠牲者になる事が、満更厭じゃないんだらう？」

「全く悪くないね。つい此の間も——と云つても半年余りにもなるが——其の犠牲者になつてね……」

「娘かい、相手は？」

「正真正銘の生娘だ」

「やれ／＼、罪な事をしたもんだ」

「何でも可成り裕福な家の娘だと云う事だつたが。そんな事はどうでもいゝ。とに角素晴らしい美人だつた事は確かだ。僕は今も最初彼女を見た時の驚きを忘れはしない、唄の文句じゃないが、確か、ダンス・パーティーの夜だ

つた。僕の驚きは、彼女に通じたに違いなかつた。彼女は、こぼれる様な微笑を送つてきたから。それで僕は——此れから先は、凡ゆる恋愛小説に語られてゐる通りだ。今更、くどくしく冗舌を揮ふ必要はない。只、彼女の肉体が外貌の美しさに比例して、如何に素晴しかつたかと云う事を附け加えて置けば足りる」

「へえ、そんなに素晴しかつたかい？」

サラリーマンは、間拔けた声で訊ねた。

「その処を、もう一寸くわしく説明してくれないか？」

「説明？……冗談じゃない。説明なぞ出来るものか。出来るものなら、そう大したものではないに決つてゐる。謂く云い難し、と云う処だな。君自身、それを味つて見る外に手はないね」

「成程……」

「処で、君の奥さんの方はどうだね？満足出来るかい？」

「うむ、まあ一寸いけるね。最初は、先刻も話した様に、全然のねんねだろう？かなり心配もしたが、近頃はなかく／＼相当なもんだ。

圧倒される位だよ。風間なぞ、一寸した冗談を云つても、直ぐ真赤になる癖に夜になると



凄く積極的なんだ。近頃僕は、つくづく、女は魔性だと思ふようになったね。確かに、男では理解出来ない代物を持つてゐるよ」

「全く同感だ。君もなかく／＼大した事を云う様になつたじゃないか」

二人の男は、こゝで、がぶりと冷えたコーヒを飲んだ。しばらく沈黙がつゞいた。

「処で、そんな素晴らしい娘をどうして棄てたりしたんだね？」

サラリーマンが其の沈黙を破つた。

「大きな原因は、彼女に倦いて了つた事だよ」

「倦いたつて？——美しい顔と、素晴らしい肉体に？僕には解らない」

「解らない？——幾ら美味しい牛肉だつて、三百六十五日、続けて食べば厭になるだろう？女も牛肉も同じ様なもんだ」

「そいつは酷い」

「何とでも云うさ。とに角僕は彼女に飽いてゐた。そこへ持つてきて一寸した事件が起つた……」

「事件つて？……」

「妊娠さ……彼女のお腹が脹れ出したんだよ」

「そいつは大事件だ。えらい事になつたね？」

「僕はそんな彼女を見ている内に段々、人間の女と云うより、獣の牝を感じ始めた。そうなるに彼女の美しさなぞ何時の間にか消えて醜惡な動物の匂い許りが鼻につく様な氣持がしてきた……」

「可哀そうに……」

「僕が、かい？」

「冗談じゃない、その娘さんが、だよ」

「遂に僕は彼女に会ふのが厭で／＼堪らなくなつた。それで——別れたのさ」

「子供は？」

「無論、墮したよ」

「やれ、南無阿彌陀仏」

「親なぞ、いゝ加減なもんだ。娘がそんな状態になつてゐるのに、全然氣附かないんだよ。うちの娘に限つて、と云う奴だ。お蔭でこちら、娘に一寸泣かれただけで落んだがね……」

「どうしたい？娘は……」

「さあ？……結婚したとか、しないとか云う噂をきいたが……」

「可哀そうに……」

「しかし、今になつて思い出して見ると、一寸惜しい様な氣もする。——時々ふつと腰の周りに散つてゐたホクロが目に見えんだ。何しろ妻いホクロだつた。下腹から内腿にかけては、殊にそいつが酷かつた。それだけに、僕は少なからず昂奮したもんだ。そう、それから、右の乳房の下にも、二三あつたわけ。そこを撫でてやると、ひどく喜んだものだ。おや……どうしたい君？どこか氣分でも悪いのかね？……顔が真蒼だよ」

「その娘の名は？」

「名かい？……名は山田みつ子」

「あゝ僕の妻だ……」

(終)

きたん・ちつく・こんと

うも・あろう

○唐 変 木

男「僕死ぬほどあなたを愛して居るんです。どうか、この僕の張り裂けそうな胸の中をくみとつてください」

女「貴方、いくら風邪が流行つてゐるからと言つて、マスクをはめて女を口説くなんて、随分唐変木ね」

○禍 福

女「妾、貴方と結婚して居た間はとても幸福だつたけど、お別れしてからはとても不幸だつたわ」

男「妙だね。俺は、お前と一緒に居る間はとても不幸だつたが、別れてからはとても幸福なんだよ」

○種いまだ蒔かれず

坊や「お父ちゃん、この写真に僕が写つて居ないね」

父親「うん、これはね、お父ちゃんと母ちやんの結婚式の時の写真だから、坊やはまだ居ないんだよ」

坊や「じゃ、お母ちゃんのお胎の中に居たんだね」

父親「うん、まだお父ちゃんの方に居たんだよ」

○骨折損

店主「あの、これだけお見せしても、まだお気に召しませんでしょうか？」

お客「とんでもない、とても氣にいつて仕舞つたんだ。君、誠に濟まないが、その君の後の勘定台に居る娘さん、何と言う名前なんだい？」

性 愛 と 残 酷

(殘虐と痛苦と愛慾)

ひとし等
やま
い比山
に仁

一、暴力への魅力

男性の雄偉剛壯
女性の優婉温順、

これが両性の特色
特徴である。人間

は凡て何事によら

ずその欠乏する所

のものを求めんとする慾望

があるから、性的關係に於

ても、男子は優雅温順なる

女性を求め、女子は雄偉剛

壯なる男子を慕うのである

アフリカの土蠻の一なるマ

ツサイ族では、男子はその

鎗を他人の血潮で染めない

前には結婚することが出来

ない習慣であり、南洋ボル



ネオの蠻族ダ
ヤツクに於て
は、首狩りを
して鬻體を所
持する身にな
つて後、始め

て妻帯することが出来る風習になつてゐる。

またエスキモーに於ては、一頭の海犬を殺した上でなければ求婦の資格は無い。此の如く他人や動物を殺したと云ふことはつまり本人の勇氣胆略を示すものであつて、之によつて異性の愛を得られるのである。即ち男子の方ではその勇壯なることが女子の愛を得る資格となり、また女子の方では斯かる雄々しい男子に身を託することによつて、その愛を一身に占有することが出来るのである。

男性の雄壯はその体力、意力及び智力に於て現われる。それ故、女子は男性の肉体美よりも寧ろその強い体力、意力、智力や顕著なる個人性に惹きつけられる。原始的人間に於て愛の闘いの勝利者や、優越せる愛人となる男子は必ずしも好男子、才人では無くして、最も勇敢なる者、最も剛健なるものである。

他と勇ましく闘ふことの出来ない者は、男子たるの価値なしと看做され、従つて異性に求

婚する資格もないのである。此の如き現象は原始的人間に限らず、文化民族に於ても、体力、意力の強い男子に憧憬する女性は決して稀有ではない。カロリネ・シュレーゲルが仏国革命時の奸雄たるミラボーのことに就いてルイゼ・コッターに贈つた手紙の中に次のような文句がある。「彼は醜い男であつた。それにも拘わらず、ソファイは彼を愛した。女と云ふものは美貌のために男を恋するもので無いからである」と。即ちソファイはミラボーの如何にも男らしい雄渾剛健の氣邁に恋着したのである。独逸の有名な哲學者ハルトマンもその名著「無意識哲学」の中に、女性の強い愛情は最も美貌なる男子によつて起るもので無く、これと反対に最も醜惡なる男子によつて起ることを説き、また文豪レルモンツフもその創作「現代の英雄」の中に、心の狂う迄も醜惡な男に恋い焦れる婦人の決して稀有でないことを云い、そして彼女等はそれの醜貌の恋人を美少年エンジミオンと交換することを欲しないであらうと云つた。要するに眞の男性美は、イワン・ブロッホの云つた如く、精神的の美、即ち意志力、創造力、及び自由なる個性の表現である。決して容貌肉体の美では無い。

二、掠奪結婚の遺風

前述の如く原始の人間に於て、男子がその勇氣胆略を女子に示すことは、求愛の最好手段である。彼の掠奪結婚の如きも、スペインが心理的に解釈したが如く、この方面から説明することも出来る。男子が暴力を以て女性を掠奪することは、自己の勇敢なることを親しく証明する手段である。強い男子でなければ之を實行することが出来ない訳であるから、掠奪の目的を達したものは勇氣ある男子として賞讃せられ、従つて異性の愛を得られることになる。されば太古時代に行われた掠奪結婚の遺習は、今日の未開民族の間にも行われ、求婚の場合には男子がその妻にせんとする女子と故意に争闘を試み、相手に打勝つた上で、始めて結婚の式を挙げるような風習になつてゐる処も尠く無い。フアールのニュージールランド土蠻の風俗に就いて記する所に依れば、男子が自己の妻に求めんとする女子を見出した場合には、先づその女の父或は親戚の家に赴いてその許可を受け、次いで暴力を揮つて女を連れ出す。すると女は全身の力を出して之に抗争する。ニュージールランドの女は身体が強健で筋力が頗る強いから、中々

男に負けない。そのため劇しい斗争が始まつて、屢々二三時間以上に亘ることもある。若し女の方が勝つて再び両親の家に帰つたならば、男は求婚を断念しなければならぬ。またタインバルの記する所に依るに、新南ウェールズの土蠻に於ては、男子が女子に求婚する際には、その女に対して自分の家へ一緒に来いと迫る。すると女の方では故意に拒絶する。男は之に脅迫を加える。打つ。なぐる。果ては双方の斗争となる。遂にはいつも男子の勝利となる。女は心の中では初めから求婚を承諾していても、なお反抗をつづける。それは無理やりに我が家に連れ帰つて、始めて仲よく同棲すると云う段取となる。またハイエスがエスキモアの結婚風俗に就いて記する所を見るに、花嫁は暴力を以て花嫁を誘拐する。女は之に反対して故意に反抗し叫喚し、男の家に来る迄それを続け、次いで夫婦の契りを結ぶと云うことである。

上記の風習は掠奪結婚の模倣的遺風であつて、男子が自己の勇敢剛壯なることを示し、之によつて相手の女の承諾歓心を得て求婚の目的を達するのである。即ち全く女子を征服してしまふ程の体力意力のある男で無ければ愛を得る資格はないのである。原始の人間に

於ける愛に残酷性の伴うのは実に此の様な理由に基づくのであつて、「サヂスミス」及び「マゾヒスムス」の本性の一面は之によつて説明することが出来る。新カレドニア土蠻に認められる男女関係の如きは、之を説明するに最も適當なる例証である。フォレーの記する所に依れば、この蠻族に於ては、処女はその愛人から叢林内に追跡せられて暴行迫害を受け、顔を掻きむしられ、殴打せられ、頭部肩等に咬みつかれる等、残酷な目に遭うて再び家に帰るのである。此の如き凌辱迫害は、男子にとつてはその勇氣を示して相手の愛を深める所以であり、女子にとつては相手の強いことを認めて愛情の一層増す所以である。

三、愛の鞭打ち

前記の如く、性愛と残酷との間に必然の關係の存することは常に蠻民のみならず、また文化民族の性生活に於ても認めることが出来る。スラブ民族の下層社会に於ては、夫から殴打せられない婦人は侮辱せられるように感ずる風習があつてパウリヌスの記する所に依るも、露国の婦人は夫が妻を鞭答することを以て愛の表徴であると信じ、若し夫から鞭答せられない時は幸福と感じない。此のような

風俗は今尙ウンガルンにもあつて、クラフトエビングは地方農民の妻はその夫から鉄拳で殴打せられない迄は、愛を受けていないと信ずる風習のあることを記した。尙露国の諺の中には、「汝の妻を汝の靈の如くに愛せよ。而して汝の毛皮の如くに打て」「最愛の人の殴打は痛くない」と云うようなものもある。シユリヒテグロルはスラブ民族に於ては、前と反対にまた婦人が男子を鞭答殴打することの多い事実をも記した。

チエリニーはその自叙伝の中に、彼がそのモデルであつた情婦カテナを残酷に取扱つたこと、そして之がために却つて女の愉快がつた有様を見た時、大いに驚いたということを書いた。男子に於てはその愛人を殴打することが愛の表徴であり、女子がそれを喜んで甘受することは、チエルヴァントの創作に於けるカリハルタとしレポルドとの挿話が之を証明している。南米の印度種族に於ても同様な風習がある。マンテガツツアはポリヴィアに旅行した途上、夫の殴打を受けなかつた妻が夫の無情を訴えたことや、また一処女がその愛人のことに就いて、「彼は私を大いに愛してくれます。その証拠には度々私を殴打しますから」と語つたと云うことをその著書



の中に記した。

此のような性的感覚は古代の文化民族にもあつた。例えばルキアンの「ヘテレー物語」中の一婦人は「自分の愛する女を鞭答せず、その頭髪をかきむしらず、その衣服を破らないような男は真にその女を愛して居らないのだ」と云つた。オヴィドはその情夫に対して

怒るように、また自身の着物を引裂くように願つた。ロッソーの記する所に依るに、伊太利の一地方に於ては、婦人はその夫から虐待せられる時に於てのみ夫の愛を受けて居るように思い、妻を殴打しない男は馬鹿者と看做すそうである。

売笑婦の中にはその情夫から虐待迫害を受けることによつて、却つて愛情の増進するような者も稀でない。この事に就いて仏国の学者バラン・デュシャトレーの記述した所に依れば、彼は一売笑婦が泥酔した情夫からさんぐ殴打されて、眼瞼は裂け、顔面は血潮にまみれ、軀幹の皮膚はむごたらしく掻きむしられ、半死半生の有様で入院したのを見た。然るにその全治するや、いそぐとして情夫の家に帰つたそうである。またニチエフオローの記す所に依るにローザ・エルという娼婦はその情夫から「殺すぞ」脅迫せられ、小刀を首にあてられなどして甚だしく虐待せられたにも拘わらず、法官の訊問に対して悉く事実を否定した。また

マリア・エルという娼婦は情夫のために傷つけられて、顔面に刺創を負い、大なる傷痕を残して醜貌となつたにも拘わらず、いつ迄も情夫を忘れず、なつかしげにその写真を保存していた。或る時、顔面の傷痕のことに就いて警官から問われた時、彼女は「彼は私を傷つけました。それは真に私を愛しているからです」と答えたと云う。

四、痛苦の性的快樂

傷害罪、殺人罪を犯した男子が未知未見の婦人から艶書を貰うことの稀でないのは、エ

リスの記したことであるが、キールナンが嘗てシカゴからエリスに通知した処に依ると、墮胎幫助と傷害罪嫌疑とのために捕われた一男子は、未見の婦人から結婚を申込まれ、或は艶書を送られた。そして、その宛名の婦人は独逸人と露国人であつたとのことである。

エリスは男子の暴力に征服せられるのを愉快とする女子の一例として、下記の如き妙齡の女子を紹介した。それは教育ある十九歳の女性で、数ヶ国の国語に通じ、聰明で且つ同情深い性格であるが、同衾の際、その愛人をして自己の身体に暴力を加えしめるのを例と

した。その理由を愛人から問われた時、彼女は男子の暴力の下に自身を委ねて征服せられたいが為めであると云つた。また或る時、彼女は「私の身体に痛苦を与えて、殆ど生命を絶つてくれる程の力強い男が欲しい」と云つた。

浮世三文経

青蛙 太郎

◎豫備隊

◎再軍備

◎短命

軍備放棄の看板も
激しい時流にうち勝てず
いつか法衣の袖に銃。

泣いて切腹押しとめた
女房のお蔭で返り咲き
天下とる日がやつてきた

試験勉強に大臣の
名を暗記するうつけもの
またそのうちに変わるだろ。

◎復古

◎女学生氣質

◎豫算

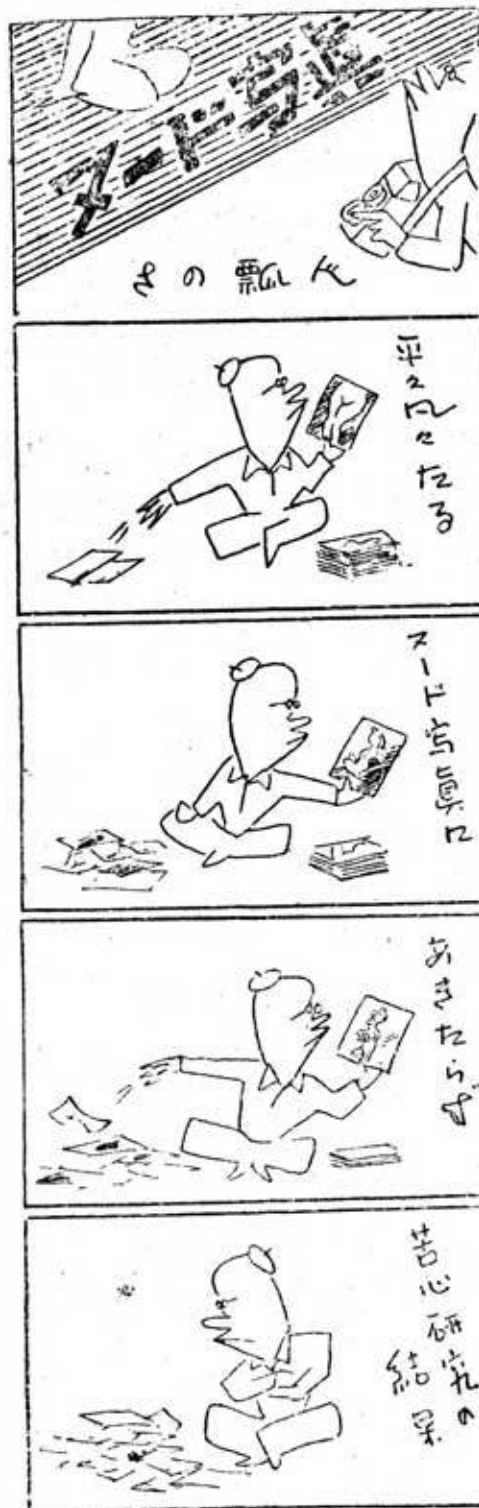
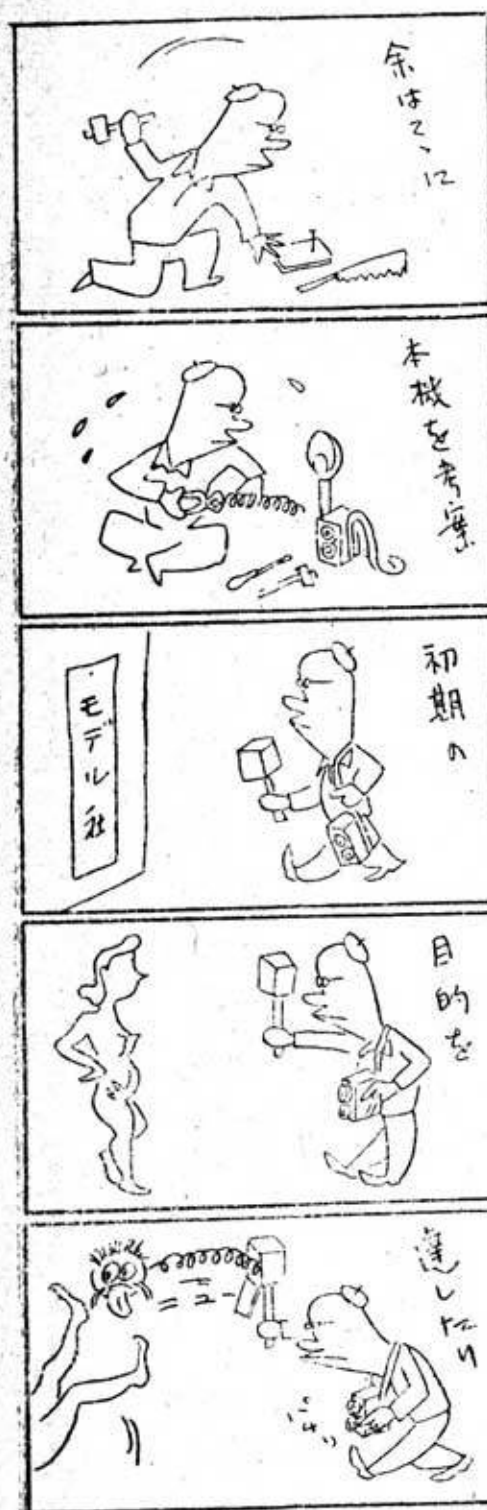
女劔劇、チャンバラ映画
忠臣蔵には新撰組
おゝ世は將に逆コース。

怪しい男に狙われて
誘拐された女学生
みんなお芝居夢話

予算がないない言うけれど
幽霊人夫や空出張
つまみ喰やつてもまだ余る。

コリンスコットは「求愛は一種のデリケートな戦闘である」と云つたが、之を哺乳動物の性的関係に見ても、雄はその体力の發揮によつて雌を獲得することが多い。それがため雌は痛苦を受けなければならぬ。蓋し雄が雌に痛苦を与えることは、取りも直さずその体力の強きことを示さんとする欲望の結果である。ミラメントの云つた如く、残酷は即ち勢力である。残酷を廢するのは勢力の廢棄である。強き勢力の所有者たることを異性に知らしめて、その愛を求めるには、暴力を之に加えなければならぬ。それが残酷行為となつて現われるので、雌は之によつて愛情が喚起せられ且つ増進するようになる。

されば、残酷、痛苦と愛慾との間に連鎖のあることは、夙に動物の性生活に淵源せるもので、それが原始的人間に伝わり更に文化民族にも現われるのである。されば「サヂスミス」、マゾヒスム」と動物から人間に遺伝



◎役人天国

ボーナス欲しけれや座り込め
女が出来たら抱え込め
小遣足らねば使い込め。

◎回 春

復古の掛け声に
神社仏閣おはやり
待てば講和の日和かな

◎食えない男

金があるなら飯を喰え
貧乏人は麦を喰え
国会答弁人を喰い

された性能と認むべきもので、普通の人間に於ても、多少此の傾向を持つてゐる。かの「愛の咬みつき」の如き、股や腕を捻り抓り合

うが如き即ち之である。その度の強くなつたものが即ち病的で、女を殴打鞭答し、ナイフ小刀、焼火箸等で傷つけ、頭髮を引きむしり

などして性的快楽を感じ、また男から此の如き残酷行為を受けて歓喜を感じ、愛慾を増すが如き者に至つては慥かに病的である。しかし此の如き男女は決して世間に慚くは無い。喧嘩口論するだけでは満足が出来ず、打つたり、蹴つたり、蹴つたり、果ては刃物を振りまわすような非常に仲の悪いように見える夫婦は、その実却つて情交が深く、夫は暴力を揮ふことにより、妻は之を受けることによつて性的興奮と満足とおぼえ、益々夫婦間の情愛の濃厚になるような者がある。その極端なる一例として茲に紹述すべき価値のあるは寺田精一氏の「惑溺と禁慾」の中に記述された殺人事件である。それは夫が内縁の妻の背に焼火箸をあて、また自分の名を入墨し、妻の足の指を断ち、足の爪を剥ぎ、虐待の限りをつくして死に至らしめた事件である。然るに、此の夫婦に二階を貸していた下の者は、斯かる残酷行為の行われたことを少しも知らなかつた。偶々その内縁の妻が足をずつて居るのを見て、どうしたかと聞いたところ、階段を下りる時誤つて踏み外したのだと答えたそれ許りでなく、裁判所に於ける加害者の言に依れば、妻は常に痛苦を与えられるように請い、その苦痛に堪えられずして死に至らんとする時も、熱き接吻を男に与えたと云ふことである。

維新の志士漁色競べ

花 山 劍 作



勤皇党といふ、佐幕党といふ、何れも口には大義名分を唱え、我こそ憂国の志士なりと自負していたものゝ、その何れもが兩派入り乱れて激しい血の雨を降らせつゝ、片一方では京女の柔肌に鼻の下を長くしていた。これが志士なる者の眞実の姿だつた

■ 色豪 近藤勇

安政から慶応へかけた十二三年間と云うものは、京洛の地は剣光双影の巷と化した。勤王党と佐幕派が入り乱れて毎日のように流血の惨事を見た。新撰組の隊長であつた近藤勇は、京は祇園の一方を宿坊として、よく遊んだものである。その敵娼は三本木の芸妓駒野であつたが、外に島原木津屋の遊君深雪太夫

とも深い馴染であつた。近藤は遊びは好きであつたが、余り人目に立つ駄々羅遊びはやらず、一力へ来る時でも島原へ通う折でも、駕籠の垂れを下ろさせるか、又は頭巾で顔を隠すという風であつた。

近藤は後に深雪太夫を落籍して、七条醒ヶ井橋に近い興正寺下屋敷へ囲つて置いた。深雪はその頃二十三四の花魁盛りで、一枚絵に描かれたほどの美人であつた。此の深雪が或年病氣にかゝり、医師の許に出養生している

留守に、家事の手伝に来ていた深雪の妹で、十八になつたばかりのお幸と云うのに、近藤が手を付けた。深雪は妹の不行跡を叱つて見たがあきらめて、自分は二百兩の金を貰い近藤と手を切り、元の古巣の島原へ帰りお茶屋を営んで一生を終つた。

近藤は多感多情であつた上に、明日をも知れぬ浪士の身とて、かなり銅堤の花を折つたその頃、勤王芸者として有名な祇園の君尾にも、白羽の矢を立てたが、君尾は、

「貴方が、禁廷様のお味方をなさるのなら、思召に従いましょう」と、わざと出来ない相談を持ちかけて、逃げを打っていた。それが又近藤の好奇心をそゝり、自由にならぬ者を自由にして見たいという意地から、度々掻き口説いたが君尾は巧みに言いのがれ、近藤の意に従わなかった。

その後、君尾が勤王党の座敷へ出ていた所を、新撰組の浪士達に見つかつて、壬生の屯所まで引立られたことがある。君尾は近藤との行掛りもあるので、玄関に立てゝある鎗の穂先、闇の中に閃く抜刀を見たゞけでも、無事では帰えれぬ、生命は無いものと観念の眼を閉じていた所へ、外出先から戻つて来た近藤がやつて来て、

「お前は君尾じゃないか」と言葉をかけ、部下の者から仔細を聞くなり、君尾の縄目を解かせ、

「君尾、何も言わんでもよいから早く帰れ、だが君尾、新撰組は女子供など殺しはせぬから、その事だけはよく承知して意地を通せ」と、言つたまゝ君尾を駕籠で送りとゞけた

近藤には、此の外に島原に金太夫という深間の傾城があり、祇園の茶屋山絹の娘お芳とも関係した。そして前のお幸には女の子、此の

お芳には男の子があつた。近藤の死刑後、男の子は東福寺に入つて仏弟子となり、女の子は女衞の手に渡り、転々した末に明治十五六年頃に、馬関で芸者をしていたが、新撰組の近藤の忘れ形身だといふので売れたものである。伊藤博文だの井上馨だの、西郷従道だのといふ頭官までが、馬関へ来ると態々招んだといふ事である。

■ 酔人久坂玄瑞

松陰門下の高杉晋作と久坂元瑞くさかげんすいとは、いづれ劣り優りの無い人物であつた。此の久坂は志士には珍しい粹な人で国学に長じていて、今に彼が作つた都々逸なるものが世に残つてゐる。その中で当時人口に膾炙されたものを拾うと「咲いて牡丹といわれるよりも、散りて桜といわれたい」とあるのや「立田川むりに渡れば紅葉がちるし、渡らにや聞えぬ鹿の声」と云うのや「加茂川の浅き心と人に見せて、夜は千鳥で鳴きあかす」など云うのが最も有名であつた。小柄な男で、いつも頭はくりく坊主だつたが、此の俚謡でも知られるように、外柔内剛の性質で、燃えるが如き熱情家でもあつた。

久坂には祇園の芸者でお辰という愛人があ

つた。文久三年に長州藩の計画が破れ、三条実美以下七郷の都落ちとなり、久坂は是等の公郷を護衛して長州に赴くことゝなつたが、その混雑のうちに寸隙を偷み、お辰へ書き送つた手紙がある。誠に情緒の深遠のもので、今読んで見ても才子と佳人との生別の苦を偲ぶものがある。

「その後は如何案じ致し参らせ候、私事俄に国へ帰らずてはならぬ事差起り、目もじも致し不申心ならぬ事いかにも推もじ被成べく願ひ参らせ候、この節の事はおもしろからぬ事許りにて、国に帰らずてはならぬ次第になり何とも口惜しき事にて候、さて出足の折、おかしきながら

桂の川の水鳥の、たちのなげきに旅ごろもあかつき暗き村しぐれ、涙をしぼる袂なれ、大内はいづこもわかぬ、駒さえさすがいばえけり、へだての雪と加茂川に、のぼるのぎりぞ悲しけれ。

と今様うたいて出足致し参らせ候、我事的心推もじなさるべく念じ参らせ候、その後もお前様の事のみ思いつゞけ候、軒端の月に露とすむ、寒き夕べは手枕に、つい寝られねば橘の匂える妹の恋しけれ」

古英雄が楯をたゝいて詩を賦したにもまさ

る風流であつた。お辰の方でも深く契つていたのだが、月明かならんとすれば浮雲これを遮るので譬で、兩人は暫らく連理の枝から別れ別れに離れて暮すことゝなつた。

翌元治元年六月に久坂は、真木和泉等と計り、長州の勢力を盛り返そうとして京都に入り画策を企て、先づ天王山に陣地を占めたが京に近く居ると急に愛人お辰の事が思ひされ一夜、陣中からこつそりぬけて駕籠を急がせて島原の角屋へ乗り込み、お辰を招んでくれるよう亭主に頼んだ。亭主は久坂と馴染の中ではあるし、それにお辰との間もよく知つてはいたが、当時は長藩の武士を客としてはならぬと厳しい沙汰があり、それに新撰組の屯所も近いので、万一の事があつては取返しがつかぬと断つた。

久坂は「そうか」と、大きくうなづいたまゝ他に一言も云わず立ち帰つた。すると入れ違いにお辰が来たので、角屋の亭主がそれを話すと、

「久坂様が」と言うなり、お辰は足袋はだしのまゝで、千本通りを南へ南へと駆けてゆき東寺の側で久坂に追いつき、兩人は手を取つて泣いた。久坂は手短く天下の形勢を説き、「此の有様では、已もいつどうなるか判らな

い。お前は身体を大切にせよ」と云い聞かせて、金二十両をお辰に与えて袂を分つた。

越えて七月十八日夜の蛤御門の変に、久坂は鷹司邸の玄関で、同志の者と奮戦し遂に斬り死をした。時に年二十六。彼は述懐の如く、牡丹と咲かずして桜と散つてしまつたのである。

桂小五郎の浮名

桂小五郎（後の木戸孝允）と祇園芸者の幾松との恋物語は、余りにも有名に過ぎているが、当時

の志士と俠妓との代表的物語として逸する事が出来ぬので、こゝには略説する。

幾松の父は若州小浜の酒井家の武



士で、生咲市兵衛という者であるが、浪人して京都に流れ込み、遂に娘を芸者にするまでの貧しい生活に落ちてしまつたのである。

桂と幾松とは、互いに想ひ想われた中であつたが、幾松の親が強慾なために、思うように逢うことが出来ず、常に兩人は悶々の情に燃えていた。それを伊藤俊介（後の博文）が知つて母親を説得したので、それ以来兩人は往き来もし桂も幾松の家に隠れて国事に奔走していた。

当時の桂は、新撰組の動静を探るのが使命

の一つであつた。そこで桂は幾松と相談して芸者の箱丁となり、名を源助と改め、新撰組の出入する料理屋へ出入して、それとなく様子を探つていた。或時祇園の鳥居屋の奥座敷で、近藤勇が二三人の同志と酒を汲みながら密議を凝しているのを知つた桂は、直ちに隣室に忍び込み障子越しに耳を引立て、聴いていた。流石に近藤は、早くも障子の外に人の気配のするのを悟り、障子を開けるや否や、「誰だッ。拙者等の相談を偷み聴くからには、長州藩の隠密に違ひあるまい」と眼に角立てた。桂は「失策つた」と思つたが、その気色も見せず、箱屋の源助と云う者だと強情を張つて脱れようとしたが、近藤はその手に乗らず、同志の者に命じて桂を縛りあげ、壬生の屯所へ引立てると騒いでいた。

恰度、そこへ勤王芸者で売つていた君尾が通りかゝり、その場の様子を一目見るなり呑み込んで、

「おや源さんじやないの、何か近藤さんに粗相でもしたのかい」と言葉をかけながら一方近藤に対して頻りに詫びたが許さぬので、君尾も持て余したように見せかけ、

「源さん、お前さんが愚図だから、こんな事になつて、ほんとうに仕方がないね」と云い

ながら、桂の横ッ面を平手でピシヤリと張りつけた。これで近藤の疑いは解けたが、後で君尾は勸進帳の弁慶が、主君の義経を殴つたのを真似たのであるとて、桂に対して深く詫びたところが、却つて桂から当座の機転を誉められたと云うことである。

桂は身辺が危いと思つたので、その後は幾松の家の戸棚に隠れていたが、こゝも浪士に襲撃され、一度は幾松の機智で脱がれたものゝ、益々危険が迫つて来たので、遂に身を賣して乞食の仲間に入り、毎日、三条河原で往来の人から物を乞ひ、夜になると木屋町から祇園あたりの様子を探つていた。幾松と君尾とは相談して毎日常早く三条の橋の上へ来て竹の皮に握り飯や手紙を包み、旭のあがるのを拝むような様子をして放つてやると、橋の下から乞食姿の桂が出て来て拾つては、飢を凌ぎ又は浪士の動静を探る手掛りとした。

併し斯うした事は永くつゞくものでは無い、今度は仲間の乞食から怪しまれるようになったので、桂は遂にそこを逃げ出し、辻の駕籠昇夫になつた世を忍び国事に尽した。然もその駕籠の相棒は、誰あろう後に参議になつた広沢兵助であつた。

回天の偉業の成つた後に、木戸令夫人とし

て迎えられたのが、此の芸者の幾松であつた三条橋下のせゝらぎは、今に無心に兩人の浮名を流している。

坂本龍馬の悲戀

土州藩の奇傑、坂本龍馬が討幕派の黒幕として、薩長兩藩の結合に尽力し、それが成功したので身辺には暗殺の魔の手が、一段と烈しく付き纏うようになった。幕府方では新撰組に云いつけ、見かけたら殺つてしまえと手ぐすね引いていたのである。

慶応二年正月、薩長の連合が完全に成立したので、龍馬はその事を同志の一人である三好慎蔵に告げて悦ばそうと单身その宿所である伏見の寺田屋へ赴き、二階座敷で三好に会つて物語りしていると、突如として素裸の婦人が、その座敷へ転がるように飛込んで来て「大変です、新撰組が此の家を取囲みました早くお支度を、早く」と言い、すてゝ再び慌しく階下へ駆け降りて往つた。此の婦人は龍馬の愛人お龍で、寺田屋の養女である。

お龍は京都の町医橋崎儀作の長女であつたが、父が頼三樹三郎等と深く交り、勤王の大義を唱えたゝめに安政の疑獄に際し、頼氏と共に投獄されて牢死を遂げた、龍馬は此の橋

崎と親交があつたのでお龍を引取り、寺田屋へ話して養女に迎えさせたのである。斯うした関係から何時か兩人の間には奇縁が結ばれるようになったのである。

新撰組が絶えず龍馬を附け狙つてゐる事はお龍もよく知つていたので、その日も見張番のように注意していたが夕食後に浴室に入り流しで身体を洗つてゐると、窓の外にピカリ鎗の穂が光つた。お龍はハツと思ふと湯文字を纏う間もなく、丸裸の濡れ鼠のようになつて、急を龍馬に告げたのである。これが為めに龍馬も三好も新撰組の毒手を脱がれることが出来たのである。

寺田屋騒動後は、龍馬は京都の薩摩屋敷に隠れて傷の治療をしていた。尤も傷と云うた所がわづかに拇指一本を切られただけであつたが、それが右手のために食事に不自由なので、お龍が日夜つき切りに世話した。当時、西郷隆盛も同じ邸内にいたので、時々龍馬を見舞つたが、お龍の身の上や今度の働きなどを聴いて感心し、

「それでは坂本と夫婦にしてはどうか俺が媒人役を勤めよう」とのこと、間もなく吉日が択まれ、表立つた祝言の式が挙げられた。そして翌二月には、龍馬新夫婦は西郷に伴わ

れて薩摩に赴いた。

龍馬がお龍を愛していたことは、その姉に送つた手紙の一節からも窺うことが出来る。

「吾等の妻に、日頃申聞け候には、龍馬は国家のため骨身を碎き申すべし、然れば此の龍馬を能くいたわりくれるが家のためにて候、それで日々縫物や張物を致し居り候、そのひまには自分にかけて候襟など縫い致し居り候、その暇には本を読むこと致させ申聞け候、此の頃はピストルは大分よく発ち申候、誠に妙な女に候えども、私の云うことを能く聞込み又敵を見て怖るゝことを知らぬ者にて、別に力味わせねど、又一向平生と変りしことなしそれはおかしき者に御座候云々」

龍馬の面目とお龍の性格とが、此の短い文句に躍如としている。お龍は龍馬の妻とならぬ以前に、二人の妹を悪漢のために誘拐され娼妓に売られたことを知り、悪漢を探し出し白刃を擬して妹を取戻したほどの女傑である此の女にしてピストルの稽古をする、又決して故なしとせぬのである。

併し斯うまで愛し合つた夫婦も、翌年十一月に龍馬が京都の旅舎で兇刃に斃れてからは孤枕永く円な夢を結ぶことが出来なくなつたのである。

西郷隆盛の大女好み

西郷隆盛は二十余貫の肥大漢であつたが、相手となつた女も又肥えた者に限られていたのは不思議である。由来下世話には柔は剛を好み、肥は瘦を愛すと云われているのであるが、大西郷だけは此の拵から外れていた。それに大西郷は相撲甚句が上手であつて、あの独りで禪も締められぬような太つた腹を突き出して踊る有様は、実に結構にも美事にも誉めようのない面白さであつたと伝えられている。

その頃、祇園の奈良屋というお茶屋の仲居に、お虎とて女力持のような肥つた女がいた西郷にはこれがお気に入り、随分と可愛がつたものである。お虎は綽名を豚姫と云われていた位だから、又以てその無恰好さが知られるのである。

明治元年二月に、愈々討幕の軍を進めることとなり、大西郷は総参謀として京都を出発した。お虎は名残りを惜んで京都から大津まで駕籠に乗つて見送つた。大西郷は非常にそれを悦んで、

「戦いの首途に虎が送つて来るとは縁起がよい」と大変な上気嫌で、褒美として金三十両

をお虎に与えた。あの喜怒哀楽を顔に現わす事のない大西郷が、これだけの金まで与えるとは、よほど嬉しかつたものと見える。これは後の話だが、西南の役で西郷が戦死したと聞いたお虎は、ひどく悲傷して、それから三年ほどして自分も死んでしまった。

祇園の井筒の仲居お末も、お虎に負けぬほどの太ッちよであつて、また大西郷の目にとまつた一人であつたが、お末は始めから終りまで逃げてばかりいた。それを大西郷が井筒の座敷で追い廻わす。追う人も逃げる者も肥えているので、座敷がゆらくと揺れたものだ。お末はその頃まで西郷が偉人か馬鹿か知らずにいて、後であの甚句を躍つたお方が、隆盛さんと云う偉人だと聞かされて始めて「へえ、あの人が」と驚いていたと云うことである。

東京へ還都後の大西郷は、陸軍大将に任じ近衛都督を兼ね、その榮達は維新功臣のうちで首位を占めていた。それにも拘らず極めて質素な、然も忠僕の熊吉だけで女ツ氣のない生活をつづけていた。それで友人や知人が、男ばかりの家庭は殺風景だから、国元より奥さんを招んだらばとすゝめても、なにその必要はないとて、長い間を男ばかりの生活をや

つていた。併し西郷とて木石ではない。一度吉原の稲本楼に遊び、同楼のお職花魁の若紫を座に侍らせた。珍しい西郷には何も彼も面白く大に悦に入り、頻りに盃の数を重ねていくうちに、

「其方も一杯飲め」と敵娼の若紫へ、手にしていた盃を差した。若紫は満々と注いでもらつた盃の酒を、半分ほど飲みさして下に置き嬌態を作つて、

「お盃は頂きましたが、せめてものお情に、どうかお肴も頂きとう御座います」と無心を云つた。すると西郷は「そうか」と云いながら、火鉢の中に烈々とおこつていた炭火を火箸で挟み、

「冬の肴には、これが一番の好物ぢや、さあ受けとれ」と若紫の目の先につきつけた。驚くと思ひの外、さすがは花魁だけに眉の毛一つ動かしもせず、

「お心こめたお肴、有りがとう存じます」と華やかに模様を織出した襦袢の両袖を重ねてそれを受けようとした。

此の仕打には西郷も胆を奪われたが、それ以来、若紫の意気に感じ、よく稲本楼へ遊びに往つたものである。

式亭三馬の墮胎薬

江戸時代の有名な戯作者式亭三馬は、戯作の傍、売薬化粧品等を製造販売していたが、その中に「天女丸」と称する墮胎薬があつた。その広告文は次の如きものであつた。

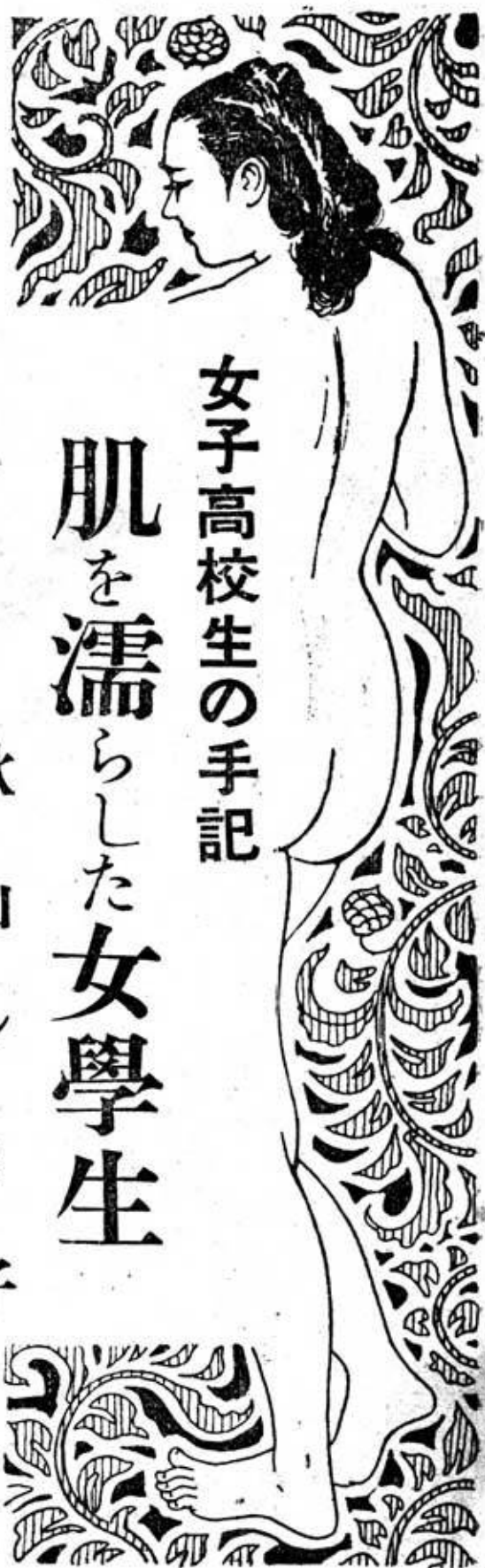
月経不順を治す名方
懷妊を休む妙薬

天女丸 価百二十四文

月々の経水滞れば、さまざまの病となる故早く之を用いて通じさするがよし。いか程久しき不順もなおらぬこと無し。しげく子を産む人、此の薬の用いようにて何ヶ年も懷妊せず。もはやよき頃と思わば薬を止むべし。その月より懷胎すること自在の奇方なり云々。(後略)

本家 江戸本町二丁目北側式亭三馬

此の効能書の様な墮胎薬兼避妊薬があつたらば、現在でも大繁昌することは謂合である。流石に戯作者だけあつて、薬の宣伝文句もうまいものである。



女子高校生の手記

肌を濡らした女学生

秋山ルミ子

心は偽わらず

私が急性盲腸炎で中野のM病院に入院したのは、もう二ヶ月ほど前の、三年生の新学期も間もなく始まる春のお彼岸頃でした。

手術の経過もよく抜糸もすんで、そろそろ起きれるという日の、暖い春の日差しが部屋一ぱいに入つて天井や壁にまぶしく反射している午後の事でした。私が入院してから、とても心配して下さつて殆んど毎日のようにお見舞に来て下さつた二年生の時の担任の榊原哲子先生がこゝ二、三日お見えにならないので、私は何となく淋しく

——どうなさつたのか知らでも先生は大へんお忙しいから、私も我慢しなくてはいいわ。——

などと考えるともなく考えて居りました。昨年の夏、ふとしたことから、私と先生は一日も顔を合わさずに居れない間柄になつてしまいました。同性愛——男の方には想像がつかないかも知れませんが、(男性の間にもこの様な関係があると思います)何もしなくても唯先生のお傍に居たいのです。

その時、この様な私の心を見抜いたかのよう、看護婦が一通の封書を届けてくれました。私には、その白い封筒の上書を見て直ぐそれが今待つて居たばかりの先生の筆跡であ

ることがわかりました。

——先生はお暇がなくて、私のところにいらして下さることが出来ないの、きつとお手紙で下さつたのだわ。と思いつく封を切つたのでした、が……

秋山ルミ子様——

ルミ子さん、お体の具合どうですか。もうよろしいのでしうか。決してルミ子さんを忘れていたのではありませんが、大へん御無沙汰してしまつて御免なさい。

突然こんな事をお知らせして、ルミさんのお体に障りはしないかと私も大分心配したのですが、結局どうしてもお話ししなければならぬ事なので申し上げます。

ルミ子さん、私は貴女が卒業するまで、決して貴女の傍を離れないとお約束したことがありましたね。その事は今でも本当なのですけれど、ルミ子さん、決して怒らないで下さい。一昨日——最後に貴女をお見舞した翌日の事です。突然私は、岐阜県のO高等学校に転任の辞令を受け取り、今月中に赴任しなければならなくなりました。予期しなかつた事として、私も周章狼狽、昨日一日てんでこ舞い

でした。

ルミ子さん、こんな事を云うと貴女は卑怯な逃げ口上だと腹を立てるかも知れませんが私達は理想とか感傷だけでは社会の現実を生きて行けないということ、貴女にもわかりでしょうか？

私は貴女が一人立ち出来るまで必ず待つて居ります。ルミ子さん、私も貴女と同じだけ苦しい、辛い思いをしなければならぬのよ許して下さいね。

最後にくれぐれもお体に注意して一日も早く元気になつて、再会の日をお約束して下さい。

榊原 哲子

その日から三日ばかりの間、私はまるで瀕死の重病人のように、食事も咽喉を通らず、夜も風もうつら／＼と寝て過しました。目が覚めると

——先生のバカ！何故ルミ子も一緒に連れて行つて下さらないの……

と混乱した頭の中に浮ぶだけでした。

悲しいとか淋しいとかいうのを通りこして身体のかなかの気力がすっかり抜けてしまったようで、孤独に傷ついた私の心は、何か考え

ることも嫌になつてしまいました。父母も私の神経をこれ以上たかぶらせまいとして、色々心をつくばつてくれました。

ジイドの「女の学校」の中にあります

——昨日の愛情に更ける今日の嫌悪——

のように、先生と別れなければならなかつた私は、淋しさのあまり一時は先生を怨み、学校でも今迄の快活さを失つて、いつも打ち沈んだ考え深い少女になつてしまいました。

その頃から私は時々居た／＼まれないような虚無感におそわれ「先生、先生……」と口の中で連呼しながら、人に云えない恥しい行為に耽けるようになりました。

或る日、おしやべりな友達が「榊原先生のお辞めになつたのわね、生徒とSの関係があつたのが、校長先生に知れたからなんですつて」と誠らしく噂し合つてゐるのを聞いた時私はハツとして思はず耳たぶまで真赤になつてしまいました。

家庭教師

東京都下でも一流と云われて居りますK高等女子学院に私が入学した時には、物事にあまり動じない私の父——二、三の重工業会社

に關係して居り財界の方で有力な一人として数えられております。——もさすがに喜んでくれました。四人兄妹の末つ子として生れた私は、世間にもよくありますように、父母の愛を一身に受けて育ち、殊に父は、私の云うことをなんでも聞いてくれ、どんな我儘でも許してくれました。このような環境に育つたせいか、男性に対して人一倍興味を持ちながら、何か一種の輕蔑感を抱き、私には現在まだ男の友達が一人もありません。

私がK高等女子学院の一年生の時、父は私の英語が外の課目に比べて、少し遅れているのを心配して家庭教師を迎えてくれることになりました。私は私達の学校の榊原先生に或るほのかな感情——何と云つていいかわかりませんが、好意以上のもの——を抱いて居りましたので、先生がおことわりになるのを父に頼んで無理に來て頂くよう、お願いしたのでした。

榊原先生は、一年生の私達の英語の時間は直接担当されて居りませんでしたけれども、その理智に満ちた広い額、いつも何かを考えに暖かな胸、それに誰に対しても優しい態度は、上級生下級生を問わず私達の憧れの的

でした。このような私の最も尊敬する先生について頂いたので、当然私も一生懸命勉強し、それまで嫌いだった英語がすっかり好きになつてしまいました。その学年の三期のことだつたと思います。東京都下の高校生英語弁論大会に男生徒にまじり出席して、見事優勝したこともありました。その時最も喜んで下さったのは勿論先生でありました。二年生に進級した時、榎原先生が私達のクラスを担当の先生になられました。その時の私の喜びようといつたら今でも臉に浮ぶようです。

その頃の私は全く幸福そのものでした。校庭の新緑、金色に輝く初夏の空、あくまで澄んだ乙女の魂は、今にもはち切れそうな思いで一杯でした。私がその時ほど初夏の緑を美しいと感じたことは今までついぞありませんでした。

このように毎日／＼楽しい日が続き、夏休の近づいた或日のことです。私は高円寺の先生のお宅にお邪魔したことがありました。夕飯を御馳走になり、そろ／＼お暇しなくてはならなくなつた時、先生は私の傍に来て坐られ、私の髪を撫でながら

「ルミ子さん、夏休みになつたら先生の田舎



ポーズの魔術

美しい顔をあお向け、両手を高く差しのべつゝ足を爪立てゝ全裸の彼女は静かに狭いモデル台に立ちつづける。

——何んだか斯う雲に乗つて高い／＼虚空遙かに舞い上るように彼女は思つた。

——爪立ち、手を上げ、立ち静まつた全裸の彼女、空高く舞い上るように思つた。ポーズの魔術、女神のポーズを取らされた彼女は斯うして天女の無我に入つた。

処女か？ 非処女か？

恐らく彼女はかつて経過した自分の前半生のうちで、今

モデル台の女神

朝倉支朗

モデルとなつて其処に立つた坐る方が安易である。坐る瞬間幸福に感じたことがなりは寝る方が安楽であるのはかつたであろう。その時、過去の自分のみじめさ罪深さがしても、裸で寝るよりは何か淡い感慨となつて彼女の心の隅をよぎり過ぎる。

彼女の前身は街の女であつた。然し今女神のポーズをとらされると、何とも知らぬ崇高なものが彼女を包む。その裸体から発散するものは決して淫猥や挑発、媚ではなかつた。

審判台の幻想

一体、人間は物体との接触面の多少によつてエネルギーの消費程度に非常な差異を生ずるものである。接触面が広ければ広い程エネルギーの消費は節約される。立つ事より習慣があるという。

のお家に遊びにいらつしやいな。……いゝところよ」

「ほんと先生、嬉しいわ!」

私は押え切れぬ嬉しさに目をかがやかせながら答えたのでした。

「お父様のお許しが出たら……きつとよ先生、きつとよ……」

私は先生と指切りをしました。その日から私は、まるで子供がお正月を指折り数えて待つように、どれほど夏休を待ち焦れたことでしょう。幸福が早く過ぎ去つてしまふような気がして、夏休の近づくのを恐れる矛盾した気持になりつつ、喜びを隠し得ずに、父や母から「ルミ子は本当に嬉しそうだね」と笑われたりしました。

海の誘惑

先生のお家は静岡県の清水市から歩いて約十五分程の海岸端にあり、先生と一緒に朝東京を発つて五、六時間汽車にゆられつゝ移りゆく窓の景色を眺めながら、そこへ着いたのは午後三時頃でした。着くとすぐ、にこにこしながら私達を迎えて下さった上品な方は、お話に聞いていた先生のお母様でした。人の

今、にわかにそういう制度 方一尺、高さ二尺位の台の上で審判者の鋭い一語がその頭が行われるとは思われないが、に一定時間、犯罪者をして或上に下つたとした。必ずや彼若しモデル台から立案されたるポーズを取らしめる、そうは自らの犯した罪の凡てをす一つの台に犯罪者を立たせてして彼が何事も思考し得ないらゝと告白してしまふのでみたらどうであらう。例えば 無心の状態になつた時を捉えはあるまいか。

よさそうな婆やは、私を見晴らしのよくきく

二階の洋室に案内してくれました。この家は、^{からたち}桐橋の生垣にかこまれ、小じんまりした和洋折衷の、何か別荘といったような感じのする家でした。すぐ目の前には、もう砂浜が来ており、その向うに紺碧の水を湛えた海のいかにも雄大な姿が見えて居りました。

「いいお家ね、先生。すばらしい眺めだわ」東京ばかりで育つて、それまで海をこのように手近に見たことのなかつた私は、めづらしいものを見た赤ん坊のように、心がウキウキして感嘆のあまり我を忘れるほどでした。先生が

「疲れたでしょう? 着かえてゆつくり休みなさい」

とおつしやるので、お借りした浴衣を着て自分の家のように長々とくつろぎました。

晩の食事が済み、疲れたからとその夜はいつもより早く床に入りました。空には星が一面にかがやき、時々耳のそばを蚊がうなりな

がら飛んで行く蒸し暑い夜でした。先生と同じ寢床に入つた私は、今迄になく興奮して、なか／＼寝つかれませんでした。

「まだ眠れないの?」

「……………」

「さあ、もう早く寝ましよう。波の音が聞えるわ」

「ほんと」

暫く沈黙が続く間、浪の音だけがだん／＼大きくなつて来るように感じ、私の気のせいとも知れませんが、何故か先生の熱い溜息が時々聞えてくるような気がしました。

翌日も上天気で、私はもう海へ入りたくて我慢出来なかつたので、早速真つ裸になつて水着に着変えました。自分で云うのもおかしい話ですが、私の身体は、日本人としては均勢がよくとれて、その伸び切つた四肢、肉はしまつているが筋立たない太腿、処女にしては豊かな胸など、私の母でさえ見とれるほどで、お友達からもすばらしい／＼とよく云わ



れたりしました。電車やバスの中などでも、男性の熱い目で私の体をなめ廻されるように見られたことも屢々ありました。それで幾分自分の体に自信というか、自惚れがあつたのでしようか。或は、私には生れつき露出狂的な血が流れているのかも知れませんが、他人の前に自分の裸体を示すことが私にはなんとなく快い気がするので、家に居る時など、女中や下男の働いている前風呂から出たまゝの姿で、下男の好奇の眼を背に感じつゝ、平気で歩き廻つたりしたことがよくありました。私は、小さい時から風呂へ一人で入つたこと

などなく、何時も女中に入れてもらい、身体中すつかり洗つてもらつて居たのですから、自分の裸体を人に見られる羞恥を普通の人はど感じないのです。決して意識してしたのではないのですが、私は先生がびつくりされて思わず顔を俯せる様な大胆なポーズで水着に着変えたのでした。

海はほんとうにすばらしく、私を全く有頂天にさせました。私が海で泳いだのはその時がおそらく始めてだつたと思います。先生と私は、そこらの処女と変わりなく、ふざけ合つたり、泳ぎの競争をしたり、本当にたのしく遊びました。その時はあまり楽しいので、ふと夏休が終り、始業式のこと、広い運動場のことなどを思うと佯びしい気持になつたりしました。

濡れた肉体

私が先生のところへお邪魔した夏休の一週間は、私にとつて一生忘れることの出来ない思い出となりました。

先生に入れて頂いた風呂から出

て、私は快い風の流れを感じながら、いやに蒸し暑かつたので、私はほとんど全裸に近い恰好で寝るにはまだ早い布団の上に寝そべつて居りました。そして夜は、いつもの夜よりも蒸し暑く、秋が近いせいか、乙女の感傷からかなんとなくうら淋しいような感じが私の胸をしめつけるのでした。その時、ブーンとクリームのいい匂がして、先生が私の傍にいらつしやいました。

「ルミ子さん！」

「何アに？先生」

「先生なんて嫌！お姉さんと呼んで……」

上気して桜色になつた湯上りの頬、その時私は、先生はなんでお美しいんだらうと思ひました。

「お姉さん、好き？」

「……」

私はだまつて頷きました。その時私は先生の熱い息を感じ、何か悪いことをする時のようにハツとして、本能的に身を引こうとしました。その身を抱きかゝえるようにして、先生はそつと唇を合わせました。そして堅くなつてゐる私の乳房をもみほぐすように、柔く強くもてあそぶ先生の手に、今迄感じたことのない、妙な快感の嵐が私の体の中で吹き始



め、私の胸は自分でも聞えるほど早鐘を打ち始めました。

「恥しい？」

「……」

「痛い？」

「……」

私はだまつて首を振るだけでした。もう私の頭の中は、ぐる／＼廻転してわけがわからなくなり、何か重くろしい、烈しい気流で一杯でした。

五人の小人が葉の青く繁つた森に来て、私の肉体の神秘的扉を開き、泉のある所まで分け入つてそこに身をひたしたり、或は岩の上に駆け上つたりして、眠れる森の精を呼び起すのでした。私は次第に恐いとか恥しいとかいう気持を忘れ、すっかり夢中になつて濡れ

てゆきました。あえぎ／＼何か云つたようでしたが、何を云つたかもはつきり覚えておりません。

十五分もたつたのでしうか、或は三十分以上経つていたかも知れません。ふと気が付いた私は、先生の胸の中に顔を埋めて泣いて居りました。

こんな事があつて以来、二人の胸を焦す情火はいよ／＼熾烈になつて、ものくるほしいまでの歓喜に酔いしれるのでした。このような私と先生の秘密な関係が続くに從つて、或る雪の塊のような不安が私の胸の中に湧き上つて来ました。

——一体、私はもう処女ではないのかしらこんな私の不安は益々募るばかりでしたので或る日、父の書棚にある性に関する書物を父の留守の時にこつそり讀んでみました。そして生先と私の行つてゐることは、同性愛と云ふものだということも、本により始めて知りました。

或る時など、自分の部屋に鍵を掛けて真つ裸になり、鏡の前に後手をつき両足を開いて自分の肉体の神秘的部分を映し、しげ／＼とぞいてみたり、手を触れてはげしい性慾——だろ／＼と思ひます——に身をふるわせた

こともありました。これ程色々悩みながらも私は目に見えない縄で引きずられるように不倫な関係が続き、性愛の絆は私の理性をはるかに凌ぐのでした。

先生とお別れしなければならなかつた最初は、父にたのんで、先生の転任なさつた学校へ転校させてもらおうかしら、などと儂ない考えにも落ちてみました。しかし、お別れして早や二ヶ月余、一時は氣の狂つたようになつた私の理性もどうやら、もとの平静に復することが出来ました。今では先生のお手紙に励まされ、再び来る春を信じてその日を夢見つゝ、卒業まで頑張るつもりで居ります。

藝妓、男名の由來

芸妓が何吉、何八、何太郎、何松というが如き男名を附するのは、宝暦の頃から始まつたらしい。それは当代の頃から男色の風が盛んになつて、蔭間茶屋の繁昌した処から、江戸深川の芸者屋ではその向うを張らんがために、芸者を蔭間風に仕立て、男鬚に結わせ羽織を着せ、その名をも蔭間のように梅太郎、染松、鶴次、千代吉など、優しい男名をつけたのが、芸者男名の起源である。

変態艶書
アフノーマル・ラフレーター

岡田 咲子

(第一回目の手紙)

咲子さま。

私は喜多玲子、思い出して下さいました？。

奇譚クラブ臨時増刊号に発表された咲子さんの小説「吸血女流画家」のさし絵を描かしていただいた玲子です。お判りになりました？。突然にお手紙差上げたりして、さぞおどろかれたことでしょう。本当に私は失礼な女です。このお便りを書いている時にも何度止めようと思つたか知れません。でも書かずには居られなくなり、とうとう書いてしまいました。

咲子さま。私はアフノーマルな小説が大好きなんです。その中でも貴女がお書きになつた「吸血女流画家」「巫女屋敷の責絵巻の責めの面白さはまた格別な味があり大のファンなので、さし絵を描く時にも是非と自分からかつて出た位に、貴女の原稿用紙の一字一句に私の心は引かれ完全に貴女の小説「吸血女流画家」の主人公になつてしまつて居りましたの。

咲子さま。私は貴女の小説に出て参りますモデルを縛

つたりいじめたりして、苦しむ裸婦ばかりを描いているあの女流画家にそっくりな女なんです。自分でもびつくりする程、良く似て居るのですもの。私が小説のモデルになつたのではないのかと馬鹿な想像もしてみたくなる位良く似て居たのです。貴女にはもうこれ以上言わなくても私がどんな女か充分お判りになつたことでしょう。貴女の創作になる女流画家と私とはキット同じ様な血が流れているのでしよう。

咲子さま。私も縛られた女、とくに苦しみにもだえる全裸体の女を描く時、私は妖しくときめく胸の高鳴りをおぼえ、体中の血が逆流する程にアフノーマルな楽しさを感じるんです。如何？ 大変な女でしょ私は？。これだけで貴女に嫌われてしまふんじゃないかとただそれだけが心配で心配でたまらない私。どうかこの手紙を御覧になつて御返事下さる方である様に祈りながら書いて居ります。

ねえ咲子さん。貴女は人に縛られたことがお有りになる？。それ共人をいじめたことがお有りになりますの？。必ず咲子さんもどちらかの楽しみを知つておいでに



なると貴女の小説を拝見し思てつたんです。

私？どうもこれは申訳ありません。自分勝手なことばかり言つて、先ずお手紙差上げた私が先に申さねばなりませんのに。じゃあ本当に恥かしいけれど思い切つてみんな白状してしまいますわ。でもこの次には是非咲子さんも話して下さいと御約束して下さいますわね？。そうでないと承知しませんわよ。いいこと？

咲子さん。私は絵を描くには必ずモデルを使います。出来るだけ肉体美の。そして出来れば職業モデルより、素人の娘さんにモデルになつてもらいますのよ。味のある良い絵は矢張り未だ男性を知らない処女の人に限ります。けれど私のモチーフを良く心得た職業のモデルでも嫌がるようなポーズをつけるので二度とモデルになつて呉れる人は居ないし、私のモチーフを理解しても呉れないのです。まあ考えてみればそれが当り前なのかも知れないんですわ。貴女の小説に出て来る女流画家より、もつともつとひどいポーズを要求するんですもの嫌がられるのも無理ないんです。それはとても雑誌の口絵なんかには出すことの出来ない絵なのですよ。私がいくら厚かましくつても始めて御手紙差上げる方には言うことも出来ません程、ひどい絵です。だからこれだけは許して下さいね。でも話さなければ判つていただけないのだしほんの少しお話することにしましょう。

咲子さん。私は裸婦を描くには必ず縛られた裸婦以外は描きません。いくらたのまれても縛られた裸婦でなけ

れば描く気がしないのです。縛つた女の姿を描くのが私の得意なモチーフでもある訳です。

私はモデルを鎖や荒縄や扱帯などで縛りそれがモデルの乳房や腹に固くくい込み、痛さに、モデルが悲鳴を上げるまで、強くしめ上げるの。中には本当に泣き出し叫びもだえるモデルも居ますよ。でもモデルがもたえればもたえるほど私の絵に対する制作慾はかき立てられ、最後にはモデルの泣きさけ口へ猿ぐつわをしてしまう時の楽しさは、「吸血女流画家」や「巫女屋敷の責絵巻」をお書きになつた咲子さんには判つていただけるような気がします。この様にして私の得意なモチーフは、完成し、なまめかしい責め絵図がスケッチブックに描かれて行くのです。

でも嫌がつても職業モデルはまだ良いの。これが素人の娘さんになると大変な苦勞をしなければなりませんのよ。

貴女の小説の様に何処かの娘さんを今時誘拐なぞして来る訳にも行かないし、先ずモデルになつて呉れる娘さんには着物や洋服のまま描くのだと言つて、ポーズもほんの真似ごと程度に手首を軽く縛つて、安心させてその日は終る訳。二日たち三日たつ間に半裸にまではなつて呉れますから、娘さんの気持がゆるんだ頃、後ろから描くと言つて手首を本式に縛つてしまうのよ。そして声を上げて構わない様に固く猿ぐつわをしてしまうとたいがいの娘さんはやつと私の本心が判つたように、あ



わててもがき始めるわ。その時にはもう完全に手おくれ。声にならない声で泣きわめくのをおし倒し、おさえつけて身につけて居るものを全部脱がすのも楽に出来るの。それから先はこつちのものなのよ。色々なポーズに縛つて描く訳なの。ひどい女でしょう？ 私？ でも気も転倒した全裸体に縛り上げられた若い女性の苦しみにもだえる肉体が、桜色に紅潮し、やわらかな乳房に腰に、太腿に痛々しく縄がかんで居る姿は筆や口では表現出来ない構図でその美しさ、なまめかしさは責めの真ズイだと言えるでしょう。だけど終つた後、なくさめるやら御札金を倍額にするやら、御馳走するやら大騒ぎですわ。

咲子さん。余り始めからおしやべりしすぎて、余りの女なのに驚ろかれていますのではないかと心配でたまりません。どうか少しでも私のお話が面白いとお考えになつたら、どうか貴女の大ファンであり、貴女の小説に協力したさし絵画家のために御返事下さい。お待ち致して居ります。

喜多玲子より

咲子さま御身許へ――。

(第二回目の手紙)

咲子さん。本当にうれしい。こんなに早く御返事いただけるなんて夢にも思つていませんでしたわ。御返事いただける事、半分はあきらめて居りましたのよ。お手紙出したのさえ後悔していたの。こんな女がお近づきにな

つたために迷惑されたんではないだろうかと思うとたまらない気持になつて居りましたのよ。

でも、でも本当に良かった。美しいペン字で綴られた貴女からの封筒を見た時、私の喜びは貴女にも御想像出来ないうでしよう。始めてラブレターをもらつた女学生のように胸はトキメキ頬はほてりお返事を持つ指先はふるえ全く年ガイもなく上つてしまいましたのよ。咲子さん笑つちやあ嫌よ。

矢張り貴女は私の想つた通りの人でしたわ。私の失礼な手紙が、こんなに咲子さんを喜ばせることが出来るなんて夢みたい。

ねえ咲子さん。御返事いただくまで私が一番心配していたのはなんだかお判りになる？。教えましょうか？それはね、もし咲子さんが私と同じ様に、人をいじめるのが好きだつたら如何うしようかと、ただそれだけが心配だつたのよ。でもその心配も今日の御手紙で一安心しましたわ。本当に良かった貴女が縛られ、いじめられるのが好きな方だつたから。その上、男性は嫌。同性の女から責められるのでなければですつて――。全く素敵。もう私はぜつたいに貴女を離さない。咲子さんは永久に私のものよ。

でもお手紙の中に、咲子さんの情熱がはけるお友達がないなんて本当にお可愛想ね。咲子さんがたつた一人でお部屋の三面鏡の前で美しい全裸体になつて、御自分の手に持たれた縄で、貴女自身の胸へ縄をかけ、ぐるぐる



体中を縄でまきつける姿が三面鏡へなやましく映し出す。縄は貴女の豊満な乳房にようしやなく、くい込み、そのままソファへ倒れ、身もだえし慾情を静めようとする咲子さんのお気持、私には良く判るの。

でもね、もう大丈夫よ。再度貴女にそんな惨めな姿は私がさせやしません。

咲子さんの創作「吸血女流画家」も私と貴女と二人で実際の出来ごとにするのが出来るんだわ。だから今日は包みかくさず私も全部恥かしがらずに、お話出来そうです。ですから咲子さんは小説の中の、あの女流画家に縛られ苦しめられ責めさいなまれるモデルになるのよ。私はあの女流画家になるわ。なんと素晴らしい配役でしょう。世界のどんな役者にも私たちが演ずる名演技は出来ない筈。全く適役中の適役とはこのことよ。

如何う？ 今週の土曜日においでになれて？。駅まで私がお迎えに参りますから、後は御心配なく。和服を着て出口で待つて居る私に貴女が咲子さんだと一目で判るように洋装の胸に白い花のブローチを目印におつけになつてね。もちろんお泊りになるお積りでね。私の家は私と女中が二人と犬が一匹居るだけです。から気兼ねなさらずにおいでになつて下されば良いわ。お判りになつた？ 今週土曜日正12時私は駅で待つています。よくつて？ お忘れにならない様をお願いします。

咲子さん。貴女が一步私の家へ入つたら、もう駄目よ。貴女は私の自由にされなければならぬわ。その時にな

つて泣いたつて暴れたつて良いわよ。だつて貴女を生かすのも殺すのも私の思うがままなんですもの。

そしてね、今までにどのモデルにもつけられなかつた素敵な特別にとつて置ききのポーズをつけて上げるわ。

そして私のスケッチブックには今までどんな有名な画家も描けない絵が完成して行くのよ。絵を描くには私の家のアトリエも日本間もベットルームも浴室も全部使いまししょう。それにあきたら、天井裏の物置部屋へも、陰気な地下室へも行きましよう。

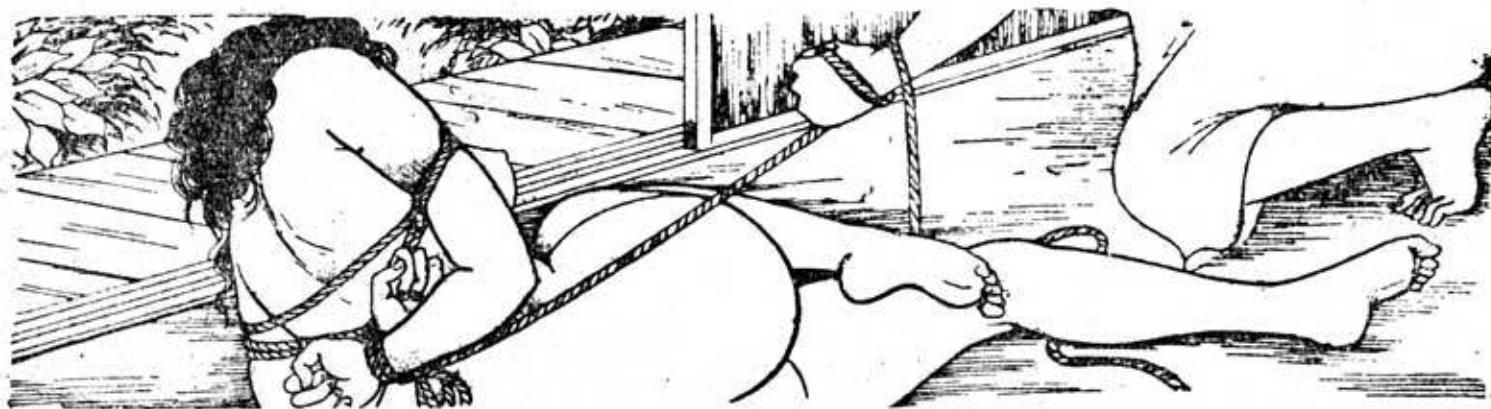
小道具もお好み次第。片っ端から使つてみましようね。椅子もテーブルも鉄製のベツトも柱も貴女の体を縛りつけるのに最も良い道具よ。責めるにはもつてこいのものばかりよ。それから貴女の美しい一糸まとわぬ全裸体を縛るものはなににしまししょうか？ 鎖？ ロープ？ それとも荒縄にする？。革のバンドも私の扱帯も使いまししょうよ。

そして泣いてさけんで苦しむ貴女の口へは私の汗や油がしみ込んだハンカチーフがおし込まれ、その上へ私の肌の臭いがしみ込んだタオルや日本手拭が固くまきつくことでしょう。それとも直接私の温かい肌で口をおほつて上げて良いわ。そのほうが良いでしょ？

如何う？ 考えただけでも楽しくなるわ。

咲子さん。これから私の土曜日予定表をお報せするわ。まあ大体こんな様子になるんじゃないか知ら？

咲子さんと私は無事初対面も終ると、駅から歩いて20



分たらずで私の家へ着くの。歩いて居る間に貴女の胸に不安の影が次第に拡がつて行く。貴女は此処へ来たことすら後悔を始める。貴女の歩く速度は次第におそくなり始めるが遂に門を通り、玄關の所へ来てしまふ。貴女は一層逃げようかとも考える。急に扉が開いて、女中が出迎える貴女はそれがきつかけでも有る様に、身をひるがえし走り出ようとする。でも駄目。正面に私が両腕をひろげてはだかる。貴女はその間に女中に抱きかかえられる様に家の中へ引づり込まれてしまふ。扉が閉まつて中から貴女の悲鳴が流れて来るが、すぐ静かになつてしまふ。と言う訳よ。いよいよ責め場にも似た私の仕事が始まるのよ。だけど全部言つてしまつたんでは土曜日の楽しみがなくなるから、ぜつたいに極秘よ。だけど予告篇と言う所でいささかアウトラインだけお報せするわ。全部お報せしちまつたら咲子さんは本当に恐くなつて来て呉れないと大変なもの。

きつと最初は私へのサービスに恐怖したりわめいたりしている貴女も次第に本心から恐怖し、本気で泣きさけび、恥も外聞も忘れてもがき苦しみ始めてよきつと。大丈夫！殺しはしないから。でも死んだり氣を失つたりしない程度に貴女の美しい全裸体には、私の満足出来るポーズになるまで、私の責めるあの術この術と数限りない攻撃が加えられて行くわ。貴女には想像も出来ない様な攻撃がね——

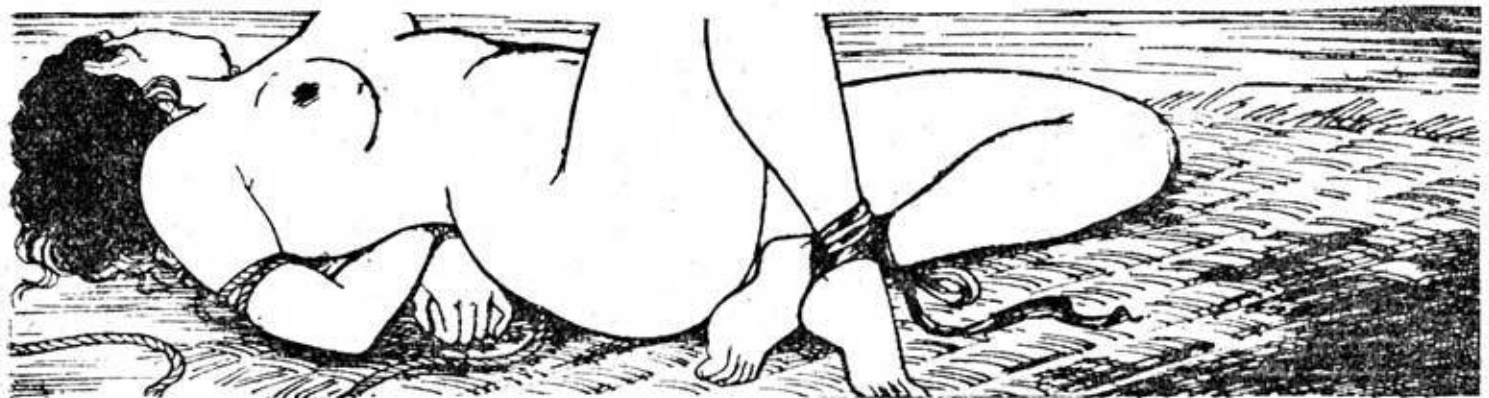
私の目の前で女中たちは洋服を貴女の体から一枚一枚

脱がせて行くでしよう。貴女も必死に身を守る。でも逃げ場のないアトリエの中。貴女は遂にブラジャーを取られ、女中に板の間へおさえつけられてしまふ。貴女は両腕を後ろへねじ上げられ、女中の大きな掌でピッタリ口をふたされて、呻く。私は女中に冷たく「さあこの縄で縛つておしまい。構わずウンと強く縛るんだよ。そうそう。乳房へくい込んだつて構やしないとも。そう、胸から二ノ腕にかけて手首を吊り下る様に縛るんだ。駄目よもつと強くしめて。そう、それで手首で縄が十字になる様にして置けば良い。」

私の命令通り縛られた貴女の口へ、衣布が一杯におし込まれると、私はしめて居た扱帯で貴女の鼻口をふたし二重三重にまわして後ろでグツと引きしぼつて結んでしまふ。言うこともさけぶことも出来ず、美しい双つの乳房には縄が二重三重にかけられ縄の間から片方の乳房が痛々しく縄目からはみ出て居る。

私は貴女の髪毛をつかんで顔を上向かせて「さけびたい？。口惜しいだろ？。泣いたつて駄目さ。それより私の仕事が終わつたら、うんと楽しませて上げるわよ。ねえ、この人のズロース脱がしておしまい。」

私に上半身を抱かれた貴女は兩足首、兩股に最後の力を集中して、ズロースのゴムにかかつた手がら体をよじり逃れようと努力する。でも遂には貴女の必死な防戦も空しく、貴女は全裸体にされて、私が命令する色々な拷問に近い様なポーズを、嫌も応もなくとらなければなら



らない時がやつて来た訳ね。そして貴女は私が望む場所へはこばれ、縛りつけられたり、ねころがされたりして私の言通りになければならないのよ。例えば――

貴女は椅子へ縛りつけられて兩腿へ別々に縄をかけられ、私と女中が左と右から引張る。貴の兩股は大きく拡げられてしまふ。

それから？それからはね、如何うしようかな？でも貴女の悲鳴や泣き声も何時の間にか荒い呻き声に変わって行く様なことになるんじゃないか知ら。

また例えば貴女の両足首と後手に縛られた手首は近づけて奪られると貴女の胸も腰も前へ突出したまま曲つた体を後ろへそらした貴女の苦痛にゆがむ顔のものがく姿は必ず素晴らしいポーズが出来るわ。そしてまた、貴女の体は足首を上にして逆さまに天井へ吊り上げられたポーズにもなつてもらふ積りよ。如何が？ 貴女の顔は見る見る中に充血して苦しさにもがく度毎に貴女の体は時計の振り子の様にブラブラゆれ動く。

また貴女の両手兩足を一緒にしてククリ猿の様な姿にして天井へ吊り上げて良いのよ。でも鉄製のベットへ貴女の両手兩足を左右に大きく大の字に拡ち上げて縛りつけければ、もつと素敵なポーズになることは言うまでもない話わ。貴女の責められる色んな姿を考えるだけでも楽しいわ。

それでもまだ気分が出なければ、フフン一寸痛い目をさせようかな？。貴女の身動きできない体を革のムチで

棒で、バンドで所かまわず引つばいたり、私の足裏で顔や乳房をふみにじつたり貴女の豊満なやわらかい肉体の隅々へ、私は吸い、もつれ、噛みつき、貴女が首をふり髪毛を乱し乳房をふるわせ悲鳴と呻き声の中で苦しきもだえる姿は、私のスケッチブックへ刻明に写し描がかれて行くのよ。

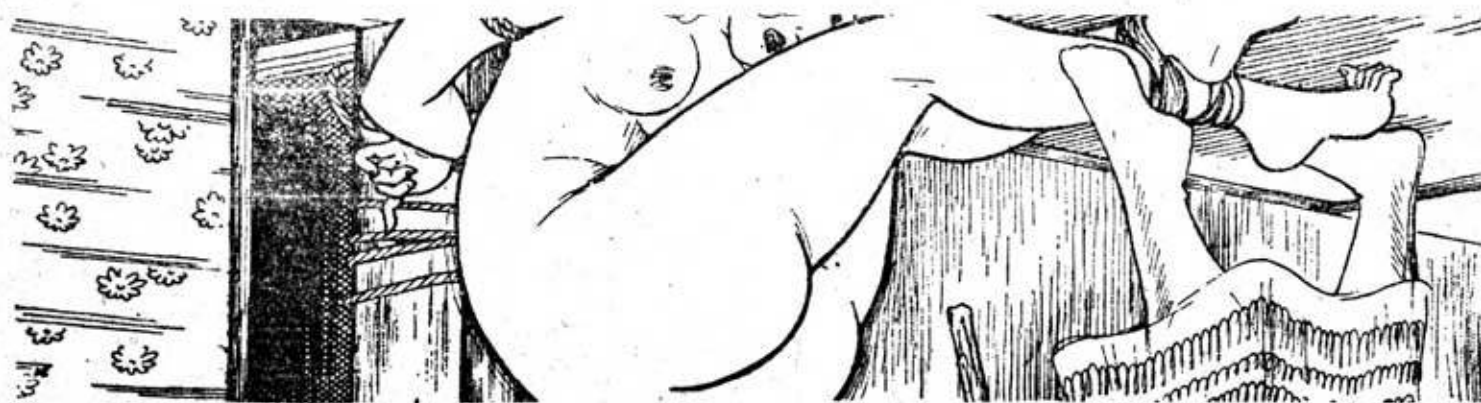
部屋の中は咲子さんの汗と油でぬめぬめ光沢が出た湯気の出そうな体から発散する臭いむせる様な空氣に、私も次第に絵を描くのも忘れて着物を脱ぎすて、無我夢中になつて貴女の全裸体へしがみつき、ベットの羽根布団の上を、二人の抱き合つた肌と肌がのたうちまわることでしょう。

こうして咲子さんの縛られた全裸体は起きている間もねている時も私のそばから離さないわよ。

嫌がり逃げようとしたつて駄目駄目。何故と言え、貴女の背中へまわされた両手首には始終細い革のバンドが固く両腕の自由を奪つて居るからなのよ。

もちろん、お食事の時にも解いて上げないわ。私が食べさせて上げるのよ。入浴の時だつて駄目よ。ちゃんと私が体のスミズミまで洗つて上げるし、お化粧だつて私がして上げるのよ。両手の不自由なんか全然心配いらない筈よ。あー御不浄の時？変な心配しなくて良いのよ。私が両股を抱きかかえてチャント用をたして上げるから大丈夫よ。

ねる時だつて解く訳には行かないのよ。でも夜だけは



ねるのに両腕が背中へ廻つて居ては痛いでしょうから、女中が貴女の両腕を上へのぼし、頭の所に有るベッドの鉄具へ両手首を細い鎖で縛つて置くでしょう。

でもまだ安心出来ない時には両足首にも鎖がまきつきベッドの足棒の金具へ直結させ、私がどんなに良くねむつて居ても貴女はぜつたいに私のそばから逃げ出すことが出来ない訳よ。

如何がですか咲子さん。これでは妖術でも知つて居ないかぎり逃げ出すのは不可能でしょう。それに貴女が私の家に居る間は、貴女の体には一糸もまとうことを許さない。一寸裸じや外出出来ないわね。

うまい考えでしよ咲子さん。完全無欠つて所ね。大声を出しても無駄よ。表へはぜつたいに聞えないわ。聞こえなくつても余りひつこく泣いたり、わめいたりすると御食事以外の時は固く猿ぐつわをはめて置かなくてはならないわよ。嫌でしよ？。

でもねえ咲子さん。すべてがこう計画通りに行くと好いんだけど、心配だわ。貴女のことを。何故つて？何故と言うと一寸説明しにくいんだけど、きつとこの逆に

「嫌よそんな縛り方。もつと強く縛つて——」なんて私の方が言われてしまつて、咲子さんは私が責めれば責めるほど、喜こんでしまうのじやないか知ら？ 私、それが心配なの。駄目よ苦しまなければ。もがかなければ。

呻き声を上げてね。泣きわめいてね。そうでないと私

は咲子さんを本当に殺してしまふ所へ行かなければ満足出来なくなると大変だから——。

でもそうなるまでにはきつと咲子さんに悲鳴を上げさせて見せるわ。猿ぐつわの下で縛られた全裸体を本当にうちふるわせて、もがき呻く声を上げさせて見せるわ。そうしなければいられない様に必ずなるの。

それは地獄の鬼の責苦よりも、もつともつとひどい鬼でさえ顔負けする位のモダン地獄絵になるでしょう。私も咲子さんに負けない様に肌に磨きをかけておきましょ。『吸血女流画家』の小説の中の女流画家より美しい女にならないと咲子さんに笑われてしまふから。

では咲子さん。私の突然差上げた手紙が立派に実を結ぶ土曜日を楽しみに待ちましょ。と言う間にも一刻一刻と時は土曜の正12時に近かずき、私の責める手は次第に貴女の体へ接近して行きます。ではそれまでサヨウナラ。

貴女だけの玲子より

私の可愛い奴隷の咲子さんへ。

(咲子言葉)

こんな馬鹿馬鹿しい手紙が有つてたまるかとお読みになつた皆さんのほとんどが一笑にふしてしまふことでしょう。それは当然なこと、もしこの手紙でも私に来たのでなければ私も皆さんと同様な態度をとつたと思



ます。

けれど皆さん。この世の中には小説以外には有るものではないと信じていることが、実は私たちの身近かで現実の出来ごととして行われて居ることを、私はこの目ではつきり見たのです。この体で体験したのです。だが、それは秘めやかに社会の一隅で行われるために、仮空の話として終つてしまふのでしよう。この喜多玲子さんのお手紙も、その中の一つなのです。

皆さん。私は約束の土曜日から一週間の生活を喜多玲子さんの所で送りました。その間に起つた総べてのことを、私は皆様の前に公然とお話できる勇氣もなく、また自由も持つて居りません。それ程私たちの想像では考えることすら出来ない様な事実を知りました。読者の皆さんはどうか、この二通の手紙の中から大体のことをお考え下さい。

ただ、それは私たちが考えて居りましたよりずっと深刻なセックスの問題に解答を得たと言うことは申上げられるのです。この手紙の主が私と同じ女性であり、私もアブノーマルな血が多少共同体内に流れている人間であつたために理解出来たのかも判りませんが――。

この手紙を発表するのに、最初はすべて仮名を使用しようと思ひました。それは喜多玲子さんも今は一流のさし絵画家であり、私と同じ女性である人の私生活の秘密を公表することになるためです。

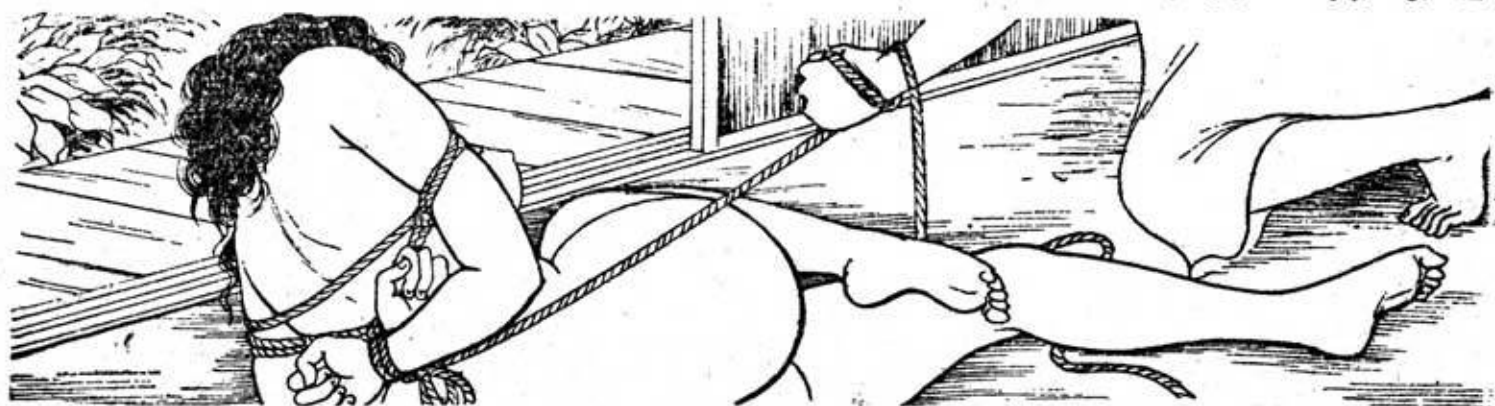
では何故、そんな人の手紙を無断で雑誌なんかに出す

んだ？とお叱りを受けるかも知れません。しかし私はこれを発表して皆さんの好奇心をそそろうとしたのでもなく、売名的な野心などで載せたのでもないことだけは知つていたのです。

私がこの手紙を皆さんの前に発表した本当の氣持を皆さんに良く知つていただくためには、私が原稿を書く時余りに私事であるために除いた手紙の中の一部を讀んでいただくことが一番手近かな方法だと思ひるので、書くことに致しました。

その手紙の中に、こう書いてありました。

「……………私の過去にも男の影がありました。でもその人は四年前に死んだんです。あの人と暮した五年の間にそれまでは何も知らなかつた私の性格の中へ知らず知らずの間に、男性を恐怖する性格と、それに代る性の対象に女性を求めると言ひ、アブノーマルな性格とを植へつけてしまつたのは男だつたの。でも咲子さん。男性に近づくのを怖れるのは、私の心の片隅に、ほんのチョツピリ残つてゐる正常性だと思つてゐるのだけれど、引かれものの小唄かも知れないわね。そして――そのチョツピリ残つて居る私の正常性さえも、次第にアブノーマルな性格が蝕ばんで行くのが私自身良く判りながら、如何することも出来ないで、とうとうまた咲子さんまで、アブノーマルな生活の中へ引入れようとしてゐる私。いけない女と思ひながらそうせねばならぬ私。昔男が教えて呉れたものを、今度はまた貴女に教えようと努力し



少年好色奇譚

松谷 茂

「ている私は、なんと云う女なんでしょう」
皆さん。これ以上私は下手な文章を綴る必要が有りません。この手紙を読んでいただけは充分です。そして皆さんの一人一人が如何うお考えになろうと構わないと思うのです。でも次に言うことだけは皆さんに是非共知

つていただきたいことなのです。それはこの様な秘密の世界が、私にも皆さんの
お心の何処かにも有りながら、私たちの常識では判断することも出来ない謎の楽
園として存在すると言ふ現実を知つていただきたいかつたのです誰れでも知つて居
るらしい。しかし本当は誰れも知らない。皆さん。これが人間の持つてゐるたよ
りない正常性と言ふものなのかも知れませんか。
(終)

童貞の失墜

幣原幸一が童貞を失つたのは、数え年十七才の四月であつた。話の順序として、その当時の事から書き初めよう。

「ね、今夜も学校へ行くの？」

スタンド式になつてゐる売店で、急がしそ
うにうどんを食つてゐた幸一の顔を覗き込む
ようにしながら、小母さんが言つた。

「うん」

夕方五時少し前である。終業にまだ僅か
の間があるので、他に客は居なかつた。

高等学校の夜間部に通つてゐる幸一は他の

者より三十分許り早く退けさせて貰ふ事にな
つてゐる。クーポン券の安いうどんで軽く腹
を作り、このまゝ家には帰らず学校へ行くの
である。

工員二百名のこの靴下工場では、厚生施設
としては他に何もなく、唯、この社内のお店
だけが唯一の憩い場所であつた。

「真面目ねえ、課長さんも、しよつちうあん
たの事をほめてるわ。ねえ、一体何になるつ
もりなの、将来——」

幸一の顔が心持ち赤くなつたようである。
「別に目的なんて無いよ。ほんとに遊んでい
ても仕方がないと思つてね」

「嘘！ 小母さん知つてゐるわよ。ね、偉い人

になりたいんでしょ？」

時間を気にしながら、せつせと箸を連んで
いた幸一は、小母さんの眼が妖しく輝いてい
る事に気がつかない。まして、もう一カ月も
前から、彼の食べるうどんが、他の者より油
揚げと竹輪が一切れづゝ多く入つてゐる事も
知りもしないのである。

「違う、違う」

幸一は首を振つた。

「偉くなんかなくないよ。市長や知事に
なつたつて、市民の機嫌許り伺つてなけりや
ならないし、社長になつたら労働組合に攻め
られるだけだしね、大臣になつたところで、
四等国ではね、偉いのやら馬鹿なのやら分り



やしないさ」

ませた事を

いう。

「まあ」

「だからね、

僕は……」

言いかけた

時、終業を告

げるサイレン

が響き渡った

「あつ遅くな

つてしまった

出発、出発」

あわて、井

を置いたので

残っていた汁

がばしやと台

の上へこぼれ

た。急いで布

巾を取った小

母さんが、さ

ら／＼と拭き

終ったかと思

うと、財布を

出しかけてい

た幸一へ

「お金はいゝの。ね、小母さんあんたに頼み

があるのよ。今夜、学校の帰りに家に来て呉

れる？」

「え？どうして？」

「あんた知つてるでしょう。小母さんの子供

が小学校の二年生になつてゐるのを。勉強を

教えてやつて貰いたいの。ね、来て呉れる？」

夜学に行くような少年は、こと学問に関し

ては眼がないのである。簡単に承諾した。

「うん家は何処？」

「郵便局の真裏よ。直ぐ分るわ」

売店の隣の、工員達の更衣室が、ドタ／＼

と賑やかになつて来た。

勿論、この晩、彼はこの小母さん（皆村そよ

子三十五才）に童貞を奪われたのである。

幸一はその日の日記に、こう書いてゐる。

神秘のヴェールは心の中ではがれてしまつ

た。こんな事を、つい昨日まで神聖視して

いたかと思つた、俺も余程馬鹿だったな。

彼女の家を出てから明るい道路で、五六人

の行き交う女を見たが、綺麗に化粧してい

ればいる程、おかしくて仕様がなかつた。

どの女もあんな部分を持つていて、いつも

べちや／＼しているのかと思つた、ふき出

す程おかしくなると共に、女の肉体つて案

外現実的に出来てゐるものだと思つた。明

日は昼休みにもうどんを食つてやろう。彼女

はどんな顔をする事かな。

女体への憧れ

幸一が女の肉体に対して異常な程興味を抱
き初めたのは、この時からである。

この日まで彼は、女体を美しい謎のように
心の中で神祕化して考え描いてゐた。現実
は日記に書かれてゐるように、幻滅ではなかつ
たが、軽い失望だったやうである。しかしこ
れは、彼の十七才的な神聖視的觀念からのも
のであり、現実的には、本能的な肉体への憧
れに燃えてゐた。実際、女体というものは、
童貞の間こそ、美しい感じを持ち続ける事が
出来るのかも知れなかつた。

翌日、彼はいつものように午前中に銀行か
ら帰つて来ると、真直ぐに事務所へ行かず、
そつと工員通路から売店へ入つた。

幸一の知つてゐる範囲では、皆村そよ子は
戦争未亡人であつた。娘の頃は、この工場の模
範工員で、その関係上信用を得て、店を出さ
せて貰つてゐるのであつた。

風前の売店はひっそりしていて、彼女はガス混和にかけた大釜で雑誌を読んでいたがぬつと音のせぬように入つて来た幸一を見ると「まあ」

手で口を押えて声を呑んだ。休憩時間以外は立入りを禁じられているのである。幸一が期待したような、そよ子の顔と羞恥心は浮んでいなかった。これが昨夜、泣くようにしがみついて来た女かと、まるで嘘のようである「昨夜はびつくりしたでしょう？ あれから眠れた？」

低い声である。

「うん」

「使いの帰り？」

「うん」

言葉使いに昨夜の印象が胸に迫る。幸一は食台の下にくぐり戸を音のたふさないように開けてそつと入り込んだ。

「まあ、叱られるわ。課長さんでも来たらどうするの？」

幸一は無言のまゝ彼女の首筋に抱きつく。

「なあ、僕は家へ帰つてから考えたんだよ」

「何を考えたの？」

「昨夜あんたは、駄目よ駄目よつて言つたがね、どうしてだい？」

「だつて当り前じゃないの。私はまだあんたがあんな事を私に仕掛けて来るとは思わなかつたもの。それが急に、あんな事を」

「へえ、あきれるなあ。仕掛けて来たのはあんたじゃないか。家へ行つたら子供がよく寝ていたのを帰ろうとしたら、上れ上れつて引つ張り上げてさ、ぐつと僕の手を握つて来じゃないか。」

「ふつふつふ。もうすんだ事好いじゃないの。そんな事、もう言いつこなし。ね」

「うまいこと言うなね」

彼はそのまゝ、後の畳一枚の部屋へ彼女を押し倒した。

「まあいけないわ、駄目、駄目」

そよ子は肘で半身を起そうとする。

「また駄目よ、か。口癖だな、あんたの。」

「ほんと、ほんとにいけないことよ、人が来る」

幸一は自分ながら自分の行動に驚く。つい昨日まで小母さんと呼び、実際に母より少し若い位に思っていた女に対して、こんな行動をとれる事自体が不思議であつた。しかし、女を知つた許りの十七才の少年は盲目で

ある。

そよ子は反抗しなかつた。右手を横に延して、仕切りのカーテンを引いていた。

その夜、幸一は夜学を途中から抜けて、そよ子の家へ行つた。教室に居ても、そよ子の肉体が頭を占めてしまつて、とうてい勉強にならなかつた。

彼女は風呂帰りのテラ／＼した肌で幸一をなすがまゝを、にた／＼と笑顔で受けた。

子供は遊び疲れていたのか、服のまゝ布団も着ずに眠っていた。



こんな関係が三カ月続いた。

幸一は、最初の女としてのそよ子の肉体に強く惹かれていたが、一方若い娘にも烈しい魅力を感じるようになっていた。三十五才の豊満さに食傷して来たのか、彼と同年輩或は一つ二つ上の娘に対して、計り知れない慾情を感じた。といつても、そよ子には大胆な彼も、根が純真なだけに、そんな年令の女性に近づく方法も度胸も持合せてはいないのである。依然として会社では、真面目な少年として評判が良く、夏の賞与も社員並の率で支給された。しかし彼の心の中では、男を知らない清純な娘の肉体への憧れが、狂しい程に舞っていた。

その機会

夏休みになつて、毎晩家に居るようになる幸一は、ふと一つの機会を発見した。

彼の家は両親と姉との四人暮らしで、部屋は三間きりであるが、例の台風で裏の物置小屋が倒壊した時、父がその跡にバラツクの建増しを行い、丁度夜学に行き初めた彼のための勉強部屋と風呂場を設けたのであった。

父の知り合いの大工が四日ばかりで建てたもので、バラツクとはいへ、窓も作りスレートを張り、居心地よく出来ていた。

彼はその計画を思いつくと、部屋と風呂場との境のベニヤ板の区切り目に、小刀で小さく立てを穴明けた。

此の一劃は空襲で殆ど焼けてしまつていたが、幸一の家の並び六軒が奇蹟的に残つたもので、何れも同じ間取りの長屋であつたが、そこはそれ戦前からの居住者だけに近所交際も深く、随つて幸一の家で風呂を作つてからというものの、誰からともなく貰い風呂に来るようになっていたのだ。

風呂は五衛門風呂に板で流しを作り、焚口は台所と背中合せになつてゐる。幸一は夕食後、父に続いて入浴を終ると、パンツ一枚になつて自分の部屋に入り、入口の栓をするとスタンドを新聞で反面だけ覆つて、部屋の中を薄暗くした。

そして機会を待った。彼の部屋は三疊程の板の間であるが、二方に大きな窓があり、一方が空地なので風通しが良く、割と涼しく出てゐる。それでも全身に汗が滲み出る。



のろ／＼と団扇を使いながら、風呂場の様子に耳を澄ましていた。

「澄子、さつさと風呂をおしまい！」

母親の声が台所から呼びかけていた。姉の澄子は彼と三つ違いの二十才である。病院の事務局に勤めていた。

やがて、ガタゴトと突っかけ下駄でやつて来る音がして、風呂場の戸が開いたようである。しかし、幸一は内心狼狽していた。姉の肉体には何の魅力も感じていないのだ。それを見る事は、肉親の姉の秘密が知れ渡るようで厭な気がするのである。それに今、まで再三背中を流してやつた事もあり、改めて覗き見る程の興味はなかつた。
(しかしと……)

と、彼は考えた。女の肉体に対する考え方が、この二、三カ月程の間にすっかり変つてゐるのだ。始めて知つたそよ子の肉体から、彼の女体についての与味は、ある一点に集中されている。姉の肉体に、今までそれを考えた事はなかつた。

(そうだ。見てやろう。)

姉の、その部分だけ見る事に、彼は胸の踊るような興奮を感じた。

彼はそつと、ベニヤ板に額をすり寄せた。さつと湯壺から出た澄子は、立つたまま、身を前に倒して、足先からタオルで洗い初めた。丁度幸一の眼には、姉の逆になつた首と背筋だけしか見えなかつた。やがて足下からシャボンの泡が立つに従い、タオルはだん／＼太腿から腹部に上り、そして上半身を起してゆく。

彼の眼は一点に集中された。そして見たそれは、そよ子のそれと同じ肉体であつた。成熟しきつていて、今にも動き出そうとするように見える。驚異であつた。二十才の姉がそよ子と少しも変らないまでに成長していると想像もしていなかつたのだ。

澄子は丁寧に腹部を洗い、やがて乳房へ、そして首筋へと、タオルを動かしてゆく。

汗びつしよりになつた幸一が、静かに窓辺に寄つて涼を取り、再び戻つて覗いてみると澄子は全身を湯上りで拭き終つた処であつた。片隅の細竹の肌膚に手を延して、頭からサラ／＼とシユミーズを着た。そして、片脚をズロースに通そうとしてふとその動作を止めると、ズロースを目の高さに持つて来て、内部を電燈で見ている。そして、そのまゝ小さく折つて脇に抱えると、再びカラコロと出て行つた。

間もなく入つて来たのは母親であつた。だらりと垂れ下つた乳房に腰巻き一枚だけで入つて来たのだが、ばつとそれ取ると、たるんだような腹部がむき出しで、幸一は、こんな処から自分が生れて来たのかと、今更のような妙な氣になり、急に父親の顔が浮んで来たりして厭になり、そつとその場を離れた。

幸 運

ものゝ三日程の間に、幸一は隣近所の女の肉体を全部見てしまつた。こんな事を、何故もつと早く氣がつかなくかつたのかと、後悔に似たものを感じ、益々興味を持つようになつた。

た。どの女にも、それ／＼の特徴があり、変つた癖もあつたが、三軒隣りの、元鉄工所をしていたという山鉄の後家さんが、糸のついたゴム輪のようなもの引つ張り出し、それを水道で／＼と洗つてから、再びはめ込んで糸の先だけ垂らしたまゝ体を洗い初めたのは、頭が脈を打つような刺戟で、氣が遠くなりそうであつた。一番端の家の若妻は、必ず生後一年程の子供と一緒に湯に入るが、幸一には、これも見逃してはならないものゝ一つであつた。それは、子供が泣き叫ぶのをあやしたり、或は流しに坐らせて洗つてやつたりする時に、これ以上開かないという程に股を開く事があるからだつた。勿論、本人は無意識であり、子供の動き具合でそうなるのだが、幸一はその姿態によつて、若妻の肉体をそよ子のそれとの相違を頭の力で比較出来る程に、はつきりと見極める事が出来るのである。それと共に、その若妻と一つ年下だけの姉の肉体を思い浮べ、姉の成長振りも当然の事だと、深く納得するのである。

だが何といつても、圧巻は、左隣りの家の加代子という娘である。銀行の給仕をしているのだが、幸一と同じ夜学に通つてゐるだけに、彼にとつては言い尽せない興味があつた。

十七才だと知っていた。彼と似て瓜実顔で、二重瞼の美しい女であつた。これ位の年令の女が、銭湯ではどんな恰好をしているのか、幸一は知る由もないが、こゝの風呂では、他人の眼がないと信じているだけに、一人前の女と少しも違わぬ動作をした。彼は肉体の隅々まで見知つてしまつた。

加代子の肉体は半熟である。幸一が以前に銭湯へ行つていた頃、時々父親らしい男に連れられて入る女兒をよく見たものだが、これらの子供は、浴槽にもたれている幸一の肩を股いだりする事があり、彼も厭になる程見せつけられたものだが、加代子の肉体もこの輪廓が一廻り大きくなつただけのもので、仇気ない程綺麗だつたが、唯、思春期に入つてゐる証拠としては、ほんのお愛想程に、その発芽があつた。それも電燈の直射を受けた時にだけ発見出来る程度のもので、頭や肩で光が冴え切られると到底見分けがつかない程の物であつた。

その加代子に、一つの癖がある。それは必ず、五分間程腹部を両手でマッサージする事であつた。太腿の附根から腹部にかけて、丹念にこすり上げるのだ。どんな効果があり何の目的なのか知る由はないが、同じ動作を何

度も繰返すのである。

処がある日の事であつた。

例によつて、加代子は全身を洗い終ると、幸一の覗いてゐる穴の方に向つて脚を開いたまゝ、肩にふり掛る髪を時々どるつとどるいするようになりながら、マッサージを初めたのであるが、時々その動作を止めたかと思ふと、ふう——と大きく息を吐き、ふと頭を傾けて耳をすますと、瞬間、その指先でチクリ／＼と肉体を弄ぶようにいじり初めたのだ。顔は驚く程紅潮してゐた。

(え?) 幸一は思わず固唾を呑んだ。加代子の動作は、そよ子がいづも彼に催促してさせる仕草と同じなのだ。

「???」 漸く思春期に入つた許りの加代子にさえ、理性だけで抑制する事の出来ない程の身悶えを感じるものであろうか。

幸一は女体の不可思議さに、大きな驚きを感じた。加代子は上半身を前に折るようにかゝめながらその手を止めようとしなないのだ。

「加代。まだ上らないのかい?」

その母親らしい女の声が、外から聞えた。

加代子は慌てたように取乱して

「え、直ぐ上るわ。」

言つたかと思ふと、洗面器でざ——と湯を

かけると、ぱつと湯壺に入り込んだ。

幸一は楽しい夢が破られたような失望を感じたが、同時に呼吸の苦しい程に、ゆら／＼と燃え上る慾情を覚えた。そして、額に玉のような汗を浮べて眼を細めたまゝ、むさぶりつくようなそよ子の肉体を思い起すと、もう我慢できなかつた。

シャツを引つ掛けるのもまどろしく、外へ飛び出してゐた。

が、彼がそよ子の玄関に立つた時、格子戸は内側から栓が掛つていて、ビクともしなかつた。「小母さん、小母さん。」

殺し声で響くように呼んだ。暫くして、すり硝子にそよ子の影が写り、戸が開けられた「まあ。」

彼女の顔に、さつと当惑の色が走り

「今夜は駄目なの。お客様が来てるのよ。ね明日の晩においでよ。分つた?」

内側へ聞えるのを憚る声である。出鼻をくじかれたやうで、幸一はかつとした。

「誰なのだ? 一体……」

「あんたの知らない人。親せきの人よ。」

幸一は思わず三和土の靴を見た。同時に彼の顔は硬張つた。時々会社で磨かされる課長の靴なのだ。

「うん、帰る！」

踵を返すと、走るように飛び出していった。

幸一はその夜、初めて街の女を買った。

それから三日目に、幸一は給仕から倉庫の

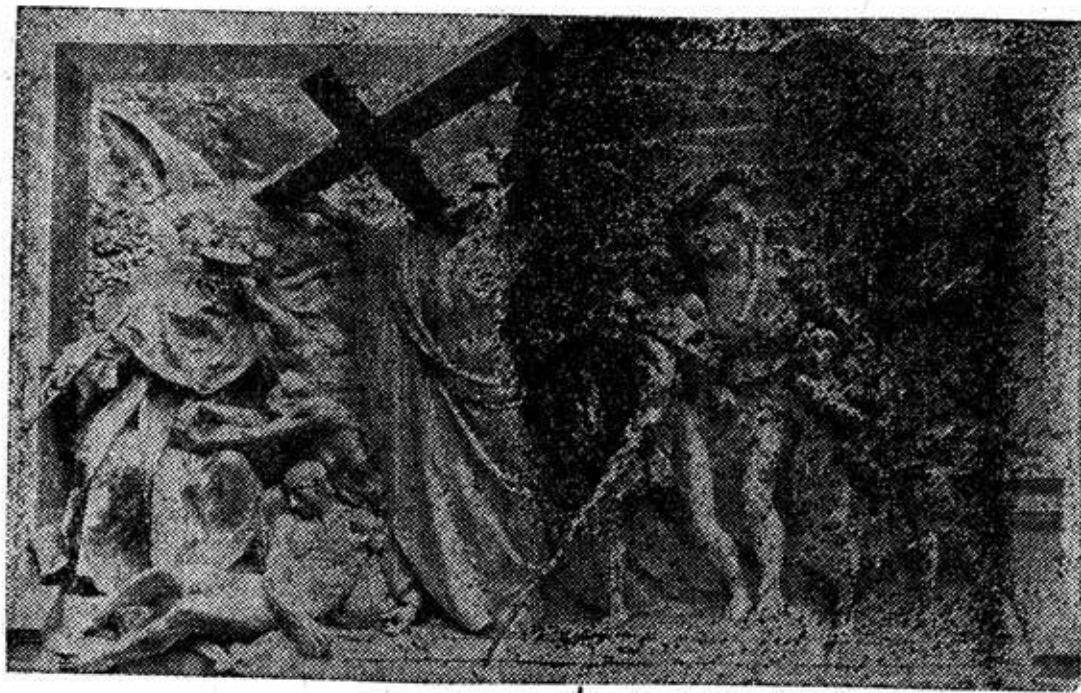
書記に出世した。

「夜学の帰りに時々寄つては、子供の勉強を見て呉れるの。夏休みに入つても子供に宿題を説明してやつていますわ。今時、あんな真

面目な少年つて無いと思いますわ。」

幸一の突然の来訪を疑つた課長に対して、そよ子が抱かれながら、こう弁明したのを、幸一自身は知らなかった。

——了——



宗教と犯罪に關する 東西名画彫刻について

宗教美術抄説

大宮 喜代子

宗教美術に關する、一貫した秘史を書こうとするならば、古代エジプトの太陽神崇拜から、各種の秘教密教に及ばねばなりません。それではとても枚数も許されませんので、こゝでは、主として基督教を中心に、その伝記をテーマとした、有名な絵画彫刻の中、非常に好色的なものと、非常に凄惨なもの、言い換えれば、晴雨趣味的なものをピックアップして、私の拙い智識の中から、お話ししようとするものでございます。

キリスト以前のものは、何といつてもギリシャ、ローマの彫刻を挙げるべきです。オリンピアの神殿趾に発見された、驚異の群像、アテネ郊外アクロポリス（城山）の、万神殿（パルテノン）に見る大芸術の宝庫、それは世界彫刻史上、最も刮目すべきものの一つです。

その全てがギリシャ神話に取材されていますが、大蛇に巻かれて苦悶するラオコーンや半人半獣のノミートルとケンタウロウロスの像などは、グロ味の傑作であり、アポロやヴィ

ナスはエロの傑作でしょう。

エロなどというと、叱られますが、その濃艶な性的魅力の発散は、正に芳醇そのものの感覚を持っています。しかもこの時代のもものは、衣類を纏つたものは少く、殆んどが全裸で、写実的な為、一層そうした感覚が強いのかも知れません。

サムソンとデリラ姫の映画には、半人半魚の魔神、デュゴンが現われますが、古代バビロニア帝国の時代には、こうした巨大な偶像崇拜が行われ、ヴェスビアス火山の噴火で埋まつたポンペイの廢墟には、幾つかのそうしたものが見られます。

キリスト以前の性神には、印度教に最も多く、中でもジャイナ教の性器崇拜はその代表的なもので、バダミの窟祠やエルーラの岩窟などに、多くの遺跡を残していますが、グプタ朝末期までの仏像は、非常に流麗な写実的感覚を持つており、臍なども作つてありますし、男神は必ず性器を持つています。

ジャイナ教に関するものは、エローラ遺跡アジャンター遺跡の一部によく見られますが、実に猥雑なまでに巨大な性器を曝露したり、或は男女神の和合している様や、人獣混構のとてもひどいものまでが、重要文化材として

現存しています。南部印度のスフヴァナベルグラの巨像は最も有名で、閼闍^{ベツツ}を模した神殿の後方に、全裸の男像が天を壓して突立ち、その太陽物を崇拜の象徴にしてゐるのですから、その太いお嬢さんなら、キヤーツと真赤になる事でしよう、その類形的な裸神像は、南部印度の所々に見られ、セイロン島にもかなり巨大なものがあります。

初期キリスト教のものは、どれもこれも皆非常に大人しくて、聖母マリヤに抱かれた、赤ン坊のキリストでも、十字架に磔けられたキリストでも、みんな衣類をつけています。所が巴里ルーブル博物館にある、十二世紀に作られた木彫の磔刑像^{クリスティア}で、始めて腰部に布をまいた裸像になつています。それは朱で肌、血の痕などを描き、高さ一六〇厘のものですが、やや凄惨味を帯びています。

磔刑後の基督像は随分沢山描かれています。が、非常に特殊な絵は、文芸復興期のイタリイの画家、マンテナヤの作で、これは死せるキリストを、足の方から頭の方へと遠く見下した、独特のスコルチオ手法を取つて、型破りな構図と共に、非常に残忍な実感をよく出しています。

又、巨匠ミケランジェロは、十字架から降

されたキリストが、埋葬される所を書いていますが、これでは腰布も取り、恐らく全裸体のキリストを描いた絵は、これ一枚じやないでしようか。

聖母受胎や、エデンの園などを取上げて、旧約聖書を、聖書じやなく性書だなどと毒付いた、天邪鬼^{あまのこ}が居ましたが、そのアダムとイヴは、絵画に彫刻に、よく取扱われています。これも大てい局部は隠されていますが、ミケランジェロの楽園追放は実に明快に、又、十四世紀のトマソマサッチオのものは、木の葉などを配してはありますが、その部分を描破しています。

有名な画で、女性のものを、あまり堂々でもありませんが、やはり勇敢に描いているのは、ルネッサンス期のロマン派巨匠テントレッツの作「スザンヌの水浴」でしょう。その絵は、はち切れそうな肉感の美女を主題とし、それを垣間見る老人を配し、草花咲く庭園を背景にして、野生の歓喜と、微笑ましい情景とを、すばらしい技巧で書いています。

その反対に、局部を隠すことは、常に論議の中心のようですが、非常に自然的に取扱つているものでは、十四世紀時代には、巨里クリニイ博物館にある彫刻アダムで、全裸の彼

が、地上から生えた無花果の木の葉で、スムースに隠していますし、絵画ではサンドロボツティ、チェリの有名なヴィナスの誕生でしよう。貝殻の上にスツクと立つた全裸の美女ヴィナスが、右手でちよつと乳房を蔽い、左手は丈なす自分の垂れた髪の毛で、自然に前を隠しています。

文藝復興期の有名人の中でも、彫刻のドナテルロは、全然裸体は取扱わず、ラファエルも裸体は少いようですが、ミケランジェロはその殆どが裸体で、ローマ法王庁のシステイン礼拝堂の天井画と壁画にまで、有名な「最後の審判」を書き上げてしまいました。

この神聖な場所に、浴場のように、悉く裸体の人物を配した構想は、不都合だという非難が喧しく起りましたが、彼は一切沈黙を守り、弟子のダニエロ・ダヴォルテラが、画中の人物に、一々腰布を描いたので、彼は裸画工と呼ばれたという、寓話まで残っています。

次にこの時代の、惨虐絵を少し紹介してみましよう。

ミケランジェロの先蹤者シニョレリの書いた、聖セロームの失神は、正に十四世紀の大傑作であり、ゾーツとするような、鬼氣人に

迫るものを持っています、美術書にはよく引用されるので、御存知の人も多いでしょうが、実物はルーブル博物館に所蔵されています、又、イル、ソドマの聖セバスチアンの殉教も荒野の木に縛られた青年聖者の裸身に、数本の矢が貫かれている、凄惨な迫力を持った絵です。

暴君ネロの圧迫に耐えかねて、ローマを脱出しようとした聖ペテロの前に、基珍が現れて「Quo vadis」(主よ何処へ行かせ給うや)という有名な言葉を聞き、再びローマに引返し、全裸体を逆磔にされて殉教したという伝記を絵にした、デル・サルートの名画「クオ・ヴェイデス」は、燃え上るローマを背景に、逆十字架にかけられて、鼻腔から血を噴く、恐ろしい大戦慄を深く感じさせます。

又、アルメニアのアルバナポリスで、生きながら皮を剥がれた上、逆さ磔刑になつたという、聖バルトロマイの殉教は、リベラによつて激烈に描かれ、西班牙マドリッドのプラド美術館に残されています。

ギリシャの歴史家ヘロドトスが伝える「埃及王カムビセスが、贖職罪を犯した宮廷法官シサムネスを、皮剥の極刑に処し、その皮を以て法官の椅子を張り、後人の見せしめにし

た」という物語に取材し、惨酷な死刑執行の実景を、ゼラール・ダビッドが書いています、十五世紀のドイツ画家グリユンは「虚栄」と題して、裸女を追立てる鬼を書き、死を純然たる醜骸にしないで、腐肉の垂れ下つた骸骨にした所に、非常なグロウ味を出しています、妖怪画家として名あるヒエロニムス・ボッッシュは「十字架を負う基督」などで、惨忍と醜惡の限りを尽した、実にグロテスクなものを書いています。

日本では、徳川中期の大家、曾我蕭白が、身の毛もよだつ怪奇の筆で、織田信長の叡山焼打と大殺戮を描いていますし、池大雅も、その九月十三日の修羅叫喚を、淡彩にしています。

これは宗教画ではありませんが、円山応挙の刑罰絵巻や、伊藤晴雨の無惨画、最近では丸木位里、赤松俊子両氏の手になる、広島原爆の凄惨言語に絶する大部作など、代表的なものとして、知つておいてもいゝでしょう。

我が国の宗教美術は、仏像と建築に於て、非常に傑出したものがありました、特異なものは少く、グロの方では、鎌倉時代に運慶、湛慶等が作つた仁王像や、飛鳥、白鳳、天平時代の仏像群などを、挙げるに止めておきま

しよう。日本の仏画に、あまり好色めいたものはありませんが、伊吹山頂の立川密教の遺物や、江の島弁財天（国宝）生駒聖天の秘画などは有名でしょう。

文芸復興期の絵画彫刻は、大いに裸体礼讃でしたが、その後又暫く衣類をつけたものが多くなり、再び歴史は繰返すとかで芸術の真隨は、赤裸々な人間性を透して得られると、尤もらしい爆弾宣言を放つて、十八世紀には、一世の名匠、ローギュスト・ロダンが登場しました。そして腰布なんて芸術を歪曲するとはかりに、「ペーゼ」「黄銅時代」などを世に出し、続いてカルポー、ペガス、ヒルデブラントなどが裸体を謳歌しました。

それでは最後に、宗教美術からは脱線しますが、日本の裸体史に少し触れてみましょう。勿論浮世絵などの、秘画はかなり古くからありましたが、堂々と展覧会場に現れたのは大阪の住友男爵家が所蔵している。有名な黒

田清輝画伯の「朝粧」です。鏡の前に裸婦の立つている絵ですが、明治二十九年、日清戦争戦勝記念博覧会が京都市で開かれ、その第四回内国勸業博覧会に出品されたものですが、



われています。その後明治三十六年の第五回内国博覧会には、妙技二等賞を受けた。岡田三郎助の読書する裸婦、梅原龍三郎氏の裸婦などが登場して、もう、美術展に裸婦は付き物のようになってしまいました。彫塑では、始めて裸婦習作を出品したのは、朝倉文夫氏でしょう。

昭和十年前後の、頽廢全盛の時代にでも姿を見せなかつた性毛描写が終戦後遂に登場しました上野美術館で昭和二十三年に出品された。カナカ土人の女は、一時問題にはなりましたが、遂に展覧許可され、最近の好例は「風顔夫人」でしょう。

大岡昇平氏の「武藏野夫人」、三島由紀夫氏の「純白の夜」などで上流家庭婦人の生態を描写した姦通小説が相次いで世評を呼んで

その当時、観衆達は見馴れない裸体画に相当な物議を醸したものでした。

それはその前に、パリの春のサロンに出品されたもので、当時の大使館書記官石井菊次郎氏が室とモデルを提供したものだと言

いる時、美術文化の会員古沢岩美画伯が、昭和二十六年九月、大阪梅田新道梅田画廊で開催した個展に上流夫人の姦通をテーマにした「風顔」を出品して話題になりました。新聞「新関西」は、それをこのように報じてい

ます。

話題の油絵「風顔」は縦一尺足らずの小品ですが、コバルトグリーンコバルトグリーンの平塗りのバックの前方に、鋭く写實的に描かれた裸婦が、昂然と顔を挙げ、放恣な肢態を恥じらいもなく観賞者に向けて、それでも彼女の夫を裏切る苦悩と憂慮が、全身の桜色に色ずいた肌と物腰に表現され、全身にキリストの茨のように紫色に綺麗に咲いた風顔の蔓と葉が絡んでいて、マダム風顔の性行を象徴的に暗示しています。

戦後、展観される全ての画家の裸婦は、陰毛を書き込むのを遠慮して、たとえアトリエでは書き込まれていても、出品する時は消される習慣になつていますが、この風顔は、消さずに残されています。

個意に消された例では、戦後フランスから

入つて来た。巨匠ルブスクの「室内裸婦」でさえ、そのまゝ日本で展示するのを憚られて山下新太郎画伯が、その絵に筆を入れて、陰毛を消した前例もあり、天王寺美術館の某展覧会でも、神戸の一青年画家の力作「裸婦」が入選しましたが、鮮明に陰毛が書かれていたので、審査員の要求で補筆されて、始めて出品された程ですから、その個展は、古沢画伯の画壇の習慣への抵抗としても注目されています。

やがては、故意に陰毛を消した、不自然な絵などは、無くなる時代が来るかも知れませんが。誰か真の写実謳歌の為に、古沢画伯の後に続く人はありませんか？

私はそんな日の来るのを、とても楽しみに

いでしまつたような所さえある。

その鬱蒼とした道を、私は三輪車に乗せられて、ガタンゴトンと揺られつゝ幾度か木の枝に頭をなぜられながら奥へ奥へと進む。まだ五時半だというのに太陽は山にかくれて、夕方のような感じが私の体をおしつゝむ。

浅茅村からちようど一時間半、目的地につく。こんな所にとと思われる山の中。それでも

しているんですけれど……

○ 鴛とんびに油揚

男「あなた、昨日僕の親友の山本君に会つてくれましたか？」

女「えゝ、お会いしましたわ、とても感じのいい方ですね。」

男「で、あの、僕のこと、何かあなたに言い伝えませんでしたでしたでしょうか？」

女「あなたの様な素晴らしい女性を僕に紹介するなんて、何んと彼は犠牲的精神の強い男なんだらうと、とても、あなたに感謝して見えましたわ」

男「え、??」

そこは盆地の容をなして谷川の南と北側に密集している家々の周囲は平坦に開けて、いま通つて来た道の両側のようなうつとろしさはない。

いまにも入りかゝる太陽が最後の名残りのようにバツとあたりの緑に反映して、妖しいまでに美しい。が、その美しさとはおよそかけはなれて、木と竹と、草から出来上つた堀

浅茅村を過ぎてオート三輪車は石ころのころがつたデコボコ道を西北に入つて行く。民家はもう一軒もない。山と山との間を流れる小さな谷川に沿つた道の両側は、つただの藤かずらだのが、深く生え茂つた杉と檜の林の下に一面ひろがつて、なかには、行くてを塞

立小屋といった感じの家々からはブウブウとブタが鼻を鳴らし、何ともいえない異臭が私の胸をえぐるように接つてくる。ブタ小屋の横の倉庫めいた中に大きな釜が見える。

(密造酒の蒸溜器かな。)

と私が思つてのぞき込もうとしたとき、

「さあ入りましょう。もうすぐはじまりますよ」

そう言つたのが、私

をこゝに案内して来た大山であつた。

私は、そこに並んで立つてゐる十戸ばかりのうちのいちばん立派ないちばん大きな家——といつても田舎の古びた農家をそこに持つて来たという風な家に入つて行く。

薄暗い土間。土間からすぐ右手に続いた座敷。座敷には畳がなくて古びた上敷が板張りを覗かせてゐる。それでも結婚式とあつてか合の襖を取り除いて二つの部屋を一つにした

結婚奇習探ぐり

山 村 夜 色



吉 井 川 洋

部屋の中は取り片付けられて、表から見ただけは、わりにいゝ感じである。

二

「式はすみしましたよ」

大山が私にさゝやく。

(なあんだ、つまらないじゃアないか)

と私が思つてゐると、

「まあ、これから変つたところで」

とやはり大山の低い声が私の耳もとにひびく。

どちらを向いても私のような日本人は居ない。言葉もまったく私には判らない。大山の時々私に説明してくれること以外まるで異国にある感じ。そう思えば、こゝに来たときから、これが日本の土地の一隅であるとはどうしても思えないのである。男は、ずつと年寄を除いて背広か背広に似通つたものを着ているが、女は、短い上衣が乳房のうえでチョン切つたように止つて、そのかわり、下はおそろしく長いスカート風なものをまとつてゐる。それが、真赤であつたり真白であつたり、紫であつたり緋であつたり、まったく色とりどりの蝶々がそこに舞い下りたといった恰好である。幽幻境とはこのことかも知れない。

「それ、若い者がとび出ますよ」

大山がそう言つてから待つほどもなく、一人の若い背のぐつと高い男が踊るような足どりで花婿と花嫁のまえにすゝむ。手には丸くまるめた帯のようなものを抱えている。

すると、その背の高い男のあとから、十人ばかりの頑丈な若者が、どや／＼と飛び出して花嫁のまえにつつ立つた。背の高い男が、

「歌を歌え」

と言ひ出した。

「歌えません」とは花嫁の言葉。

「歌え、歌え」

と、前に立つた若者が一斉に声をかける。

「すみません、歌えないのです」

「歌え、歌え」

「歌えません」

「よし、歌わないとあればこうしてやる」

一人の若者が背の高い男の持つた帯を引きとつて花嫁の首に巻きつけた。

「歌うか」

「うたえません」

「ようしやれ」

十人の若者は声をそろえて、花嫁の周囲を取りまき、長い帯で首をしめ、手足をしぼる

「きやあー」

と悲鳴があがつた。美しく化粧した花嫁の

顔が歪んだ。花婿が救援にのり出した。が、相手は多勢。花婿も共に縛られてしまった。

縛つた二人を若者どもは、エンヤ、エンヤとかけ声荒く引張り廻す。花嫁の裾が乱れ、白いはぎが人魚のうねりのように泳ぐ。花婿の真新しい衣服の裂ける音がする。見ている私のほうがハラハラするくらいだ。

座に居る他の者は、べつに興味もなさそうな顔で見ている。

やがて、花婿花嫁は、精魂つきたといった風に、座をトントンとたゞいた。参つた、というしるしであつたろう。いままでの騒ぎはすつと静まつて、若い男たちが散つたあとに衣服の乱れを直す若夫婦の上氣した顔が灯りに照らし出された。

静かに、何事もなかつたようにもとの座に戻つた花嫁の口から、きれいな、しかも陽気なメロディが流れ出した。次の間から、バケツの底を引つかくような伴奏。

すると、曲の終つたあと、又してもさつきと同じように若者がとび出してわいわい騒ぐ「つまりその、キッスしろと言つてるんですよ」

と、大山が私に説明する。

（皆のまえで接吻する。これは少々おもしろ

くなつたぞ）

と思つてみると、また花嫁がそれに対して拒否権を発動したものか、帯の乱舞がはじまつた。

三

その部屋は酒宴の席に變つていた。私は見たこともない料理をまえにしたまゝ皆の動作を見ている。

「食べませんか」

と大山が、長い箸で誘うのであるが、とてものどに入りそうもない。

しばらくして、いまゝで明るかつた部屋の中が、すうつと闇に包まれる。

（停電かな）

と思つたものゝ、こゝには電氣は来ていないのであるから停電もあらうはずがない。

大山の声がした。

「あれ、あれですよ」

そう言われるまでもなく、私の眼をとらえたのが正面に映し出された影絵。障子一枚へだてた向う側の部屋からローソクの光りぐらの光度で二つの影を写し出している。

「さつき、キッスしろと言つてたでしょう。その結果があれですよ」

なるほど揺れる影は花婿と花嫁の姿である。二つの影がだんだん接近して行く。顔と顔がいまにも一つになるかと思われたとき、男の手が女の肩にかかる。

差らう女の姿が、はつきりとその影に現われてくる。とうとう影は一つになった。と思つたとき、女の姿勢が乱れ、後ろにのけぞるように……。男の手が、それを支えるようにしたまゝ、かるい静かな音がひびいて、影は消え、反対に、私たちの周囲がバツト明るくなつた。

明るくなつて、異様な眼であたりを見廻したとき、さつきまでそこには居なかつた筈のところ、いちばん下手に四十才ばかりの女が立つている。

純白の服装。化石したような姿。

私はそれを凝視した。深く刻まれた顔面の皺、だらりと垂れて居る手。坊さんの袈裟ごろもといった衣服。さらにじつとつむつた眼を見たとき、それが呼吸をしている人間とはどうしても思えない。

しずかな、細い糸のようなメロディが隣りの部屋から流れ出す。それといつしよに女の白い上衣が、はらりと解けて落ちる。一枚落ちたあとには何もない。大きく垂れた乳房だ

けが私の眼を奪う。

座はしんと静まつて、流れ出るメロディだけがその部屋の中を包んでいる。

さらに、女の下半身を掩う一枚の布がわずかに下がる。ほんの僅かに……。

伴奏が急にはしやいで急流を思わせるようなものになる。

(あつ)

と、かたずをのむ。

女は、一糸まとわぬ姿に変わつていた。一瞬眼をそむけた私の視線が、こんどは、女の立つているとは反対側、つまり私が座つて居る側の下手に来て止つてしまつた。男の裸体姿である。女に氣をとられていた私はいまでそれに気づかなかつたのである。

女とちやうど差し向いの位置にある男の姿は、たゞ、女と違つて、僅かに三角布のようなものでまえを掩つて居る。

「ツン、ツル、チンツル」

細い三味線の音色にも似た伴奏がはじまつた頃、女は肩を振り、身をよじり、踊り出した。さつきまで彫像のように見えた女の眼が異様に輝き、皮膚が緊張しはじめた。

女は一步まえに進み出た。男もそれにならつて……。

眼をそむけたいほどの身ぶり腰のうごき。

「ツンツル、ツンチン、ツンツルチン、ツテツンツル、ツルツルチン」

二つの裸形はだんだん移動して、さつき、花婿と花嫁の影絵の映つたあたりに来てとまる。

二つの体が一つになり、また離れて行く。離れてまた接近する。

四十才、五十才——かも知れない二つの肉体が、いつのまにか、若く、ぴち／＼した壮者の肉体に変化して私の眼に映る。

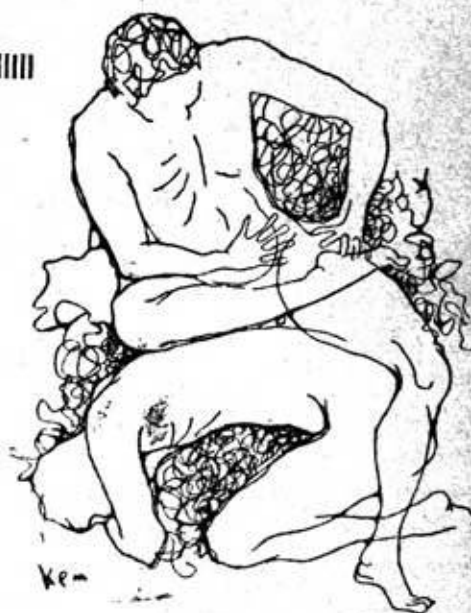
障子一つへだてたあちらの部屋では、さつき私たちが花婿花嫁のあの動作を見たように花婿花嫁はこの肉体の饗宴——男と女の寝室の交りを思わせるような踊りならぬ踊りをひそかに見ていることであらう。

(無智な性教育かも知れない)

「このへんで、おひらきということになるんですかね」

と、大山のおしつぶすような声が夢を醒すように私の耳にひびいた。

まもなく、表で、私を乗せて来た三輪車の始動しはじめの音がし出した。



— 色慾異常青年の告白 —

三 村 幾 夫

夢性の美少年

(第一部)
(少年時代)



(僕の略歴)

昭和五年六月生、昭和二十年、終戦直前の混乱期に学徒動員で勉強を中止して軍需工場へ動員され、終戦後、食生活改善のため、叔父の家にて農業に従事。後転々と職をかね、現在は本業の築業に専念する。文章など嘗て書いた事なし。

〔尚本文に出てくる人物はすべて実在している人です故仮名にしました〕

僕は姉一人弟一人妹四人の七人兄弟の中に生れました。今から語ろうとする事は僕の今迄の異常な(少くとも異常である)と自分で思っています。性愛の告白でございませう。忘れもしません。あの頃、まだ小学校の一年の時位でしたでしょうか、隣りの僕と同じ年頃の男の子と納屋の中で遊んでいました。そしてどちらからともなくズボン

でも未だ七ツや八ツの子供の事ですから早熟だといつても大人達の世界は全然知らなかつたのです。たゞ、そうする事によつて何んとかほのかな快感を伴つたことは事実でした。

それからの僕は男性の尻を夢に描いてばかり居りました。十二、三歳位になると、益々美少年に対する憧れがつのつてゆきました。或る時は自分の肉体を鏡に写して慰めた事もありました。入浴の時等はしげしげと飽くことなく自分の身体の各部分を眺

めることが楽しみでした。

そうした或る日、僕より三つ年上の少年に麦畑へ誘われ、服やズボン、パンツを脱ぐことを強要されました。僕は恥しいといつて断りました。すると、その少年はいきなり、自分のパンツ迄素早く脱ぎ去ると、僕の目の前に下半身のヌードを露出しました。その時の僕の驚きといつたらありませんでした。胸はドキドキと高鳴りました。

その少年は「俺が見せたから、お前も早う見せ」と催促するのです。その少年の前を見ると、思春期のシンボルが薄黒く萌していました。僕は勇気を出してパンツを取りました。然し、そういった性的遊戯に耽るには、余りにも幼い僕でした。

やがて夏になりますと、丁度戦争の最中でしたので、徴用工が沢山附近の海岸へ海水浴に参りましたのを、松林のかげから眺めていました。均整のとれたピチピチとした若人の全裸の姿は堪らない程の魅力でした。そして夜になると、その若人達の禪を晒した体を、一糸まとわぬ裸体にして眺めている自分を夢見ました。

その頃はまだ射精は勿論のこと、勃起等

という現象も知りませんでした。夏休みが終つて登校してみると、他校から転入して来た汐谷という生徒がありました。耳がピンと立つて鼻すじの通つた賢しそうな、上品な美少年だったんです。僕は一目で好きになりました。しかし腕白小僧や餓鬼大將達はこの美少年の転入生によく悪戯をして泣かせました。一カ月程経つた日です。例の腕白の中で太田といつて、むしろ早熟といつた方が適當かも知れない大柄な少年が、汐谷の側へ寄つて云いました。

「お前、俺の前でパンツ取れ！」

放課後の事です。教室には五六人より居りませんでした。僕はびっくりして彼等の顔を見ましたが、内心好奇心というよりは、是非見たいという激しい衝動に捉られました。汐谷は今にも泣き出しそうになり、みんなに取り囲れながらモジモジしていました。

「何にぐずぐずしているんだ！」

太田の音頭取りによつて、汐谷は急に床の上に押し倒され、二人は両手を、二人は足を、一人は胴に跨がつてバンドをはずしてパンツの紐をほどきました。僕は当時級長

をしていたので、こんな行為は止めなければならぬ時なのですが、早熟で大柄な級友達ばかりなので、どうする事も出来ませんでした。パンツは取られて、中から白いすべすべした肉体が露出されました。一人がいきなり股間に手を差し込んで、俗に称する「解剖」をしました。

汐谷は急に泣き出しましたので、やつと解放されました。彼は泣き乍ら走つて家へ帰りました。その時の汐谷の肉体の一部がいつ迄も強く僕の印象に残りました。

それから、此の級に急に「解剖」が流行して、更に三人ばかりされました。僕も掃除当番の日に危くされかけましたが、うまく逃れました。昼休みの時間。声変りしている少年が「解剖」された時です。いきなりパンツを下へ下しました。その少年は真赤になつて防ぎましたが、全部の生徒の視線がその少年の陰部に注がれました。そしてそこに大人へなりかけの過渡期の中途半端な生理的現象をはつきりと眼底に焼きつけたのです。

それから二三日してから、僕も体の一部をよく見ますと、その少年と同じ現象が二

三本発生していましたが、恥しくて直ぐ抜いてしまいました。射精も知らない自分の若い肉体の一部に対して強い関心を持ち初めたのは、その頃の事です。そして他の級友達のと較べて、自分のは人より小さいように思えてなりませんでした。それは焦立しいような劣等感でした。

やがて僕は学徒動員で工場へ勤めることになり、一週間程会社の寮に合宿しました。合宿した日の夜、皆と一緒に風呂へ入る時は大変恥しかったのでした。その浴場は十五人位一度に入れました。僕の号令で僕が先に入ると、続いて皆も入るようにと先生にきめられました。陰毛の揃っている者は級で僕を除いて三人程でした。

夜になると腕白達が悪戯を初めました。よく寝ている級友のパンツをはずして、糸で股間をしぼりつけたりしました。一人の少年が縛られて起きて見て泣き出しました。焦れば焦る程固く結ばれてはどけなく、それが面白いと云つて、皆が笑いころげました。

翌晩の事です。平素から餓鬼大将の太田にお上手を言つてお機嫌とりをしていた川

井という少年が太田と一緒に寝ました。川井は女の子のように色白で、声もきれいに澄んでいました。僕の好きだった汐谷はあれから直ぐ官吏だった父が転勤したため、他へ転出してしまつて、おりませんでしたので、僕は川井にほのかな想いをかけていました。太田と一緒に寝た川井がその夜何にをしたか、僕は彼等の隣りでしたから何もかもよく判りました。神経質な僕の事ですから一晩中寝ないで様子を見ていました。十時の消燈時間になると電燈を消しましたので、川井は太田の腕に抱かれました。

それと同時に太田の手が川井のパンツにかかりました。僕は息をこらして、じつと横目で見つめていました。然し二人は僕が起きてゐるのに気がつきません。やがて川井の白い女のような綺麗な肌が現れました。二人は何か小さな声でボザボザ話し合つていました。僕は興奮と嫉妬で身が燃える様でやがて二人が疲れ果て、ぐつたりと寝入つてしまつてからも、とうとう朝迄眠られませんでした。

僕は意志が弱くて、相手に好意を持つていても、中々打開ける勇気がなかったので

す。その翌晩は川井は風呂へ入りませんでした。僕もそれから一週間は一ぺんも入らずじまいでした。九日目の朝、空襲警報が鳴つて帰宅しました。家の人は僕の顔を見て瘦せたと言いました。

やがて三月の卒業期が近づいてきました。少年兵の受験をすゝめられるというよりも強制的に受験させられました。受験場で身体検査の時、全裸となつて軍医が調べますのでそれが恥しいのと人より小さい自分の性器を人前にさらすのが辛いので、幾度か断つたのですが、最後に仕方なく受けました。

受験の日、僕の前の順番に当つた二十歳位の青年の肛門や陰部に房々として黒い毛が生えているのを見ました。僕は幼い時、海水浴場で見た禪一本の青年の姿をどうかして、一条纏わぬ全裸にして、つくづく眺めたいと願つた事を思い出して、思わず胸が、高鳴りました。目の前に大きくクロージ、アップされた全裸の肉体……。夢が実現したのです。

床の上に手と足の型を白黒で印をした処へ四つ這いになるのあの検査、でも不思議

だつたのは肛門の周りの毛でした。あんな所にも生えるものかと、ちよつと意外でした。

卒業の直前、丹波のグライダー訓練所へ合宿で級友達が出かけました。例の太田も川井も一緒でした。僕も行くつもりでしたが、丁度風邪をひいて行けませんでしたが、級友達が帰つてからの話では、川井は始終教官に叱られ通しで「ぐにやぐにやして、お前はそれでも男か？ 睾丸があるのか」と側へ寄つてきて股間をぎゅつと握られ、その若い教官はてれかくしに「お前は男のくせに女の様だ！」と云つたそうです。川井にはそれ程、同性に対して魅力があつたのです。

卒業してからの学業生活を顧つてみますと一年と二年は学業は第一位で級長を、三年と四年は副級長を、五六年は七八位に下り、高等科で第一位、第二位になりましたつまり五六年生の頃が僕にとつては一番精神的に悩んだ時だつたのです。学校へ来ても理想の男性を頭に描いては、教室でもぼろとしていて、先生の問いにも、とんちんかな答をして、はつとする事も度々あり

ました。

やがて少年兵に行かない中に、終戦となりました。

僕は叔父の家へ百姓の手伝いに出かけて叔父の家に住みました。三年生位の可愛い、叔父の男の子がいました。僕は毎晩この子供と一緒に寝て、お伽噺を聞かせてやるのを日課にしました。僕が叔父の家にいた間中ずつとこの子供を抱いて寝ました。

僕もこの時数え年十六になつていましたので、身体

の方は日に日に大人に近くなつてゆくのです。五右衛門風呂で叔父の裸体を盗視した事もあります。然しこの時は、何の気持も起りませんでした。

秋になると、村の祭礼が近づいて来ました。村の青年達でやる演芸会に僕も毎晩稽古に行きました。僕の女形や喜劇の主人公の芸が大変うまいと賞められ、いつの間



にやら立役者にされていました。そして今度やる劇の主人公に選ばれました。稽古に

来た村の青年達は、猥談や男女交合の真似をよくやりました。それは既婚者の青年も大分混っているから尙更でした。僕の容貌はむしろ醜いといつたらよい位の顔でしたが、声が高かったので女形に向きました。或る晩の事、一人の青年が手箱の中から、春画やエロ写真を沢山出して皆に見せていました。一人の若い女が自演してい

る写真や、いろいろな姿勢の男女交合の画や写真、それをその青年の説明をきく乍ら僕も見せて貰いました。生れて初めて接する興奮でした。僕の興味を持ったのは、寧ろ均整のとれた男性の全裸の肉体でした。

その翌日、風呂の中で、昨夜教えられた仕草を試みてみました。それから数日後、薄暗い馬小屋の中で、先日風呂の中で行った行為を繰返えしてやつてみました。僕は此の年の秋初めて射精というものを経験しました。そして、その時の快感が忘れられずに、自らそれに執著してゆく自分を見出していました。

そして僕が六年生の頃に妹から聞いた事を今更の様に思い返していました。妹二人が山へグミの実を探りに行きました。グミは野生でトゲは有りますが、甘酸っぱくて美味しいのです。妹達が暫く藪の中を探していますと、山陰の窪みに一人の若い男が坐つていてこちらへ来いと手招きします。妹達が恐る恐る近寄つてみると、何んとその男は自ら着物を脱ぎ始めました。全裸になった若い男はこちらへ向き直りました。多分露出症という奴でしょう。妹はまだ小

さいので何の事だがわからなかつたらしいのです。「〇〇〇から煙が出た。おへそが背中にある」と云いました。

多分おへそはタイトの跡だつたのでしよう。でも煙が出たとは思議だと思つて大人に聞いてみると、笑つて「色きちがいだ」と相手にしませんでした。僕は「色きちがい」といふ言葉の意味が少しもわからずにいましたが、今になつてすべてその意味がわかりました。

性に目醒めた少年にとつて、それは大きな喜びであると共に、又大きな不安でもありました。それは雑誌上で、その行為が罪悪であり、発育途上の少年にあつては有害であると説いてある記事を見たからです。然し、一度味つた禁断の甘美な木の実の味は、そんな事位で諦めきれるものではありません。畑で一人仕事をしている時でも、若い男性の裸体をじつと思ひ浮かべると、もう堪え難い程の慾情に身をさいなまれるのです。

或る時は余りの切なさに私の樹の幹に抱きついた事もありました。不思議と女性に對しては全然慾情を感じないばかりか、む

しろ嫌悪を催しました。今迄幾人かの意中の美少年に遭遇しましたが、それらの少年に誘いをかけるといつた勇氣はともありませんでした。

久方ぶりの休みの日、街へ出て映画館へ入りました。座席へかけると直ぐ後からぽんと肩を叩く者があります。顧ると、それは嘗て六年生の時の夏僕の家が海のすぐ近くでしたので、海水浴に来て僕の家へ寄つた事のある少年でした。彼は色の浅黒い丸顔の愛嬌のある少年で澄んだきれいな眸と長いまつ毛が特徴でした。海水パンツを持たない二人は素裸となつて海へ飛び込みました遊び疲れて並んで砂の上に転びました。

僕は彼の背中から足へかけて砂をかけてやりました。そして尻の割れ目から肛門へ手をやりました。彼はびつくりして僕の顔を見ましたが、僕が笑うと彼も笑顔になりました。今度は上向きになつて、肉体の一部を自由にさわらせました。そして直ぐ海へ飛び込んで沖へ向つてクロールで泳ぎ出しました。

僕は彼の脱いだ下着をそつと抱きしめました。そしてパンツに手をかけ鼻に当て、

匂いをかぎました。僕にはその汗のにじんだ下着の香から何んとも云えない快感がうつとりと全身にしみ渡るのを覚え、遂にそのパンツを舟の下にかくしてしまいました。上つてきた彼はしきりに探していましたが、僕が舟の下から出してやると「有難う」と素直に礼をいつて無操作にそれをつけて帰りました。

六年を卒業してから、彼とは一度も逢っていませんでした。今日が初めてなので映画を見終つて、僕が海水浴の事を話すと彼は黙つて公園の薄暗い木立の中へ入つてゆきました。そして、にこにしながら僕の耳の傍で囁やきました。「僕は君のような人が好きだ」と。

彼は自分の裸体を誇らしげに見せくれました。すつかり大人の身体の成り揃つた立派な体格でした。僕は見せて貰うだけで十分で行動に出るような事をしませんでした。僕の要求をいれて肉体の秘密をかくすことなく見せてくれた彼に、僕は堪らない魅力を感じました。その日はそのまゝ再会を約して別れました。その夜、僕は始めて夢精というものを経験しました。そしてそ

の夜以来、一層激しく身体が燃えて処置するのに困りました。そんな時パンツの洗濯をしてくれと云つて出させませんので、風呂のしまい湯で自分で洗濯してから、裏へこつそりと干して置きました。前にも申しました様に雑誌でオナニーの害を知りました。が精神的であるからと書いてある記事を見つげ出し、やつと此頃は安心したというより、やむにやまれぬ衝動をそうして自己流に解釈していたのでしよう。その頃週に少くとも三回位は経験しました。

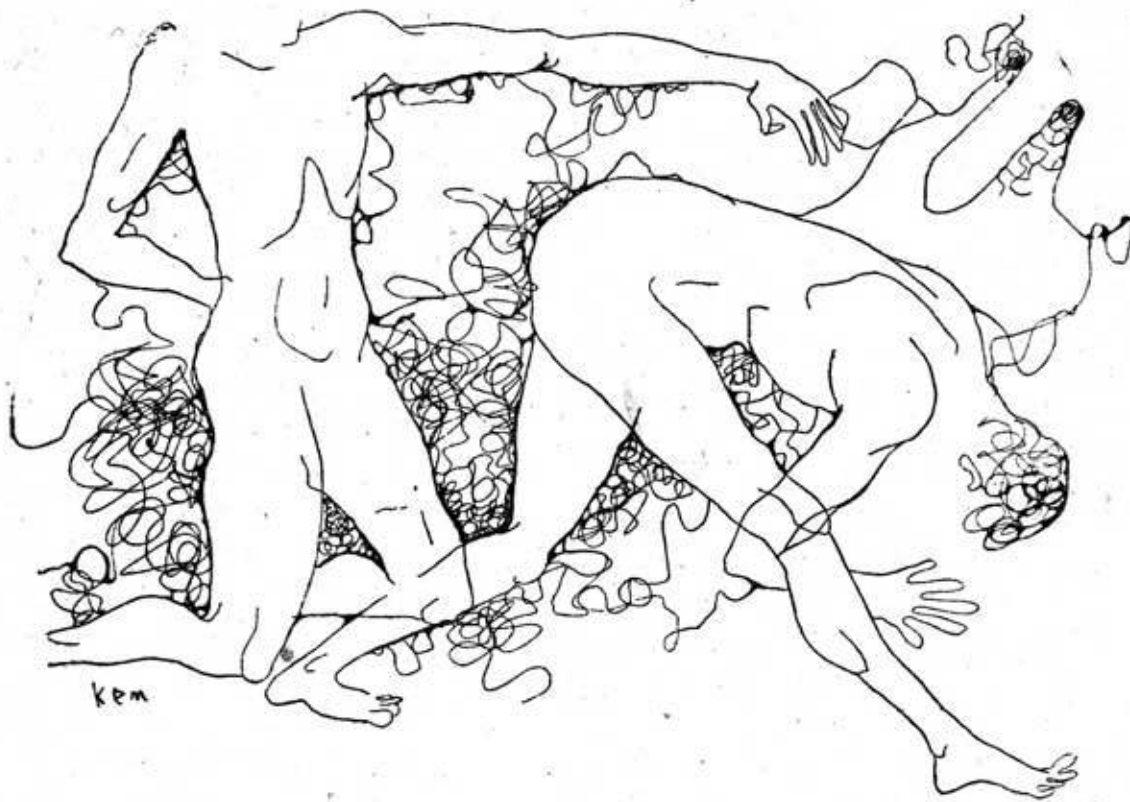
翌年の春早く水田に引く流水路の修理の為に一週間の予定で、山の麓へ泊り込みにゆきました。若い男ばかりでしたから、晩になると猥談の花が賑やかに咲きました。そしてその挙句はいろいろな性的の悪戯になるのです。

僕のような年頃の少年（当時十七歳になつていた）も二三人居りました。風呂は長州風呂の小さい奴で、囲いのない野天にそのまゝ風呂をたてゝいるのです。僕は明るい中は遠慮して、暗くなつてから入りました。僕の前に入つた十八位の男が、腋の下の毛を見せびらかして「俺も年頃だから生

えてきた」と嬉しそうに僕の顔を見ました。僕は何んだか恥しくて黙つていました。年齢はその男より下なのに、腋毛はとうの昔に生え揃つていたからです。彼はすべすべとした稚い肉体をかくそうともせず、僕の目の前にすつかり現わしながら上つてゆきました。僕は彼の挙動をじつと穴のあく程見つめ、自分が入浴するのを忘れる位ぼんやりと彼の後姿を見えなくなる迄追つていました。

その年も暮れて、叔父の家の百姓の手伝をやめて実家へ帰り会社へ勤めに出ることになりました。会社といつても小さな所で人はたつた三人でした。僕は留守番がてらに宿直をしたのです。十八と十九の年を過ぎて、二十才の時、盲腸の手術をして生死の間をさまよい、やつと快復すると、折からの農繁期だったので再び叔父の家へ百姓の手伝いに行きました。前に手伝いに行つていた時小さかつた叔父の子供はその後暫く見ない間に成長して、僕の背丈に近い程伸びていました。

或る暑い日でした。山の麓の池へ行つて二人で泳ぎました。人目のない所でしたの



で禪もつけずに泳ぎ廻りました。青く澄みきった池の水は、二人の裸体を白く浮き上がらせて、まるで脂肪の様にねつとりと身体中にまとわりついてくるのです。彼の身長はびつくりする程伸びていましたが、裸体

になつてみるとまだ子供子供したものでした。

「君はまだ〇〇〇を知らんだろ、教えてやろうか？」

そういう自分の慄える声をどうする事も出来ず、此れだけ言うのがやつとでした。彼は僕の言う意味がわからないのか黙つていました。言い終つて僕ははッとししました彼が家に帰つて話をすれば、家人に知れて大変な事になると思いましたが、幸い彼はそんな事も忘れてしまつたのでしよう。何事もありませんでした。それから、つとめて彼をその池へ連れていつては、今迄年長の青年から聞かされた猥談を池の中で泳ぎながら話してきかせましたが、彼は一向に心を動かすような事はありませんでした。

その時分から僕は暇を見ては街へ出では銭湯へ入りました。案外まだ子供じみた身体の少年に思春期のシンボルを見つけ出して驚くことがありました最初、僕の誘いによつて一緒に街の風呂屋へ行つた叔父の子は、何時の間に

か行かなくなりました。僕は銭湯へ行つて同性の裸体を見るのが、一つの大きな楽しみとなつていました。だらりとたるんだ老人の体には少しも魅力がないばかりか、目に映つても嫌でした。若い張りきつた同性の全裸体、それ以外に興味のあるものはなという強い偏執にとらわれていました。

街にストリップ・ショーが来た時、僕はこの機会だと思つて見物することにしました。女の裸体に対する自分の気持を試してみたかつたのです。出来れば正常な人のように、異性に対する性慾が起つてくれればよいのにという、かすかな希望を持つて、その小屋の入口を潜つたのです。そこで僕は大きな失望を味わなければなりません。興奮が少しも起らないばかりか、女性の裸体に対して嫌悪の情が催してくるのです。

男達があのように大騒ぎをするストリップなんて、なんとつまらないものだと思ひました。そこで僕は試しに叔父の子を連れでもう一度一緒にストリップを見に入りました。彼はもう十六才になつていましたから、喜んでついてきました。僕は「面白い

か？」と聞いてみました。彼は僕の問いに答えるのも、もどかしげに人を押しわけてかぶりつきへ殺到してゆきました。あゝ此の子も正常な性慾の持主であつたかと思うと一縷の望みもがらくと音を立てて、くずれてゆくのを覚えました。

やがて二十才になる妹が嫁いでゆきました。姉は既に一人の子持になつていました。二人共別に異常あるようには見受けられませんでした。只祖父が少し精神病的な所があつて、僕の兄が病気で死んでから、仏があゝの世へ兄を連れて行つたと思ひ込んでしまつて、正常な時は少しも普通の人と変らないのですが、独りきりで考え事をする時等「仏よ、俺につきまとうな帰れッ」だとか「なぜ、あいつを連れて行つたのだッ」等と呟やきながら自分の頭を握り拳で叩くのです。一人の叔母は年頃になつて大阪へ出て始めて電燈を見て気が狂い、四十才で死にました。祖父も相ついで後を追いました。

又一人の叔父は、妻を虐待したので実家へ逃げて帰られ、二十年間もヤモメ暮らしをしていましたが、一人暮らしが淋しくて、氣

が狂い手当り次第に女を追ひ廻すので、寄つてたかつて精神病院へ送り込みました。あゝ、僕の家系の血統には悪魔の血が流れているのでしょいか。人間の正常な頭を狂わせる悪魔の血が……

此の春も、叔父の子と一緒に山へ柴を取りに行つた時、余程自分の胸の中を打明けて、僕の性の対象になつて貰おうと決心しましたが、いざとなると云い出せませんでした。若い人の前途を、木の芽を摘み取るような事をしてはいけないという理性が強く働きかけるからです。そうして淋しく諦めると、理想の男性を頭に描いて儚い夢に耽るのです。

女を愛する事の出来ない僕。そして又少年をも愛し得ない罪悪感におののく僕のこの氣持をお察し願えると思います。男娼を買おうと思いついた事もありました。しかし、不潔な感じが先に立つのです。何故？それは女は嫌いですから、女の服装をし女の仕草をする男娼には反撥はあつても、魅力は少しもありません。長男である僕はやがて結婚して家を守つてゆかねばならないでしよう。今の所理性でこの異常な欲望を

強く押えつけては居りますが、一度だけでよいから、結婚する迄に、理想に描く美少年と一緒に同衾して愛しあふ事が出来ればこんな幸福はないと思いますが、今の所、そんな機会はありません。

広い世の中には恐らく僕のような異常性慾の方も居られる事と思いますが、そんな方々には是非読んで頂きたい、此処に下手な文章もかえりみず僕の少年期の一部を記した次第です。

僕の告白はまだこれから続く筈でしたが余りちぐはぐな文章なので、自分からも嫌になり、第一部としてこの稿を終りにしました。又機会がございましたら、皆さんに此の続きを読んで頂ければ幸甚に存じます

(第一部了)

◎大胆率直に異常性愛者の告白を寄せられました一文は、一部発表し得ない個所を削除した以外、殆ど原文通り掲載しました。其の後、第二部として青年期を御送稿になりましたので、引續いて次号いて次号に掲載する事にいたします。

愛読者の方々の好評を得れば幸いです。

原稿募集

古今東西を問わず珍奇な小説読物

**変態資料、体験告白、暴露記事
探訪報告、奇習紹介、實話小説**

- 一、すべて未発表の興味本位の作品たるべきこと。
 - 一、四百字詰原稿紙三十枚迄の作品たるべきこと。
 - 一、住所、本名の外略歴を記載して下さい。
 - 一、発表作品は発行後一ヶ月以内に相当の謝礼を呈上致します
 - 一、原稿は原則として御返戻致しません。
 - 一、締切は毎月二十日、翌月号に発表します。
 - 一、挿絵、写真、コント、漫画、笑話、小話等も募っています
- 奮って御応募下さい。

**探偵小説、怪奇小説、時代小説
軟派文獻、犯罪實話、珍談記録**

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇
曙書房内 奇譚クラブ編集部

◎裸婦肉体美写真実費分譲

光澤面焼付 五枚一組二百円 (送料共)
印書紙焼付 十枚一組三百五十円 (送料共)

一糸纏わぬ全裸の肉体美人の豊艶絢爛たる大胆奔放な種々のポーズを取揃えて愛読者サ1ピスとして愛好家に実費分譲致します。

☆責められる女各態。五枚組、第一集より第七集迄。本誌独特の花の蕾のモデルによつて構成された責められる女の美の極致

☆浴室に於ける裸女、五枚組第四集まで

☆野外ヌード各態、五枚組、第一集から第五集まで美景を配して揃えました。

☆女闘美、二人の若い女によつて展開される

肉体相搏つ女闘美のポーズの真隨を選んで五枚組、二集まで

☆寢室のシーン各態、ベット上に於ける女体の曲線をキャッチしたポリウムのある妖艶なる姿勢の集成、五枚組二集まで

☆室内に於ける各態、五枚組第五集まで

各作とも漸次新に多数追加致しておりますので必ず御満足の召される美しいもののみを選んでお送りいたします。新作品につきましては御照会頂きますれば、その節に御返事致します。御送金は小為替、現金書留、又は振替にて、尙切手代用は小額のもので一割増にお願いたします。

(代理部)

☆旧号は送料共、一冊九十円にて御送付申し上げます。昨年十一月号以降毎号若干保有しております。

◎直接購読者募集◎

半年分六冊(送料共)五百四十円
一年分十二冊(送料共)壱千八十円

(定価値上げの際もそのまゝ据置きます)
半年分御支払込の愛読者の方様には特別景品として極鮮明なる裸婦写真一組、一年分御支払込の方様にはヌード・アルバム一冊贈呈申し上げます。

◇振替又は小為替にて御送金下さい。切手代用の節は一割増で小額のもので願います

奇譚クラブ

第六巻 第七号
毎月一回一日発行

七月号

定価 九十円

昭和二十七年六月三十日印刷
昭和二十七年七月一日発行

編集人 眞田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔
大阪府堺局区内菅原四丁目三〇
発行所 曙書房
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固く御断り致します。